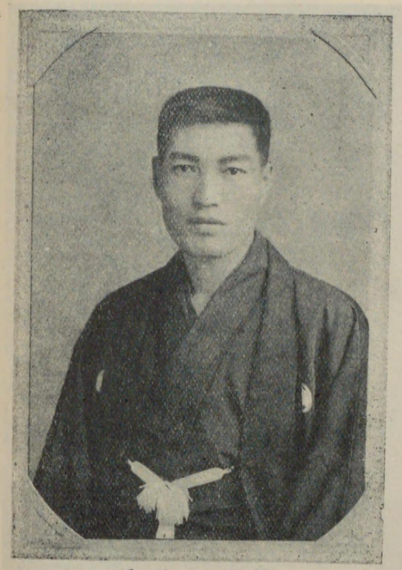
日本古流華道教授
同家元補佐職
松函齋　久保一岳氏

氏は明治三十年六月十四日、千葉縣海上郡本銚子町に生る。本名を政成といひ、久保惣三郎氏の三男である。

久保家は享保年間久保旦柳氏より起り、爾來、連綿二十餘代を經歷代紀州藩に仕へて來た。維新直前までは、名主として名望高く、氏の叔父、佐藤勘七氏は（父君の實兄）現に本銚子町々長として、町政のために盡してゐる。

氏は、實兄二人と共に、佐倉五十七聯隊に入營し、大正十年に上京、建築請負業を營み、現に盛大を極めてゐる。

華道には、早くより志あり、初め正風遠州流を學んだが、上京後——大正十二年十二月より日本古流家元角田一忠宗匠の門に入つて研修した。技術の進境拔群、同十四年十一月には、早くも皆傳を許されて師範となつた。

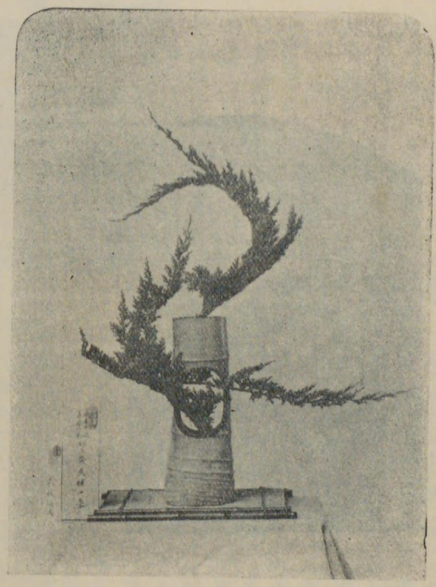


久保一岳氏

續いて、昭和三年家元より特に補佐職に推薦され今日に至る。

氏は研究に熱心なるは勿論、當流の振興のため、常に力をつくし同門中に最も重んぜられてをり、又、將來ある斯道家として、一層の大成を期待されてゐる。趣味としては舞踊。

家庭はすえ子夫人との間に、長男秀雄君（大正十三年生）長女幾子孃（昭和元年生）の一男一女があり、家業盛大、幸福なる家庭を營む。（東京市外野方町新井四八三番地）

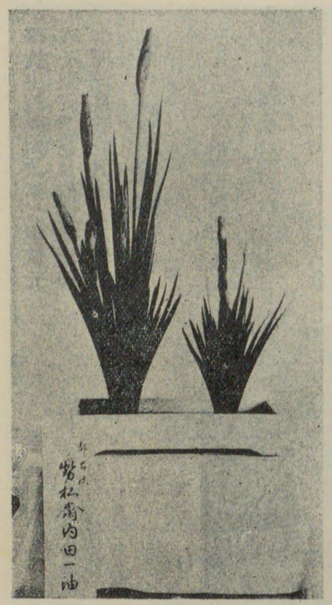


久保一岳氏作（磯馴）

都古流家元師範
勢松齋　内田一油氏

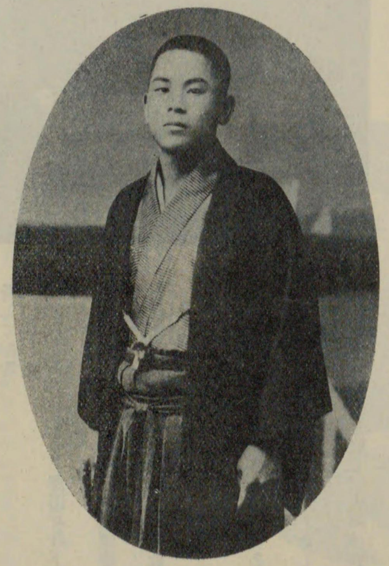
氏は千葉縣市川の人、明治三十九年八月十日を以つて生る。俗名を芳松といひ、内田岩松氏の男、庭園業である。

氏は本業の庭園業者として、華道の大に參考となるを觀破し、以來斯道に入り、都古流家元村瀨一水先生の社中となつた。處が氏の天賦の才と熱心とは、悉く家元の寵を集め、氏もそれに感じて、殆んど專門的に研究するやうになつた。氏の研究に熱心なのは、夜の十二時は愚か、師と共に大抵二時三時になるは毎時の事で、夜を徹して鷄鳴を聽くこと稀れでないといふ。



内田一油氏作

今日では家元師範として、毎木曜日に家元と共に社中を教授してゐる。將來いよいよ當流に重きを加ふべき人であらう。



内田一油氏

尚ほ、茶道表千家を修業する傍得意のの技は、二重物、三重物、釣瓶、曲花等々多數である。

又、氏は花道の教授は、營業的でなく、親切第一にして行きたいといふことを常に心掛けてゐるとら、書を北野昌軒氏について學んでゐる。（千葉縣市川新田一七二番地）

僻言のなくてぞ見たし木々の花　淡々
春雨は花に寐ぬ目を休めり　草也

華道小笠原古流第二世家元 表千家茶道花月庵煎茶教授 小原流盛花吐月流盆石教授

松風齋 蛭川秀樂女史

女史は明治九年東京駒込に生まる。中井藤吉氏の二女にして本名せい子といふ。幼にして駒本小學校に學び、十八歳の時嫁して蛭川姓を名乘る。

女史は小笠原古流第一世家元松風齋秀樂師について華道を學ぶ。先代松風齋は夫君蛭川氏の嚴父である。蛭川氏の祖先は清和源氏の齋にして姓伊藤を名乘り、小笠原家の家老として代々糾方的傳の家柄であつたが、小笠原家に華道の法がなかつたので、氏の嚴父に至りて始めて小笠原古流なる一派を創始するに至つたもので、伊藤氏は嘗て社寺局長たりし人である。

蛭川秀樂女史

女史の夫君に至つて蛭川姓を名乘ることとなり、女史が第二世家元を繼承するに至つたのである。

女史は又盛花を小原六合軒師について學び、吐月流盆石を安達竹風師に學びて竹松と號し、煎茶は花月庵師について學び、いづれも師範職である。女史が華道を子弟に教授するにあたつて嘗に唱導する所は華道は單に花技のみを以て足るものにあらず、茶花、盆石、禮法の一切にわたりて心得おかざるべからずといふにある。故に子弟の華道を學ぶものにして、志あるものに對しては、茶道、盆石、禮法は別に之に對し月謝を受けずして教授してゐる。

女史は又二十年來、書道を日下部鳴鶴翁について學び、今尚ほ暇あれば臨池に親しみ、嘗て筆を放たずといふことである。

家庭は夫君との間に一男一女あり、夫君蛭川氏は元醫を業とせしも、數年前醫業を廢し、大塔流筑前琵琶大塔宗家を再興し、大塔日城と號して、斯界の重鎭である。

（住所東京市外淀橋町柏木九一）

池坊龍生派華道教授

華染庵 我妻醉香女史

女史は明治十六年五月二十日、宮城縣志田郡松山町に生まる。本名をそめぢと云ふ。

明治三十五年宮城縣女子師範學校に入るや、同地の華道師範青木某につき、生花に入門し、同三十七年三月まで、三ケ年間にわたり、研究を續け、後四十五年より四年間、同地山田芳子師につきて池坊生花を研究し、後更に二年龍生會の蘊奥を究め、大正七年池坊龍生派華道教授並に大日本華道會教授免許を受け、大正十二年一月、池坊龍生派總華鑑職に補せらる。斯くて華道家として既に十分の實力を得たる女史は、これを以て倘ほ足りとせず大正十四年八月より龍生派家元につき、立華の技を研究し、その妙處に達す。

我妻醉香女史

家庭は夫君との間に七男二女あり、至極圓滿である。（住所宮城縣志田郡古川町北町）

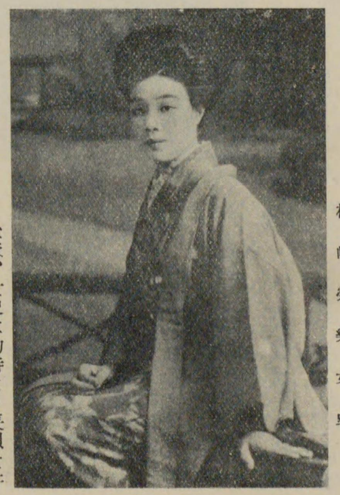
池坊龍生派教授
松濤齋 松崎榮樂女史

女史は明治三十九年七月一日、東京市淺草區千束町に生る。本名久子、嚴父は故松崎權四郎氏であつて、女史はその三女である。松崎家は代々淺草に住し、豪農を以つて知らる。謂ゆる淺草の草分けといはれる。父君は三十餘年間東京市會議員および淺草區會議員として自治公共のために盡す處頗る多く、大正七年功によつて藍綬褒章を授與された。惜しむべし同九年物故した。現在は母堂多滿女史、健在し、令兄權四郎氏その跡を繼承し、現に市會議員として在任してゐる。

女史は千束小學を經て、東京府立第一高等女學校を大正十年三月卒業した。卒業後、花道に志し、池坊龍生派鷲田晃亭女史に入門し、研究大に努め、大正十五年春皆傳を免許された。更らに昭和三年四月教授職となり、現になほ、熱心研究を重ねてゐる。

女史得意の花は、水仙、燕子花等であつて大きなものを好まず、細いものを愛してゐる。

又女史は、花技に對して一方に偏したものよりも一般向きに伸び伸びとしたものがよいと思ひます。餘り流儀にこだはらないで時に應じ目先きを變へるのが趣があるやうに思はれます』といふ意見を持つ。

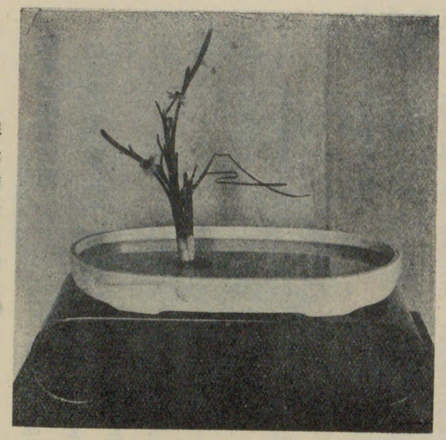


松崎榮樂女史

なほ、女史は幼時より長唄を杵屋六藏氏について學び、杵屋繁久といふ名取りの名手である。歌澤は家元芝勢以氏について目下修業中である外、書道は夙に武田雲洞氏について研學、馨雲の號を持つてゐる。又、一面スポーツを愛好し、女學校時代は、大の運動家であつたといふ。容姿の美と共に、稀に見る多能の閨秀といふべきである。(東京市淺草區千束町二ノ一三三番地)

松崎榮樂女史作

駿東流華道家元
伯齋流瓶華家元
松軒齋 村田華光氏



村田華光氏作

氏は明治八年十月五日、靜岡縣庵原郡江尻に生る。本名を喜助といひ、父は伏見助之丞、母を縞江といつた。

當流の祖は、寶永の頃、東京小石川旗本松平十金五なる人が創始した。この人は當時大茶人として知られてゐた三代將軍の御教授役古田織部の門人で福龍庵伯齋と號してゐた。駿州公に從ひ府中に住ひ、その流名を駿州流と稱した。後僧形となり諸國を偏歷し、斯道の技を練磨した。後、子々相繼ぐ七代、氏の祖父の代となり、花道の號を華光と改め、茶號を依然伯齋と號した。氏の父君伏見助之丞氏は、風流のことに餘り趣味を抱かず、明治維新の役鹿兒島において戰死し、氏は幼にして祖父の膝下に引き取られ、その薰陶を受けて人と爲つた。氏の父君が伏見姓を名乘つたのは、維新當時、松平の姓を憚つたがためであるといふ。

かくて氏は十三歲より相傳の華道と表千家の茶道を祖父によつて教へられたが、別に志を立てて明治三十五年東京藏前工學校に入り、同三十八年その建築科を卒業、建築請負業に從事し村田姓を名乘ることとなつた。が、同四十年三月十七日、祖父が物故したので、その跡を襲ふことになり、八世家元を名乘ることゝなり、且つ東都に出でゝ流名を宣布すべく決意し、大正七年東都に出で、名も駿東流と改稱し、先づ代々木に居を卜し更らに京橋八丁堀、柳原と居を移して、當流の宣布に努めた。たまたま都新聞生花十傑投票に際し、門下の松武齋大海華童氏が、その首席に當選し、大に流名を發揚するに至つたものである。

村田華光氏

なほ、當流の三相傳は、水仙、菊、かきつばたである。而してその特技は曲活けで、富士の水仙は流儀では『武藏野活け』と稱してゐる。

その出所は蓮香法師の

武藏野に梢の下に夢さめば
草より低き不二の山見ゆ

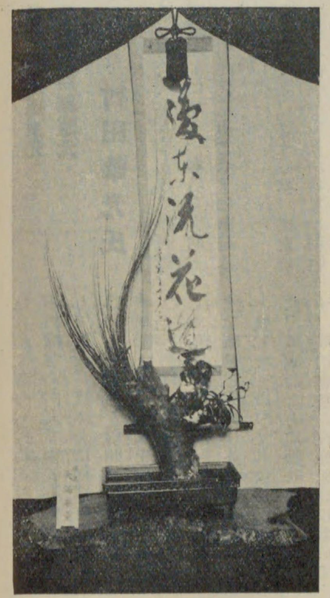
に出據するものであるといふ。

氏はまた俳句を好み伯齋と號す伯齋は傳來の號で、茶の方にも用ゐてゐる。

花の香や人も彌生は一と盛り
伯齋

家庭は夫人まつ子、長女龍子(家元目代松雪齋華龍)長男右太郎、二女文江、二男左太郎の二男二女がある。(東京市本所區柳原町一丁目十二番地)

駿東流華道師範
松武齋 大海華童氏

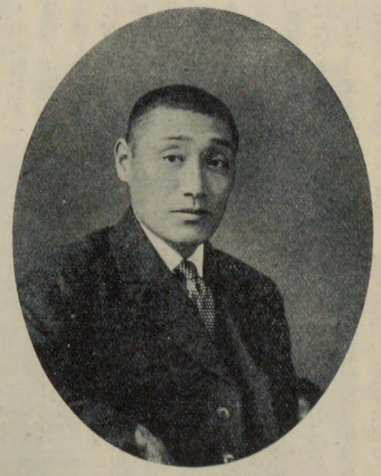


大海華童氏作

氏は新潟縣中魚沼郡中條村の人名を武慶といひ、吉太郎氏の三男である。生家は祖先以來、製粉精米を業とし、鄉里において知名の素封家である。氏また現に製粉業を經營、盛大を極はむ。

氏は小學を卒へ、後專ら獨學を以つて、力行奮闘した。華道は氏の祖母君が池の坊に通じてゐたので、幼少からその指導薫陶を受け、斯道の精粋を極はめる處があつた後、駿東流家元村田松軒齋華光氏について、その蘊奥を極はめるに至つた。

昭和三年九月、都新聞によつて行はれた全國生花十傑の公募に對しては、最高點を以つて、第一席を占むるの光榮を荷ふに至り、盛名一時に揚つた。



大海華童氏

大禮博覽會に際しては、その妙技を十二分に示し、都木和會並に都新聞社より賞狀を受け、面目を施した。

氏得意の花は枝物である。

氏も又、進歩的立場に立つ人である。從つて徒らに舊習を墨守することを好まず、時代の趨向に應じて、常に進歩と發展を企圖しなければならぬといふ信念を以つて日夜忙中の閑を利して新工夫に努力を傾注してゐるといふ。

餘技としては茶、俳句等である。

社中數十名、營利を放れて懇切に指導してゐる。

家庭は夫人との二人、極めて圓滿和平である。(東京市本所區餌差町一九三番地)

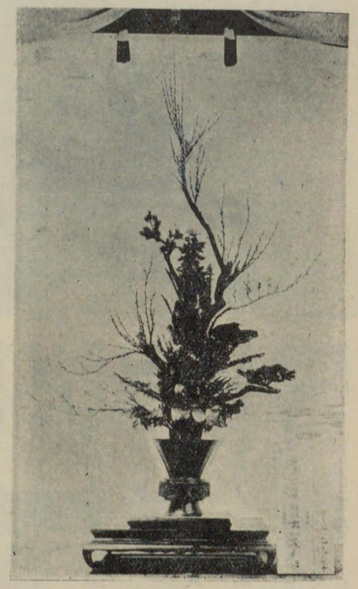
紅梅や障子つきぬく日の移り　桔夕
紅梅や空は薄絹の薄曇り　馬光
紅梅にしかも緑の土手つゞき　遷喬
紅梅に足あたゝめる雀かな　吟江

家元池坊華道教授
裏千家茶道教授
小原流盛花瓶華教授
三才流盤景家元
古松庵 乙丸新月女史

乙丸新月女史

女史實名は益子。信州上田の素封家大河原金八氏の女である。廿五歳にして山口縣人乙丸市熊氏に嫁した、盤景の號は晃川である。

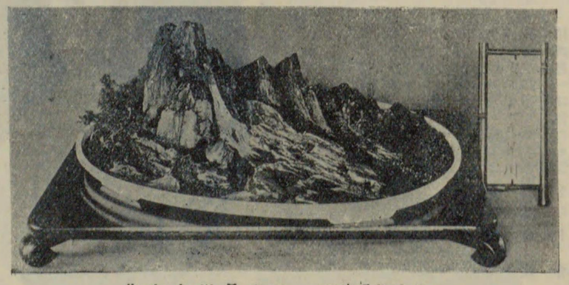
女史幼より才藝に俊秀、好んで華道茶道管絃を學び、華道は京都上野啓純先生に師事し、東都にては兒島晩翠先生の樂天社に屬し、立華生華の蘊奥を極め、盛花瓶華は小原流平一鶯先生に就き研修、現に國風會幹事の任にあり、何れも門葉多く盛大を極めて居る。



乙丸新月女史作

大正六年勤務の都合にて臺灣に居たが不幸夫君に逝かれ慟哭悲哀措く能はざりしも、女史は夫君の生前中より深く法華經を信じ、日蓮大聖人に歸依し、本化の信仰に住して居たので忽ち悟る所あり、世を趣味藝道の爲に捧げ、一は夫君の靈を慰むべく、一は世道人心の歸趨に資し、且大聖人の報恩に努むべく健氣にも專念精進を續けたのである。而て大正七年四月衆望により推されて女史が最も得意とする三才流盤景の家元となつた。この間生花盛花盤景の作品を天覽台覽の光榮に浴すること數回、爾來諄々として勵精し、盤景研究會を設立し本部を東京に置き五十餘個所の支部出張所を全國各地に有し會員の數實に萬を以て算ふるの盛況に至る。

昭和三年十二月、全國に於ける門葉有志の發起にて女史の德を永久に頌する爲一大頌德碑を東京府下池上本門寺境内に建設した、その撰文は特に長興長榮兩山七十四世日愼大僧正の筆になり、女史が人格を偲ぶに足るものである。



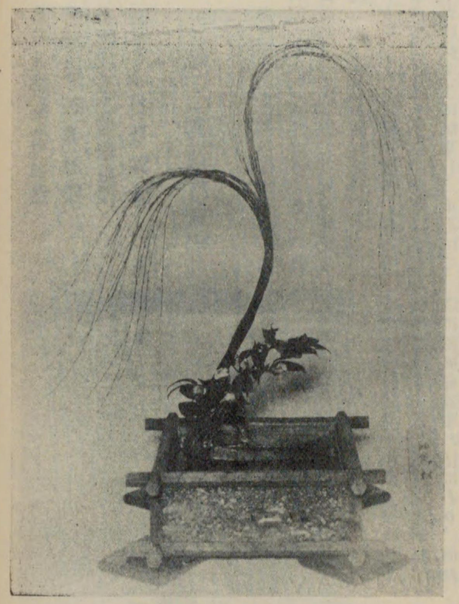
三才流盤景家元　乙丸晃川女史作

(東京市麹町區上六番町四十二)

駿東流華道教授
伯齋流瓶華師範
福龍庵 **嵯峨野伯女女史**

女史は明治四十年を以つて、東京神田橋本町に生る。嵯峨野彦太郎氏の女、本名を縫子といふ。家はセルロイド工業を營んで盛大、父君既に歿し母堂健在す。

女史は大正十三年神田高等女學校を卒業、華道は十六歳の時より、駿東流家元村田氏について研精怠らず、昭和二年春、福龍庵を襲名し、家元の信頼最も厚く、伯齋流已の休養時間を割いて護病慰籍至らざるなく、傍人をしてその至情に感嘆せしめたといふ。



嵯峨野伯女女史作

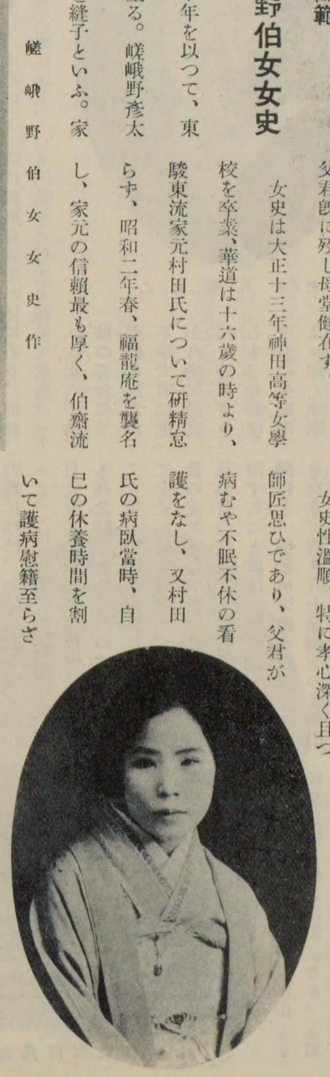
瓶花の日代とする意嚮であると。

女史性溫順、特に孝心深く且つ師匠思ひであり、父君が病むや不眠不休の看護をなし、又村田氏の病臥當時、自

得意の花は葉物。又、俳句を村田氏に學び、出藍の譽がある。

秋風や朝日さしこむ軍船　伯女

家庭は、母堂、長兄博仲氏次兄巖氏の外、總て八人。財豊かにして平和圓滿である。(東京市本所區柳原町二丁目十七番地)



嵯峨野伯女女史

◎

行心手折りて歸る花もがな　宗伊
折る枝やなかは心の春の花　宗祇
折り取るは花のさきなる心哉　弘永
折りに來し我も花もる心哉　宗因
花手折る美人縛らん春一夜　几董
花折は兵庫の者じや御免あれ　盛張
花盛思へは似たる雲もなし　專順
豐年の雲を又見て花盛　鳥歌
陽炎や花も盛りは燃る程　白草
嵯峨までは見事歩みぬ花盛　荷兮

宏道流家元代理師範
陽雲流盛花家元
宏道流家元評議員
北信宏道研究會副會長
長野縣諸流齋美會幹事
陽雲齋 **岩村春岳氏**

岩村春岳氏

氏は明治十七年五月一日、長野縣松代町舊藩士岩村眞太郎氏の長男として呱々の聲をあぐ。實名を捨雄と言ひ、幼にして英才を以つて知らる。

氏は、農學校を卒業するの當時、長野縣の養蠶は、漸く盛んならんとするを知り、其の原動力たる優良蠶種製造を思ひ立ち、日夜勉學研究の功成り、遂に良蠶種を最も多く製造する大蠶種製造家として自他共に許すまでになつた。

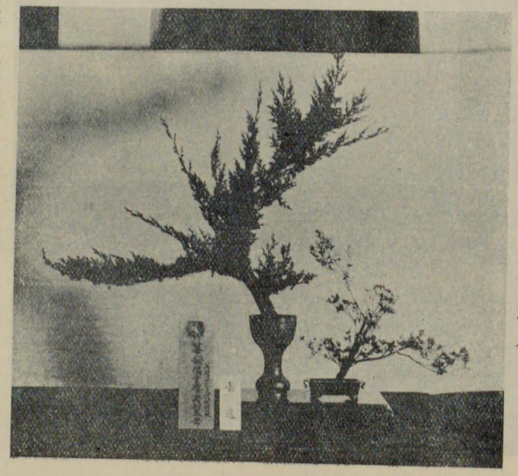
しかも、氏は幼少の頃より花道の趣味を解し、十六歳の春松代町青木二世曉雲齋先生の門に入り、宏道流の挿花を學ぶ。元より天賦の才能あり、加ふるに其の熱心と努力は、一穐古毎に同僚先輩を抜き、二十歳の秋は早くも免許皆傳となつた。しかるに、程なく先師の他界に會ふや、三世青木清峨師に師事し、傍ら子弟の教養につとめつゝ、同僚と相計りては華道研究會、或は競技大會を催す事十數餘回に及び、同地方に於ける花道をして漸く隆盛ならしむるに至つた。

が、氏はこれを以つて足りとせず上京して家元につき研磨修養、ついに極秘蘊奥を極め、師範免許を請け鄉里松代を中心として、子弟の訓育に務めつゝあつたが、華道の普及は本活盛花兩道にありとし、再度上京して高森梧堂先生に就いて、小原流の研究に潜念した。

爾來、松代町を振り出しに、長野市婦人會主催の第一回盛花講習會一百五十餘名の要望に應ぜしを筆頭に、長野縣下各地の招聘により、講習行脚する事數十回、其の間小原流の長を取り短を補ひ、研究工風し陽雲流の一派を起し、又初習者の手引として、右葉を編述するに當り、舊藩主眞田男爵よりは、題字をさへ賜り、初習者を稗益する事又尠からず、宏道流家元よりは代理師範を付嘱さる。

昭和二年三月、東京中央新聞社主催、日本全國花道界より十傑の公募あるや、縣下一千三百有餘の門下生に擁せられて、見事入選第五位の榮冠を獲得し、其の披露と作品陳列會を銀座松屋呉服店七階において、一週間に亘つて開催したのである。

氏の正しき宏道流の作品と、しかも同流獨特の挿法一基二瓶容の



岩村春岳氏作

名花は、大衆の賞讃を博し、徒らに新派奇流を好む都會人をして驚嘆せしめ、家元に於ても名人の所作にあらざれば、出來難き名花なりと激賞し、これ氏の名譽のみならず、又以て當流の名譽なりとて、同流華階最高の華領を付嘱され、又評議員に選出された。氏は亦小笠原流の折形作法をよくし、これが師範である。

かくして十年一日の如く精進練磨を積んだ氏の教導を受けた門弟は、其熟達早く、昭和三年春までには、皆傳者實に二百名を突破し、皆一流の士として師が華道精神を體し、好く斯道の爲に精進し、全國は勿論遠くは滿州大連にまでも及んでゐる。

思ふに氏の如く、一方に蠶種製造の事業を經營して、信州養蠶界の爲に盡すのみならず、亦華道の爲盡し得る事は、賢夫人の譽れ高き靜子夫人の内助の功あづかつて大いに力ある事であらう。(長野縣埴科郡松代町)

家元池坊花道教授
廣山流投入盛花教授
秋光園 秋山松月女史

女史名を雅子、明治十九年三月二十五日、東京京橋築地に生る。父は秋山作太郎氏、母はきく女、數代前より染色を業とし、家運旺んであつたが、今は何れも歿して、令弟銀三郎氏が家業を繼承盛業中である。

女史は小學を卒へるや、專ら習字、茶道、花道等を修め、何れも奥傳に達した。當時、花道は、日本橋芳場町なる美笑流花流軒一水先生に就き、茶道も同先生より裏千家を學んだ。

昭和三年春より、池坊東京紫雲會長岡田廣山先生の門に入り專心同流を研修すると共に、別に廣山流投入盛花を學び、技術の進境頗る顯著である。

秋山松月女史とその作

餘技として、二絃琴を嗜み、頗る堪能である。

家庭は、令弟銀三郎氏夫妻と、令甥一人である。(東京市芝區高輪車町三〇番地)

岡崎秀杉女史作

筑浦古流華道教授
表千家茶道教授
林竹庵 岡崎秀杉女史

女史は明治三十九年十月七日、東京上根岸町に生る。俗名を杉子といふ。岡崎家は同地の素封家として知られ、女史はその愛孃で、淑徳高等女學校の出身である。

大正七年頃より、筑浦古流家元に師事し、精進大に勞めたので、進境著しく、同十五年三月師範を免許された。また茶道も表千家を同師匠に學び、これまた師範職を許され、爾後、引續いて研修を重ねてゐる。

この外、琴曲を寺田秀和先生に學び、昭和二年春免許された。同師範名を杉和といふ。(東京市下谷區上根岸六九番地)

日本古流華道師範
松樹齋 大柴一惠女史

女史は明治四十一年三月二十一日、山梨縣北巨摩郡穗坂村に生る。本名を友惠といひ、大柴喜十郎氏の女である。

大柴家は代々穗坂村の地主であつたが、父君は官海を志して稅務官となり、後、若尾銀行に入り、現在は保險代理業を營み、實業界に重きをなす。長兄文雄氏は東京帝大を卒業し、米澤高等工業學校の教授に就任、目下獨逸に留學中であり、次兄俊一氏は、水戸高等學校を卒業、目下靜岡縣興津において動物學研究中である。令弟二人は目下中學校に在學、何れも俊秀の譽が高い。

女史は縣立甲府高等女學校を卒業、更らに同校補習科を修了し、才媛として知られてゐる。大正十四年一月松樂齋石原一遜先生の門に入り、爾來、修業を積み、昭和三年七月免許皆傳を許された。外に茶道を學び、裁縫に巧みである。得意の花は盛花。(山梨縣甲府市御崎町二八番地)

大柴一惠女史

昭和古流華道家元
同盛花投入花家元

松富齋 **上野理清女史**

女史は明治二十四年十二月五日新潟縣刈羽郡田尻村安田構町に生る。父は上野榮助、母をこい、女史俗名をいせといふ。一ツ橋共立女子職業學校の出身である。父君榮助氏は、夙に上京して神田小川町に越後屋といふ貴金屬袋物商を營んでゐたので、女史は幼少の頃から東京下町風に育てられ、從つて生つ粋の江戸ッ子の面影がある花道は父君が趣味を持つてゐたので、早くからその修業を積んだ。卽ち當時古流の名手として知られてゐた本鄕金助町の福田理風先生について、熱心に修業の功を積んだのであるもとより天資穎脫、幾何ならずして、免許を與へられたが、女史はこれを以つて滿足するやうなことなく、常に新工夫新趣向を加へて、新天地の開發に力を用ゐ、遂に一派を樹て昭和古流として、斯界に新旗幟を翻すに至つた。

上野理清女史作

上野理清女史

爾來、嶄新の流風と、熱心なる指導研究は、多くの門下をその傘下に集め、俊秀頗る多く、新興昭和古流の流名をして、漸次發揚しつゝある。又、夙に昭和花道研究會を設け、斯道の振興普及に、倦まざる努力を拂つてゐる。閨秀華道家として囑目されることの偶然ならざるを思はしめる。

昭和二年三月、中央新聞社の全國挿花十傑投票に際しては、投票數七五、〇一八票を獲得し、その首席に當選するの榮を荷ふた。

表彰狀

昭和古流家元宗家

右ハ本社カ昭和二年三月日本全國挿花十傑選出ヲ一般投票ニ依テ公募シタルニ貴所ハ其結果トシテ首席ニ當選セラレタリ玆ニ其名譽ヲ表彰ス

昭和二年三月　中央新聞社

なほ、女史が斯道に精進して、今日の地位を獲得するについてはその裏面にあつて、夫君善吉氏の理解ある激勵に負ふ處が尠くないのである。善吉氏は現に洋服業を營み、趣味廣くして特に遠州流生花に造詣深き人であるといふ。

女史は和歌、俳句の嗜みも深い。

× ×

御大典を祝して

常盤なる松のみどりともろともに千代榮えゆく大和島根は

床挿の松のみどりに色まして昭和の御代の榮え行くらん

× ×

我が庵のほまれは淸し菊の花

淸らかに富士の姿や今日の月

花挿して山の心や龍田姫

なほ女史が得意とする花は、頗る多いがその最も得意のものは水仙であると。（東京市神田區小川町一番地）

駿東流華道家元目代

松雪齋 **村田華龍女史**

女史は明治四十三年、靜岡縣庵原郡江尻に生る。本名を龍子、駿東流家元第八世村田華光氏の長女である。

村田華龍女史

女史は幼にして、父君の指導薫陶により當流を修業し、多年技を磨いて父君を補佐し、現に師範代として、多くの子弟を教導してゐる。第九世家元となるべき人である。（東京市本所區柳原町一丁目十二番地）

◎

さかぬ間と思ふな花を春の雲　宗祇

明日も又海花染の春の雲　善阿

雲と見し夜も曙や花の色　紹巴

御幸遠州流華道準家元 同流雅風會々頭 芳花園 堤 雅一風氏

氏は滋賀縣大津市土橋町の人、明治九年十一月二十九日呱々の聲を擧ぐ。本名は堤久次郎、先考はこの地に於て花商を營み氏も亦父祖の業を繼いで花商となつたのであつたが、小學二年十歳の時故あつて近藤利貞氏の塾に轉じ、螢雪の功を積むこと前後六年、氏の社會人としての基礎教育はこの時に於て略完成したのであつた。

氏はその職業上よりして花道に志すこと久しいものであつたが、近藤塾に於ける六年の學業を了ふるや遂に意を決して明治二十六年六月弱冠十七歳にして當時出色の名ありし正風遠州流第一世群鶴園冷一風師の門に入り、後僅々二年、二十八年には早くも奥傳を受け、三十二年には皆傳の極意を授けられて同流師範となり、爾來鋭意同流の爲めに献身努力し、明治四十二年准家元に抜擢されて今日に至つてゐる。

氏は常に花道を以つて子弟の思想を良導することに勉め、三歳五常の節倫を説いて、後進啓導に日も是れ足らず、大正二年雅風會の創設さるゝや、推されてその會頭となり、よく會員を統率、悲喜慶弔を偕にし、會員は恰も一家の如き親和の狀を呈してゐる。

堤雅一風氏社中作

氏の高潔なる人格と、懇切熱心なる指導とは恰く京阪地方に喧傳され、此の門に入つて教を乞ふ者日に増し、今日まで氏の門より排出したる教授十名、皆傳者百三十七名を算し、現在縣下及び京阪の兩都に於て三百名の子弟を有し、多々益々隆盛に赴かんとしてゐる。

金雀草と葉蘭は氏の最も得意とする處、また讀書を好み、餘技として謡曲をよくす、家庭は夫人との間に四男あり、花道に於てのみならず、家庭に於てもまた誠に祝福されたると謂ふべきである

因に正風遠州流は花型の改良を完成して、明治四十一年現在の御幸遠州流と改めたものである。(大津市土橋町八番地)

現代華道家列傳 野崎一仙氏作

京葉古流華道教授 松齢齋 野崎一仙氏

氏は現住所東京市外葛西村の生れである。俗名を文藏といふ。酒類白米商を營むの傍ら、公共のために盡す處頗る多く、現に村會議員、學務委員として在任してゐる。

氏は他面において、夙に風流の道をも好み、京葉古流の家元二世松翁齋一條先生について、斯道を研究する處多年、師範代として既に二十有餘年を子弟の教育に盡して來た。即ち葛西尋常高等小學校に、名譽教授として、滿二十ケ年間生徒に教授し、その數六百八十人におよび、内五人は皆傳を免許され師範となつてゐる。

如何に氏が斯道のため、献身的に盡したかが分るのである。

かくの如き、奉仕的なる氏の努力は、各方面において認められ、東京府知事より受賞されること七回、郡および村からの表彰數度に及び、また小石川警察よりも一回受賞してゐる。

野崎一仙氏

又、前記、村會議員、學務委員の外、消防組頭として、滿五ケ年を勤め功勞尠からぬものがある。

蓋し、氏の如きは、斯道家として稀に見る有爲の材といはねばならない。將來、一層その努力に待つ處が尠くないのである。切にその自愛を祈る。(東京市外葛西村長島四八番地)

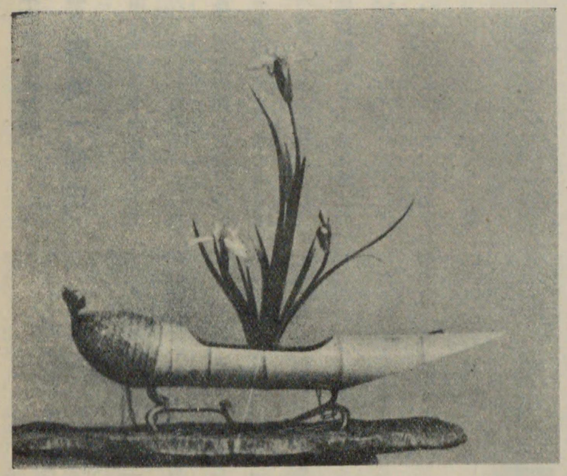
◎

春の風いづくも及ぶ草木哉　逸名
大空の春の色まつ小草哉　宗祇
春風は上に色そふ草葉かな　同
春草の上いつもなし野邊の雪　紹巴
木曾の情雪や生ぬく春の草　芭蕉
古草や春折々は雪か露　曉台
水かすみ春草匂ふつゝみ哉　宗祇
色々に水ゆくしたや春の草　紹巴
春草の花もて水をつゝみ哉　同
手をのべて折行く春の草木哉　園女
春草の委待たるゝ裾野哉　鬼貫
石起すあとやそゞろに春の草　成美
花おちて名殘からばし春の草　宗祇
綠さへ一つ色かは春の草　兼載
春の日の下草もるゝ色もなし　紹巴
あとゝへば只春草の戸さし哉　同
花々の根さしからばし春の草　同

京葉古流華道教授
華道京和會幹事
松霞齋 吉野一曉氏

氏は明治二十九年六月十五日、東京市外南葛飾郡本田町篠原に生る。吉野平八氏の三男、本名を鐵五郎といふ。

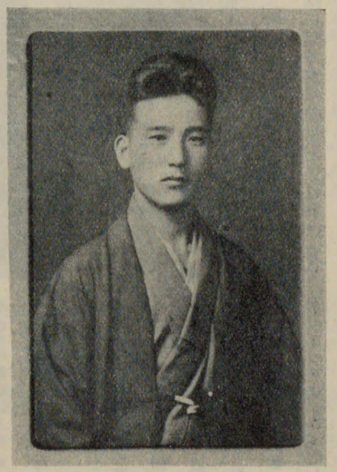
代々本田村に住し、農を業とし、傍ら盆栽花卉の栽培を營んでゐる。氏は十五六歳の當時より華道に趣味を持ち、大正元年二月より京葉古流家元松翁齋一條先生について研究に從ひ、二年十二月皆傳、同三年十一月教授職を免許されるに至つた。これその天稟の才に加ふるに熱心なる研究の賜であることと勿論だが、一面その才能を認めて、特に力を入れて教導した師の力も與つてゐる。



吉野一曉氏作

かくて、社中を養成すると共に、同六年十一月、現在の處に生花商を開店し、兩々相俟つて、斯道のために努力を怠らないでゐる。現に華道京和會幹事として、斯界のために盡す處尠くないと共に、自らの社中によつて、松霞會なる研究團體を組織し、每月研究を催してゐる。

氏の教授の主眼は、民衆的な稽古を行ふことにあり、これがためには、舊慣を打破することを顧慮せず、斯界の興隆のために力をつくす處尠少ならぬものがある。されば、今や氏の門下に集る社中は頗る多數であるといふ。



吉野一曉氏

得意の花は小菊。

家庭には夫人かね子（明治二十九年生）との間に、一女きん子（大正九年生）あり、牛島小學校に通學中である。（東京市外向島請地一八二番地）

舊嵯峨御所派古流師範
舊嵯峨御所華道會東京支部長
松尾流茶道教授
松若齋 村上理香女史

女史は明治六年三月十七日、東京日本橋區坂本町に生れた。本名しげ子、茶號を松花軒翠古と稱す。

村上家は代々德川家に仕へた由緒ある家柄である。女史は二十歳前後より華道の門に入り、後舊嵯峨御所派古流を學び、一路精進して今日に至り、昭和二年十月舊嵯峨御所より總目代を授けられ、現に大日本華道會名譽會員顧問であり、舊嵯峨御所華道會東京支部長の要職にもある。

女史の永き華道生活における功績は頗る多く、その門下から有力なる教授者多數を出してゐる。又、各種の博覽會、花會等において受賞せる數も頗る多きを算へるが大震災においてその記錄を亡失し去つた。が、女史は震災後特に斯道のために盡瘁し、甦生の意氣を以つて、研究に教導に全力をつくしてゐる。

茶道は松尾流を學び、その蘊奥を極めて、早くよりこれが師範をなしてゐる。

家庭は令妹との二人である。（東京市京橋區大鋸町十三番地）

上原華貞女史

桂古流活花教授
櫻月庵 上原華貞女史

櫻月庵華貞女史名は貞子、明治三十三年八月三日、埼玉縣南埼玉郡櫻井村上原重治氏の女に生る。

上原家は代々里正、女史の祖父治郎右衞門氏は自治の功勞者として聞え、父君重治氏は現に櫻井村長として夙に令名がある。

斯の如き名家に一粒種として生れた女史は、兩親の慈愛を一身に聚めて生ひ立ち、土地の小學校より進んで埼玉縣立浦和高等女學校に學び、大正五年以來學業の傍ら斯界に盛名ありし桂古流家元溟鼓庵池華叟先生の門に入つて刻苦精勵することゝ前後九ケ年、十三年家元教授を免許され、十四年一月より同縣喜久高等女學校嘱託教授たりし師華叟氏の助手となり、その歿後、後を襲つて同校嘱託教授となり今日に及んでゐる。

しかしながら常に向上を望んで濟まない女史は、先師の歿後更らに同流の長老たる汲古庵星野華甫先生に學ぶ。

大正十四年末夫君麟之助氏を迎へ琴瑟よく和し、家庭に於ても令名がある。（埼玉縣南埼玉郡櫻井村大字上間久里三四）

古流華道教授
松齋大掾 後藤理糸女史

後藤理糸女史

女史は明治七年十二月十六日、神奈川縣平塚に生る。本名をイトといひ、代々德川旗本の由緒ある家柄であつた。

女史は幼少より、嚴格なる武家的敎養を受け、華道にも早くより親しみ、今や東都における古流の一名手として、斯界に重きを成してゐる。

女史は早く夫君に死別し、近親の養育を一身に引き受くるの傍ら華道に精進すると共に、一面公共慈善のために、常に心を用ゐるを忘れず、その爲め粉骨粹身の貢獻をして『藥研堀の女丈夫』といはれて來た。しかるに、氣丈の女史も二竪の冒す處となり、數年間藥餌に親しむ身となつた。偶々『法運術』の効果を傳へ聞き、その治療を受けた處、忽ちにして治癒したので、その威力に驚き、女史自身、研究を重ねた結果、遂に、斯術の原理を體得し、到る處の病人を治癒するほどに上達した。女史は花道において村雲尼公殿下、その他各皇族方並に貴族の恩寵を受けてゐる一方、貧しい人、氣の毒な人に對しては、無報酬にて敎授し、それ等の數も尠からぬものであるといふ。

又、女史の親孝行は有名なもので、その故を以つて、十五六度新聞に報道され、諸雜誌にもその德行を彰された。母堂は現に八十九才の高齡で健在し、昭和三年の御大典に際しては、畏くも天盃を拜受するの恩命に接した。因に女史の祖母は九十八才の壽を保つた人である。

女史は造詣する處のもの多方面で琴曲、琵琶、座禪、肖像畫等の外柔道にも練達してゐるといふ。

思ふに女史の如きは、わが華道界において最も異彩ある閨秀といふべきであらう。家庭には母堂の外、故令弟の二子、令妹を一手に引き受け愛育してゐる。（東京市日本橋區藥研堀三二番地）

現代華道家列傳

蓬清流投入盛花家元
晃雲流盆石盆畫家元
池坊龍生派花道敎授
春報堂 猪熊昌埒女史

女史は俗名倫子、明治二十一年四月三日、茨城縣水戸市上市並松町に生る。父君は清水惠敏、母を銀といふ。父君惠敏氏は茨城縣官房主事として奉職中、五十四歳にて水戸で歿し、母堂は現に健在、何れも水戸落士であつた。

猪熊昌埒女史

女史は茨城縣立水戸高等女學校を卒業し、後陸軍歩兵中尉猪熊敬一郎氏に嫁したが、敬一郎氏は結婚後間もなく病臥の身となり、明治四十四年八月二十日、不歸の客となつた。享年僅かに二十九歳。なほ氏は病中既に起つべからざるを知るや、一書を遺さんことを決意し、日露戰爭記『鐵血』を著はし、洛陽の紙價を高からしめた。しかも、この一書は、病中氏が口述して、夫人たりし女史が筆記したものである。

猪熊昌埒女史作

敬一郎中尉は、明治十六年群馬縣白鄕村に生れ、成城學校を經て陸軍士官學校を卒業、陸軍歩兵少尉となり、歩兵一聯隊の小隊長及び旅手として日露戰爭に從軍、旅順奉天の各地に轉戰、親しく屍山血河の間を往來したのであつた。が、この一書『鐵血』は新婚の夢圓らかなるべき當時、妙齡の女史が命旦夕に迫れる夫君の枕頭に坐して、筆記した眞に熱淚の結晶であつたのである。中尉自ら卷頭に序して云く、

餘命尙夕陽の如き乎。樂人の詩に曰く『夕陽限りなく好し、然れども黃昏なるを如何せん』と。予は一劍一誠の武人にして、幸にも日露の役に從軍し、旅順奉天の各戰に丹心を試むるを得たり。凱旋の後、不治の病を得、今や二十九歳にして一生を了せんとし、この書を遺す。云々と、亦、悲壯といふべし。

さて、女史の華道に入つたのは、十六歳の時であつたが、眞に研究に力を入れたのは、夫君に死別後であつた。卽ち大正三年瀑美華愛先生について、蓬清流投入盛花並に晃雲流盆石盆畫を研究し、更らに池坊龍生派を修得し、前者は大正六年より、後者は同七年三月より敎授を開始した。が、大正十一年十一月華愛先生の歿するや、その家元二世を襲ひ、今日に至る。

現に有力なる多數の社中を養成し、閨秀斯道家として、斯界に重きをなしてゐる。（東京市小石川區戸崎町五番地）

本派美笑流生花教授
宗偏流盛花投入教授
宗偏流茶道教授

美峰軒 **榊原一松女史**

女史は明治三十五年十月二十五日横濱市山下町二百三十八番地に生まる、本名を清子といふ。父君は歿し母君は榊原ふみ子刀自である。

女史は十八歳にして神奈川縣立高等女學校を卒業したる才媛である。花道茶道は大正七年十七歳にして美笑流及び宗偏流教授美旭軒一峰先生の門に入りて修養、大正十年には已に中傳に進級し、其披露會を同年一月横濱本牧原氏別邸三景園に開催した。大正十年三月榊原家に嫁してより一層研修を勵み、遂に其蘊奥を極むるに至り、大正十五年五月皆傳に昇格し教授を允可さるゝに至つた、同年五月淺草公園一直樓に之が披露の花筵を催したのである。爾來門生の教養に從事し斯道の向上に精進を續けて居る。

得意とするは殊に木物である。

餘技として琴曲に堪能である。

家庭は夫君との間に一女あり、極めて圓滿和平である。（東京市外瀧野川町三百三十九番地）

榊原一松女史作

榊原一松女史

池坊龍生派華道教授
裏千家茶道教授

鷲峰園 **鷲田晃亭女史**

女史は明治二年八月一日、東京淺草松清町に生る。鷲田定次郎氏の女、母をみつ子といふ。祖父は紀州尾張家の御用をつとめ、父君は淺草本願寺の役員である。女史の本名を田鶴子といふ。

女史は明治九年當時の小學校を卒業し、後、家庭にあり、習字、讀書等を家庭教師について學ぶ。

花道に入つたのは、幼少の頃であつたが、明治三十七年の頃池坊龍生派の松木晃雲先生について學び、明治四十年師範となつた。

女史は何れの方面においても可ならざるなき名手であるが、どちらかといへば華かなるものよりも澁味あるものを好愛し、且つ得意としてゐる。有力なる社中多し。（東京市下谷區上根岸町五七番地）

鷲田晃亭女史作

池坊龍生派華道教授

葭昌園 **大島しげ子女史**

女史は明治三十四年四月十二日千葉縣流山町に生る。矢野忠吉氏の女である。生家は代々染物業を營む。

女史は池坊龍生派豊秋軒戸田内女史に師事して、斯道を研究し、最近その皆傳を許され教授職となつた。なほ引續き熱心研究中である。女史は老後の樂しみにもと、斯道の研究に入つたのであるから、子弟を養成せず、專ら趣味に始終してゐる。

女史の家は目下菓子卸商を營み夫君貫一氏は東京日々新聞に勤務す。貫一氏は近衞聯隊に入營し、しばしば成績優良の故を以つて、中隊長、大隊長等より賞狀賞品を授與され、又、除隊の際には木杯賞狀を下賜され、特別大演習に際しても特に表彰狀を授與された。

なほ、女史の餘技はミシン。

家庭は夫君との間にそめ子（大正十二年生）がある。（東京市外金町字金町二二三三番地）

大島しげ子女史

古遠州流華道師範
小原流盛花瓶華教授
表千家茶道教授
瑞月庵 **辻 一幸女史**

辻 一幸女史作

女史は慶應二年、東京麻布我善坊町に生る。父を岩造氏といひ、母をふさ子といふ。女史の俗名はこうである。

女史は幼少の頃より華道を好みのがあつた。

又、女史はその間、小原流盛花縫女學校へは、毎週出張して、茶道および華道の教授をしてゐる。

女流斯道家として、閨歴、技術、教授職にある。

女史は得意の花として、特に木物を好み、婦人博、電氣博その他に出瓶して受賞せること一再ではない。

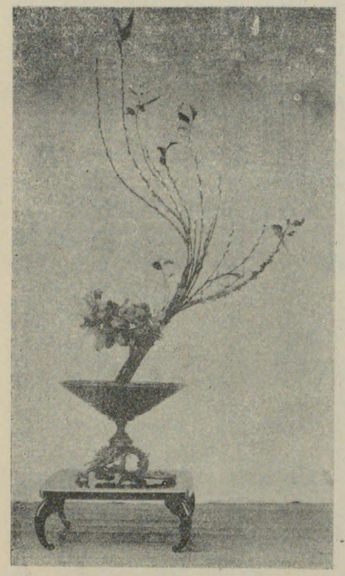
辻 一幸女史作

特に今姉が遠州流をよくせる處より、その教へを受けて、一家をなしたが、後更らに池坊龍生派をも修得する處があつた。

明治三十六年より古遠州流家元について、當流を學び初め、同四十二年瑞月庵となり、同時に師範を免許された。爾來今日まで二十餘年、當流のため將又斯道界全般の爲めに寄與する處、頗る多きも

德望最も高き一人である。斯界のため切にその自愛を祈るものである。（東京市芝區君塚町二十一番地）

古遠州流華道家元補佐
小原流盛花教授
南宗瓶華教授
愚月庵 **大杉一陽女史**



大杉一陽女史作

女史は慶應三年、山口縣德山町に生る。俗名陽子、磯邊半兵衛氏の女である。

磯邊家は周訪國德山町の草分けで、田邊の庄といつた頃からの舊家であつた。田邊の庄といふのは、磯邊姓の舊稱田邊から生れたものであつて、後磯邊姓に改められた。累代の白木綿問屋で、且つ周訪三邊の一に數へられた巨商であつた女史の大杉姓は、婿家の姓である大杉家は德川旗本で、女史の夫大杉正之氏は、外務省書記官として、支那各地の領事等を勤め、支那通として知られてゐた。女史また夫君に從つて、北京、芝罘等に七八年滯在した。後、正之氏健康を害したので、遞信省に轉任し、外事課に勤め十數年間勤續、六十六歳で逝去した。

女史が華道生活に入つたのは、明治二十四年の頃であつた

大杉一陽女史作

初めは知人について古流を學び、半歳にして古遠州流家元槻月庵一全先生に師事し、同時に千家表流茶道を學んだ。師匠は孤峯庵師であつて、後何れも幹事として重きをなしてゐたが夫君と共に支那に在任したので約八年間雅道から遠ざかるに至り、歸來後再び研究を開始し、更らに大正七年の交より小原流盛花、南宗瓶華、又、小川流煎茶をも修業し、何れも皆傳教授職となつた。

なほ、古遠州流家元槻月庵一全師は、明治四十五年に物故したが、師が在世の當時にあつては、同流は頗る盛大を極はめ、芝增上寺において開催される春秋二季の花會の如き、毎時盛會であつた。

女史は、舟に活け込むことに妙を得てゐて、故一全宗匠からも、よく賞讃の辭を受けたものであるといふ。

女史天稟高尚優雅、雅道の師として、まことにふさはしい人である。（東京市外澁谷町新橋八番地）

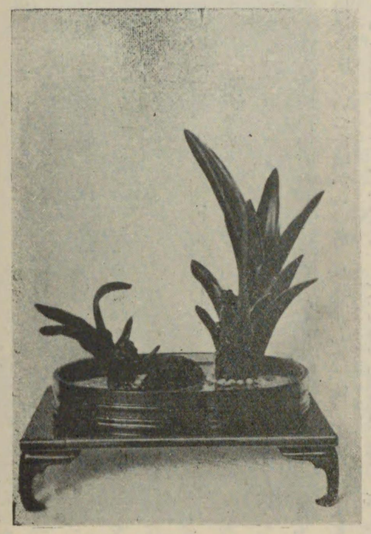
古遠州流華道教授

昭月庵　小野一幸女史

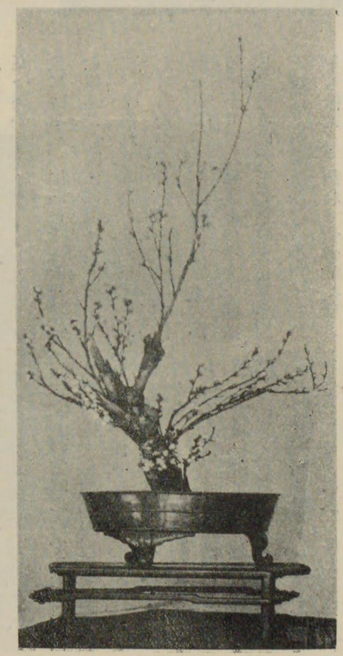
女史は明治二十三年三月、岡山縣淺口郡河内村字西原の出生、江口郡平氏同春子の女である。俗名靜子といふ。後、小野義一氏の許に嫁した。

夙に古遠州流華道を學び、これが教授となつた。人格高潔、技風亦高雅、内外の信頼最も厚く、女流斯道家の雄である。

稽古所は、自宅の外、市外世田ケ谷下北澤に設け、多くの社中を養成してゐる。（東京市麻布區坂下町三番地）



小野一幸女史作



小野一幸女史作

◎　丹比乙麿呂
霞立つ野の邊の方に行きしかは鶯鳴きつ春になるらし
◎　素性法師
見渡せは柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける
◎　管家
東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな
◎　同人
梅の花ぬしを忘れぬものならばふき來ん風にことづけはせよ
◎　奥謝野尚綱
霞みつゝ日は落ちにけり山陰の花のみ白き春の夕ぐれ
◎　香川景樹
白樫の瑞枝うごかす朝風に昨日の春の夢はさめにき
◎　茅野肅々
森ゆけば物やはらかき慰めのこゝちにしめり木の香するかな

古遠州流華道教授

澗月庵　林一清女史

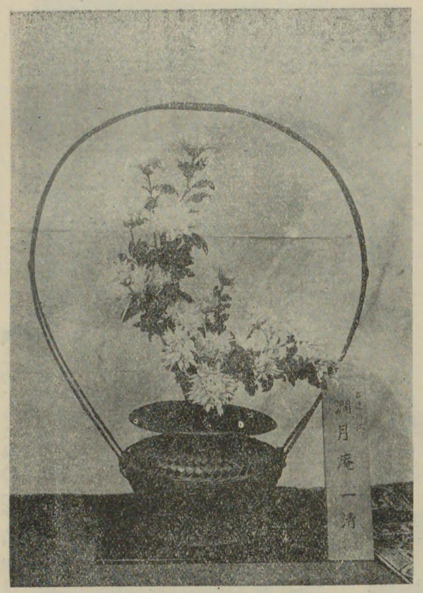
女史は明治十八年五月三日、東京芝濱松町に生る。本名喜久、林勝氏の女である。

女史は明治三十五年東京女學館卒業、更らに同三十九年女子高等師範附屬高等女學校專攻科第二部を卒業す。

明治四十四年二月より、古遠州流大家瑞月庵辻一幸女史について學び、大正五年皆傳を授與され、爾來、當流教授として今日に至つた。瑞月庵門下として最も古く、且つ有力なる閨秀の一人である。

女史はすべての花に對して得意である。又、趣味も廣く、若い時代には和歌、俳句等を學び、茶は石州流の奥儀を極はめてゐる。

震災前までは生地濱松町に住してゐたが、爾後現住所に移り、母堂とたゞ二人の奥床しく閑寂なる趣味生活に親しんでゐる。（東京市外中野町三八四三番地）



林一清女史作

古遠州流華道教授

晴月庵　葛西一住女史

女史は靜岡縣田方郡韮山村原木の人、明治二十八年十二月三十一日を以つて生る。本名を住重といひ、古見易五郎氏の長女である。母堂をとも子といふ。

葛西姓は婚嫁のそれである。

華道に入つたのは、大正八年であつて、師は古遠州流の名手として知られる、瑞月庵辻一幸先生であつた。

爾來、研究倦む處なく、生花に盛花に天稟の才華を發揮し、俊髦才媛の多い同門下においても、拔群の譽を荷ふに至つた。かくて大正十四年十月師範を許され、爾來、教授として門下の養成に力を用ゐてゐる。（東京市芝區新堀町一六番地）

葛西一住女史作

遠州流華道教授
松霜齋 **矢部一曉女史**

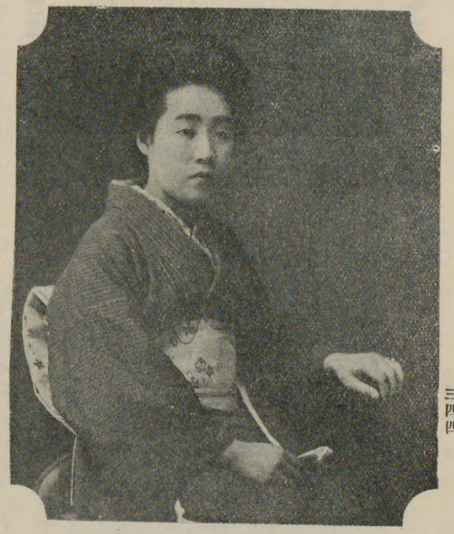
女史は明治廿五年八月八日、東京本郷湯島兩門町に生る。俗名を若といひ、柳寅藏氏の長女である。父君は新潟縣の人、三十一歳の時上京、淺草芳町に建築業を經營し、漸次功を收め湯島に移り、斯界に重きをなしてゐた。昭和二年七十四歳を以つて歿す。

女史が華道に志したのは、十四歳の時であつた。卽ち遠州流の大家海野一曉先生について研究、切磋琢磨の功成りて、十九歳皆傳となり、教授職となつた。後更らに同流の家元矢島一甫先生に師事し益さにその蘊奥を極はめたのである。當時松若齋一檗と號してゐたが、昭和二年十月四世松霜齋一曉と改めた。

女史はかつて、明治四十四年都新聞社主催の諸流生花競技會において入選し、銀牌を贈られ、大正七年十一月第一回秋季連花會において、優花證を受けた。その外博覽會その他のものは頗る多數に達する。

女史の得意の花は梅である。この外、寶生流謠曲を加藤景信氏について學び、裏千家茶道を吉岡宗圓氏について修業し、更らに長唄にも長じ、和歌、俳句をも好み、特に英語に達し、極めて多才多能である。

母堂いく子刀自なほ健在し、長女百江嬢(大正十一年生)あり、平和圓滿なる家庭である。(東京市本鄉區湯島兩門町一二番地)



矢部一曉女史

美葉軒一紅作

本派美笑流生花教授
宗偏流盛花投入教授
宗偏流茶道教授
美葉軒 **倉島一紅女史**

女史は東京淺草材木町に於て倉島恒太郎氏の女として明治三十六年一月五日呱々の聲を擧げた。家業は先代より洋酒鑵詰等の卸問屋として知られて居る。

女史は淺草小學校を卒へ、次て跡見女學校に入學三學年を修業したが、病氣の爲止むを得ず半途退學した、惜しむべきである。それより風流に志し、大正九年二月十八歳にして花道を美笑流及び宗偏流盛花投入花並に宗偏流茶道教授美旭軒一峰先生に師事して研修、大正十二年には已に中傳に昇級し其披露會を同年十一月上野公園常盤華壇に於て催し、大正十五年五月皆傳に進み其の奥堂を極むるに至つて教授を許された、而して之が披露の花筵を同年五月淺草公園一直に開催した、爾來專心茶花道の修養に努め、東京華道協和會の一員として斯道の向上に鋭意精進を續けて居る。

倉島一紅女史

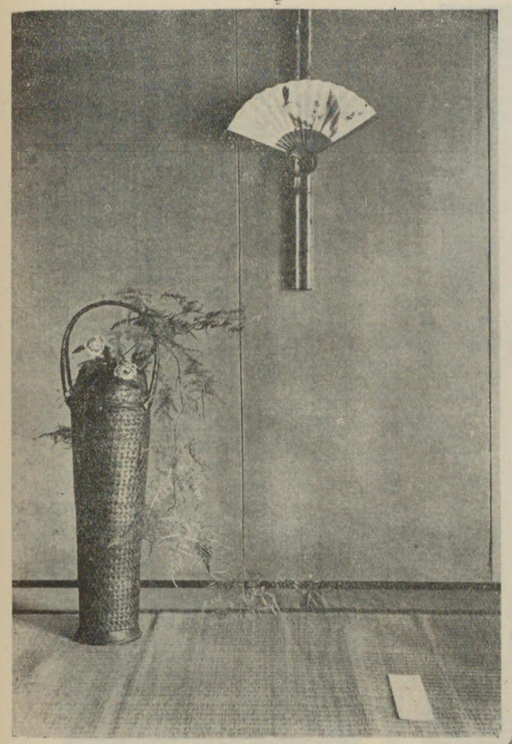
女史は好んで木木を挿す、其の得意とする所である。

餘技は長唄、三味線等にて造詣ありと。

家庭は父、祖母弟妹叔母の諸君で家運隆々圓滿平和である。

(東京市外瀧野川町瀧野川三百四十一番地)

未生流華道教授
矢野式盛瓶花家元
廣緝齋　矢野良甫氏



矢野良甫市氏作

氏は明治二十六年七月十三日、大阪西區南堀江下通り四丁目に生る。名を良芳といひ、矢野勘吉氏の男である。

祖先は高山の士族、今より二百年前大阪に出でて商人となり、熊野屋勘兵衛と稱し、祖々父又同藩士にして三浦姓であつたが、後、矢野家を繼ぐに至る。この人は元治の廢藩に至るまで、戸長として重きをなし、又一面肥料乾物を商ひ、明治初年には、御室御所御用を爲し、宮家より多くの下賜品あり、現に家寶として保管されてゐる。

氏は中學に學び、更に英語を專攻、貿易業に從事し、後、獨立して主に、舶來雜貨、メタル等を取扱ひ、大正十二年まで繼續、現在は後者を專門としてゐる。

華道には早より志し、親族藪廣友齋先生にき未生流を學び、大正三年獨立を許されるに至つた。大正十二年雜貨業を廢すると共に、專ら、花道三昧に入り、現在に及んだが、その間大正八年植松子爵會長の大日本花道奬勵會に幹部となり、大いに盡す處あり、當時大丸呉服店において、毎月大會を開催して、斯道の普及に努め、現に同會の幹部である。

又、大正十二年一月、白木屋呉服店支店長と圖り、阪地における最初の花道家とデパートの會を設けて、相榮會と稱し、常任幹事兼會計となつて盡す處があつた。同會は大阪における自由花の各派一流を網羅したもので、その盛容比類なきものとして、大に世の視聽を集めた。後、諸流團體花友會の幹事に推され、更に同十五年には日本花道協會を起して、現に理事、主事兼會計として盡瘁しつゝある。

なほ氏は同十四年春矢野式盛瓶花を創始、大に賞讃を博し、婦人會の講師を囑託され、又、博覽會等において受賞する數回に及んだ。

氏は常に現代華道は、實社會とまだ間隔があるので、斯道を今一歩進めて實社會に卽したものとする必要があるとを高唱してゐる。

そして日進月歩の文化に遲れないやう、追隨させたいといふ理想を以つて斯道に力を盡してゐる。

氏得意の花は淋しい花、流儀においてはエニシダ、菊の殘花等であると。

又茶道は早くより研究に從ひその奥儀に達し、大正十三年より同十五年七月まで、今日庵大阪出張所の事務を統括してゐた。又、餘技として南畵を姬島竹外氏に學び、一家を成してゐる。

夫人は肥原未生流家元の直門、浩々庵美市と號し、現に未生會の幹事として重望を荷ふ人である。

中に長男實生君（昭和二年八月生）あり、圓滿なる家庭を結ぶ。母堂ツマ子刀自は、德井町に令弟夫妻と共に隱棲しつゝある。

氏吝性重厚仁俠、好んで人の爲めに盡し、德望最も盛んである。

（大阪市南區順慶町一丁目十五番地）

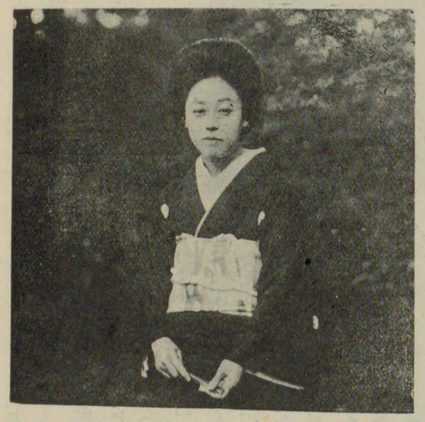
池坊華道
小原流盛花瓶華教授
芳春園　市村幸水女史

女史は明治二十年一月六日、東京市芝區白金猿町に生る。本名を仲子といふ。

華道は初め池坊を習修し大正三年五月皆傳を許され、芳春亭幸水と號し、次で南宗瓶華を學びて春光軒青松の號あり。更に小原流盛花瓶華に入りて現に脇教授の職にある。

盆石は東山流にて蘊奥を極め大正三年七月師範に昇格し號を春岡亭鳳仙と稱す。

女史は頗る多趣味の人で茶道は表千家を研修し造詣深く、其他舞踊、長唄、割烹、園藝等の餘技あり行くとして可ならざるは無く女史の如きは實に稀に見る多幸多福の人と謂ふべきである。（東京市芝區白金猿町七七番地）



市村幸水女史

家元池坊華道教授
東京紫霞會所屬
春風軒 風間桂山氏

氏は、文久元年十二月十日、山梨縣甲府城内、佐藤兵衛政一の四男として生る。名を桂龍といふ。

佐藤家の家祖は徳川家康公に仕へ、爾來、連綿十二代を經、代々幕府の旗本であつた。氏の嚴父は甲府城勤番小普請取扱役を勤め、母うら子は同じ旗本同城組頭加藤景明の長女である。氏は幕府瓦解に際し、風間家の養嗣子となつた。

氏は寺小屋時代を經て、小學を卒へ、爾後獨學を以つて、勉學大に力むる處あり、縣の學務課より授業生を拜命、小學校助教員として三ケ年を鄉里の學校に奉職した然るに時勢の進運に感する所あり勃々たる壯志を抱いて、單身横須賀海運造船所に知己を訪ひ、造船機械製作修業を志した。時に明治十四年のことであつた。

風間桂山氏

かくて、具さに實地につき、機器廠等に職を奉じ、後、轉じて株式會社築地活版所機械部長として勤務すること四年、明治三十五年自ら芝高輪南町の一角に、工場を借り受け、講師を招聘し、以つて機械學を習得する等、その努力精進は、青年の範とするに足るものがあつた。

明治二十年業成るや、東京に出で、石川島造船所および陸海軍兵建設し、諸機械の製作販賣に從ふ。業連隆々として、産を成す大、大正十四年長男龍陽氏に後事一切を託して、自ら閑日月を樂しむことになつた。

氏は、花に對しては、少壯の頃より、大なる趣味を有し、その未だ審閲時代においては、斯道に入るの寸暇なきため、自ら机上床の間等に投げ入れ、以て心を慰めるといふ程、好愛してゐたのである。

されば、業成り後事を長子に讓つて、閑日月を得るや、先づ第一に花道の修業を志し、生花を池坊岡田廣山先生に、投入盛花を石井紫老氏に就いて學ぶに至つた。爾來夙夜倦む處を知らず、研究修練に心身を傾注したので、抜術の進境刮目に償するものがあるといふ。

なほ氏は挿花を以つて、人生々活上に缺くべからざるものであるとの信念に立ち、斯道の家庭普及を念願し、輕便速成の講習法を研究しつゝあつたが、今や漸く完成に近づき、その發表も近き將來にありとのことである。(東京市芝區高輪北町五三番地)

横田茂市氏

絳雲未生流花道家元
絳雲會々長
表千家流茶道教授
絳雲齋 横田茂甫氏

氏は明治十五年七月三十一日、香川縣善通寺町字有岡に生る。本名を茂市といふ。

生家は家系の正しい謂ゆる舊家として知られた家柄であつた。氏はこゝにおいて學業を卒へたが、少年にして風流の道を好み、年十七にして大阪に出で、當時、隆々の聲望高かつた末生流の門に入つて、華道の技に親しむことゝなつた。夙夜精勵して切磋琢磨すると共に、廣く他流を見學して、採長補短の用意を怠らず、年二十一にして、師範代の重位につく。

しかし、勃々たる向上心に燃ゆる氏は、これを以つて滿足せず、廣く斯道の精粋を極むべく東上し芝神明に卜居して、二年有餘を東都各流の研究に費し、更らに鎭西の斯術を極むべく、去つて下關に移り居る事三星霜、欲するがまゝに同地の斯技を修得して大阪に歸つたのである。かく、或は東し或は西して、修道の一路を辿ると共に、その間多くの子弟を養ひ、大正六年には、推されて華道准頭活會司、末生流大阪花道團體本部役員の樞要の地位を占むるに至つた。

かくて大正七年四月、別に自ら絳雲未生流なる一新派を樹立、以つて宗家たるに至り、爾來、專ら門下の養成に潜心し、今日まで幾多の閨秀俊才を門下から輩出した。現にその技風と德望を慕ふて、來り教へを乞ふもの頗る多く、今や大阪斯界一方の覇者として、九鼎大呂の重きをなしてゐる。

横田茂市氏作

氏は、別に抹茶表千家流教授として、多數の門下を擁し、特に奈良の別邸には、茶庵を設け、花道と共に多くの門葉を養成してゐる。

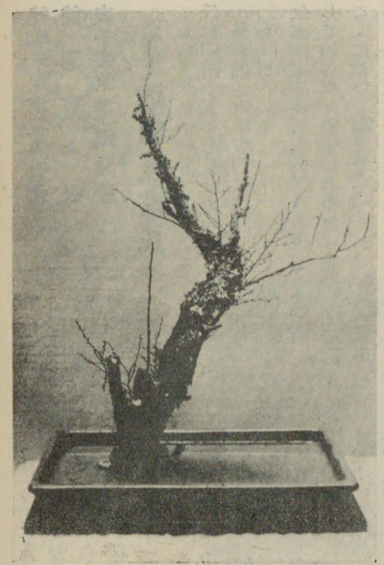
また、社中の研究機關として、絳雲會を組織し、毎月研究會を催し、專ら社中の技術向上に資す。

資性格勤、人格高潔、名利に恬淡にして德望自ら生ずるものがある。(本宅大阪市東區鎗屋町一丁目二一、別宅奈良縣生駒町菜畑)

緣雲未生流花道教授
緣雲會名譽顧問
朴木保甫氏

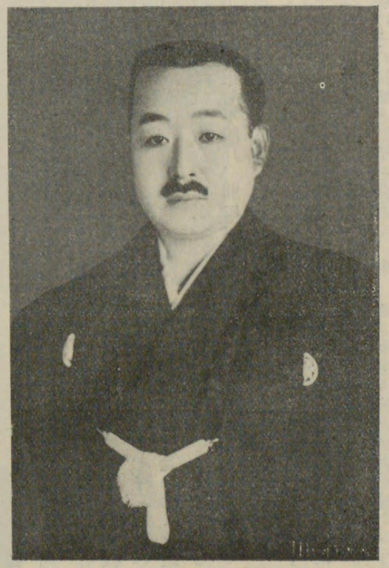
氏は明治二十四年六月一日を以つて、奈良縣生駒郡生駒町菜畑に生る。本名を葆光といひ、朴木芳三郎氏の長男である。化粧品卸問屋として、斯界に著聞する實業家である。

朴木家は、大和生駒谷の出で、遠祖は神功皇后、應神天皇の後裔、卽ち生駒大明神の末流である。爾來、生駒十七ケ村の大庄屋として十七代を繼承し、天正時代においては代官役を勤め、明治維新に及んだ。極めて由緒深き家柄である。



朴木保甫氏作

氏の嚴君芳三郎氏は、安政六年の生れ、明治二十五年上阪して、煙草卸賣業を營み、後、專賣制となるや、元賣捌業を經營した。大正二年より化粧品問屋を創業し、業運隆々として上り、現在は隱退して、葆光氏に後事を託し、自らは生駒の別邸に、風月を樂しんでゐる。



朴木保甫氏作

氏は幼少の時より風流の趣味を解し、明治三十八年頃より岡本逸甫宗匠の門に入つて未生流華道を學ぶこと、十餘年の久しきに及び、累進して、諸國總會司に進んだ。かくて氏は當流のため、大に盡す處あり、岡本先生が大日本花道團體大阪本部長となるの半面には、氏の貢獻による處大であるといふ。

大正七年横田茂甫氏が、新に緣雲未生流を樹立するや、その名譽顧問として、その完成のために、大に力を致したのである。

氏は風流の道には何によらず、趣味を持ち、茶道表千家を初め、生駒の別邸には庭園を設け、花卉園藝に親しみ、茶室を設け、更らに寫眞、觀世流謠曲等にも通じてゐる。家業に從ふの傍ら、閑日を割いて常に風流韻事のために、精進してゐるのである。まことに、欽すべき雅懷といはねばならない。

家庭には繁子夫人（明治二十七年生）あり、琴瑟相和す。（大阪市東區松屋町、電話東二〇二〇番、別邸奈良縣生駒郡生駒町菜畑）

古遠州流家元補佐
小原流盛花教授
古竹園瓶華教授
松尾流茶道師範
東佛教婦人會幹事
春月庵 岡森一喜女史

女史は慶應三年六月、高知市北奉公人町に生る。本名を梅といふ。父は淺津金藏、母は雪子、後、鳥取縣の岡森家に嫁す。岡森家は由緒ある名家であつて、女史の夫君は遞信官吏として令名あつたが、後、鳥取藩主池田侯に仕へ、大正六年に歿した。鳥取縣下岡の森神社は、同家にゆかりある神社であるといふ。

女史は明治二十七年より古遠州流を學び、大杉一陽女史、辻一孝女史等と共に、家元直傳を受く。同三十一年春月庵となり、現今に及んだ。又、一方小原流盛花、古竹園瓶華投入等を學び、何れも師範となつた。更らに茶道は松尾流を修業、同じくこれが師範である。

女史は敬神崇佛の念厚く、明治神宮の祭禮には、大正十年より十三年まで、每年生花を奉納し、同十二年皇后陛下明治神宮奉物殿へ行啓の際は、御休憩所に生花を献納するの光榮に浴した。又、今上陛下皇太子殿下に在せし時代にも献花の榮譽を荷ふた。

なほ、佛教方面においては、夙に東佛教婦人會の爲に盡瘁する處多く、明治三十六年大僧正梶尾貫務師より、幹事に推擧され、任滿つるや同四十二年にも、再び任命された。又、品田俊平氏主宰の心教暗示學研究會の會員として心教の研究に專心し、佛教、華道と共に、その思想精神の涵養に努力しつゝある。

岡森一喜女史作

女史得意の花は桃の控へ流し、卽ち流し技である。（東京市外馬込町千束三四七九番地、東京市麻布區永坂町三十三番地）

東古流華道教授
無聲流盛花投入教授
弄月園　今村竹雨女史

女史は通俗文藝界に於て周く知らるゝ今村次郎氏の夫人である。故石原雨香先生に師事して東古流華道を習修し、次て無聲流家元宮原無聲先生に就いて盛花投入を研修して其蘊奥を極め、共に家元總會頭職の高職に昇進し、流内樞要の位置に在りて重きをなして居る、茶道は表千家流家元の直門で造詣が深い。

女史は大正十一年都新聞主催華道十傑に當選し名聲大に擧る、現に大日本華道國風會評議員の列にあり。大日本華道會の名譽會員、且つ顧問であると共に、昭和二年都新聞にて催したる華道十傑投票當選者により發起したる華道都木和會の正會員であつて、斯道の爲には常に私を忘れて盡瘁せられる共の熱誠は何人も首肯し且感謝して居る所である。

家庭は令息信雄氏夫妻ありて家業を相續し、令孫誠一氏ありて圓滿和平春風駘蕩の感がある。

（東京市淺草區須賀町二十番地、電話淺草三五一一番）（自宅稽古日、火曜日）

今村竹雨女史作

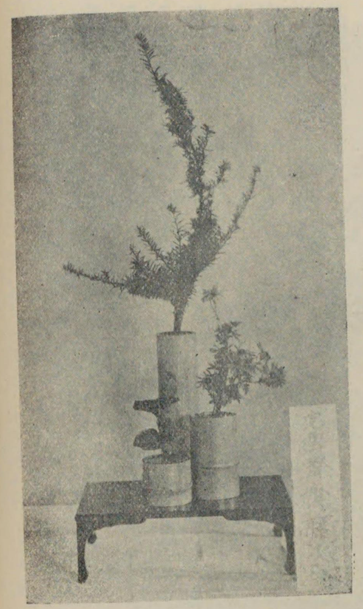
東古流教授
弄月園　今村竹雨女史作
蝦夷松・薔薇

宏道流家元幹事 大日本華道國生會幹事長 完雲齋 齋藤溪月氏

氏は埼玉縣北埼玉郡新郷村の人明治十六年一月二十日、安五郎氏の男として生る。

氏は明治三十九年より華道に志し、當時名聲嘖々たりし宏道流家元渡邊溪淫氏の高弟松雲齋内田漬月氏について、研究すること七年有餘、大正二年一月教授職となつた。爾來小石川戸崎町に居をトし、子弟を教導するの傍ら、獨自の手法を加味して、自ら研鑽を積むこと五ケ年に及んだ。同六年春より居を餌差町に移し、一層斯道のために精進の一路を進んで來た。そして斯道發展のために、師範者を糾合して研究會を組織し、或は春秋二季の招魂祭には、自ら率先して展覽會を開催し、更らに又、昭和三年二月には二週日に亙つて、京王閣樓上に展覽會を催し、大に斯道の振興を促す處があつた。この外大正三年の大正博に出瓶久保田知事より賞狀を受け、同十四年秋明治神宮に獻花を行つた。

この間大正十三年四月大日本華道國生會の組織に奔走し、これが幹事長となつて盡瘁す。自派内になつては家元幹事の最高職にあり、又、諸流の家元師範者よりなる討論會、批評會等の如きを氏の主唱によつて催すこと一再ならず、斯道振興のため、寧日なきの奮鬪努力をなしつゝある。



齋藤溪月氏作

齋藤溪月氏

家庭は夫人スエ子（明治十六年生）との間に長女はつ子（明治四十年生）長男猛夫君（大正五年生）二男廉夫君（同十一年生）の二男二女がある（東京小石川區餌差町三四）

小原流投入盛花教授 舊嵯峨御所派古流教授 松光齋 花房一榮女史

女史は俗名を敬子といひ、明治十二年九月六日、吉本氏の末女として、東京日本橋濱町池田公爵邸内に生れ、後花房家に嫁す。

父君は女史が幼時に卒去し、母堂芳子刀自は震災の年八十四歳を以つて歿した。令兄吉本光藏氏は海軍將校となつたが、音樂に趣味を持ち、夙に獨乙人エツケルト氏について研究、後、音樂研究のため獨佛に留學し、歸朝後には、海軍々樂隊の教授となつた。又、氏は國歌『君ケ代』の作曲家として、一代の光榮を荷ふてゐる。又、日比谷舊音樂堂の建設は、やはり令兄の主唱と計劃とによつて、完成されたものであるといふ。

花房一榮女史

女史は小原流盛花並に舊嵯峨御所派古流を學び、何れもその蘊奥を極はめ、現に小原流一葉會幹事、舊嵯峨御所派古流諸國總會司幹事兼會計の要職を帶び、斯道のために盡す處大である。

女史は華道に志す動機として、

『何か自分を慰め且つ樂しみとなるもので、しかも、最も女らしくて好きな道として、この道を心がけてゐましたが、機會がありませんでした。が恰度、花房家へ嫁ぐやうになつてから、その機會を得、舊嵯峨御所古流家元村上先生について學び始めました。が、人樣にお教へするのは、烏許がましいと思ひますが、巧拙は別といたしまして、たゞ好きな道でありますので、花に接する時の心持ちが、何よりも私の喜であり生命であります。從つて、教へるとか教へられるといふことでなしに、この喜びを皆樣と一つにすることを樂しんでゐる次第です』

如何にも謙讓なその人柄を察することが出來るといふべきであらう。

又、女史は、茶道の研究にも深く心を潜め、池田氏について現に修養中であるといふ。

家庭は主人有恒氏との二人、清福を謳はる。（東京市本鄕區追分町三〇番地）

橘遠州流家元顧問
清香堂 **牧野梅軒氏**

氏は明治四年八月二十三日、東京本所元五ツ目河原町に生る。本名を長次郎といひ、商を營む。

當流は千葉縣帆丘町（今の長生郡本納町）なる橘神社の神官水鳥川保忠なる人が、創始したものである。水鳥川氏は古典に通じ、且つ尊王家として知られた人であつて、深く橘姫の御神德を敬仰すると共に、廣く敬神尊王の信念を扶植するといふ理想を以つて、傳來の遠州流華道に、一新機軸を出し、橘の一字を冠するに至つたものである。

二世宗家は清香堂府川龍軒氏で約五十六年前その跡を繼き、當流の基礎を固からしめた人、現に古稀を過ぐる半にして髮鑁、淺草向柳原町に住す。三世は卽ち現家元であつて、卽ち清香堂奥野露月氏である。

わが牧野梅軒氏は、夙に華道に趣味を有し、當流二世家元府川龍軒氏について、斯道の門に入つたのであるが、現家元奥野露月氏とは謂ゆる兄弟弟子、相互に精進奬勵して、その技を磨くと共に、當流の發展に大なる努力を拂つた。而して、大正九年十一月、奥野氏が第三世家元を襲名するについても、大にこれを補佐し、現に家元顧問の要位にあり、夙夜當流のために力を傾注して、流内の絶大なる信望を荷ふてゐるのである。

資性溫厚篤實の君子、一流の長老として技倆人格兼ね具はるの人である。

家庭には夫人との間に三子あり家業また繁榮す。（東京市神田區新銀町三九番地）

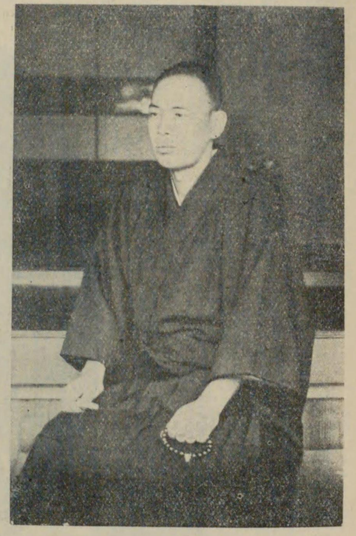
牧野梅軒氏

牧野梅軒氏作

家元池坊華道教授
廣山流投入盛花教授
叶月堂 **石山飛雲氏**

氏は明治二十一年九月十日、羽前寒河江町に生る。本名有亮、僧侶石山亮珊師の長男である。

氏は新義眞言宗智山派の僧侶、幼少にして桑門に入り、刻苦修道すること十年、年二十一にして、一寺の住職となり、二十七歳の時、先代の遺志によつて、現埼玉縣下鳩ケ谷町源永寺の住職に轉住、その第二十二世を繼承した。



石山飛雲氏

氏の華道は、幼少より園藝を好む處に起因し、大正九年春池坊山田望山先生の門に入り、指導を受くること三年、生花敎授となり、同十二年春より岡田廣山先生の門に入り、立華並に廣山流投入盛花を研修、現に池坊東京紫雲會評議員、東畴社々長である。

氏は精神的敎化、家庭敎育の一つとして、斯道の普及を企圖し、今やその門を叩く社中頗る多し。

氏性溫順にして社交に巧みに、よく言行一致の德を有し、深く一般に敬仰さる。（埼玉縣北足立郡鳩ケ谷町大字三ツ和三二八八番）

家元池坊花道教授
廣山流投入盛花教授
愛豊園 **松浦松翠女史**

女史は本名依世、明治二十五年一月二日、東京品川町南品川に生る。松浦竹次郎氏の女である。

大正四年、横濱における池坊花道敎授松愛軒宮川翠光氏（岡田廣山先生門下）の下に入門、斯道に志し、大正十三年翠光先生の物故するに及び、岡田廣山先生の門に入り、大に斯術を研磨する處があつた。現在大日本生花總執事である。

松浦松翠女史

女史も又横濱池坊開拓に當つて功勞尠からず、大正元年横濱清正會の創立に際しては、大に奔走する處があつた。社中としては外人その他頗る多く、現に池坊東京紫雲會松翠社長の職にある。

茶道裏千家に通じ長唄を好くす

長女勝子孃は、大正十四年日本女子美術學校日本畫科を卒業し、長男福卿君は、陸軍士官學校に在學し、次男祿卿君は、目下京都三高に在學中である。（横濱市中區山下町五十二番地）

關西流盛花二世家元
松榮 光永文子女史

女史は明治十六年六月一日、山梨縣に生る。文學士前田晃氏の令妹であり、日本電報通信社重役光永眞三氏の夫人である。

女史は今より二十八年以前より華道の門に入り、教授職となつて以來、二十五年になる。師は先代關西流家元夏目松榮先生であつて、大正十五年同先生故人となるや、女史は推されて二代目家元を繼承し、以つて今日に至つたものである。

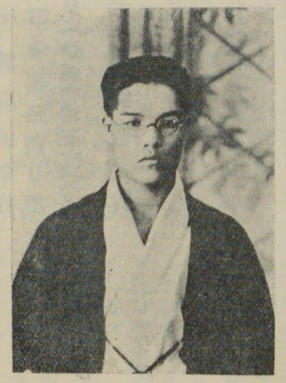
光永文子女史

しかし、社會的地位名望ある女史は、全く趣味の斯道家であつて、女史は他にも趣味多く、琴曲、琵琶、盆石、三味線等行く處として、可ならざるはなき、多藝である。

夫君眞三氏との間に一男二女あり、長女宮子孃(明治四十二年生)は、三輪田高等女學出身の才媛、他家に嫁し、長男廣氏(明治四十四年生)は、目下靜岡高等學校に在學、二女友子孃(明治四十五年生)は、三輪田高等女學校に在學中である何れも俊秀の譽がある。(東京市小石川區雜司ケ谷町一一九番地、電話牛込四九六三番)

その教授の如きも、希望者に對しては悉く無料で教へ、決して報酬を受くることをしない。即ち世の謂ゆる遊藝師匠的態度に墮せざるにとめめに努力してゐるのである。

◎みよしのゝ山べに咲ける櫻花雪かとのみぞあやまたれける　(紀友則)
◎いざ今日は春の山べにまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは　(素性法師)
◎花の色は霞にとめて見せずとも香をだに誰め春の山風　(良峯宗貞)



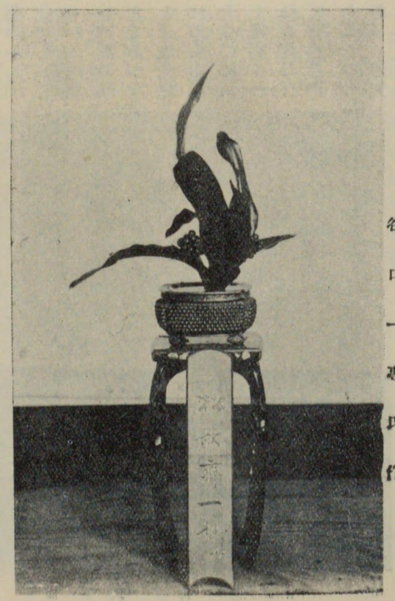
谷口一專氏

遠州流華道教授
松梅會幹事
清賞會同人
松巧齋 谷口一專氏

氏は三重縣河藝郡明村の人、明治三十四年三月一日を以つて生る。本名を專彌といひ、谷口德次郎氏の長男である。父君は農を業とする傍ら、養蠶教師を兼ねて斯界の權威である。

氏は大正四年三月鄉里の高等小學を卒業し、同八年三重縣鈴鹿郡龜山農學校を卒業す。

氏は大正五年十月、鄉里にて名古屋の人北浦氏について、美松流を學んだが、師の歸鄉するや一時師なく中止し、後上京して、遠州流を名古屋の人松國齋一與先生について學んだが、師の歸國するや、家元本松齋一甫宗匠に學び、大正十五年二月初傳、昭和二年一月中傳奥傳を許された。かくて、昭和二年十月、麹町紀尾井町清水谷公園内皆香園において、松梅會長遠州流十一世家元本松齋矢島一甫先生の三週忌、故十四世松養齋海野一伯先生の追悼會並に十二世家元と十五世一伯の繼承披露會の行は



谷口一專氏作

れた際、松巧齋一專と號し、教授披露をなした。

氏得意の花はおもと。餘技としては、筑前琵琶を好み、入神の技を有す。現に松梅會幹事、清賞會同人として、斯道のために盡してゐる。(東京市外內巢鴨町大字巢鴨一二四八六)

桂古流華道教授
桂古流家元預り役
大日本華道會埼玉支部長
汲古庵 星野華甫氏

星野華甫氏

氏は明治八年五月二十三日埼玉縣浦和町に生る。本名を長吉といふ。氏の祖先は藤原氏にて祖父三郎兵衞氏の兄三左衞門藤原重巽氏は同地の本陣で紀州家より苗字帶刀を許され鳥見役を命じられた實に同地の草分ともいふべき舊家であつた。

氏は父君市五郎氏の營業を繼襲して質業を營んだが宗教に歸依して今日に至つたのである。

桂古流の源流を按ずるに光格天皇の頃舊桂宮花務職たりし養眞齋白龍先生が維新の際佐渡國に遁世し桂古流と稱して同地に華道を弘めたのに始まるといふ。其高弟佐渡の人眞壽軒白鶴先生は實に池華臾先生の恩師であつて、五ケ年間葉蘭のみを挿花せしめたといふ程熱誠篤實の達人であつたと。池先生は即ち白鶴先生の跡目を繼襲され桂古流の三世家元とたられたのである。池先生は佐渡國日蓮の教義を信仰するに至つて大に悟る所あり自己の信ずる道に邁進すべく大正八年斷乎として其業を廢止した程の確固なる信念の持主である。

氏は普通學を卒へ後三輪塾に入りて漢學を習得し、傍ら風雅の志深く明治三十六年二月古流池華臾先生に師事し研鑽多年其蘊奥を極め同三十九年には國會司に昇進指南を開始した。大正四年池華臾先生が桂古流家元を繼承したので其意思を襲ぎ同流を稱し、大正十五年七月家元逝去後繼嗣華美枝女史幼年の爲家元幹部の總意により家元預り役として同流華務を總攬して今日に至つたのである。

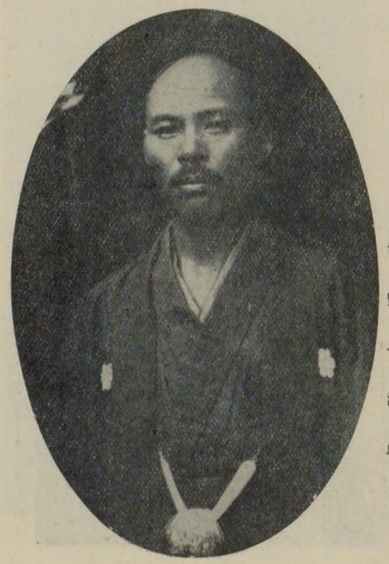
星野華甫氏作

桂古流は同流一統の信望を荷ひ前家元の遺志を繼ぎ同流華道の發展に盡瘁するのみならず浦和小學校學務委員、日本赤十字社埼玉支部浦和區收入委員、浦和青年音樂團副團長、浦和青年會副會長、浦和町會議員等の名譽公職に從事し德望があつた。現に浦和地方裁判所陪審委員である。氏はまた前家元と共に東京大正博覽會金澤村の人で明治三十三年埼玉縣熊谷町に來り同地に教場を構へ同三十六年浦和町に出張教授所を設けた時に氏は入門したのである。爾來池先生は同縣下樞要の各地及び東京にも教場を設け專心一意此流の進展に奮勵努力した。

氏は資性溫厚着實同流一統の信望を荷ひ前家元の遺志を繼ぎ同流華道の發展に盡瘁するのみならず浦和小學校學務委員、日本赤十字社埼玉支部浦和區收入委員、浦和青年音樂團副團長、浦和青年會副會長、浦和町會議員等の名譽公職に從事し德望があつた。現に浦和地方裁判所陪審委員である。氏はまた前家元と共に東京大正博覽會に生花を出陳して同會長より感謝狀を受け其他各方面より數多の表彰謝狀等を受けたるを見ても其名望の一斑が窺はれる。

氏は俳句圍碁等に趣味を有し、俳句はその最も好む所である、母君の父は夜雪庵金羅の門人なりし、氏は十六歳にして蕉風一籟居琴堂先生に師事した、先年讀賣新聞に於て催したる菅公一千年祭記念に氏の應募句紅葉山人選の入選句「明星の如月寒き端山かな」は龜井戸天神奉揭の額に納められて居る。家庭は老母及び岸子夫人との三人である。(埼玉縣浦和町仲町、稽古日一、六、五、十)

正風遠州流華道教授
大日本遠州流華道會幹事
貞曉齋 海野一潮氏



海野一潮氏

氏は明治十七年十二月、茨城縣多賀郡鮎川村字油繩子に生まる。本名孝太郎と云ふ。鄉里の中學校卒業後、明治四十三年二月貞歡齋三瓶一聲師につき遠州流華道を學び、教授職となり今日に至る。現在正風花道研究會及び大日本遠州流華道會東京支部幹事として、斯道のために努力しつゝある。

氏は華道に對し、師の意を擧み花道の本旨を守り、心技を以て身を修め、技巧を以て自然の態を模することに努めにゐる。

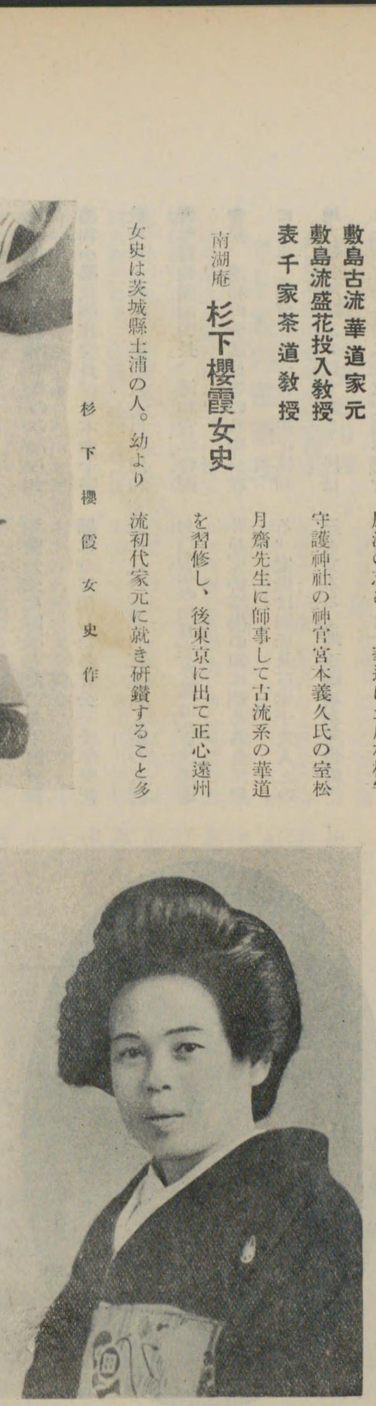
現に東京市電氣局吏員を奉職し公務の餘暇を以て電氣局員同好者に華道を教授してゐる。(東京府下淀橋町角筈七二八)

杉下櫻霞女史作

敷島古流華道家元
敷島流盛花投入教授
表千家茶道教授

南湖庵 杉下櫻霞女史

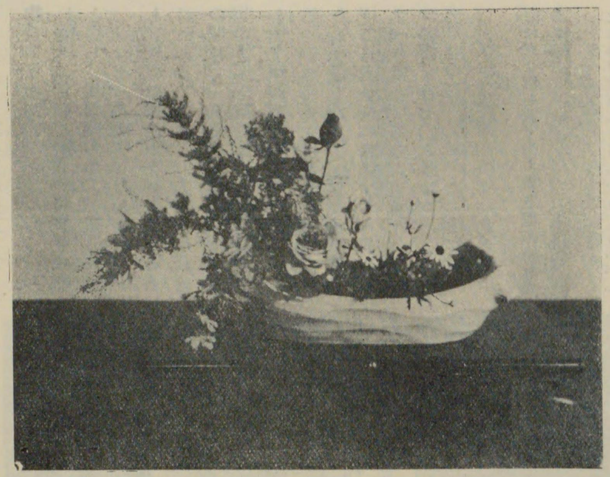
女史は茨城縣土浦の人。幼より風流の志あり、華道は土屋相模守守護神社の神官宮本義久氏の室松月齋先生に師事して古流系の華道を習修し、後東京に出て正心遠州流初代家元に就き研鑽すること多年その蘊奥を極め、皆傳免許を得次いで諸流に渉り研學する所あり、新しき花容を案出して傳書を作成し、大正三年十二月敷島古流を樹立し翌四年四月之が披露の生花會を開催し爾來專ら子弟の教養に任しつゝ今日に至つた、師範者である。



杉下櫻霞女史

夫君治夫氏は實業會社に重役たりて、二男一女、和也、章子、哲夫氏ありて藹々春の如き家庭である。

（東京市小石川區久堅町三十八番地）



藤木光甫女史作

小原流盛花瓶華教授
眞正祖古流華道教授

翠松庵 藤木光甫女史

女史は俗名德子、明治十一年の生れである。光甫は小原流盛花瓶花の號、眞正祖古流は翠松庵白德と號す。

夙に斯道の研究に入り、盛松庵白榮先生の門に入り、眞正祖古流を學び、二十餘年前既に同流の師範となり、爾來門弟の教授に從つて來た。

後小原流盛花瓶の研究を志し、關光園女史について研究した。光園女史教授開始以來、最初の門人であり、昭和三年春同流の師範となつた。（東京市外世田ケ谷下北澤一〇二三番地）

池坊龍生派花道教授

泉明園 泉すみ子女史

女史は明治十八年八月二十一日秋田縣山本郡鵜川村に生る。故泉幸八氏の女である。

泉家は藤原氏泉三郎の後裔某、元祿七年出羽に下り、代々鄉士として連綿相繼ぎ、後久保田藩主に仕ふ。同藩の鴻儒瀨谷桐齋は、卽ち女史の母方曾祖父に當る。

又、女史の夫君揖郎氏は、秋田縣選出前代議士信太儀右衞門氏の令弟にして、大正十二年東京に移り、合名會社秋田精米を起し、現にその主幹である。俳人華桐として、明治大正俳壇に名を馳せしも、今は事業に專らなるの傍ら、寶生流謠曲に精進し、自ら閑日月あるを示してゐる。

女史は夙に華道に志し、鄉里にあつては千家華道を學び、技大に進みしも、後、上京池の坊龍生派師範豊秋軒戸田內月光先生に私淑しその教へを受けて、皆傳を許されるに至つた。現に同師について益々その蘊奥を極むべく精進をなしつゝある。

而して、女史の得意の花は、木

泉すみ子女史

物であるといふ。

趣味は俳句、觀能、俳號を山吹と稱し、佳句頗る多し。近作に

菊活けて天地窮りなかりけり

と、以つて、その全豹を窺ふことが出來るであらう。夫君捴郎氏との間に、一女七重子嬢（大正六年生）あり、一顆の寶玉として鍾愛惜かず、昭和二年山田流箏曲中傳を許されたるも、女學校入學準備のため中斷した。が、かく一家を擧げて日本藝術に精進するは眞に欣すべき限りである。（東京市外高田町雜司ヶ谷七〇六番地）

◎庭に立つ麻を刈り干ー敷き偲ぶ東女を忘れ給ふな　（常陸嬢子）

◎大和路は雲隱れたりしかれどもわがふる袖をなめしと思ふな　（兒島嬢子）

◎思なくば何ぞ粧はん匣なる黃楊の小櫛も取らんと思はず　（播磨嬢子）

◎わが兄子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家にいたるまで　（坂上郎女）

桂古流花道教授
利休流茶道師範
秀月庵　野口華雪女史

野口華雪女史

女史本名須磨、埼玉縣北埼玉郡持田村戸長にして同村の豪農たる小宮義棟氏の家に生れ、明治十二年同縣熊谷町野口膳氏に嫁す。婚家は往昔成田下總守の家臣にして野口大膳と稱し、五代熊谷宿に土着して總鎭守愛宕神社別當となり大膳院と稱した。中興十二代秀舫氏は書を能くし、雪江の號を以つて近鄕に知られた家柄である。當主膳氏はその玄孫に當る。

女史は明治二十一年志を立てゝ東京洋服專修館に入り、同館高等科を卒業後更らに渡邊裁縫女學校に學び東京府及ひ和歌山縣高等小學校裁縫教師檢定試驗に合格、以來東京千代田高等小學校、和歌山女子裁縫學校等に教鞭を採り、傍ら桂古流三世家元故溪鼓庵池華叟先生に學び、恪勤精勵よく斯流の奥意を究め、家元師範代並に家元幹事となり、大正二年縣立熊谷高等女學校に挿花教師として奉職し以來今日に及んでゐる。

挿花は絶對に形式に囚はれず、植物獨自の個性を表現して眞の藝術品たるに愧ぢないものでなくてはならないとは女史の常に唱導する處、今日まで女史が親しく薫陶せる社中數千を超え、同地方に於ける斯道の重鎭である。その最も得意とする處は萬年青。他に裁縫、水引、折紙細工、挿繪　壜細工等の餘技がある。

氏は夫君に仕へて貞淑、專ら內助の功あり、三男一女あり、長男秀一郎氏は醫學士、次男秀紀氏は工學士たり。家庭的にもまことに多幸の人といふべきである。（現住所埼玉縣熊谷町三三二番地）

いけ花にはつきりとする心哉　正利

さす花や瓶の上なる山櫻　專順

瓶にさす花の風は日かず哉　逸名

生んため折るは花貧の窮み哉　同

作り花や枯たる木にも薄化粧　西清

利休古流華道教授
松翠庵　平田賞月女史

女史は明治三十二年四月十日、東京本所入江町西横川河岸に生る本名を花子といふ。

女史の生家は、代々材木商として相繼承し、斯界に知られた家である。

女史は府立第一高等女學校の出身であるが、花道は十二歳の頃より、利休古流家元榮心庵新呑傳月先生について研究、十七歳の春皆傳を許され、爾來引き續き研究を怠らない。

平田賞月女史

得意の花は葉物、洗心會に出品して數回の受賞をした。

茶は表千家、その他長唄、端歌、文學等を好む。

社中また多く、現に洗心會副會長、當流の中堅として重きを成してゐる。（東京市本所區入江町西横川河岸十號地）

利休古流華道教授
明澄庵　中村靜月女史

女史は明治十六年一月二十五日越後國長岡に生る。本名を時子といふ。

祖先は福井松平家の臣、後越後に移り、呉服商を營む。女史は十七歳にして中村家に嫁した。

女史は鄕里において、早くより池の坊華道を研究し、その後上京するに及び、利休古流水明庵晴月先生について學び、大正七年春皆傳を許され、教授職として以つて今日に至つた。

中村靜月女史

得意の花は草物。

家庭は夫君大正十一年一月に歿し、現在四人である。社中多く信望を集めてゐる。（東京市外大島町六ノ一五八番地）

日本古流華道教授
有樂流茶道師範
松栗齋　**石原一遜女史**

石原一遜女史

女史は明治十一年五月十一日、甲府市百石町に生る。俗名嘉壽眞、父は石原孫三郎、母はかく子、嚴父は元戸長および村長を歷任し、自治の爲め盡す處多かつた人。

石原家の祖先は武田信玄公の家臣であつて、元龜三年信玄公より賜つた文書並に天正十年德川家康公より賜はつた文書が現存してゐる。以つてその家格の由緒深きを知ることが出來る。爾來連綿として鄕主、戸長、村長等を勤務して今日に至つた。女史の令兄石原初太郎氏は、理學士であつて、現に山梨縣廳に奉職してゐる。

女史は埼玉縣女子師範教員養成所講習科を卒業、久しく小學校に教鞭を取つて、育英の事に從ふ。

花道に入つたのは明治三十五年、當時甲府に在つた日本古流家元角田一忠先生の門に入つたのが初めである。爾來、研究大に努め、同三十七年師範を免許され、後上京して東京本所小梅町笠間洗耳庵について、有樂流の茶道および華道の免許を受け、教授となつた。現在までに十餘名の師範者を出してゐる。號を松風庵嘉水といふ。

大正九年五月本格の師範を免許され、昭和三年三月會頭職を認許された。又家元より特に大正九年五月、改正傳書全卷を授賞せられた。

女史の得意の花は、生花および盛花である。

又、女史は『現代の女性のために、華道の如き日本古來の美術を修得させることは、最も必要であると信ぜられる。從つてますます斯道の發展を希はざるを得ない』といふ意見を持つて、子弟の教導に從つてゐる。現在の社中約四十餘名。

昭和四年三月、山梨民友新聞の生花人氣投票で、第三席を占め、名聲を揚げた。

趣味は裁縫、謠曲。

家庭は主人との間一男あり、琴瑟相和す。(山梨縣甲府市百石町二一六番地)

投入や梅の相手は蕗のたう　良品
梅さくや木の間に透て竹の色　可英
春の日や梅くれかねる竹の中　酒高
藪もれて一枝咲きぬ梅の花　着孤
梅咲くや藪のつゝきの角屋敷　桃水

杉山美甫女史作

絳雲未生流華道教授
絳雲會幹事
絳隆齋　**杉山美甫女史**

女史は明治四十年十月十日、佐賀縣神崎郡西郷村川寄に生る。本名を美香子といひ、杉山要三氏の長女。

杉山美甫女史

大阪手藝學校の出身である。大正十四年春より、絳雲未生流家元横田茂甫先生の門に入り、華道を學び初めたが、研究熱心技術優秀、昭和二年十月第一級皆傳を許され、家元師範となつた。

現に絳雲會幹事として、當流のために盡瘁してゐる。

又、表千家流茶道を同師によつて修業し、目下孜々として研究を重ねつゝある。

盆石は遠州流を學び、その奥儀を究はむ。

餘技としては長唄であつて、頗る練達の域に達す。

女史もまた同門中、最も春秋に富む閨秀であつて、その將來を期待されてゐる一人である。(大阪市東區玉造唐居町一六五番地)

五明流花道七世家元
五松齋　山根壽富女史

女史は明治六年四月五日、京都市上京區今出川に生る。本名藤枝、故五明流六世家元五壽齋安田鶴松先生の女である。

女史の祖先は、累代京都北面の武士であつたが、光格天皇の御宇、浦野良全なるもの、禁裡の庭匠奉仕中、生花を奉るに、五行の備へ明かたるにより、扇面に五明流なる三字を以つて、御名命を賜はりし事が、その流および流名の起原である。かくて、代々相傳へ、女史の父君の代に至つて當流第六世となつた。

女史は幼少の時代から、父君について花道に親しみ、出京後山根家に嫁したが、雅道に親しむを忘れず、古流玉川理調先生について、古流を研究する處あり、つひに家元師範となり、約二十餘年前に教授を開始した。數年前故郷に歸り、父君に五明流の奥儀を授けられ、後父君八十六歳の高齡を以て歿するや、その後を襲ふて第七世家元となつた。

『文明の惡影響と申すか、世の中は日に忙しくなり、生活にゆとりといふものがだんだん無くなつて行く、現今の日本――特に婦人方に取つて運動競技に熱狂する一面において、この優美にして床しい花道により、古來の優しさと潤ひのある人柄とを養つて行くことは最も必要であります。從つてこの道に携はるものは、十分に意を用ゐてこの花道を、擴めなければならぬと存じます』

といふのが、女史の對花道の抱負であり、希望である。

又、女史は常に、花道を勵なの傍ら、時世に遲れないことを期し、又、その慰めとして、和歌、俳句、小說等を研究し耽讀してゐる。されば社中の集ひの際などに、よく文藝談に花を咲かせることがあるといふ。

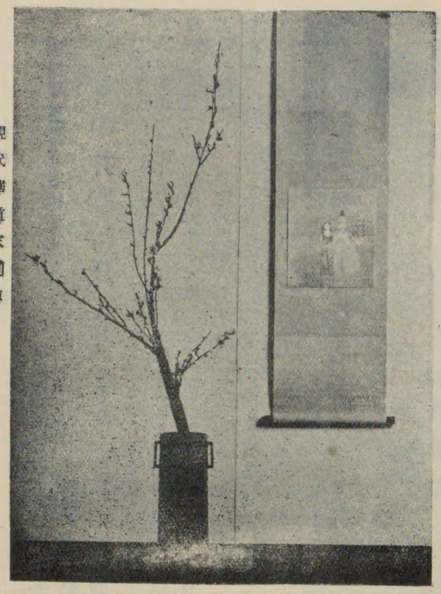
兎に角進歩的な人であつて、現に一百人からの社中を持つて、斯道のために奮闘してゐる。

各方面より賞を受くること多く、特意は盛花。茶道にも精通してゐる。

夫君との間に一女あり、極めて明るい幸福な家庭である。(東京市外千駄ヶ谷町九三六番地)

山根壽富女史作

山根壽富女史



鵬島理峯女史作

古流實派華道教授
表千家茶道教授
松耀齋　福島理峯女史

女史は明治二十一年四月三日、横濱市に生まる。本名を直子といふ。父君は高岡和三郎と云ひ、三條實美公の會計であつたが、明治廿一年歿するに及び、女史は廿三年福島家の養女となつたのである。

明治三十四年四月、お茶水高等女學校に入學、翌三十五年退學、同年渡邊裁縫女學校へ入學、三十七年同校を卒業した。

華道は、大正九年、古流松統齋小野理貞師の門に入りて研究し、大正十四年八月松應齋家會頭となつたが、故ありて大正十五年一月松景齋石塚理耀師の門に入り、累進して顧問上席に進み花耀會委員である。

餘技として表千家茶道に達し、又書道を小野鷺堂、小林五峰兩師に和歌を坂正臣師について學び、いづれも堪能なりといふ。(東京市外南千住町一ノ二十)

前田甫香女史

大和斑鳩御流教授
皇國池坊流教授
華昇園　前田甫香女史

女史は明治廿五年一月廿四日、兵庫縣明石郡重水村に生る。實名をはなといふ。兵庫縣立高等女學校を卒業、華道は夙に家元小島專甫師に就き研修すること多年、斯道の奥堂を極め累進して家元總役の高職を許され、熱心門下の教養に努め今日に至つた。

華道は家庭趣味の最上のもので人生必須科目の一であるとの信念の下に眞劍味をもつて稽古するといふ思想を養成し普及せさたいと思ふ」とは女史の意見である。

茶道、盆石の餘技あり、何れも小島先生に師事して造詣ありと、夫君前田千三氏は元官吏であつたが現在は銀行の庶務課長である長男は府立一中在學、二男三男は何れも小學校在學中にて惠まれたる平和な家庭である。(東京市外高田町雜司谷一五〇番地)

池坊東京研究會副會長
晡月庵 中井龍吟氏

中井龍吟氏作

氏は鄉里の中學校を卒業後上京專門學校に入り文部省中等教員試驗に合格し、爾來二十餘年間國民教育に盡瘁する處があつた。その間華道に志し、池坊華道を研究して、その蘊奥を極はめ、更らに小原流盛花投入、細川流盆石、三才流盆景等を學びて、何れもその奥儀を極めるに至つた。特意の花は草物である。

中井龍吟氏

氏は花道に對し、大體次のやうな意見を懷抱してゐる。

『世の思想が險惡化する秋にあたり、最も理想的の思想善導法は、華道に入りそれに精進することである。華道並びに茶道に立脚したる教義は、何れも人格の陶冶に有効なるものである。特にこれを幼少年時代より修養せしめる時は、自ら立派な美德を涵養することが出來る。予は斯様な意味にて、自ら研究すると共に他を導いてゐる。又、現今の華道の教授振りが、餘りに古い型に囚はれてゐるから、これをもつと一般的にし、民衆化せしめるやうに努力しなければならぬ。かくて、初めて華道の眞の意義を發揚することが出來るのである。』

なほ、氏は多年國民教育に盡瘁せるの功により、區および市より表彰を受け、前年の御大禮に際しても、その功を表彰せられ市より紀念品を受くるの光榮に浴した。天資快濶にして洒脫、眞に時代の要求する模範的花道家といふことが出來やう。現に池坊東京研究會副會長たるの外、盛花小原流國風會幹事、池坊昭和會評議員等の職にある。趣味として音樂を愛しこれに通曉す。(東京市外目黑町下目黑九六六番地)

絕句　僧志南

古木陰中繫短篷。
沽衣欲濕杏花雨。
吹面不寒楊柳風。

山行　杜牧

遠上寒山石逕斜。
白雲生處有人家。
停車坐愛楓林晚。
霜葉紅於二月花。

根津宗悅氏

柴山古流 華道家元
緣山流投入盛花家元
松陽庵 根津宗悅氏

根津家の祖先は眞田の家臣にして、講談により、人口に膾炙せる彼の眞田の影武者として、今に俠骨を謳はれつゝある根津四郎右衛門の血統である。代々舊桑名の藩士として、武技を以つて名がある。

宗悅氏の祖父および叔父(父君の兄)は、幕末に際會し、蛤御門の變、伏見鳥羽の合戰には、武勇を以つて、桑藩のため氣を吐く萬丈なりしといふ。氏の嚴君根津鐵藏橘安政氏は、武術を以つて近衛、警視廳等に職を奉ずること十餘年、彼の十年の戰には拔群の功あり、明治天皇上覽の野試合に際しては再度天覽の榮を賜はり、大に面目を施す處あつた。現に壯者の慨あり。

根津宗悅氏作

宗悅氏はこの鐵藏翁の長子として、明治三十一年八月六日、東京麻布本村町松方邸内に生る。本名を武といふ。

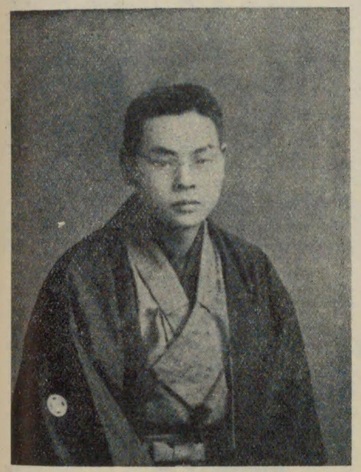
氏は生來病弱であつたゝめ、早稻田大學を中途にして退き、爾後獨學を以つて、國文、宗教、哲學、心理學等を研究し、餘暇あれば筆硯に親しみ、著作に耽るを樂しみとす。既に著作を自費にて出版すること二三に達してゐる。又、丹青を東都住吉派大家板谷桂舟氏に就いて學び、一家の風をなす。

又、氏は幼少より草木花卉に親しむ性格があつて、早く花道のことに志し、池の坊、佳月古流、古流等を修得したが、何れも氏の意を滿たすに足らず、各流の花會、研究會等に出入して採長補短を志し、遂に大に悟得する處あり、大正十年自ら柴山古流の一派を創設して大に普及に努めるに至つた。

氏は別に茶道表千家を學び、京都表千家東京家元出張所に屬して重きをなす。曾つて茶花道長生會幹事、茶花道長壽會幹事たりし外、現に柴山古流樂友會長、松友會顧問である。

氏の花道に對する所見は『花術

美精流盛花家元
堺華道藝術協會長
美正齋 五百旗頭（いおきべ）精甫氏



五百旗頭精甫氏

氏は明治二十六年四月十日堺市に生まる。本名を政一と云ふ。舊姓大野なりしも、家兄大野家を繼ぐに及び、氏は母分の姓五百旗頭をつぐ。代々花道京派未生流家元にして、氏の父君大野政次郎氏は松月齋政甫と稱した。

氏は少年時代より父君指導の下に花道を修業し、その蘊奥を極めたが、他面また盛花粧華を專心研究し、父歿後、美精流盛花家元を樹立して、堺市華道界の一角に立つに至つた。由來堺市は何事にも保守的にして花道界の如きも其例に洩れず、二三の格花家元あるも、萎靡として振はず。此時にあたつて、氏が突として新流派を標榜して、斯界に進出したことは、多大の驚異であつたに相違ない。宜なるかな、氏が新流派を掲げて日尚ほ淺きにも拘らず、非常なる優勢を示し、氏の存在は今や堺花道界の一の脅威となつてゐる、而も氏は權門に媚びず、孤軍奮闘、益々自流の普及に努力しつゝある。現在の直門社中百數十人に達すといふ。

氏は斯道教授に當り、秘密公開主義を採つてゐる。各流家元が、秘傳、口傳の名にかくれて、技術を出し惜しみすることは時代おくれの甚しいものであると云つてゐる。又各流師範が互に相對立することは喜ぶべきことでないから、是非共彼等は互に意思疎通を圖り相提携して斯道のために努力すべきであると說いてゐる。趣味として讀書、音樂、繪畫等を好む。家庭は老母トフ、夫人ハルエ、二女吉子、長男馨の五人にして至つて圓滿である。（堺市九間町東二丁錦小學校西橫手）

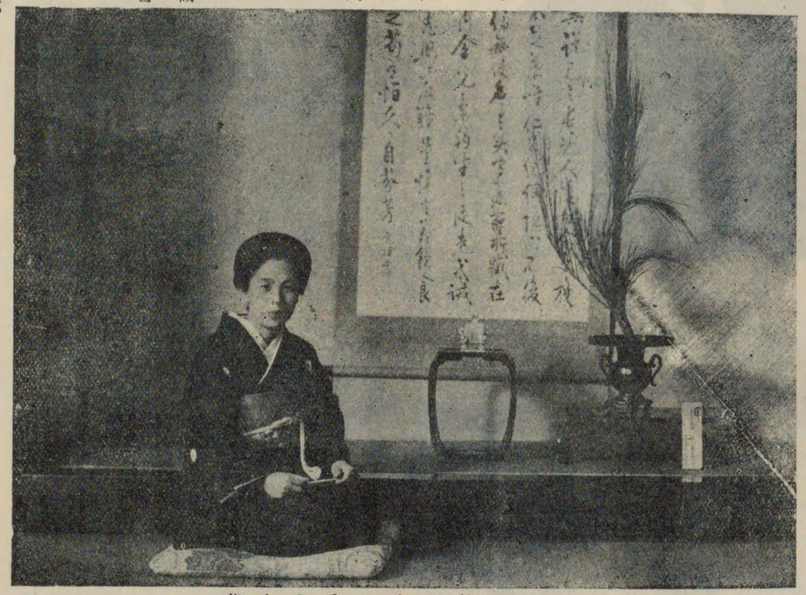
日本古流華道教授
同家元會頭
松婧齋 佐々木一俠女史

女史は明治十九年六月一日を以て生る。本名すみ子、庵號を湖月庵といふ。

女史は技藝女學校を卒へ、更らに實踐女學院に學んで卒業す。大正十三年四月、日本古流家元角田一忠宗匠の門に入り、爾來、巢進して昭和二年三月、皆傳と共に師範職となつた。

同年六月家元補佐職に推され、續いて同年十一月家元幹事の要職に進み、更らに同三年三月家元會頭に進んだ。

闇秀俊髦の多き同門中にあり、最高幹部として、斯流のために、夙夜精勵して倦む處なく、上下より重んぜられてゐる。



佐々木一俠女史とその生花

主人馨氏は十餘年前三十九才にて故人となり、爾來、一女喜美子嬢（大正二年生）を掌中の玉として愛育して來た。目下千代田高等女學校に學び、優秀の成績を收めつゝありといふ。（東京市牛込區原町一ノ三〇番地綠雲寺内）

◎

梅櫻花より花にうつる哉　宗砌
梅櫻中をたるまず桃の花　水鳴
咲花をまつ一に梅二は櫻　重方
梅は散り櫻の間の嫩葉哉　箕吹
見つゝ思ふ世は梅の花櫻哉　宗因
庭や春けさより梅の花櫻　昌休
男なり梅さそはぬ梅堅し　無刻
今ぞ知る月日の花も梅櫻　許六
櫻にも花咲く梅の木の間哉　昌叱
中十日梅に別れて初櫻　太祇

小原流盛花瓶華教授
東池坊華道教授
表千家茶道教授
小原流一葉會幹事
小原流國風會審査員
柳鶲亭 **横山綠水女史**

横山綠水女史

女史は明治十六年九月三十日、東京市外西ヶ原に生る。本名ちか子、安藤豪鐵氏の女、父君は農商務省の官吏、今は故人となつた。

後、陸軍歩兵大尉横山富太郎氏に嫁し、二女を擧けたが、何れも夭折し、夫君又明治三十七年八月十四日、日露大戦に出征、旅順附近の大激戦に奮闘し、名譽の戦死を遂ぐ。享年三十三であつた。

爾來、女史は獨身で刻苦精勵、今やわが斯道界において、名聲嘖々たる屈指の閨秀華道家となつたのである。

女史は雅道に對しては、幼少より趣味を持つてゐたので、夙に池坊華道を學び、また東池坊家元法眼岩田美捷翁について研究、大正元年十月からこれが教授となる。

小原流盛花瓶華は、斯界の權威平一舊先生について學び、同六年四月より教授となり、小原流一葉會幹事、同國風會審査員として名聲いよいよ高い。

餘技は三絃、琴等々である。

資性温和にして、しかも意志頗る堅固、未亡人として終始し來つたのに見るも、その性格の一端を窺ふことか出來るのである。蓋し斯界一方の女傑である。

横山綠水女史作

（東京市小石川區原町一三番地にノ七號）

不破花瑞女史

千家古流華道教授
青雲庵 **不破花瑞女史**

女史は本名久美子、明治十六年三月二十八日、富山縣婦負郡百塚村宮尾に生る。父君を直元氏、母堂をはる女といふ。

生家は代々の士族にして、祖父不破直榮翁は、鄉國において有名なる人であつた。

女史は幼少の頃より花道を好みその研究に從つたが、大正七年より專門的の修業を志し、千家古流宗家石森花月先生について、その教へを乞ふこととなつた。而して、研究と指導に專心してゐる。

又、家元における研究會においても、毎回藝優賞を受け、その將來を最も期待されてゐる。

女史の得意の花は葉物であつて華道に對しては、師匠石森女史と同一趣旨の下に、奮勵努力してゐる。——卽ち『華道を研究するには、その人の精神が、人として立派なものでなければならぬ』といふ人格至上主義に立脚して、自己の藝術完成と後進養成に專念してゐるのである。（東京市外入新井町不入斗八三三番地）

不破花瑞女史作

萬年青、菖蒲、かきつ、葉蘭、菊、水蓮、そなれ、朝鮮槇、松、梅、千兩、柾木等であり、特に三段生、五段生に秀でゝゐるといふ。

池坊龍生派華道教授
豐秋園 **名和紅葉女史**

名和紅葉女史作

女史は群馬縣前橋市立川町の人明治十八年を以つて生る。本名を米子といふ。

女史は長野縣技藝裁縫女學校を卒業、華道は在學當時より池坊を學び、後熊澤仙遊先生について、池坊龍生派を修業、大正元年皆傳となり教授職を許され、爾來、子弟の養成に專心したが、それ以前は自ら裁縫女塾を經營し、多數の子女を教導してゐた。

女史は家元研究會において、一等となり家元の賞を受くることしばしばである。その最も得意のものは、エニシダ、柳等々である。

女史は華道が健康法として、最もよろしく、しかも、優美高尙、女子の技術として、最も理想的なものであるといふ主張の下に、將來ますます斯道のために盡す意氣を持つてゐる。

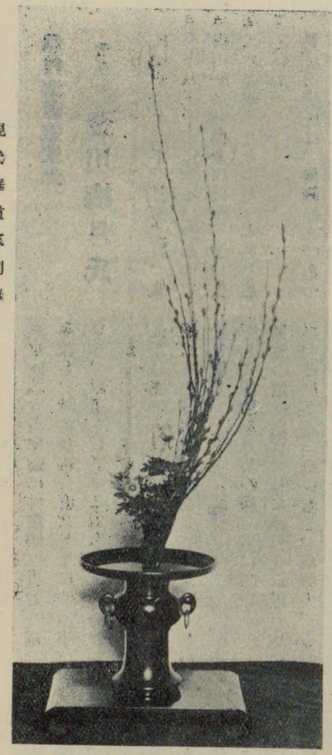
名和紅葉女史

養成せる社中は十數年間に、頗る多數に達してゐるが、特に東京市電氣局從業員の多數を社中として教導してゐる。

茶道は江戸千家を研究することと多年、夙に一家を成してゐる。

夫君名和克郎氏とは、明治四十一年に結婚し、一子二郎氏を擧げ、二郎氏は目下早稻田高等學院に在學中である。なほ名和氏は東京市電氣局に三十餘年を勤續し、教習所庶務課長、主事等を歷任して後退職、目下舊藩主酒井伯爵家に仕へてゐる。溫良恪勤の紳士として令名がある。(東京市牛込區矢來町一番地)

美笑流花道教授
花山齋 **水町一泉女史**


水町一泉女史作

女史は明治四年七月愛知縣下に生る。名を田鶴子といふ。水町姓は婚家の姓である。

女史の夫君水町氏は佐賀縣の人管原道眞の後裔で、鄕黨に聞えた名家であつた。夫君は軍人で、たまたま日淸戰爭に出征し、武功を樹て、凱旋、小倉聯隊に勤務中、病を得て明治三十二年に歿した。

女史は東京築地の海岸女學校に入り、後成立學舍女子部に學んだ。

女史の祖父は茶華道に達してゐたので、年六歲の頃よりその薰陶を受けて、斯道をたしなんだ。その後、水町家へ嫁し、更らに夫君の物故に會ふや、三人の遺兒を引きつれ、將來自立獨行の生活を營むために華道家として立つべきことを決意したのである。時に女史二十九歲の時であつた。

そこで、明治三十三年春より、美笑流家元戶田一樂宗匠に師事し專ら斯道の研修に努力し、爾來三十星霜、同師につき斯道につくしてゐる。又、一面橫濱の村口無庵先生について、投入盛花を研究したが、時に三十五年頃のことであつた。當時は投入盛花なるものは、全く顧みられない時代であつたが、女史は時勢の趨向を察し、これが研究に志したのであつた。その明敏轉た敬服に價するものがあるではないか。

水町一泉女史

女史明敏の資に加ふるに溫厚恭謙師を敬ふこと頗る厚く、現に戶田宗匠の高弟として三十年渝らざるの至誠を以つて、その恩を感謝し、師の名聲を揚げるに專心すると共に無庵老師に對して忠實、現にその師を訪ふて、技を磨き且つ慰安するを怠らないといふ。輕姚なる現代において、まさに一美談として傳ふべき價があらう。

女史は一面料理に趣味を持ち、その大家として知られてゐる。即ち婦人の友その他の雜誌においてその蘊蓄を傾けてゐる。(東京市芝區南佐久間町一丁目三番地)

無相流華道家元
香風軒 **金川梅月氏**

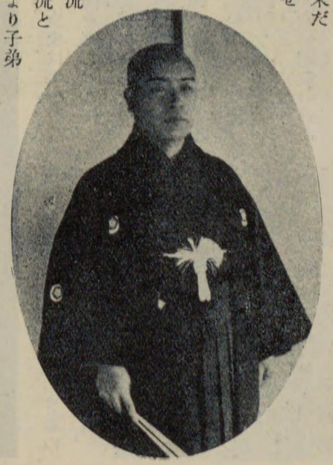
氏は明治十二年三月十二日、東京府下八王子市に生る。故あつて神奈川縣足柄郡金田村金子金川信禪氏の養嗣子となつた。本名を惠信といふ。

養父信禪氏は、僧籍の人であつたから、氏も亦桑門に入り、その敎養を受けたが、後、笈を負ふて東京駒込大道學館に神儒佛三道を學び、又青山流を汲み、後現住寺に轉じて後も、精進大に努めた。しかし未だ以つて氏を滿足せしむる處がなかつたので、明治三十五年の春より井村吟月氏について、熱心に池坊を學んだ。

金川梅月氏作

結果、つひに一流を案出し、無相流と稱して大正四年より子弟を敎養し以つて今日に至る。

その間、子弟を敎養すること百數十人、その指導の懇切丁寧、加之、その懷抱する花道の蘊奥と豐富なる學識により、信仰的見地より花道は單に枝を矯め花を拵ぐるの淺技に非ずして、一瓶の花を挿すは、一體の花菩薩を建立し、一軀の花神を勸請する意義なれば、先づ花を活けんとする時は、丹田に十分に力を入れ、虛心平氣、無念無想の境に悠遊し、形式に拘泥せず、花と我とは一體なれば、花我れに入り我れ花となり、謂ゆる總に生佛不二を達觀すべしと諄々として敎ふるを以て、始めは單なる挿花の研究より、次第に深き信念を錬へられ、篤信家となつたものが多いといふ。



金川梅月氏

氏は又、現時花道界の通弊を慨嘆し、傳授料免許料と稱するものはこれを徹せず、初入門者と雖も、熱心研究するの士に對しては、直に花道の奥義を傳へ、更らに墻壁を設けることをしない。たゞ念ずる處は斯道の源底に達し、これを振興せしむるにある。(横濱市中區南太田町一六九一蓮花院住職)

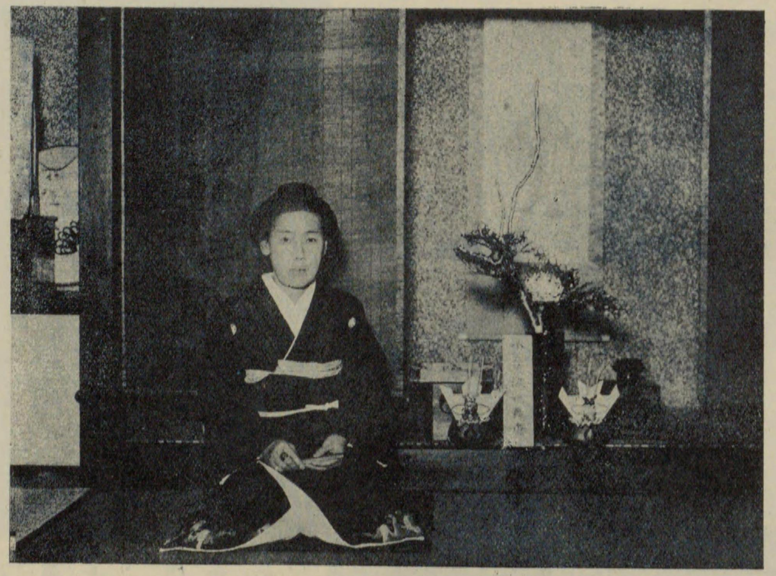
千家古流十六世家元
蓉柳齋 **太田一賀女史**

女史は明治七年、横濱常盤町に生る。俗名鶯子、太田源之助の女である。母は佐藤家の出、雪子といひ、代々德川直參であつた。江戸四谷左門町に住み、母堂雪女は田安家に上り、德川十六代將軍家達公の乳人として、御本丸お乘り込みまで、側近に奉仕した。當時はお仙の方と呼ばれてゐた。

女史は十六にして華道の門に入り、十五世芙蓉齋一盛宗匠によつて、千家古流を學んだのであるが、その進歩は常人を超えてゐたので、十八歳の二月皆傳免許となり、蓉柳齋一賀を名乘るに至つた。そして横濱宮川町一丁目において、華道の敎授を初め、同時に日の出町に同志と圖り、私立女學校を開き、裁縫、華道、女禮、茶道を敎授した。この學校が現在の神奈川縣立元町女學校の前身であつた。

後十五世芙蓉齋の跡を襲ふて、十六世家元となり、その間水引挿花の研究を遂げ、獨自の境を開いて、これが宗家となつた。なほ、當流の祖は千利休である。當流の奥傳として轡の組み方が傳へられてゐる。即ち當流の傳書に、

『それ、當流馬盥に花甁轡を用ふる事、天正十八年夏、豐臣大臣相州北條對陣の時、利休翁を召され、軍勞の慰みに、何ぞ面白き趣向はなきやとお尋ねありければ、時しも涼風來り軍馬の勞を助けんとて、椽先に盥あり、水を添へをきけり。翁これを見て、即時に杜若を小刀に結びつけ席上より椽先なる馬盥の中へ投げ入れしに、その刀馬盥の底に逆に立ち、杜若鬢に生けたる如く、自ら風ぜいをふくみて立ちければ、太閤思はず手を打つて、利休投入れの妙なりと觀賞し給ひ、以後馬盥を花器に用ゆ可しとの給ひぬ。それより馬盥を花器となし、花器に轡を用ゐ、陣中の樂しみとせり。その後利休翁盥に寸法を定め、轡も又種々の組み方を工風して、一種の花器とせり。これ吾門の馬盥に



太田一賀女史

轉を用ふる事になれり。馬盥の寸法は別巻にのす」云々とある。

なほ女史は大藏大臣、稅關長その他より斯道上の賞狀枚擧に遑なき程、又、明治三十一年赤十字社より正社員の賞狀を受く。

女史はこの外、裏千家茶道を修業、小笠原禮式は一世淺倉きん先生に師事し、二世家元鶴舞齋となつた。又、衣裳着附の教授をも兼ぬ。女史容姿端麗、斯道家の好典型である。（横濱市曙町四ノ五五番地）

色白し月の顏ばせ梅の花　立圃

梅白しきのふや鶴を盜まれし　芭蕉

水鳥の嘴に付たる梅白し　野水

鯉の音水ほの暗く梅白し　羽笠

白梅のかくれて匂ふ月夜哉　蓼也

日梅の枯木にもどる月夜哉　蕉村

古遠州流華道教授
爽月庵　渡邊一昌女史

渡邊一昌女史作

女史は明治三十一年二月十一日三重縣鈴鹿郡關町に生まる。父君を渡邊治平といひ、女史はその五女で、本名まさ子といふ。東京高等女學校の出身である。

大正三年一月より古遠州流華道教授辻一幸師の門に入り華道を研究し、同六年九月皆傳を受け、翌七年教授職を授けられ、爾來門戸を開きて子弟の教導につくし今日に及ぶ。

女史は又華道の外、書道を吉田苞竹氏について學び、闇秀書家として知られてゐる。（住所東京市芝區櫻川町一）

年一つまたも重ねつ梅の花　鬼貫

梅咲いて湯殿の扉れ直しけり　利牛

きさらぎや大黒棚も梅の花　野水

燈にゐる程の寒みや梅の花　馬光

くれ縁に足音高し夜の梅　梅橋

牛水場のまだ仄暗し梅の花　嵐青

見くるしき壘の焦や梅の影　几董

宿の梅花もひさしのつゞき哉　宗砌

今朝ぞ見ん藏の後の梅の花　爲文

東なる若黨部屋が梅の花　潘川

柴部屋の北の隅や梅の花　曾良

四阿に枝さし入るや梅の花　鳥路

水茶屋も梅に巢をくふ日和哉　窓雪

宿の梅折取る程になりにけり　蕪村

初午や白き梅より赤の飯　山只

梅干の花とて惜しむ小僧哉　爲有

是のみに寶酒もなし梅の花　武然

赤味噌に鯉の所望や梅の花　夢太

掌に塩辛寒し梅の花　柴雨

振り出しも一際進め梅の德　祇有

松葉古流華道家元
柏松庵　樋口一舟女史

樋口一舟女史作

女史は遠州濱松市に生まる。本名樋口しま子といふ。

幼少の頃から華道に趣味深かつた女史は、二十四五歳にして遠州流の門に入り、研究すること多年、つぶさにその蘊奥をきはめて、華道教授として立ち、爾來子弟の養成に從事して、終始一貫今日に及ぶ。

女史が華道において熱心なることは驚くべきもので、身心一たび赴くときは、寒暑を物ともせず、又寢食を忘れて沒頭するを常とするといふ。されば多年苦心研究の結果、斯道に一生面を開き、大正十五年十月、松葉古流なる一派を創始するに至つた。

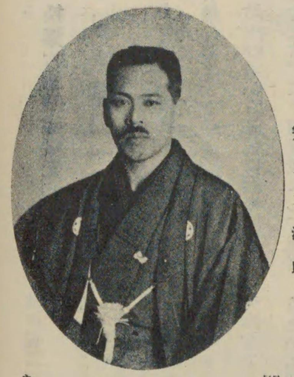
樋口一舟女史

而して女史の直門孫弟子は、今や五百名に及び、役員としては高崎市に目代遊松庵大友一惠、上州安中に目代皐松庵朝倉一鶴、新町に師範役高松庵高田一操、高崎に師範役壽松庵山田一芳、同司松庵小倉一正氏等ありて、多數の門人を有し、家門ます〳〵盛大である。（住所桐生市今泉六二）

古流御家派華道家元
松月齋 寶井理湖氏

氏は俗名作次郎、栃木縣芳賀郡益子町の人、明治十八年三月七日を以つて生れた。親父は同縣下筑波町眞言宗一條寺の住職寶井智元師である。母堂うた子は遠州流の挿花に長じ、幼少の氏を感化する處大であつた。

氏は栃木縣益子町小學校を卒へ宇都宮下野中學校に入りて卒業、明治三十八年陸軍に入營、士官として大正九年まで在職した。その間隱師松月齋理政氏について、古流を修業し、二十五歳の時、早くも斯流の名手として出籃の譽があり、その教へを乞ふもの頗る多かつたが、職を奉ずる身のすべてこれを拒絶し、只管研究工夫を重ねることに專心した。が、その後も氏の門を叩くもの跡を絶たないので、大正八年斷然官を辭して、これが教導に當ることになつた。



寶井理湖氏

しかるに、更らに氏は研究努力を重ねた結果、獨自の天地を打開し、こゝに古流御家派を樹立すると共に、自ら雜誌を發行して、斯道の開發振興に積極的に盡す處があつた。又、爾來各流派各個人が秘傳とし來つた水揚法の如きを、化學的に說明公開し、以つて斯界の陋習を打破することに、先鞭をつけるに至つた。卽ち同門を以つて現に松の會（前名寶友會）を組織し一門と共に不斷の努力を拂つてゐる。蓋し、斯界の一傑物といはねばならぬ。

昭和二年中央新聞社が、日本全國挿花十傑を一般に公募するや、氏はその十傑中に當選するの榮を得るに至る。

氏の花道に對して、手記せる處を示せば次の如し。

寶井理湖氏作

『抑々花道は、古來精神修養の具とし、花型を整齊するは、卽ち其道程の表象にして、床の折目正しき花を見るに、端座せざれば、花に對し何となく忸怩の情を覺ゆるものなり。然れども、花形にのみ拘泥し論斷するは、誠に遺憾とする處なり。流派により右に傾斜するものも、左に延たるものも、丈の長きものも亦あるべし。之を主觀的に輕卒に格の一端を見て、總てを批判することあらば、之れ卽ち琴柱を膠するの類となるべし。茶は從來の前面よりの眺めに適する生花を基礎とし、各方面より眺むるも、敢て不體裁ならざる花型に改め、教授するに力むると雖、格を整齊するを以て花道の全生命なりとするものにあらず外に花形を整備し、內に精神涵養を旨とし、修身齊家の副產物として、花形あるを說迹するを常とす。思ふに斯道に精進し、名をなす者は筆の人に非らず、口の人にも又非らずして、實行の人であるなれば、例へ以心傳心（言ふな悟れ）の方法にありても、良く感化するを得べく、新人の高唱する方法にても、先哲の遺訓を踏襲するにありても、可もあり不可もあるべし。而して一は環狀軌條を循環し、倦まざるものと、一は或起點を中心として、縱橫に突進するものとの差異あるも、要は其の人の實行如何にあるのみ。』

宜なるかな、今や氏の流名、とみに高揚して、斯界に嘖々の評あることや。

又、茶道は裏千家宗家大隅宗眠氏について修業多年、その奧儀を極はむ。

家庭はいう子夫人（明治二十一年生）との間に一女喜美子嬢（大正四年生）あり、實踐高女に在學中である。（東京市外澁谷中通一ノ五番地）

京葉古流華道教授
松原齋 小原一美女史

女史は本名ふみ子、東京下谷中根岸町の生れである。

女史の生家は細川藩の家中で、代々江戸に住し、祖父輝美氏は、廢藩に際して風流の道を志し、不忍池畔に居を卜し、風月を友として、餘生を樂しみ、父君もその遺鉢を受けて詩歌の道に遊び、一家をなした人であつた。女史はこの間に人と爲り、その感化を享けて早くより風雅の道を解し、幼少より茶華の道に親しんだ。後土佐藩士小原家に嫁したが、主人また常に文人墨客と交り、風流を談ずるの人、女史の如きまことに、還境に惠まれたるの人といふべきである。

小原一美女史

女史は神田高等女學校を卒業、その後父君について國語漢文、詩歌等を學び、更らに手藝の研究を積んだ。華道は十二三歳の頃より遠州流海野一曉先生の門に入り、その蘊奧を極めたのであるが、それに滿足せず、更に京葉古流家元松翁齋一條先生について、その技を練り、師の熱心なる薰陶と相俟つてその奧儀を得るに至つた。

女史得意のものは、大作物、葉物類並びに菊等であるといふ。が、女史は性來謙讓その名の出づる事を好まないので賞を爭ふ如きことはしないのであるが、師の奬めによりたゞ一回、明治四十四年都新聞社主催、諸流生花大競技會に出品して、銀牌と賞狀を得たことがある。

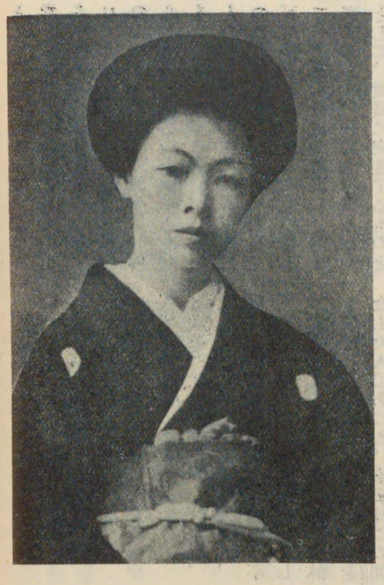
女史は花道において自然を尙ぶを旨としてゐるが、一面古流花道の歷史的研究に興味を持ち、特に父君および、義父君共に、古文書を涉獵し、花道の古本も、相當蒐集されてゐるので、これにより、現在の花道との比較研究をなしつゝありといふ。

茶道も早くより親しみ、詩歌においても一家の風を具へてゐる。

なほ、女史は何れかと云へば、蒲柳の質であるが、斯道上には頗る熱心、かつて某處女會に教授として出張するの當時、たまたま病臥してゐたが、當日は風雪を冒して出張し、會員を感嘆せしめたことがある。以つて斯道における女史の精進振りを窺ふに足るであらう。

家庭は夫君との二人。（東京市外南葛飾郡金町織道官舍）

古流御家派華道教授
松保齋 **飯田理久女史**



飯田理久女史

女史は明治三十年七月十四日、東京日本橋左官町に生る。本名を久子といふ。

女史は久松小學校を卒業後、裁縫女塾に入りて、專心裁縫を學び、これを卒業した。

華道に入つたのは、大正十二年五月、古流御家派家元寶井先生に師事したのが初めである。爾來累進して昭和二年六月皆傳となり、教授免狀を得、同時に家元花目付職となつた。現松の會幹事として家元を補佐し、子弟を誘導す。

茶道は大正十五年以來裏千家を學び、現に熱心研究中である。

家庭は夫君との間に一男一女あり、極めて圓滿である。(東京市外澁谷町氷川二番地)

古流御家派華道教授
松陽齋 **櫻井理春女史**

櫻井理春女史

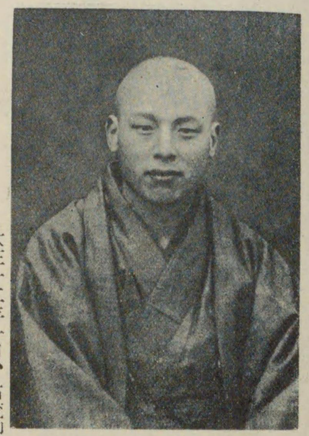
女史は明治四十年五月一日を以つて東京澁谷町に生る。勝太郎氏の長女である。俗名を春枝といふ。

女史は臨川小學校を卒業し、更らに文化裁縫女學校を優秀の成績にて卒業す。

大正十三年七月より、古流御家派家元寶井理湖先生の門に入り、當流を研修することになつたが、よく刻苦精勵して、技倆の進歩著しく、昭和三年三月教授職を免許され、現に家元會頭職として、當流のため將又斯界のために盡瘁してゐる。女史最も春秋に富む。前途を期待される偶然ではない。

(東京市外下目黒町中目黒四一六番地)

古流御家派華道教授
松鶴齋 **田丸理賢氏**



田丸理賢氏

氏は明治四十一年二月二十五日東京澁谷町に生る。田丸岩吉氏の長男、俗名を賢治といふ。父君は盆栽業東光園を經營し、頗る盛大である。

氏は長谷尋常小學校を卒業、園藝に趣味を持ち、獨學力行盆栽の知識を造詣する處頗る深い。

大正十二年十月、古流御家派宗家について、華道の研究に入るや、熱心にして技術の進歩最も顯著、同十四年早くも師たるの技能を認められ、師範として家元を補佐し、傍ら教授に專心しつゝあつたが、同年六月皆傳に進み、家元花目附職松の會幹事たるの外、同流生花審査員等の要職に推さる。年少氣鋭、將來ある人としてその前途を祝福されてゐる。(東京市外澁谷町原二七番地)

古流御家派華道師範
御家流盛花投入花教授
松節齋 **古木理千女史**

古木理千女史

女史は明治三十三年七月二十四日、愛媛縣松山市新玉町に生る。中村芬氏の女で、俗名を千賀といふ。後古木家に嫁す。

古木家の家祖は新羅三郎の後裔で、鎌倉北條氏の重臣小木宮内である。明治初年古木と改姓、父君祥三郎氏はその二十三代に當り、長く地方政界に盡し、現在は隱退して、長子政光氏が當主となつてゐる。政光氏は昭和學院を建設し、育英のことに盡瘁する處が多い。

又、祖父なる人は、南街堂柳夢と號し、俳諧の宗匠、德行多く生前相模聖人の稱があつた人である。

女史は大阪東區第二高等小學校を卒へ、更らに常盤松高等女學校を卒業した。

大正十四年より古流御家派家元寶井理湖先生につき、斯道に入り特に盛花投入に長じ、昭和二年春教授を免許され、子弟を養ふの傍ら、家元を補佐して、花道の改善に意を注ぎ、技術の向上著しく、御家派をして、いよいよ盛大ならしめるに寄與する處多かつた。又松の會幹事として家元の信任會員の信望厚く、盛花投入にありては、女史の右に出づるものなしといはる。

現に同研究會の審査員の重位を占めてゐる。

餘技として刺繍に得意技倆見るべきものあり。

夫君照三氏は藥學士にして星製藥會社の技師として令名ある人である。(東京市外澁谷町代官山一〇番地)

古流御家派華道教授
松實齋 **川村理初女史**

女史は本名初子、明治四十一年五月二十日、東京市外目黒町上目黒町に生れた。川村爲吉氏の長女である。

女史は廣尾小學校卒業後、實井裁縫女塾にありて、裁縫を修學し、大正十二年五月より古流御家派花道の研究に入つた。

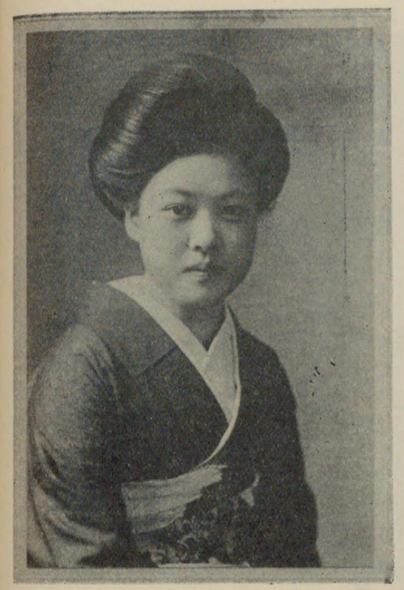
かくて、昭和三年一月、教授を許され、家元會頭職となり、松の會幹事として、會の發展に努力してゐる。又、非常に教授に熱心であるため、社中の信用厚く、社中も又多い。

餘技としては和歌、俳句。

× ×

五月雨や橘の柳に風情あり
朝ぎりに一本清き百合の花
明けそむる山の姿をそのまゝに
賤がこの身の心とやせん
煩はしうつし世なれやあこがるゝ蓮のうてなに月を見る世を

（東京市外目黒町上目黒二〇七一番地）



川村理初女史

宏道流華道教授
晩雲齋 **大岡美石女史**

女史は明治十一年、神奈川縣高座郡瀧谷村高倉に生る。俗名いし子といふ。野澤直正、同かめ女の第七女である。野澤家は代々瀧谷村高倉の名主後村長となつた。直正氏は同村上和田の代官小川家より出でゝ、野澤家を繼いだ人。何れも知られた舊家である。

女史は初め土田觀龍先生の門に入り、宏道流を學び、大正九年、家元梨雲齋先生について修業し、同十年師範職となつた。ついで、昭和二年家元代理師範補に擧げられ以つて今日に至る。

女史得意のものは木物、特にその大なるものを好みて挿し、他の追隨を許さぬものがあるといふ。

茶道は裏千家流を學び、その蘊奥を極はめてゐる。

主人大岡嘉市氏は、瀬谷銀行の主任を勤め、溫良の紳士である。

（東京府下南多摩郡町田町原町田）

大岡美石女史

日本生花司
松月堂古流
日本總會頭顧問
不及流投入花家元
不及庵 **高野隆雅氏**

氏は、明治元年九月二十六日、新潟縣六日町に生る。隆雅は本名、宗月、愚天等の別號がある。高田藩士高野帶刀の後裔、父を高野半兵衛隆則といふ。代々の莊官であつた。

氏はその長子にして幼少神童の譽あり、五歳にして書讀を好くす。長じて漢學を國定禪師に、書を無菴に學ぶ。後、京都講學校に入りて卒業、卒業後は直入、和亭等に師事し、その蘊奥を極はめ、更らに新井石禪に參禪する多年に及んだ。

花は十八歳の時、正風遠州流貞松齋宗匠に學び、後、池の坊武藤松菴翁に就き、更らに明治三十六年松月堂古流五大坊佐藤牧水翁に學んで、謂ゆる斯道の秘奥を極めること頗る廣汎にして深奥、現に同流日本總會頭顧問職である。又、別に自ら不及流の投入花を創始して、獨自の天地を打開するに至る。

この外、氏は茶道、作法、篆刻、俳諧、詩歌、相學、靈怎術、築庭、琴曲、舞踊等に至るまで、通ぜざるなく、何れも一家を成してゐる。現に花道の外、師範たるもの、千家表茶道、小笠原流作法、書道講法等に及び、書畫の賞を受くる五十餘回、諸會の審査員たること七十四回に達すといふ。かくの如く百藝に通じて、しかも、その悉くが堂に入れるもの、氏の如きは蓋し稀れであらう。

忙中に閑を求め、動中に靜を得るは、これ實參修養の要諦なり。而して、その閑靜を得るは、書畫、茶花、禮法を習得するに、如くはなし。蓋し、書畫は人格の象徴、茶花は安神の極意、禮法は社交の精華たればなり。然るに世人動もすれば、書は姓名を書するに足る、畫は閑人の餘技、茶花作法は婦女子の末技と蔑視す。誤解も甚しと謂ふべし。就中、花は修養の本、百藝中第一の高尚優美なるものなり。されば、生花の師たるものは、學問あり人格あり、修養のある人たるべし。然るに門人の月謝と免許料を以て營業とするもの多し、遺憾とす。

花とは、氏が花道に對して、懷抱する意見であり、又磊塊でもある。以つてその識見と高風とを見るべきであらう。

氏は平生酒を用ゐず莨を嗜まずしかも孤獨の生活を送り、今や齡還曆を越ゆるも、殆んど病を知らずといふ健康の持主である。人に接して洒々磊々、放談し豪語し、一見十年知己の感あらしめる。居を上野山下に卜して、常に中京、京洛の地に周遊し、悠々自適の生活を送り、諸會の會員二萬を數へ、社中を養ふ現に三百人、然も謝禮を受くることなく、求むるに隨つて教ふ。眞に氏の如きは、我が花道界稀れに見る奇骨であるは、勿論、當代において、得易らざる快傑といふべし。

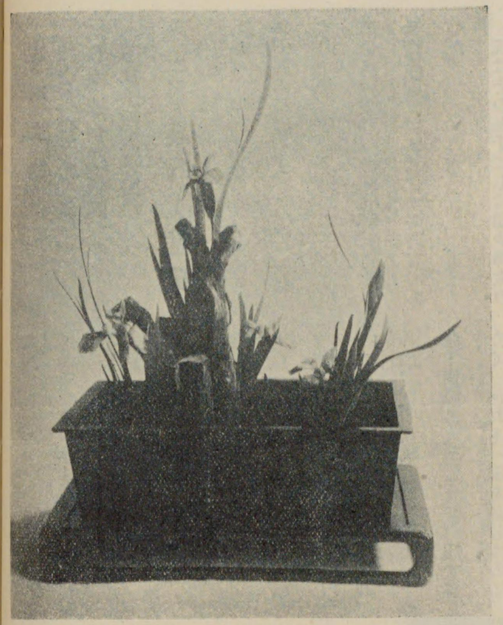
（東京市下谷區車坂町一三〇番地）

新古流華道家元
清湜齋 宮本一眞女史

女史は明治三十二年十二月十八日、宮城縣仙臺市原町に生る。小畑源治氏の三女である。俗名をしんといふ。

生家小畑家は、代々呉服問屋として著聞し、祖父の時代より町長の名譽職にあり、父君は母堂ヨシヱ女と共に現に健在、自治のため盡する處甚大である。

女史は郷里の東華高等女學校に學び、その傍ら即ち大正三年六月、年十六の時、郷里の美笑流吉田理山氏について斯道を學んだ。更に大正五年六月より當時郷里にあつ



宮本一眞女史作

て、名聲嘖々たりし古遠州流家元清泉齋西林一雨先生につき、具さに研修すること滿四ケ年、大正九年三月師範に進み、爾來約二ケ年間門下の敎養に力を盡したが、大正十三年五月上京し、約二ケ年餘、斯道の研究に鋭意精進し、各流の長を採り短を補ひ、以つて一派を創成これに新古流と名命し、爾來その開祖として今日まで幾多の門下を養成するに至つた。

女史得意の花は草物、就中燕子花において、他の及び難き特技を有すといふ。

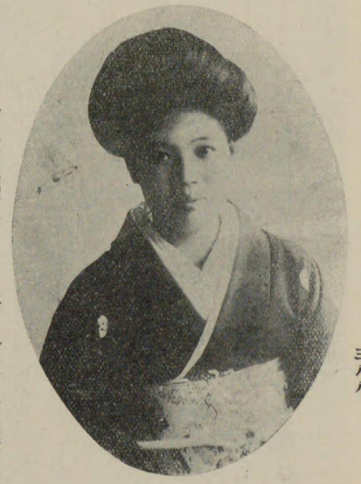
女史は『生花の技藝として高雅幽邃なるはいふ迄もないが單に人目を娯ましめ、又は室内の裝飾とするの業のみでなく、實に精神の修養、人格の向上の要道である。』といふ信念を以つて、斯道のために努力しつゝある。

茶道裏千家師範たるの外、餘技として和歌および俳句を好む。

族人の休める茶屋や燕子花
菊花に裏庭ひろき樽かな
朝霧の中に浮きけり竹の春

これ女史の近吟である。

夫君宮本房次郎氏とは、大正十三年十一月結婚、房次郎氏は少壯官吏として、將來を嘱目されるの人である。(東京市本所區綠町二丁目八番地)



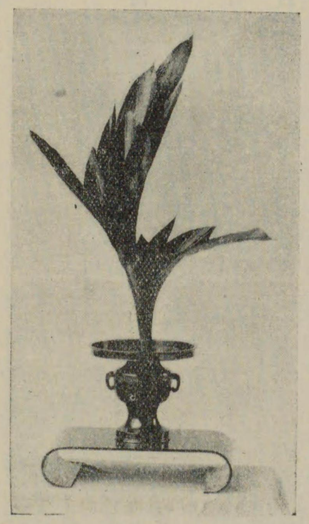
宮本一眞女史

日本古流華道敎授
松岡齋 岩澤一史女史

女史は明治二年七月十八日、東京牛込辨天町に生る。川村吉見氏の女で、本名をはる子といふ。川村家は累代徳川家の家臣、上野戰爭の當時は、駿府に出仕を命ぜられ、幕府のために活躍した一人であるといふ。岩澤姓は女史婚家の姓である。

岩澤家は三十餘年間戸塚源兵衛に住し、生花商を營み、女史は傍ら日本古流家元角田一忠先生に入門して、斯道を研精する處あり、同八年三月初傳、同九年十一月二十八日奥傳、同十年七月三十日皆傳を免許され、同日師範職となつた。爾來、子弟の養成に力をつくし、當流のために盡す處多く、同十五年六月家元補佐職を嘱託され續いて昭和二年十一月家元幹事に推されるに至つた。

岩澤一史女史



岩澤一史女史作

女史はこれより先、小原流盛花の研究にも從ひ、日本古流に入門して以後も、常に他流の研究を忽にせず、比較研究して、技術向上に資してゐるといふ。後、戸塚源兵衛より現在の野方町に移り、當流の普及に、孜々として努力を惜しまない。

家庭は夫君庄五郎氏、三男徳三郎氏(明治二十九年生)同氏夫人しか子、令孫靜子(大正十年生)藤江(同十四年生)の五人である。徳三郎氏はポンプ製造販賣業を營み、營業逐日隆盛を呈し、現に近郊における同業者中屈指の大商店として、信用いよいよ重きを加へてゐる。(東京市外野方町新井五八九番地)

日本古流華道教授
松盎齋　松木一泓女史

女史は高知縣長岡郡稻生村の人明治二十九年四月三十日を以つて生る。井上仲太郎氏の女である。俗名をミチ子といひ、庵號を有光庵といふ。後松木家に嫁す。

女史は大正二年高知縣高知市立土佐高等女學校を卒業し、上京して麴町大妻技藝學校および本郷渡邊裁縫女學校に入りて學ぶ。

大正五年二月、日本古流家元松梅齋角田一忠先生の門に入り、斯道の研究をなし、昭和二年七月累進して師範となつた。同時に家元補佐職および家元幹事となり、爾後引續いて研精の一路を進むと共に、後進の教導に力をつくしてゐるのである。

松木一泓女史

又、茶道表千家を學び、別に生田流の琴曲をもよくす。

家庭は夫君耕作氏との間に一女知子（大正十三年生）あり、母堂かね子刀自健在す。（千葉縣南葛飾郡砂町龜高四三七番地）

◎

日も暮れぬ人も歸りぬ山里は峰の嵐の音ばかりして　（藤原頼實）

◎

徒らに思ひし峰の一つ松今宵月こそ澄み登りけれ　（香川景樹）

◎

影を退ひ影に追はれて往き返る月の夜道は遙けくもなし　（熊谷直好）

◎

靜やかに月は照りたり天地の心とこしへ動かぬがごと　（尾上柴舟）

松木一泓女史作

池坊龍生派華道教授
美秋庵　倉林圭月女史

女史は明治三十四年十一月十日埼玉縣兒玉郡兒玉町に生る。本名を秋子といひ、倉林泰五郎氏の女である。

倉林家は倉林越中守の末葉であつて、由緒に富む名家である。

女史は晩香高等女學校の出身、大正二年一月、池坊龍生派師範門田熒月先生の門に入り、研究を初め、累進して昭和二年四月奥傳を許され、同時に教授職となつた。爾來、閨秀華道家として、大に子弟の教導に任じてゐる。

倉林圭月女史作

倉林圭月女史

又、女史は家元猪熊先生について、蓬清流盛花投入をも研究し、目下精進の一路を辿りつゝある。

この外、山田流箏曲を稻垣先生について、修得して技頗る堪能。

家庭は既に母堂なく、嚴父との二人、靄然たる和氣の裡にあつて、雅道のことに潜心してゐる。技術秀拔にして、人と爲り溫良貞淑、加ふるに容姿亦端麗、將來ある閨秀として、多大の望みを囑されてゐる。（東京市小石川區林町六十四番地）

◎

玉敷ける家も何せん八重むぐらしげれる小屋も妹と居りては　（讀人不知）

家元池坊花道教授
廣山流投入盛花教授
窓香園　丹波梅香女史

女史は、靜岡縣駿東郡の人、明治三十二年五月二十一日を以つて生る。父は大嶽熊治氏、母はいね子、女史本名たか子である。後、嫁して丹波姓となる。

大正十年三月、靜岡市東鷹匠町井上恭子女史について、池坊花道を學び、家元門人として入門、同十一年六月五ヶ條、七種傳、同十二年十二月、草木集、定式卷、同十三年八月、砌生卷、生花卷、同十四年十月床構、橘紫幕、薄盤、華盤等を受く。同十五年一月、駿河國生花會頭職となり、同年二月東京に移り、同年五月より、池坊東京紫雲會長岡田廣山先生に師事するに至つた。

丹波梅香女史

昭和二年十二月、上野日本美術協會における大正天皇追悼献華會に出席し、同三年六月簾之間を受くると共に、大日本生花總幹事に昇進現在に至る。

女史は研究の熱心を以つて知られ、將來ある花道家として、嘱望される。(東京市麻布區谷町二五)

遠州流華道師範
花道松梅會幹事
花道清賞會同人
松岡齋　村田一春女史

女史は、明治三十年十二月六日、横濱市根岸町に生る。父は谷村敏成氏、母は豐子、本名を信子といふ。後村田家に嫁す。父は薩摩の藩士、母は新納時行の三女である。

女史は明治三十八年、京都大原小學校に入學、卒業後、神戸松蔭女學校に入り後、京都高等女學校に轉じて業を卒ふ。

大正六年十月遠州流家元幹事長松養齋岡本一伯先生の門に入り、斯流の研究に志し、切磋琢磨の功を積んで、大正九年四月奥許となる。爾來、教授職となり、子弟を教導するに至つた。

村田一春女史

女史は斯道の技術において、最も卓抜し、斯道の門に入りて、幾何にもならない大正七年十一月、花道清賞會の花會に、躑躅の紅葉を活け、大に賞讃を博し、同會より優花證を受けたことがある。現に同會同人として、研究一日も怠らざるは勿論、遠州流松梅會幹事として、斯道の爲に盡瘁してゐる。

なほ、別に裏千家茶道を幽石庵黎仙氏につき研究中である。

主人との間に、二男二女あり、幸福なる家庭の主婦として、家政に育兒にいそしみつゝある。(横濱市保土ケ谷區天王町字神田二一六)

靜美流華道家元
松聲華道會々長
花道清賞會理事
松　聲　山下輝野女史

女史は、東京京橋區の商家に生る。父は中坪彌市氏、母を千代子といふ。祖父は、風流韻事を好み、別して華道茶道に通じて居た。されば、女史の厳父も、單なる商人にあらずして、茶道、華道の修養淺からず、ことに古流の蘊蓄が深かつた。

女史は、共立女子職業學校に學び、卒業直前眼病の爲退學した。

山下輝野女史作

華道は、父祖傳來の家風により、又自ら趣味を有し、幼にして父につき其道に參し、後、尾張美笑流金久保氏の門に入つた。時に女史十四歳、女史が天稟の才能と研究心の旺盛とは、技術の進境著しく、十八歳の春よく既に師範となる。

尚その後も引きつゞき研究中女史二十二歳の時、師の物故に會し、爾後、相阿彌正流先代家元今月庵先生及び遠州流先代家元矢島先生に就き、薫陶を受くること頗る深く、女史の斯道における技倆は、全く大成を見るに至つた。

山下輝野女史

かくて、女史多年に亘る諸流研究の結果と、天賦の才能とは、茲に自ら獨自のものを創成せざるを得ず、遂に明治末期の交、靜美流なる一派を立てるに至つた。

又、女史は餘技として、書道、裏千家茶道、長唄等に通じ、共に一家を成してゐると共に、和歌、家刻等行くとして可ならざるなき多藝多才の人である。

女史は、曾て大正天皇御即位式に際し、便殿に献花を命ぜられ、更に皇后陛下女子大學に行啓の折御休息所に盛花を献じたる外、各宮殿下に献花の光榮に浴すること屢々である。又、書道においては、久邇宮殿下に拝謁を賜り、東伏見宮妃殿下の御前揮毫の光榮を得、かつ難有き御言葉を賜はつた。展覽會における受賞は亦頗多きに達してゐる。

女史得意の花は松。

女史は資性恬淡にして義氣に富み、頗る豪放の風がある。蓋し稀に見る閨秀といふべし。

夫君は自己經營の會社重役にして、内外の信任厚き好紳士である。(東京市京橋區築地二丁目二十二番地)

蓬淸流投入盛花教授
晃雲流盆石家元幹事
昌雲齋　**鈴木龍喜女史**

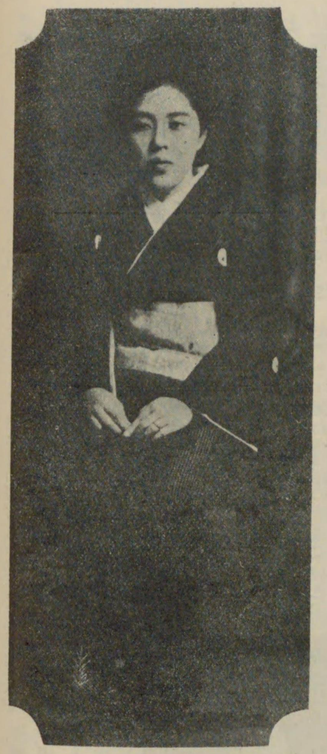
女史は明治三十一年一月三日、東京四谷傳馬町に生る。本名をかね子、故鈴木喜八氏の長女である。母堂はまさ子、家業は松喜屋號として、知られた牛肉商である。

女史は明治四十二年東京高等女學校に入學、同六年同校を卒業す。

華道に入つたのは、年十五の時からであつて、當時は月賓古流を學んだが、五年にして中止し、後、大正十一年七月より猪熊先生について、蓬淸流投入盛花を研究すると共に、晃雲流盆石盆庸を研究し、何れも大正十四年奥傳を許されるに至つた。花技に對し非凡なるはもとより、盆石盆庸の技術において最も超凡であるといはれる。

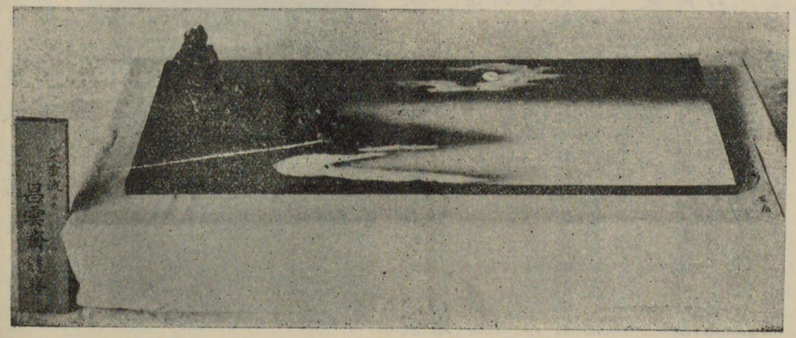
又、茶道表千家流を學び、その奥儀に達してゐる。

女史容姿人に優れ、しかも敎厚の性、聰明の質、技術の卓越と相俟つて、流内の信望最も厚きものがある。



鈴木龍喜女史

（東京市四谷區傳馬町二丁目五番地）



鈴木龍喜女史作

池坊龍生派華道敎授
春信園　**加藤花榮女史**

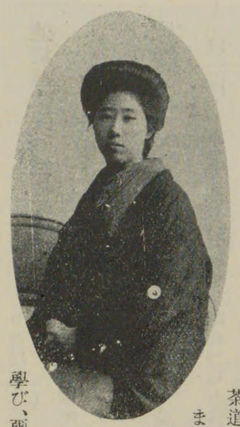
女史は明治十四年一月一日、靜岡市紺屋町に生る。本名を信子といひ、梅澤家の出、後加藤市藏氏に嫁す。

生家梅澤家は、累代德川家の直臣、代を繼ぐこと二十代である。祖父梅澤孫太郎守義は、幕末戰爭の當時、慶喜公に從ひ京洛の地に居り、後公が水戶に移るや、再び從つて水戶に赴き、爾後水戶藩に屬し、後一つ橋に仕へた。又、現代財界の大立物澁澤榮一子とは、最も親交あり、晩年は靜岡に隱棲して六十四歲を以つて歿した。この人の四男信平氏は即ち女史の父君、翁の跡を繼いで德川家に仕へ、維新後、德川家の東京移住と共に、東京に移り、女史も父君に伴はれて、公の本邸に召され、終日令嬢方と茶の湯、生け花等のお相手をして遊んだものである。

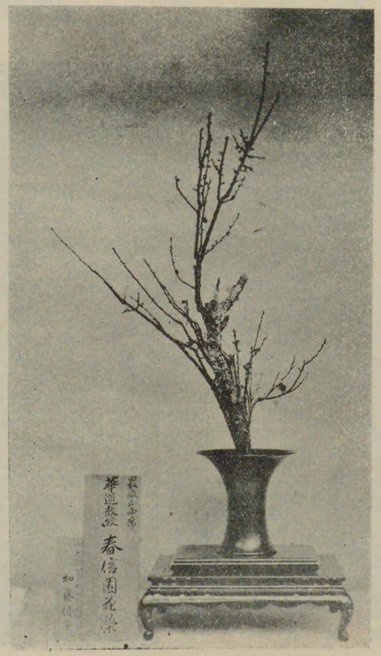
女史は靜岡縣立高等女學校を卒業したが、それより先き九歲より華道を學んだ。流派は德川家に出入する關係上、石州流を主としてゐたが、茶道も同じ頃から十七歲まで研究してその奥儀に達した。

その後、大正十二年より戶田內先生につき、池坊龍生派を學び、爾後研修三閱年、戶田內先生の懇篤な敎導と、女史の才能と熱心によつて、大正十四年秋同流師範を許されるに至つた。勿論、職として斯道を學んだのではなく、たゞ自らを慰め且つその花を通じて、人格を修養し人に接することを以つて、その使命としてゐるのであるといふ。

なほ、主人市藏氏は船舶業を經營し、本店を日本橋に支店を橫濱に設け、店員數十名、同業間に覇を成してゐたが、大正十三年不慮の病を得て長逝した。が、一子政三氏（明治三十七年生）は、立大を卒業し、父君の遺業を繼いで、これが經營に當り、毫も後顧の憂ひなく、父君に優る才腕を示し、信望いよいよ重きを加へつゝありといふ。まことに至慶のことといふべきである。（東京市小石川區宮下町一二番地）

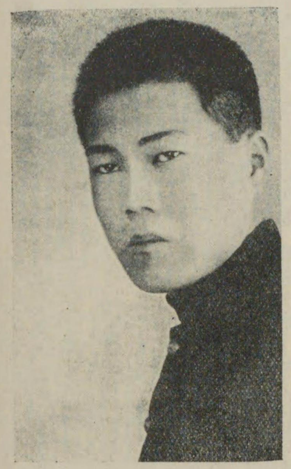


加藤花榮女史



加藤花榮女史作

池坊龍生派華道教授
晴雲齋 **中川觀山氏**



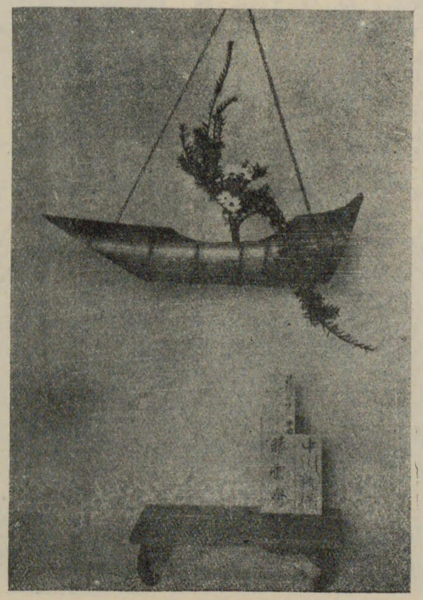
中川觀山氏

氏は靜岡縣濱名郡曳馬村上島の人、明治四十二年十二月二十一日を以つて生る。中川末一郎氏の長男である。本名を精保といふ。

氏は初め、晴華古流渡邊女史について學んだが、父君が池坊の研究家なる爲め、大正十五年九月より池坊龍生派師範村松華詠先生に入門し、爾來、只管斯道の研究に沒頭したので、技術の上達目覺しきものあり、儕輩を拔いて累進し、昭和二年十月皆傳の域に達し、教授職を免許されるに至つた。

氏の得意の花ほ、變體物であつて、この點他の及び難き獨特の壇場なりといふ。

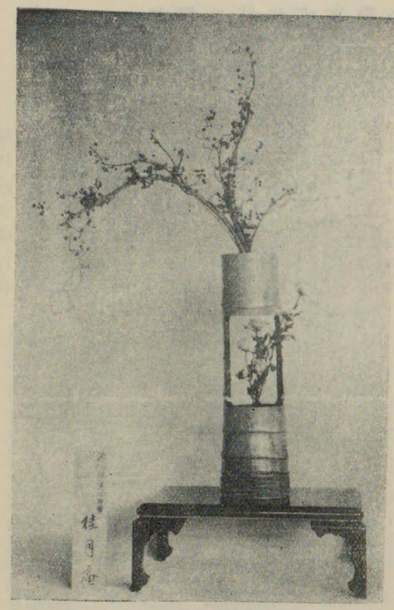
氏は遞信省官吏であり、職業として斯道に入つたものではないがその春秋に富み、且つ旺盛なる研究心と天賦の才能とは、その前途を最も刮目せしめるものがあるといはれる。(東京市外龜戸町一丁目三五番地村松華詠方)



中川觀山氏作

◎

元日や神世の事も思はるゝ　宗武
餅も水浴びに來よ神の梅　龜洞
斧入れぬ神の林や朝がすみ　沂風
佛より神ぞ尊き今朝の春　とめ
神風に雨こそ匂へ夏の草　除風



黒川桂子女史作

池坊龍生派華道教授
桂月庵 **黒川桂子女史**

女史は明治三十四年九月十七日京都府八幡町に生る。日本美術學校の出身、日本畫の專攻である。

大正十三年より池坊龍生派師範戸田内先生について斯道の門に入り、爾來研究を怠らず、最近師範職を免許された。女史も亦、趣味の斯道研究家で、忙しい家事と子女を教養するの傍ら、斯道にいそしんでゐる。又、茶道、ミシンにも練達の手腕を有し、繪畫はその本領とする處であることいふまでもない。

夫君美夫氏は、三菱製紙會社に勤務し中に一男一女あり、極めて趣味儼かな且つ床しくも平和な家庭である。(東京府下金町字越渡三菱社宅)

川口峰玉女史

池坊龍生派華道教授
貞壽園 **川口峰玉女史**

女史は明治四十年一月十三日、東京淺草駒形に生る。本名を貞子といひ、川口治之丞氏の女である。家は代々商業に從ふ。

女史は上野高等女學校を大正十二年に卒業し、翌十三年四月より池坊龍生派教授鷲田晃亭女史に師事して研鑽倦まず、昭和二年春皆傳を許され、同三年春より教授として斯界に進出した。

女史は別に書を佐藤泉仙氏に學び、又、琴を山内登久代女史について修業す。

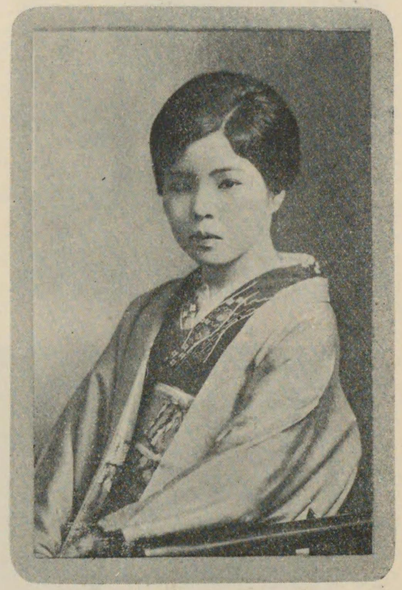
最も將來ある斯道の閨秀として期待されてゐる。(東京市淺草區駒形町四三番地)

日本古流華道教授
松鮫齋 梅田一暉女史

女史は俗名かつ子、明治四十二年三月二十九日、小石川西江戸川町に生る。吉五郎氏の長女、母をはる子といふ。累代中野町本郷に住し、豪農として知られてゐた。特に先代由五郎氏は公共のために盡す處多く、選ばれて伏見宮家閑院宮家御用となり、又、女史の叔父梅太郎氏は、現に伏見宮家御用邸かゝへとなつて奉職中。父君は現在青物乾物商を營み盛大である。

女史は大正十四年十月より、日本古流家元角田一忠先生につき、斯道の研究に入り精進大に努め拔群の進境を示し、昭和二年三月教授職となつた。爾來、子弟の指導に當ると共に、引きつゞき研究を續け、家元自宅の研究會へは、缺かす處なく出席して、その技を磨きつゝある。庵號を入江庵といふ。

茶道は庸軒流を修業中である。女史未だ妙齡、その將來はまことに洋々たるものがある。(東京市外中野町打越二〇七〇番地)



梅田一暉女史

旭古流華道教授
旭山齋 相原一元女史

女史は靜岡縣田方郡の人、累代名主を繼承し來れる清水家の出である。父を幾四郎といひ、その五女である。俗名をきい子といふ。

女史は明治二十六年四月、田方郡三島小學校に入り、同三十一年高等科を卒業、更らに駿東郡沼津裁縫女學校に學び、同三十七年卒業した。

相原一元女史

卒業後、三島皆先生について、華道を研究し、大に技術を磨き、後、旭古流家元旭鶴齋押田一貫先生について、同流を學び、その奥儀を極むるに至る。現に家元旭會の幹事として、同流のため且つ斯道のため盡瘁しつゝある。

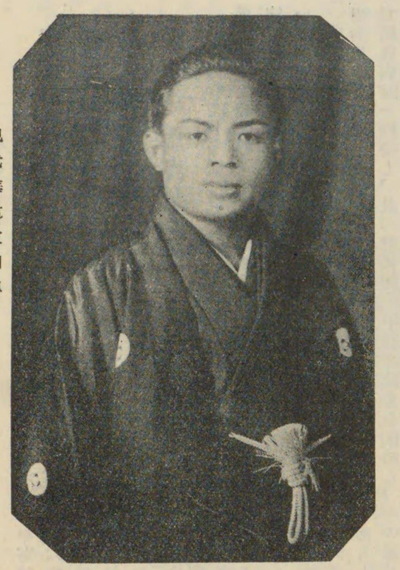
女史の特に傑出せるは木物。

なほ、女史は幼時より琴曲を好み、十一歳にして小林先生につき、後上田先生について學修した。又、茶道および盆石にも造詣淺からずといふ。(東京市青山南町五ノ一九番地)

日本古流華道教授
松鶴亭 堤一景氏

氏は明治三十八年十二月二十五日、甲府市愛宕町に生る。本名は貞藏、堤龜吉氏の三男である。庵號を清風庵といふ。

父君は盆栽家で、兄雄三氏また斯道の大家である。特に風流趣味に長じ、一景氏と共に日本古流華道に親しむといふ。



堤一景氏

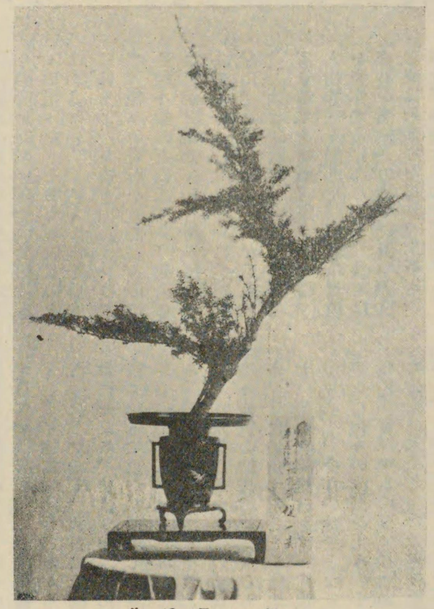
氏は父君の業を見習ふため、夙に同地の金子撫松園に入り、盆栽および園藝を實地について多年研究、今や斯道の名手として知られるに至つた。蓋し撫松園は、斯界の最高權威であるといはれる。

氏は職業の必要と趣味とから早くより華道に志しがあつた。而して大正十二年、同地において名聲高き日本古流華道師範石原一遜先生の門に入り、研修することとなつたが、その技術は日と共に進み早くも昭和二年その業を大成して奥傳および師範の免許を得るに至つたのである。

元來、その動機は師範たるが目的ではなかつたが、業成り技の進むに從つて、斯道の眞諦のいよいよ興深きを悟入し、それ以後は家元の直門となり、その奥儀を極めるに至り、現に家元補佐職として當流内に重きをなしてゐる。

趣味は職掌柄盆栽、盆景はいふまでもなく、別に有樂流茶道を同じ石原先生について學び、造詣する處が深い。

なほ、昭和四年山梨民友新聞主催の華道家人氣投票に際して、日本古流は入選するもの九名の絶對多數に達し、氏もその一人であつたといふ。(山梨縣甲府市元紺屋町五番地)



堤一景氏作

中心流盆景家元
晃雲流盆石家元幹事
蓬溝流投入盛花教授
一松齋　馬島碧洞氏

馬島碧洞氏

氏は明治二十四年四月十七日、東京神田北神保町に生る。本名忠德、晃雲流盆石號を樂雲齋龍進といふ。馬島永德氏の長子である。

嚴君永德氏は、帝大出の醫學明治二十三年以來、大正十二年まで馬島病院を經營し、且つ醫術開業試驗委員として久しく在任し、功によつて從七位を下賜さる。

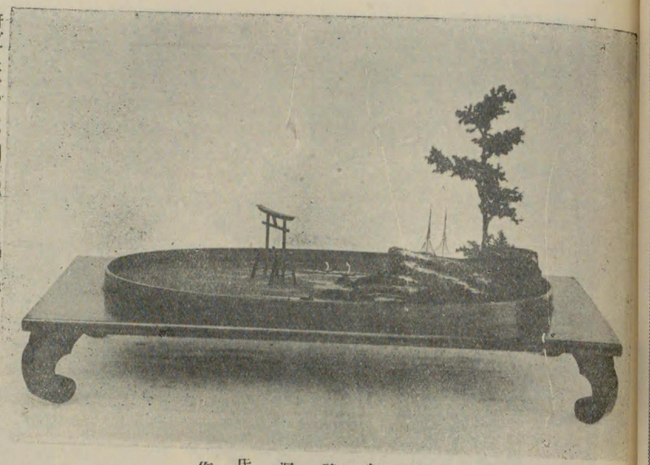
氏は夙に風流の道に心を寄せ、中學に學びて後、即ち大正六年六月、日本橋和泉流盆石二世家元村田智葉氏について學び、同六年皆傳となり、教授職を免許された。

又、同年六月、小石川戸崎町晃雲流盆石家元渥美龍玄氏に入門、同八年七月皆傳、現同流二世家元猪熊龍玄女史時代となつては、家元幹事として努力する處が多く、一面同先生について蓬溝投入盛花の研究をも重ねた。かくて同九年四月、氏は自ら新工夫を凝らし、中心流盆景を創始し、その家元として立つに至つた。當流盆景は、在來の盆景に盆石を應用し、且つ獨特の化土（眞菰の根の數百年地に埋沒腐蝕し土に化したもので昔沼澤地であつた處から出るもの）および天然石を以つてし、斯道に一新機軸を出したものである。

氏の盆景は次第に世の視聽を集め、大正十五年三月には、伏見宮殿下が、細井ドクトル邸へ御立ちよりの際、海邊一面を殿下の臺覽に供し、多大の御賞讃を博した。氏はその著『盆景講義』中に次の如く述べる。

『盆景は日本特有の藝術であつて、近時一段の進歩發達を示し今や藝術的園藝の一に數へらるゝに至つた。そもそも盆景の起原は、殿る古くして、昔時支那及び韓土より文物が輸入される當時、種々の奇石をも輸入され、これを盆の上に置きて、賞美したのが、盆景なる名稱の起原であるといふ。盆景の外に盆石、盆山、盆畫といふものがある。（一）盆景は水盤の中に天然石を置き草木を植ゑ、家、橋、船、人物等とを配して、自然の景色を製作するにある。（二）盆石は奇石を黒塗りの盆中に置き、白砂或は色砂等を用ゐ、山や川の形を羽根等を用ゐて表現する。

（三）盆山は盆石と略同一にしてその製作方法において少しく異るだけである。（四）盆畫は黒塗の平板に繪を描き、額面等に應用するものである。而して、盆石、盆畫の如きものは、往昔より上流階級に弄ばれ、今日に至つたのであるが、盆景は中流以下の道樂となり、つひに箱庭と稱するものに變形した。何が故に盆景が中途その名稱を變へたるやといふに、盆石は婦人が座敷の裡にて、製作するに適してゐるが、盆景は草木土砂を使用するため、婦人特に上流の藝術として不適當の處があるからであつた。かくて、盆石は上流社會に擴まり、盆景が中以下に愛翫されるに至つた所以であり、更らに箱庭に變形した理由である。然るに、明治二十年頃となり、和泉智川氏その他の諸氏が種々研究の結果、化土なるものを盆景に使用することを案出した。爲めに箱庭はますます進歩發達して、今日の盆景となり、更らに種々の流派を生み各その特色を發揮するに至つた』云々なほ氏は大正七年盆景翠風會を組織し、これが幹事として斯術の研究に專心し、同十五年美術盆景協會を設立、會長に男爵杉溪言長氏を推し、自らその主宰者として技術の鑑賞練磨に盡力する處が多く、又、盆景寫眞帖、盆景講義を發行し、斯道の普及發達に資する處が尠くない。因に氏の社中として傑出した人々は、一葉齋翫天碧麿


馬島碧洞氏作

（大阪市）二晴齋安中碧洲（岡山市）二雲齋早田碧仙（長岡市）一楮齋岡田碧翠（東京市）一溪齋手島碧水（東京市）の諸氏を初め、一揚齋上條碧川女史（松本）等があり、今や全國的に、その流布を見つゝある。氏は趣味頗る廣く南畫を山岡米華について學び謠曲は觀世流に達す。外に盆栽の趣味もある。雪子夫人明治二十三年生）は夙に、池坊龍生派家元吉村華芸宗匠について學び、大正十二年春より教授職となり、又表千家茶道を無事庵園登米氏に師事し、同十三年九月教授職を許されてる。（東京市神田區北神保町十八番地電話九段一四八三番）

千家古流華道教授
青柳庵　岩崎花畦女史

女史は明治四十五年二月九日を以つて生る。本名を梅子といふ。

大正七年淺草千束小學に入り、後大森入新井校に轉じて、同十三年三月卒業。同年四月城南女學校に入學し、昭和三年三月、同校を卒業す。

華道は大正十四年八月より、千家古流宗家石森花月先生の門に入り、爾來研修を重ねること頗る熱心、技大に進み昭和二年奥傳を許され、同三年皆傳となり、同時に教授職として立つに至つた。

現に城南幼稚園の助手として、幼兒を教導するの傍ら、斯道の研究のために、一路精進をなしつゝある。

前途春秋に富み技術拔群、當流中の才媛として、師の推賞を受けてゐる。（東京府荏原郡入新井町不入斗）

岩崎花畦女史

新古流華道教授
清閑齋 富永一賢女史

女史は明治三十一年九月二十三日を以つて、兵庫縣明石市榮町二〇四七ノ一に生る。本名を千代乃といふ。

富永一賢女史作

女史は鄉里の明石尋常高等小學を卒業し、後家政を學ぶ。

少時より花道に對し、特別の趣味を持ち、名流の花技を見學する處あり、後、東京に出づるに及び、新古流家元宮本一眞先生の門に入つて、當流を學ぶこととなつた。

爾來、熱心に斯道の技を磨き累進して師範となつた。が、現在においても、その蘊奥を極はむべく、ますます精進して止む處がない。まことに稀に見る熱心なる研究家である。宜なるかな、技術また群を抜いて優秀、多士濟々の同門中においても、陸離たる光彩を放つてゐる。

主人富永政喜氏は、自働車業を經營し、使用人二十餘名、別に支店を有して頗る盛業を極めてゐる。(東京市淺草區小島町八〇番地、電話淺草三三七五番、六六六六番)

滋野增子女史作

日本生花司
松月堂古流教授
日本準總會頭
曉華園 滋野增子女史

女史は、明治十七年七月二十七日、東京淺草南富坂七番地に生る。父は滋野溫幸、母は富貴女。祖先は信州眞田家より出で、當代で十一代になる。父君は德川に仕へ、明治維新後、江戸に移住し、後大藏省に出仕してゐたが、女史十七歳の時歿す。滋野家は、古くより現住所に在り、現に富坂町の草分けといはれる。母堂は山中鹿之助の後胤、夫歿後の遺兒數名を擁して、その愛育に沒頭すると共に、姑に仕へて至孝、時人から女丈夫として、推賞された人である。子女何れもその感化を受け、人と爲り豪毅良順となつた。

女史は、年十九歳にして、松月堂古流の大家宮田宗興先生を知り後明治三十五年の交、名古屋の高野潛龍舍先生(大正七年九十一歳で歿す)について、松月堂古流の蘊奥を極め、居ること五年、東京に歸つて、斯道の教授をなすに至つた。高野先生歿後は、その高弟五大坊佐藤牧水翁について學ぶ。

滋野增子女史

女史は昭和三年十月今上陸下即位の御大禮を行はせらるゝに際し、同流家元に隨從して京都御坐所に生花を奉獻するの榮譽を荷ふた。

得意のものは、菊を第一とし、次いで菖蒲である。

尙、女史は山田流上原派の琴曲に達し、現に教授をなしてゐる。餘技としては和歌を好み、曾て東海道を過ぐる頃、曉の富士を見て、感に堪へず。

おほかたはまだ明けやらぬ曉のふじのすそのは見えそめにけり

と一首を詠じ、大に賞讃を博した。

又、靜風と號し、茶道にも通ず。

現に、由緒ある南富坂町の家に兄弟の家族と共に、平和なる團欒を樂しみつゝある。(東京市淺草區南富坂町七番地)

東光古流華道教授
清月庵 宇野松溪女史

女史は明治十四年十二月二十三日を以つて、東京京橋南八丁堀に生る。本名をきく子といひ、中村龜七氏の女である。

女史の生家は代々商業を以つて知られてゐるが、女史は、幼少にして、風流の道を嗜み、特に華道に對しては、先天的の趣味を持ち、夙に各流派の研究に着手し、その技を練磨し來つた。後、東光古流家元東光庵福田松齡氏の門に入つて、當流の秘奥を傳へられ、これが教授職として、多數の門葉を養成し、現に副家元の重任に就いて、ますます斯道のため盡力し、當流內において、最も重んぜられてゐる。(東京市芝區三田小山町二番地)

宇野松溪女史

宇野松溪女史作

東光古流華道教授
松雪庵 高部峰月女史

女史は明治十年四月、千葉縣千葉町に生る。

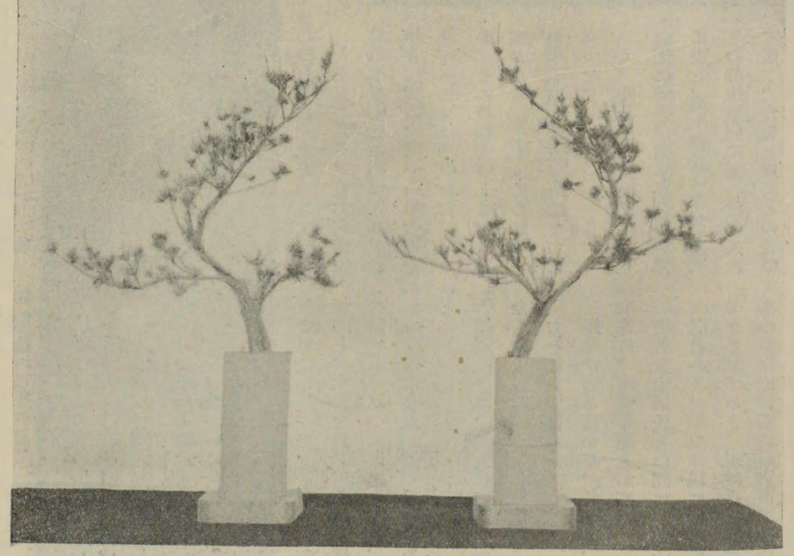
千葉女學校の出身である。

華道には早くより入り、初め西山古流を究め、後、東光古流家元福田松齡氏の門に入りて、その研究を積むこと約十有餘年、夙に教授職として、當流の普及宣揚に力を致し、門葉を多く取り立てた。現に家元顧問の要位にあつて、ますます斯流の發展に盡す處が多いのである。

女史は、何れの花に對しても、好惡巧拙なく、技倆秀拔にして、一門の推賞を得てゐる。

家庭には夫君との間に、四男二女あり、一面賢母として、子女の薫化に努力しつゝある。(東京市外瀧の川田端五二〇番地)

高部峰月女史



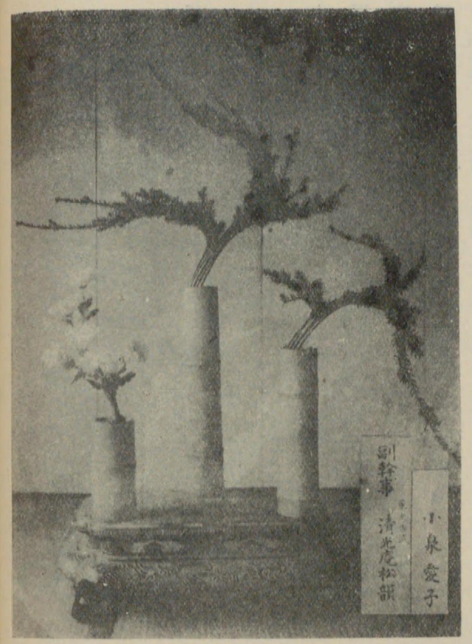
高部峰月女史作

東光古流華道教授
表千家茶道教授
清光庵 小泉松韻女史

女史は明治二十七年八月二十二日、栃木縣栃木町萬町二丁目松島清次郎氏の女として生る。本名を愛といひ、別に盛花號を松壽齋一香、茶號を古生齋一舟と稱す。後小泉新太郎氏に嫁した。

生家は製糸業者として知られ、父君清次郎氏は、長子堅太郎氏に家督を譲り、目下飼鳥を樂しみ、餘生を樂しんでゐる。

女史は宇都宮女子師範學校に學んだが、健康を害して中途退學、後專ら風雅の道に心を寄せ、以つて身心の修養に志した。



小泉松韻女史作

大正五年六月、東光古流家元福田松齡氏の門に入り、研修大に努め、同十一年皆傳を免許され、一時中止してゐたが、その技倆を惜しまれ、家元より教授をすゝめられて、爾來子弟の養成に專心するに至つた。

又、盛花は大正十二年より研究に着手、同年五月平和博に際し、聖上攝政に在せし頃、その御休憩室に藤の投げ入れを献じ、台覽を賜はるの光榮に浴した。

女史は今後一層、斯道の研究に努力し、生涯を通じてこれが練磨に精進し、以つて斯道の振興、流派の宣揚に心血を濺ぐ覺悟であるといふ。

得意の花は、投入れの如き清楚なものを好み、この方面に向つて、主力を注いでゐる。

趣味は頗る廣いが、特に琴、長唄等は、堪能の聞えが高い。

夫君新太郎氏との間に、一子榮次郎君あり、社中は現に數十名の多きを算すると。現職は家元副幹事の要位に居る。(東京市下谷區上野櫻木町二番地)

日本古流華道教授
松姚齋 小堀一効女史

女史は明治三十六年九月十二日宇都宮市戸祭町に生る。石川玄三氏の女であり、本名を齊子といふ。小堀姓はその婚家の姓である。

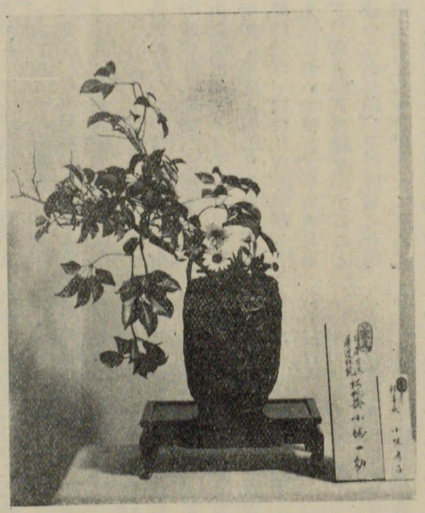
石川家は維新まで名主として、二十數代を經、豪農として又名望家として、著聞してゐた家柄である。夫君玄三氏は、栃木縣會議員として十餘年を在任し、後衆議院議員に選ばれて、議政壇上に送られ、八年間その地位に居た。その後、後進に譲りて政界を引退したが、なほ矍鑠として公私のことに盡瘁しつゝある。

小堀一効女史

女史は大正九年三月宇都宮高等女學校を卒業し後、東京大妻技藝學校に入り、同十一年九月同校を卒業した。

女史は在學時代より華道に興味を持ち、常に觀賞と研究に耽つてゐたが、たまたま日本古流の流風を知るに及び、これに傾倒して同十一年三月、家元角田一忠先生について、研究することとなつた。爾來、孜々として研究の結果、技術の進歩頗る迅速、同十四年十月早くも師範を免許され、以後教授とした、斯界に立つに至つた。

又、茶道利休派表千家茶道を同じく角田先生について學び、現に教授となつてゐる。この外山田流琴曲にも長ず。



小堀一効女史作

夫君小堀九平氏は、駒場農大研究員として、前途ある少壯學徒である。(東京市外澁谷町永川二七番地)

旭古流華道教授
旭照齋 箕浦一節女史

箕浦一節女史

女史は明治二十一年九月大阪西成郡難波に生る。本名をとよ子といひ、箕浦文明氏の長女、三歳の時父君の實弟春三郎氏の養女となつた。

箕浦家は篠山藩士で、代々御殿醫を勤めた家柄である。家祖箕浦量庵文輿より、泰庵希聖、量伯文友、玄伯遊龜を經て、父君文明氏に至る。遊龜氏に三男あり、長男文明、二男春三郎、三男雄四郎といふ。文明氏は同藩士依田秀實氏の二女を娶り、長男文武氏（東京市電氣局勤務）長女とよ子（即ち女史にして別家箕浦春三郎氏の養女となる）三男文也氏（母方伯父遠藤愼司氏の養子となる）の二男一女を擧げた。

文明氏は父祖の遺業を繼いで、醫師となり、大阪堺に住して病院に勤め、後自ら開業して二十餘年を經、信用頗る厚く、一面和歌俳句に趣味を有し、この方面に傑出してゐた。

女史は箕浦家の別家春三郎氏に養はれた。養父春三郎氏は、劍道の達人で、武德會、七十聯隊、縣立中學等に劍道指南として、多年貢獻した人である。女史は養母あさ子刀自の令甥、播州小野藩士崎田連氏の三男滉氏を迎へ、二男二女を擧げた。即ち長男博夫（大正六年生）長女鈴子（同九年生）二女美智子（同十年生）三男雅夫（同十四年生）である。

女史は明治三十六年三月兵庫縣多紀郡篠山女子高等小學校を卒業、同三十六年五月より大石貞質氏について、漢學を學び、同三十七年一月七日私立兵庫縣教育會主催准教員養成講習會に入り、同年三月修了、同三十七年四月大阪府女子師範學校に入學、同四十年三月同校を卒業した。この外諸種の講習會を修了すること二十二回、講義錄により女子師範科、實習女學、割烹、女子大學講義錄について研學修了、好學勉勵夙に稀なる才媛として、鄕黨に囑目された。

華道に入つたのは、女史が十四歳の時、卽ち明治三十四年九月、篠山東新町栗山リツ子女史について研修、玉光と號してゐた。師範在學時代は、同校花道師範關スヤ子先生について學び、卒業後兵庫縣下、東京府下に職を奉ずること前後十六ケ年間、その間常に花道の研究を怠らず、精進大に努めてゐたが、大正十二年三月職を辭すると共に、專心斯道に參ぜんと欲し、現旭古流家元旭鶴齋押田一貫先生の門を叩き、その教へを乞ふに至つたが、たまたま震災に會し、加ふるに兒女の病臥するあると共に、女史自らも健康を害したので、一時鄕里に歸省し、靜養加療に努め、健康の恢復と共に歸京、同十四年九月以來、再び一意專心押田先生について研究の甲斐あり、累進して現に旭會幹事となり、家元の殊寵と後進の信頼を博し、その將來を最も期待されてゐる。

女史は小學校以來、學業優秀品行方正を以つて、賞を受くること七回、女子師範時代も操行方正、學業精勵の故を以つて賞狀を受け表彰された。又、四十二年十二月大阪府泉南郡に奉職中『方言並に發音の誤り取調表』を教育品展覽會に出品し、大阪府知事より三等賞を授けられた。

女史得意の花技は木物であるといふ。又、夙に祖父遊龜翁について、茶道、和歌を學び、十二歳にして、鄕里和歌會國風社に入り、大阪唉也會、中央歌文會にも學んだ。又書は桑山雀山先生につき、書を大下藤次郎先生に學ぶ。この外染色、絞法、天道流薙刀術にも長じてゐる。

今女史の詩歌を示せば、左の如くである。

花道に對する意見をといはれて思ふこゝろを

我れをさなくてありし頃
　坐敷の床に飾られし
文箱あまたある中に
　我祖父遊龜の手になりし
文のかず〳〵讀むうちに
　知らず〳〵もしきしまの
道に心をみちびかれ
　お茶に、お花に、くさ〴〵の
文をば見ては我もまた
　祖父の心をうけつぎて
この道にこそ入らめとぞ
　思ひそめしぞはじめなる
わけても花のこゝろをば
　かきのこされし「花がたみ」
花にこゝろをならはむと
　思ひそめしもこの時よ。
そもそも山紫水明の
　我が日の本に生れ來て
神代ながらの敷島の
　道ふみ入れし匂ふなる
やまと錦の生花は
　これも神代の其むかし
すでにひらけし道にして
　我國ぶりのほこりなり。
いでやわが友諸共に
　學びの業のいろ〳〵に
智識をみがき外國の
　運動ぶりを見倣ひて
其身體を練ふとも
　心はつねにしきしまの
神にさゝげし榊葉の
　いとも正しく、み佛に
たむけの花のうるはしき
　こゝろを己が心とし。
我か藝術のほこりなる
　生花の道にいそしみて
人を導き我身をも
　つゝしみあひてひとすぢに
大和をみなの道のみか
　御國を守る男子等の
心をやすめ大君の
　みためにつくす人となし
いつ〳〵までも日の本の
　國の光を廣き世に
奥をきはめむひたすらに
　御國の爲に世の爲に。

御大典奉祝

さしのぼる我が日の本の大君のみのりを祝ふ今日ぞめでたき

旭古流のいよ〳〵隆盛ならんことを祈りて

古への神代の手ふりそのまゝに
匂ふ旭の家元の花
廣き世を照して千代も匂ふらむ
旭古流の花のかほりは
大君の今日のみのりにあらはれて
旭のかげの花は榮えむ

女史は至誠一貫、事に當手するや、机に向つて放れず、儕輩から『蒲鉾』といはれた程であるが、又、大の運動すきで、『左さん』の稱をとり、師範在學時代には雪中なほテニスに耽つたことがあるといふ。蓋し稀に見る意志堅固にして、多藝多能の閨秀といふべきであらう。（東京市外澁谷町櫻丘五五番地）

新古流華道教授
清蓮齋 **岡田一聖女史**

女史は長野縣石堂町の人、明治三十四年を以つて生る。本名を菊枝といひ、元官吏岡田菊藏氏の長女である。

女史は長野縣立高等女學校を卒業、更らに長野縣裁縫女學校の業を卒へた。

大正十一年四月誠派古流に入門家元を補佐して、後進の誘掖指導に力めつゝある。

岡田一聖女史

女史は又、文筆に長じ、諸種の作品をものするを得意としてゐるが、就中、紀行文において、最も巧みであるといふ。

家庭は兩親の外に弟姉二人あり圓滿なる團欒裡に、雅道に潜心してゐるのである。(東京市外寺島村二一三五番地)

同十四年三月まで研究、同年四月より現在の新古流家元宮本一眞先生に入門し、生花並に盛花投入花等を研究すること四年昭和三年四月師範職を免許され、現在も引續き研究に專心すると共に、

岡田一聖女史作

◎
あさじ原主なき宿の櫻花心やすくや風に散るらん　(惠慶法師)

◎
花も皆散りぬる宿は行く春の古里とこそなりぬべらなれ　(紀貫之)

◎
櫻ちる木の下風は寒かうで空に知られぬ雪ぞ降りける　(同人)

新古流華道教授
精香齋 **山口一華女史**

女史は明治三十七年三月十三日東京日本橋長谷川町に生る。本名を貞子といひ、實業家山田勇一郎氏の女である。後山口家へ嫁す。

山口一華女史

女史は附屬小學校を經て、女子神學校に學び、これを卒業す。

華道には十二歳にして入り初めは古流を學び十九歳まで研究、一家の技倆を得るに至つたが、二十歳より更らに新古流宮本一眞先生の門に入り專心その蘊奥を極はめるに至り、昭和二年秋業いよいよ成つて師範を免許された。

家庭は夫君と二人、伉儷頗る睦じきものあり。

なほ、餘技として茶道表千家、山田流琴曲に長ず。容姿秀麗、技術拔群、當流における閨秀として、內外より重んぜられてゐる。(東京市赤坂區新町三ノ三九番地)

山口一華女史作

新古流華道教授
清雅齋 **中右一麗女史**

女史は明治十六年十一月十六日兵庫縣神崎郡川邊村字屋形に生る父は淺野房吉氏、母はいと女、女史はその二女で、本名をきぬ子といふ。明治三十六年二十歳の時、中右重三郎氏に嫁し、同時に上京した。

夫君重三郎氏は、洋服商を經營し、人夙に上京して貴金屬商を營み、大に產を成したが、昭和三年六月六十二歳で物故し、母堂たけ子健在す。

女史は深川裁縫女學校に入り、大正十二年四月卒業し、今や使用人二十餘名を有し、斯界に知られた有力家である。

女史は幼にして華道を好み初め池坊を研究し、後古流を學び、造詣する處頗る深きに拘はらず、更らにその技を練磨すべく新古流家元宮本一眞先生の門に入つた。爾來研修すること六星霜、全く大成して昭和二年十月師範職を許され、家元に力を用ゐてゐる。

中右一麗女史

女史第一の趣味は生花で、これが研究は畢生の事業として、將來ますます研精の一路を進むことを期してゐる。

夫君との間に、子女六人あり、一面良妻賢母として、多くの推賞を受けてゐる。當流の最有力社中として、家元門葉の信用最も厚い。

（東京市麹町區紀尾井町十番地、電話九段九五〇番）

◎

峰ならで雲ゐる花の梢哉　澄月
雲と見し高ねに歸る花も哉　智蘊
花の山又雲にして戻りけり　其水
白雲や花になり行額は蟇峨　其角

新古流華道教授
清美齋 **金子一喜女史**

女史は明治四十一年二月八日、東京本所綠町一丁目に生る。本名美喜子といひ、金子仁助氏の三女である。

父君仁助氏は千葉縣東葛飾郡の

金子一喜女史

金子一喜女史作

翌十三年春より、新古流家元宮本一眞女史について、華道を研究し、昭和三年二月皆傳を許され、同時に教授職となつた。

家庭は母堂たけ子、主人重氏との三人である。（東京市本所區綠町一丁目四七番地）

梅が香は花にさはらぬ嵐哉　肖柏
風までに匂をちらせ梅の花　宗祇

千本古流華道宗家
巖松齋 土屋嘉清氏

土屋嘉清氏

氏は明治七年二月二十日、靜岡縣沼津市に生る。本名を清治といひ、川添宜延氏の二男である。後土屋家に入つて繼ぐ。生家川添家は德川家の直臣であつた。

氏は靜岡縣片濱村小學校を卒業後、沼津市において棉花業に從ふの傍ら雅道に入つた。しかも氏の熱心なる明治二十四年より三ケ年間一日も休む處なく、精進したのである。師は沼津市の人、內藤氏であつた。なほ居ること數年間、つひに一切の免許を受け、その跡を繼ぐことになつた。

かくて大正十一年夏より、橫濱市において華道教授を開始し、爾後多數の門葉を輩出した。

氏は資性廉直、常に輕薄なる世辭追從にては、進級を行はず、偏せんとして來る門弟に對しては、『一日何回にても教授するを辭せず』と稱し、毅然としてその本領を守つてゐる。まことに欣すべき風格である。

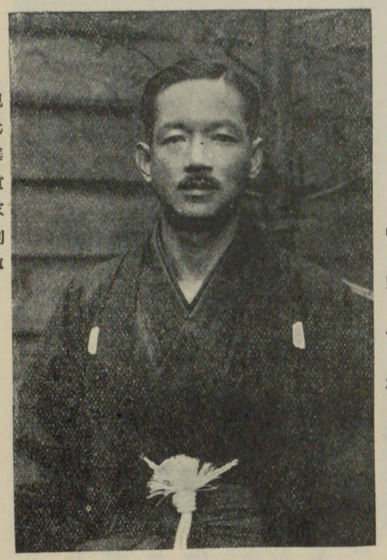
氏得意のものは葉物、就中、葉蘭、萬年青、かきつ、菖蒲、松等々である。

社中としては木村嘉靜、新井嘉鷹等の諸氏が傑出してゐる。が、この外にも、多數の俊秀を出してゐるといふ。

土屋嘉清氏作

なほ氏は大正四年五月二十八日石原縣知事より、人命救助によつて、褒狀を下賜された。

家庭はふく子夫人との間に一子一雄氏あり、大正十三年中央大學商科を卒業、目下實業に從事してゐる。(橫濱市中區野毛町三ノ一二五番地)



中野一水氏

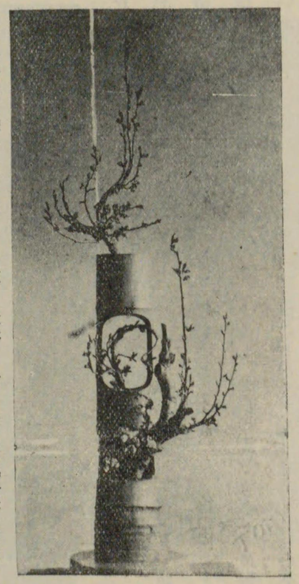
美笑流二十世家元
美笑軒 中野一水氏

氏は明治二十二年八月二十六日東京日本橋下槇町に生る。俗名を參之助といひ、初太郎氏の二男である。初太郎氏は當流十九世家元たりし人、大正十年七十七歲を以つて歿した。

當流の初代は後藤大學といひ、上杉家の家臣であつて、武人であると共に、風流の道に詳しく、特に花技を愛すること最も大であつた。つひに元和元年自ら美笑軒道覺と號して美笑流を起し、流名大に揚つた。爾來連綿相傳へて二十世、現代の一水氏に至つたものであるといふ。

氏は幼にして祖父の薰陶を受け技を練磨すること多年、年三十二にして、宗家家元たるを許され、同時に一水の號を名乘るに至つた。而して大正九年三月二十一日、その披露會を神田區仲町福田家において擧行した。

氏は斯界稀に見る練達の士であるが、家元を襲ふと共に、その發展を圖るため、美盛會を組織して自ら會長となり、研究琢磨の功を積むと共に、直門子弟の指導に潛心し、更らに花道五日會四代の會長に就任して斯道界のために盡す處頗る多いのである。由來美笑流は、古來の古流から分派したものであるが、今や三百年二十代を經て、その傳ふる技術は、全く獨特のものとなつた。當流の前途いよいよ洋々たるものがある。



中野一水氏作

氏は昭和二年三月、中央新聞社の全國挿花十傑投票に當選して、表彰され、又、招魂祭等には、しばしば獻花の擧をなし、當流の名聲宣揚に努めてゐる。氏の生花生活に入つて以來の門下數千人を算し現に一百人の社中がある。

茶道は石州流。

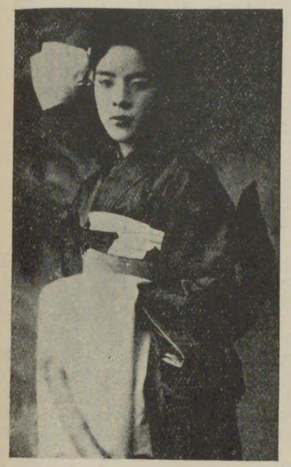
朝子夫人(明治二十四年生)との間に長女勝子(明治四十三年生)長男道明(大正五年生)二女敏子(昭和二年生)の一男二女がある。(東京市本所區石原町七十七番地)

新古流華道教授
清盈齋 井上一溪女史

女史は大正二年、東京本所横網に生る。本名文子、井上茂十郎氏の女である。

父君は運送業を經營するの傍ら自轉車業を營み、新進事業家として、斯界に重きをなす人である。

女史は昭和三年文化學院中等部を卒業、目下同大學部にありて。勉學中である。



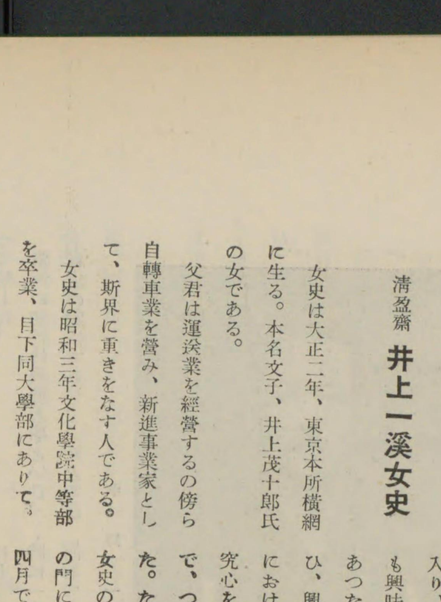
井上一溪女史

華道には十三歳の頃より研究に入り、學校においても、斯道は最も興味あり且つ最も得意の學科であつた。しかも、研究の積むに從ひ、興味はいよいよ加はり、學校における研究だけでは、女史の研究心を滿足することが出來ないので、つひに師を求めることゝなつた。たまたま新古流家元宮本一眞女史の流風と盛名を慕ひ、同先生の門に入つた。時に大正十五年春四月であつた。

以來熱心に研究を重ね、技倆日に練達し、僅かに三年餘にして、早くも生花、盛花、瓶華の皆傳を免許されることになつた。その進境には師をして舌を捲かしめたといふ。

女史の華道における、全く趣味のためであつて、眞の意味の華道家である。その前途は大に期待さるべきものがあらう。

女史は別に洋樂を好み、又、語學には特に堪能、英、佛の兩語をよくし、學科中華道と共に、最得意のものであるといふ。(東京市本所區林町二ノ一三番地、電話本所五三六四番)



井上一溪女史作

寺尾影月女史作

利休古流華道教授
利心菴 寺尾影月女史

女史は明治三十四年六月十四日東京日本橋本石町に生る。本名を多賀といふ。

女史は常盤小學校を卒へ、明治四十五年神田高等女學校に入學、四學年を修了、後大正九年利休古流家元榮心庵新呑傾月先生について、華道の研究に入り、同十二年皆傳となつた。茶の湯は女學校時代より近藤トモ子女史について學び、又、割烹は赤堀峰吉氏について、研究大に努めた。

得意の花は水仙である。毎月催される家元の研究會において、一等を取ることしばしばであるといふ。

なほ餘技として梅若流謠曲を小山健太郎氏に學んでゐる。

家は商業を營み、父君は數年前歿し、現在は母堂令姉と共に、快適な趣味生活を送つてゐる。(東京市赤坂區檜町五番地)

古流御家派華道教授
松風齋 高崎理靜女史

女史は明治三十二年十一月七日の生れ、鹿兒島縣日置郡西市來村港町の人である。本名を靜子といひ、父君は元大阪府知事にして、後貴族院議員となつた、彼の有名なる高崎親章氏である。

女史は女子商業學校を卒業し、後アメリカに遊學すること二ケ年に及び、歸朝後、古流御家派家元資井理湖先生の門に入りて華道を研修することとなつた。爾來、刻苦精勵、技術の練達に努力した結果、その進歩は衆を抜いて躍進、昭和二年家元花目付職筆頭となり、教授職となつた。又、花道研究機關松の會幹事として、會長を補佐し、當流今日の隆盛を招來せしめるに力を致した。

高崎理靜女史

なほ、女史の花型は、特に幽雅にして自然、衆人の嘆賞の的となつてゐる。

餘技としては獨唱和歌等である

夫君は海軍中佐として、現に海軍省に奉職、一男一女あり、淑德の譽が高い。(東京市外澁谷町長谷戸四二番地)

五明流華道教授
五錦齋　**矢崎壽甫女史**

女史は明治四十一年二月二十八日を以つて、茨城縣稻敷郡本新田村上出島に生る。高城駿氏の長女で、本名を文子といふ。

高城家は封建時代より代々名主として聲望ある名家であつた。後、祖父啓次郎氏は茨城縣參事會員として選出され、地方政治の爲めに長とし自治のために盡瘁した。

矢崎壽甫市女史

女史は高等女學校の出身、大正三年、矢崎家の養女となつた。矢崎家の祖は關東管領北條早雲の臣土岐氏であつて、早雲一敗するや常陸の國に移り、後矢崎姓を名乘るに至つた。

女史は大正十三年五明流家元山根壽富女史について研究、昭和三年皆傳を受け、引き續き研究を積んでゐる。得意の花は草物。

餘技は琴、茶等である。(東京市外大島町一ノ一七七番)

明月古流華道家元
美盛會幹事
光韻軒　**金子水月女史**

女史は明治三十四年十二月十九日を以つて、埼玉縣南埼玉郡粕壁町の生れである。本名をキク子といふ。

女史は十餘年前より美笑流家元中野一水先生について、同流の研究に精勵し、技術大に進み、師一水氏をして最も嘱目せしめ、家元幹事として、同流のために盡す處多大であつたが、後、師一水氏の許可を得て、別に明月古流を創始し、以つて家元となり今日に至つた。一水氏の美笑流と共に、大にその流風を宣揚して、今や多數の門葉を養成するの域に達す。(東京市本所區石原町七七番地)

金子水月女史

梅月古流華道家元
關西流盛花教授
松鶴齋　**荻野理兼氏**

氏は明治八年二月二十七日、東京赤坂新町に生る。繁太郎氏の男、本名を兼吉といふ。

祖先は代々江戸において、幕府の御用商を勤め、當時豪商として知られてゐた。が、氏は不幸にして六歳父君に死別し、祖父半兵衞氏の手によつて養育されたが、九歳にしてその祖父も物故したので氏の境遇は激しい變化を受け、十一歳より製鐵業に從ふことになつた。しかも、氏の至孝なるそれ以來業務の餘暇を以つて、菩提寺を訪ひ、先考の靈を弔ふこと、今に變らず四十年一日の如しといふ。

氏は夙に風流の道を好み、二十歳にして華道の門に入り、更らに茶の湯を學び、忙中を割いて、常に研鑽を怠らなかつた。明治四十三年十一月、神田元柳原の一角に居を卜し、建築業を營んだが、氏の革新的計劃は、時代の潮流に合し、幾何もなく業況隆盛、逐日大を加へ現に數十人を使用してゐる。

この間華道の研究も怠らず精進し、大に得る處があり、他面時代の新流派も、かくあらざるべからずと痛感したが爲であるといふ。

氏は又別に宮田泰山氏につき關西流盛花投入をも研究すること多年、現に教授職である。

資性快活にして人格高潔、氏に接する程の人をして、悉く敬慕の念を起さしめざるはない。

家庭には筆子夫人(明治八年生)と二男廣君(明治四十四年生)がある。(東京市下谷區竹町三番地)

現代華道家列傳　荻野理兼氏

荻野理兼氏作

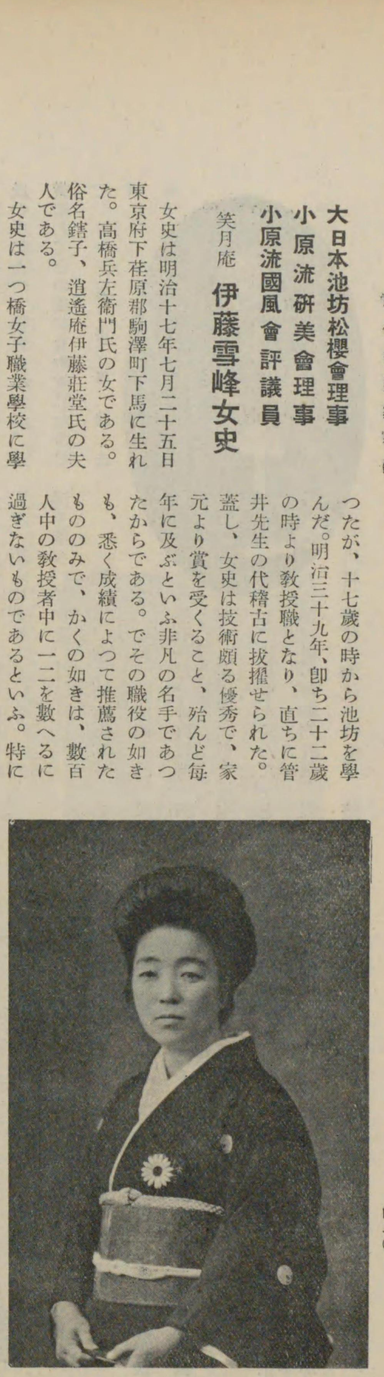
大日本池坊松櫻會理事
小原流研美會理事
小原流國風會評議員
笑月庵 伊藤雪峰女史

伊藤雪峰女史作

女史は明治十七年七月二十五日東京府下荏原郡駒澤町下馬に生れた。高橋兵左衛門氏の女である。俗名錡子、逍遙庵伊藤莊堂氏の夫人である。

女史は一つ橋女子職業學校に學んだが、華道に入つたのは早く十四歳であつた。當時は遠州流であつたが、十七歳の時から池坊を學んだ。明治三十九年、即ち二十二歳の時より教授職となり、直ちに管井先生の代稽古に拔擢せられた。蓋し、女史は技術頗る優秀で、家元より賞を受くること、殆んど毎年に及ぶといふ非凡の名手であつたからである。でその職役の如きも、悉く成績によつて推薦されたもののみで、かくの如きは、數百人中の教授者中に一二を數へるに過ぎないものであるといふ。特に木をこなす妙手として知られる。

女史が六角堂入門以來の經歷を示すと、明治三十四年十一月入門、三十七年七月生花皆傳、同四十年七月花目付、床構、紫幕、同年九月薄盤、大正三年三月脇教授、同年八月華盤、正面席、同四年九月準教授準目代、同六年十一月家元教授、國目代、同七年九月國會頭および準總幹事、同十年三月大日本教授、兼間、總幹事、準總華鑑、同十三年二月社長、同年十二月總執事、同十四年九月立華皆傳、大日本總華督の順序であつた。



伊藤雪峰女史

なほ、小原流盛花は、同流の研盛會設立當時より入門して、累進教授となり、現に小原流國風會審査員、同研美會理事として、重きをなしてゐる。

又、女史は大正十三年池坊中央橘會を鈴木、江口、小沼、川口の諸氏と共に、設立し、これが幹事となり、更らに昭和二年、山田、鈴木、伊藤、松井、古内の諸氏と圖り、大日本池坊松櫻會を設立し、以來理事として今日に至つた。又

同年池坊昭和會の設立されるや、評議員に推されて、現在その任にある。

又、大正二年より同六年まで成女高等女學校教師、同六年より八年まで中村高等女學校の教師として、多くの子弟を導いて來た。かくて社中を養成する五百餘名、內池坊の教授者二十八名、小原流教授者三十名を女史の門下から出してゐる。以つて、女史の斯界につくせる功績を思ふべく、現に、その門に集る社中頗る多し。

餘技としては山田流箏曲と茶道、茶道は初め江戸千家、後表千家を研究した。天資快活、闘秀華道家として、屈指の一人である。(東京市外東大久保四四五番地)

伊藤雪峰女史作

專敬流華道教授
小原流盛花瓶華教授
輝流亭 馬場崎玉燿女史

馬場崎玉燿女史

女史は明治十三年十二月一日東京に生る。本名をたま子といふ。華道は今より二十六年前、專敬流關東總會頭翠流亭富田玉紫先生に就て研修すること多年累進して大正元年皆傳の允可を得、尚數年前より小原流の盛花瓶華を習得し共に門弟の教養に專念し今日に至つた。

專敬流は流法正しく而も由緒のある流儀なれば大に發展せしめたいとの希望を持ち常に數氏の有志と共に熱心研究に精進しつゝある。

女史はまた裏千家茶道に堪能である。餘技には謠曲、刺繍などあり共に素人の域を超えて居る。(東京市四谷區永住町二番地)

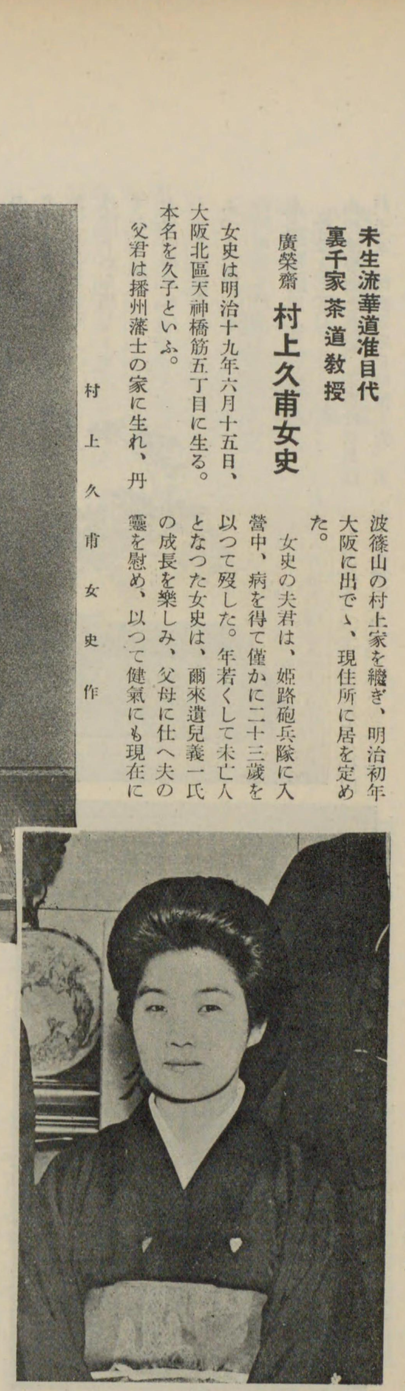
未生流華道准目代 裏千家茶道教授
廣榮齋 村上久甫女史

女史は明治十九年六月十五日、大阪北區天神橋筋五丁目に生る。本名を久子といふ。

父君は播州藩士の家に生れ、丹波篠山の村上家を繼ぎ、明治初年大阪に出でゝ、現住所に居を定めた。

女史の夫君は、姫路砲兵隊に入營中、病を得て僅かに二十三歲を以つて歿した。年若くして未亡人となつた女史は、爾來遺兒義一氏の成長を樂しみ、父母に仕へ夫の靈を慰め、以つて健氣にも現在に至つたもので、その貞淑なる半生はまさに婦人の龜鑑といふも溢美の言ではない。

村上久甫女史作



村上久甫女史

女史は當流内において、重きを成すは勿論、現大阪華道界においても、閨秀中の第一人者として隆々たる名聲を有してゐる。蓋し、女史は技術の人であると共に、頭腦明晰信義に厚いからで、その風格を慕ふて入門するもの頗る多數である。しかも、一たび入門したものは、何れもその德のいよいよ深きに傾倒し、何れもその門を出づる者なしといふはれ。現に十數年に亘つて、その門下にある社中も相當あるといふ。以つて、その德望の大なるを推知することが出來るではないか。

女史は直門の社中を養ふ外、大阪市立市民館家庭科講師および同市立小華婦人館講師を兼ねて、斯道のため、常に眼覺しく活躍してゐる。

なほ、女史はその藏する處の茶華器頗る多く、今や一千點に達し、一女流斯道家として、全く類例のない處であるといはれる。また以つて、女史が斯道における忠實、熱心を證するに足るものでなければならない。

女史の最も得意の技は燕子花、葉蘭等である。

餘技としては謠、仕舞等で、何れもその堂に入るものであるといふ。(大阪市北區天神橋筋五丁目三番地)

東池坊生花教授
小原流盛花瓶華教授
崎鶴園 石井美延女史

女史は明治十一年十一月八日、函館市末廣町に生まる。本名を達子といふ。

幼少にして華道に志し、明治二十三年三月東池坊華道教授に師事して、生花の術を學び、明治三十八年奥傳を極め、同四十年一月教授となつた。

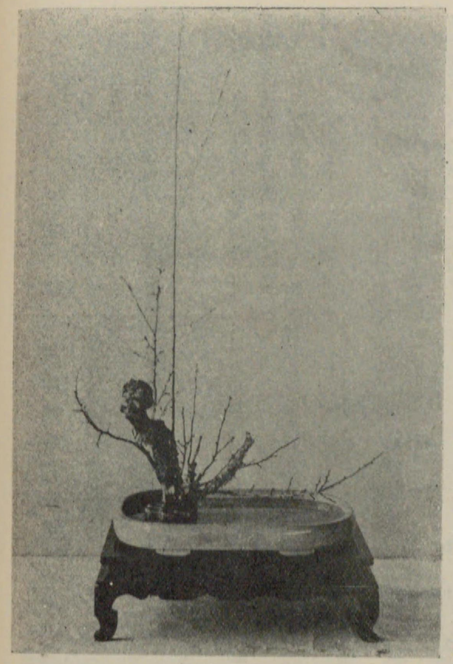
斯くて女史が華道教授を開始して以來、二十有餘年、一意斯道の普及に努力し、社中より教授職を出せるもの少からず。現に東池坊大日本總華督の職にあり、東池坊斯華會副會長である。又、小原流盛花瓶花において巧妙にして、現に小原流籬會幹事長である。盛花における雅號は六峰庵光蘭と號す。

女史は常に華道を以て心身修養第一となし、又門下の教導に對しては誠實を旨として之に當つてゐる。而して生花の原理は一であるけれども、時代の進運に應じて、その技術に工夫を加ふべきであると說いてゐる。

家庭は兩親と一子あり、一家四人暮しで、極めて圓滿である。(函館市末廣町十字街)

石井美延女史

春生流華道家元
裏千家茶道教授
春陽齋 戸塚信甫氏



戸塚信甫氏作

氏は明治八年を以つて、大阪東區大手通二丁目逸水家に生る。

逸水家は代々士分の家柄、父君は逸水房方氏といひ、氏の幼時に死去、後、氏は戸塚家を繼いだ。

氏は年十五にして、風流道に親しみ、或は遠山流或は未生流等を修め、後春生流初世加藤春生齋氏（大阪東區東雲町住）の門に入り、その高弟となるに至つた。爾來、專ら家元を補佐して、當流の爲めに盡す處多く、後、初世の隱師となるや、師を始めとし、多數門下より推擧されて、明治四十二年春より二世家元を繼承し、以つて今日に至つた。

茶道は大阪島の内住、木村宗喜氏について、千家裏流を學び、師の嘱望を集めて、つひに家元出張の事務管掌となり、大阪における斯道界に盡す處が尠くなかつた。が、氏は更らに大倉氏についてその蘊奥を極めたのである。茶號を宗信といふ。

氏は社中を中心とする研究會春生會を組織し、家元自宅において毎月二回開催、大に社中技術の向上に資しつゝある。

氏は今上陛下御成婚の當時生花寫眞帖を献上し奉り、御嘉納遊ばされるの光榮に浴し、昭和三年十一月、大阪市における交通電氣博覽會には、その社中を率いて、當流の眞技倆を示し、多大の賞讃を博し感謝狀を贈られた。

大阪斯道界の中堅人物として、重きを成してゐる。（大阪市東區空堀通り三丁目二一五番地）

戸塚信甫氏

吉田豐秋齋女史

日本生花司
松月堂古流教授
吉田豐秋齋女史

女史は明治十五年五月東京本郷湯島に生まる。吉田平五郎氏の三女にして本名をまんといふ。家世々金物商にして父君は幕末に於ける刀劍家の横威であつたと。

父君は遠州流華道の名手にして女史は幼より父君に就いて遠州流を學び、年二十一歳にして松月堂古流井上樂々亭の門に入り修養多年許されて師範となつたが、研究心に燃ゆる如き熱誠なる女史は、續いて松月會幹部一橋舍先生につきて蘊奥を極め、花檢より累進して准總會頭の高職に進み、多くの門弟を敎養しつゝ今日に至つた。

女史は昭和二年十一月、聖上陛下御即位御大禮を京都皇宮に於て擧げさせらるゝに當り、家元に隨從して御座所に生花を奉献するの榮譽を荷つた。

茶道は千家不白流にて蘊蓄あり家庭には長女萬壽美嬢あり、跡見女學校在學中である。華道茶道に終始し餘念がない。眞に惠まれたる閨秀藝術家である。（東京市小石川區晉羽町五ノ十七）

吉田豐秋齋女史作

御室御所容眞御流華務職
千家裏流茶道教授
一鶴齋 伊達九甫氏

氏は明治四年十一月十七日、岡山縣上道郡玉井村に生る。名を與三郎といふ。

氏は明治二十七年の頃から花道に志して自ら研究する處あり、同三十年頃より和歌山縣伊部郡高野山別格本山光台院において、華道三昧に入り、その蘊奥を極め斯道の達人となつた。

爾來、高野容眞流の一派を樹立して、大阪に出でて四十餘年、これが流布開發に從事し、多くの子弟を養ふて、繁榮を極はめるに至つた。然るに、大正十二年七月元御室御所大本山仁和寺においては氏の人格高く德望の旺んにして、技術また卓越せるを知り、御室御所容眞御流華務職に推擧することになつた。蓋し、最高最要の職である。

こゝにおいて、氏は從來、何々容眞流の名を附して、徒らに紛らはしき新流派を樹立することは、幾多の弊害あり、特に人の師とし

伊達九甫氏作

て立つべき華道家が、勝手氣儘に新名稱を附する如きは、社會教化の上に好ましからずといふので、容眞流を名とする斯道は何れも大本山御室御所に、一括せんことを主張し、目下これに向つて最善を盡しつゝあるのである。思ふに、氏は、茶道を京都今日庵十二代大宗匠又妙齋直叟玄室居士について修道すること長くして深し。

氏は久しく大阪天滿橋女子裁縫女學校に生花教授として在任し、現在は薩摩堀家政女學校、堂島女子補習學校等の生花教授を擔任なし、隆々たる聲望を有してゐる。

夫人そよ子は、今日庵直門の茶道名手、仲に一男四郎氏あり、目下京都帝大に在學中である。（大阪市西區本田通三丁目十四番地）

酒井幹子女史

松月派古流華道教授
松曉庵 酒井幹子女史

女史は明治三十六年、三重縣宇治山田市に生る。高井彌三郎氏の女、後、酒井家に嫁す。

生家高井家は、累代三重縣市宇田村に住し、素封家として知られた家柄である。現に嚴父は市宇田村々長として、久しく在任し村政のために盡す處、頗る大なるものがある。なほ現司法省政務次官、濱田國松氏は、女史の叔父に當つてゐる。

女史は小學校を卒業するや宇治山田市立高等女學校に入りてこれを卒業す。

後上京し、華道に入つたのは、大正十一年からで、師は松月派古流家元松月庵磯前一枝先生であつた。

爾來、研究大に努め、幾何もなくして、儕輩を拔いて優秀の技術を示し、累進して師範を許されるに至つた。

女史は何れの花も得意ならざるはないが、特に清楚なる花において、全く他の追從を許さざるものがあるといふ。以つて女史の優雅なる人となりを知るべきであらう。

酒井幹子女史作

餘技としては琴、習字を好くす。

女史は大正十三年醫學士酒井一男氏に嫁し、現在醫院を開業しつゝある。酒井家は會津藩士にして、先代は戊辰の役に際し、大に活躍した人であるといふ。（東京市本鄉區眞砂町三八番地）

松月派古流華道教授
松香庵　逆井君子女史

女史は明治三十四年一月四日、東京本郷田町に生る。逆井金次郎氏の女である。

逆井家は千葉縣東葛飾郡川間村の出、現千葉縣會議員逆井貞八氏の分家である。

女史は淑徳高等女學校出身の才媛である。

大正五年より松月派古流家元磯庵盛花投入を同師について學び、同じく師範となつて子弟を教導してゐる。何れの方面に對しても、技倆拔群の稱があり、同門中の才媛として嘱望さる。

逆井君子女史

尚眞流生花教授
松月庵盛花投入教授
一柳齋　高橋秀園女史

女史は明治三十二年五月十日、東京本所千歳町に生る。千野家に生れ、俗名を喜代といふ。後、高橋家に嫁す。

女史は武田女塾を卒業、大正六年より尚眞流家元山岸福仙先生について、華道の門に入り、精勵して同十二年師範職となる。又、松月庵盛花投入を同師について學び、同じく師範となつて子弟を教導し技倆拔群の稱があり、同門中の才媛として嘱望さる。

高橋秀園女史

又、同六年より角能裁縫女塾を自ら創設し、現に教を乞ふもの五十餘名に達し、華道と相俟つて頗る繁榮す。

餘技として宗偏流の茶道、山田流の箏曲を好くす。

夫君喜重氏は官吏、一女郁子嬢があり、圓滿なる家庭である。

（東京市外巢鴨町二ノ一一番地）

前一枝先生の門に入り、初めて華道に入る。入門以來研究を怠らず、次第に技倆を高め、同門中の閨秀として内外に知られるに至つた。

性來温厚の資、聰明の質容姿また人に優れ、才色兼ね具はる淑女で、長唄に頗る堪能である。

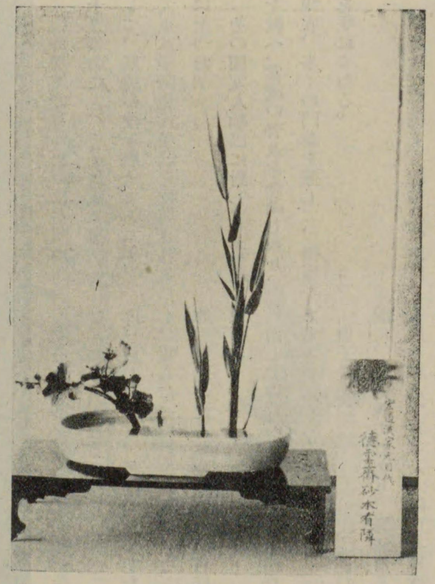
父君金次郎氏は、早く東京に出で商業に從ひ、精勵よく努め、今や多大の財を擁して、女史を始め兄姉三人と現住地に隱棲して、幸福なる生活を營みつゝある。（東京市小石川區表町八九番地）

宏道流華道教授
德雲齋　砂本有隣氏

現代華道家列傳　砂本有隣氏

德雲齋氏本名は砂本洋吉と稱し明治九年五月二十一日、廣島縣佐伯郡巳斐町にその第一聲を擧げた。

幼より風流の道を好み、特に花道に對して異常の執着を持つてゐた、弱冠十八歳にして遂に意を決して、常時同地方に於て隆々の盛名を馳せた廣島市松雲齋師の門に入り、爾來唱勉十有餘年つぶさに斯道の祕奥を極はめ、大正元年奥傳を許され、家元目代職となつて以來今日まで一日の如く、流派の開發と子弟の誘導に鋭意努力し、年未だ五十五、さことに洋々たる前途を持つものといふべきである。（廣島縣佐伯郡巳斐町）



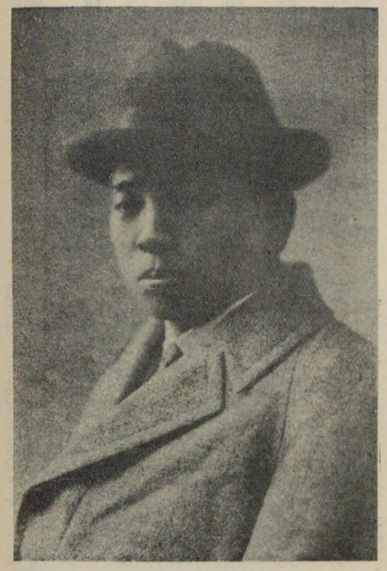
砂本有隣氏作

氏資性純朴にして圭角なく、子弟を導くや常に懇切を極はめるので、一度び氏の溫容に接した者は長くその德を慕ふて忘れないと、

◎

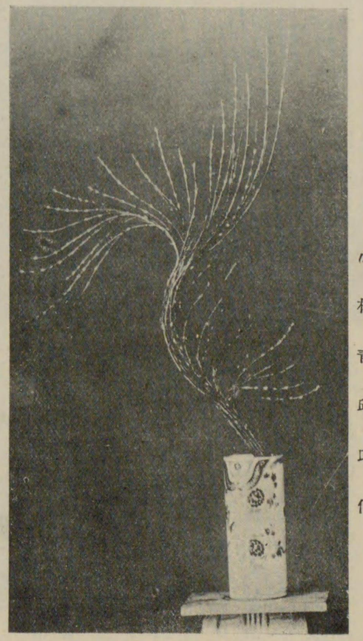
菊の香の人に殘るや後の月　昇角
若かへる菊のためしや十三夜　鼈太
白雲は遠いものなり菊の上　乙二

三先流花道教授
裏千家流茶道教授
金爾齋 小林靑邱氏



小林靑邱氏

氏は幼時より花卉草木を好愛してゐたが、明治四十四年若冠にして大阪に出で、北野の地を相して盆栽業に從事した。が工業の發展は駸々として、郊外地にも及び、良木名草の枯死するもの續出するを以つて、經營四年にしてこれを斷念し、後、造幣局に職を奉じ、その餘暇を以つて、好む處の園藝および茶華の道に親しみつゝある。



小林靑邱氏作

四三〇

氏が華道に入つたのは、明治四十五年のこと、三先流家元直門として、斯道の技を磨くこと八年、大正八年師範代免狀を授與されるに至つた。

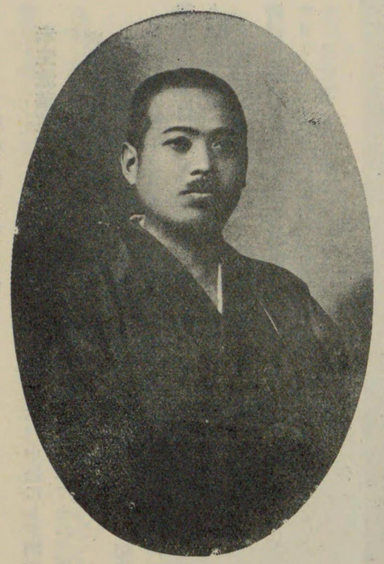
その間友人知己に對して、華道を教へ、當流の普及を企圖し來り、現在、多くの門葉を擁して、指導を垂れてゐる。

なほ氏は奉職する造幣局の構內樹木の栽培、或は局內を參觀する貴顯名士に茶を饗し、又は花を生けてこれを慰むるの傍ら、每週二回局員の有志に、茶道の教授をなし、更らに一般社中の養成に從ふ等、斯道のために寧日なきの有樣である。

而して得意の花は柳の添分けであるといふ。

信子夫人(明治三十八年生)との間に、一男輝夫君あり、圓滿なる家庭を結んでゐる。(大阪市北區造幣局官舍第七號)

古保禮古流華道教授
家元顧問
一源齋 伊藤景月氏



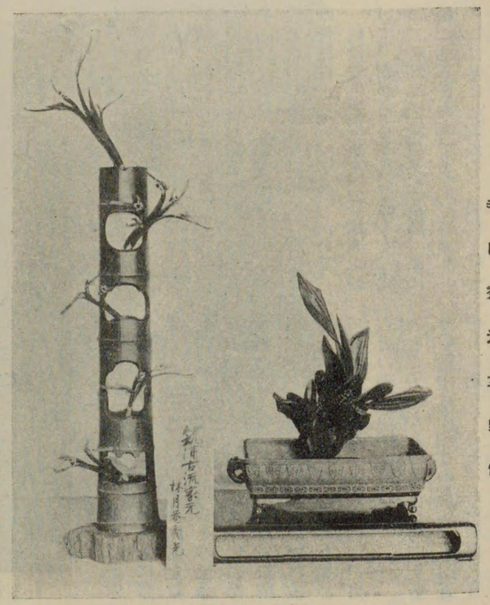
伊藤景月氏

氏はかつて、大正十年十一月都新聞社主催華道十傑投票において第六位に當選したことあり、現に都木和會々員である。昭和三年大禮博覽會に挿花を出陳し、各流師範の投票の結果、技倆優秀と認められ、賞牌を受けた。現在社中五十名以上に達してゐる。

餘技として園碁、音樂、和泉流狂言を嗜みいづれも堪能である。

(東京市麻布區市兵衛町二ノ八四)

筑浦古流華道家元
表千家茶道教授
山田流琴曲教授
林月庵 寺田秀光女史



寺田秀光女史作

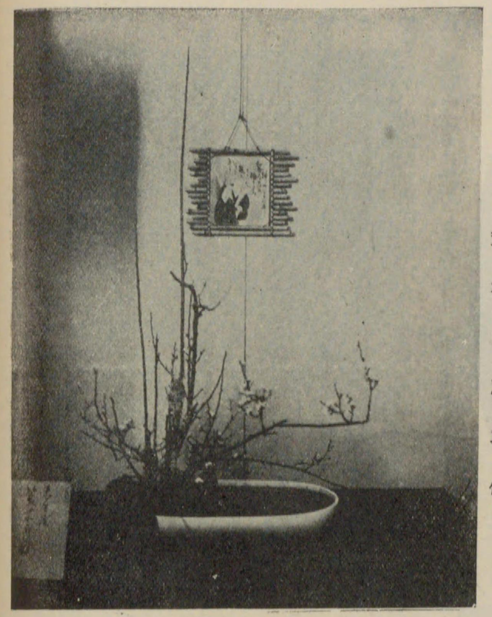
女史は明治六年十一月二十日、茨城縣土浦町に生る。本名を梅子といふ。

女史は幼少より華道に趣味を持ち、遠州流、池坊、古流等の各派を研修すること多年、造詣する處頗る深く、自ら獨特の境地を拓き、約三十年前の明治三十七年、筑浦古流家元を樹立するに至つた。爾來、今日まで子弟を導き、當流の普及に努め來つた。

又表一家茶道に精しく、山田流琴曲に長じ、何れも師範たり。

(東京市下谷區中根岸四六番地)

未生流華道宗家
廣誠齋 荒木白鳳氏



荒木白鳳氏作

氏は明治九年十二月九日、兵庫縣下西之宮町に生る。本名を幸吉といふ。

氏は三代廣誠齋であつて、初代廣誠齋源甫は二代未生齋氏の高弟たりし人、二代は氏の實兄がこれを繼承したが、中途にして物故したので、氏は推されてその三代を繼ぐに至つたものである。

氏は華道に入つたのは、初代源甫翁の高弟廣松齋に師事したのが初めであつた。居ること多年、後未生流家元六代家元について、その蘊奥を極はめたのであるが、技術眞に拔群、當時、流内において、氏の右に出づるものなしといはれたものである。そして、家元の補佐役となり、斯道のために盡す。

かくて、明治三十七年、三代廣誠齋を襲名して貢獻する處多く、大正四年隱棲の意を固めて、これを四代に讓ることとなつたが、四代未だ若年の故を以つて、現にその後見役として、努めつゝある。

氏は資性溫厚篤實なる反面において、謂ゆる名人肌の處あり、從つて名利に恬淡超然たる處、眞に稀に見る人格者である。

氏は常に超流派的に諸流を統一したる完全なる研究機關を作り、斯道の向上發展と家庭教育の振作を高唱をなしつゝある。曩きに諸流よりなる精華會なる團體を設け、その會長として、自らその使命實現のために努力し、又昨秋の御大典を機として、靜和會なる新研究機關を新設、一切の階級を打破したる團體とし、その作品を集めて『靜和の園』なる畫集を發刊、自らその編纂の任に當頭す。

とよ子夫人との間に三男四女あり、社中は師範代のみにても、五十名に達してゐる。(兵庫縣西之宮市安井)

荒木白鳳氏

池坊龍生派華道教授
青榮園 淺野とよ女史

女史は明治三十八年七月十五日千葉縣山武郡上境村尾形に生る。

父君淺野新太郎氏は既に歿し、母堂いろ子刀自、古稀にして頗る頑健である。

家は代々農事に從ひ、家柄正しく、母堂家にありて家業にいそしみ、長兄は朝鮮平安北道定洲郡海山警察部長を奉職し、前途有爲の官吏である。

女史の父君は、農家に人と爲つたが、風雅の道に精しく、遠州流華道を好くしたので、女史もその感化を受け、幼にして斯道に興味を寄せるに至つた。而して、大正十二年七月一日上京、東京和服裁縫組合の正藤正代女史につき、裁業、技術の優秀と研究の熱心とをて卒業した。

淺野とよ女史

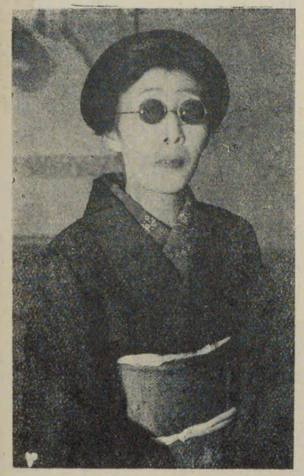
昭和二年三月より豐秋軒戸田內先生について、池坊龍生派を修タその懇切なる指導を受けてゐるのであるから、その進境も一段と著しく、刮目に價するものがある縫および花道を研究すること三ケ年、同十五年七月一日優等を以つて、將來を最も期待されてゐる。加之、現に師の宅に寄寓し日のである。(東京市小石川區宮下町六九番地戸田內方)

正風遠州流華道教授
遠州流華道會幹事
貞壽齋 渡邊一靜女史

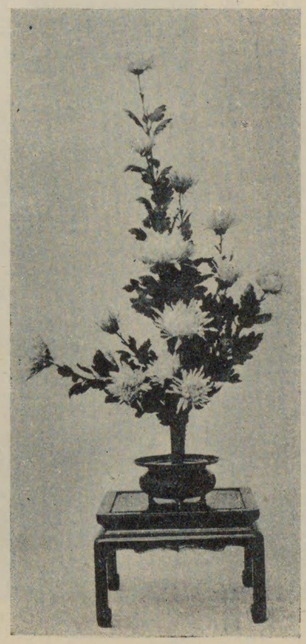
女史は明治十七年五月廿七日、京都市二條新町に生まる。本名を勢以子と云ふ。

明治廿七年、正風遠州流の門に入り華道を修め、一家を成したが、或る事情のため獨立の志を立て、大正二年現在の家元盧田一馬師の門に入り、その奥儀を極め、專ら茶道華道教授として立つに至つた。

大正二年京都私立女子美術學校の囑託となり、茶花の教授をなし、その後大正九年上京現在の住所にて、府下荏原女學校花茶裁縫教授を擔當し、目下大日本遠州流華道會の幹事として流派の振興に努力しつゝある。社中は學校以外において百五十名に達してゐる。（東京府下大井町元芝六八五）



渡邊一靜女史



渡邊一靜女史作

女史は會席の花は目立つものを好み、獨樂の花は一枝一葉を好むと云つてゐる。

◎
雨の中見通す菊の畠かな　春路
けふくは九曜の星か菊の花　正章
閨さに哀れも見ゆれ菊の雨　栗堂

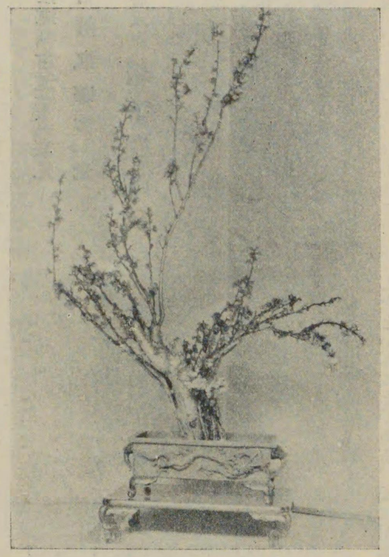
古遠州流華道師範
慶月庵 高橋一孝女史

女史は明治四年四月、東京府下に生る。本名をワカ子といひ、高橋大治郎氏の女である。

女史は夙に華道の研究に入り、ある。

古遠州流春月庵岡森一喜先生について研究すること多年、明治四十二年十二月奥傳を許され、大正元年以來教授職として、多數の門人を養成す。

得意の花は桃（控へ流し）菊等で



高橋一孝女史作

家庭は夫君松五郎氏との二人、琴瑟相和す。（東京市麻布區北新門前町二番地）

◎
草も木もふりまがへたる雪もよに春待つ梅の花の香ぞする　（源通具）
◎
しら雲の絕間になびく青柳の葛城山に春風ぞ吹く　（藤原雅經）
◎
花の色にあまきる霞たち迷ひ空さへ匂ふ山櫻かな　（藤原長家）
◎
またや見む交野のみ野のさくら狩花の雪散る春の曙　（藤原俊成）
◎
山深み杉のむらだち見えぬまでをのへの風に花の散るかな　（源經信）
◎
木の下の苔のみどりもわかぬまで八重散りしける山櫻かな　（藤原師頼）
◎
逢坂や梢の花を吹くからに嵐ぞかすむ關の杉むら　（宮内卿）
◎
みよし野の高峰の櫻ちりにけり嵐もしろき春のあけぼの　（後鳥羽天皇）
◎
山たかみ峯の嵐に散る花の月にあまぎるあけがたの空　（二條院讃岐）
◎
花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ降る　（式子内親王）

櫻遠州古流華道家元
自然瓶華家元
蘆水庵 坂下空晴氏

坂下空晴氏作

氏は本名庄太夫、明治四年一月九日、福井縣今立郡國高村村國に生れた。與三五郎氏の長男である。父君は農を業としたが、風雅の道を愛し、特に俳諧を好んで名を成した。

そもそも、當流の初代家元は越前の人、正昌庵東洋と號し、在來遠州流の手法に對し、別に感悟する處あり、獨創的手法を案出して、新に一派を樹て、今より二十年前、國高村に歿した。二世は庭正齋都照であつた。

氏はこの初代家元について、十有餘年研究を重ねたが、その熱心と加ふるに氏の天賦の才能とは、儕輩を抽いてゐたので、師東洋先生もその指導には、特に力をつくしたといふことである。氏は明治三十九年上京後も、引續き斯道に精進してゐたが、大正元年東京市中多數あり、研究團體快交社を設け、斯道の研究を重ね、精進一日も怠らずといふ。

又氏は幼時より、父の感化を受けて俳諧を好み、和歌を詠ず。更らに庭造りも得意であつて、これがため自然瓶華を創始するの機縁となつたのである。

茶道は裏千家、謠曲は觀世流を修業し、何れもその奥堂に達してゐる。

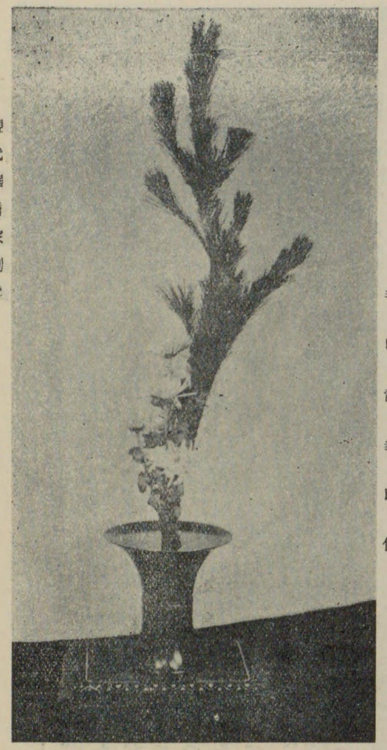
外龜戸において、初めて子弟を取つて教導することになり、同九年現在の巢鴨に花庵を移した。その年二世家元の懇望により三世家元を襲ふに至つたのである。現在社

春　若草や蹄の光る御所の馬
夏　土用干竿に錦の花ぞろひ
秋　新米や神の鏡にうつる光澤
冬　初馬の男子祝や年忘れ

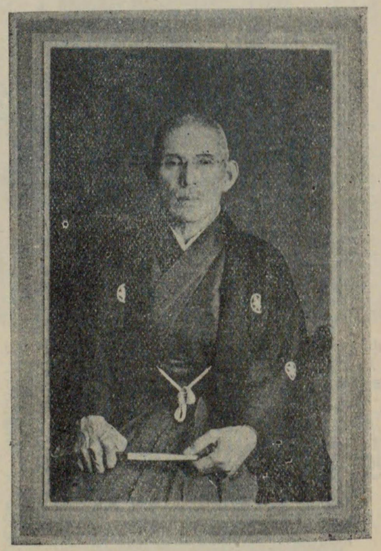
以上は氏が餘技としての俳句である。以つてその凡手ならざるを思ふべきである。

なほ氏の得意の花は、古木、或は竹であることを逸してはならない。

家業は生花花器商を兼ね、家庭には夫人久子の外、三女英子嬢（大正五年生）三男松男君（同七年生）等がゐる。（東京市外巢鴨町宮仲二七七八番地）



正風池坊華道家元
蕉窓園 寺尾靜華氏



寺尾靜華氏

氏は靜岡縣志田郡燒津町の人、明治二年を以つて生る。俗名を貢吉といふ。松右衞門氏の男である。

氏は三歳にして父母に別れ、十三歳まで叔父の手許において養育され、十四歳にして上京、後、履物商を營んだ。

明治二十七年初めて、池坊大八木如峰の門に入り、後累進して大八木派總目代職となつた。この間氏は池坊龍生派その他多くの流派について研究を積み、大に悟入する處があつた。そして、大正十年十月獨自の見地に立つて、正風池坊を創始し、その宗家として起つに至つたものである。

正風池坊を創始するについて、氏の手記する主張を錄せば次の如くである。

『私の首唱する正風池坊華道は多年の研究により感ずる所があつて創設しましたので、一般に華道の大本が忘れられ、其精華が發揮されぬのに鑑み、正しき風を興したい理想から、名實相伴ふ樣に奮ひ起つた次第であります。つらつら華道最近の趨勢を觀じますと、あやまれる因襲に囚はれて雅致を缺き、又は天然の姿に悖つて氣品に乏しいのは、比々として殆ど然らざるなしといふべきほどの有樣であります。これは、世人が單に花を弄ぶといふ如き、輕浮な考から、徒に末節にのみ走つて、本來の眞意を顧みないためだと思ひます。卽ち花を活ける本旨は美しくも凜たる容をあらはさうとするのであり、又これを賞翫するといふのは、愛すべく親しむべき氣品を慕ふからであります。これを吾々の身にたとへれば、一方には立派な人格を備へて、俯仰天地にはぢない意氣を示し、一方には敬重すべき風尙を蓄へ、人をして懷しい感を抱かせることになりま

す。かくありてこそ、始めて華道としては眞美の面目が立ち、人としては、自然に修養の道が開かれることと信じますから、私はどこまでも、此主張の下に人の心と花の態と相合するやう更に茶道の手ぶりをも加へて、斯道の振興を圖りたいと期してゐます』その綱領次の如し。

一、禮は和を以て貴しとなし厚きに過ぎ薄きに失すべからず。

一、先後の序を愼み、人の短を誘り、己が長を說くべからず。

一、正しき心、氣高き姿を以て技に臨むべし。

一、己が心と花の態と通ひて活きたる氣分に滿る樣努むべし。

一、服裝は心の表なり。華なるを去りて、實なるに就くべし。

氏は裏千家茶道の師範であり、且つ俳諧の道にも暗からず。

萬歲の聲や九重のあなたより

常盤木にそふて氣高き黃菊哉

夫人との間に長子六太郎氏あり貴金屬裝身具商を經營、傭人二十餘名ありて、頗る盛大である。(東京市本所區綠町三ノ三〇)

古流實派華道教授 同家元名譽顧問 松耀齋 鈴木理觀氏

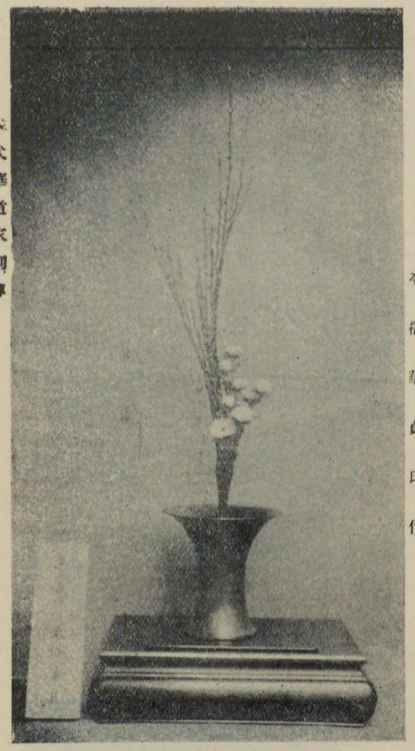
鈴木理觀氏作

氏の父君は園藝家として、花卉盆栽を營み、終生草花と共に生きた人であつた。渡邊、牟田口家の農園を初めとして、後には東伏見宮家の一切の園藝を委ねられ、宮殿下からは一入の御寵愛を蒙り、父君もそれに報いるべく熱心に園藝のためにつくしたのであつた。

理觀氏は、その當時東伏見宮邸内において生れたのである。園藝家の子として生れた氏は、自然それに親しむの機會多く、いつか花を好むようになり、大正二年小學卒業と同時に、自ら花の道に入ることとなつた。

鈴木理觀氏

即ち現花耀會々長石塚理耀師の門に入り、內弟子として、研鑽をつむこと五年の後、古流家元より師範の免許を受け、引續き研究の結果大正九年廿二歲にして師範代の許しを得て初めて師匠となつた。其後理耀師が花耀會を組織するに及び、會頭より補佐に任ぜられたが、昭和三年五月、創立當時の功により更に最高の職役たる名譽顧問に擧げられ、今日に至る。(東京市赤阪區中ノ町二四番地)



本橋華貞氏作

正風池坊華道顧問 三節園 本橋華貞氏

氏は明治十年二月二十四日、水戸市下市水門町に生る。水戸藩士本橋貞氏の男である。俗名を壽といふ。

氏は明治二十三年十三歲にして上京、後遞信省官房文書課に職を奉じ、勤續實に三十一年、功によつて從七位勳八等を賜つた。

氏は幼少より華道を好み、九歲にして遠州流の門に入つたが、その熱心なるの餘り、しばしば母堂より叱責を受けた程であつたといふ。長じて公務につくや、自ら研究に從ひ、大正四年正風池坊蕉窓園寺尾靜華先生の技風を慕つて入門、爾來その風格の高則、技術の秀拔とを以つて師の拔擢を受け、大正十年十月教授職となり、同時に總華督となつた。更らに同十五年春家元顧問として、當流のため盡す處頗る多く、現に社中多數を擁して、斯道の振興に寄與してゐる。

資性溫厚にして仁俠、大震災の當時社中の罹災者を慰問するに席暖る暇なく、更らに大正十三年四月、罹災物故社中三名のために、盛大なる供養を營む等、尋常人の企圖し得ざる處を行ふた。以つて氏の人と爲りを窺知し得やう。

氏の得意の花は、師靜華氏の手法を傳へて木物である。

本橋華貞氏

松島にて

石室や三千坊の夢のあと

以上何れも氏の近業である。以つて氏の斯道における蘊蓄と練達とを察すべきである。

家庭は豐子夫人(明治十年生)との間に長男鐵親氏(明治三十八年生、機械商)長女文子(明治四十三年生、靜修女學校在學)二男正修君(大正元年生、豐山中學在學)の二男一女がある。(東京市外高田雜司ケ谷金山三三九番地)

池坊華道教授
松月庵盛花投入教授家元
宗偏流茶道教授
盛花園　松岡秀芳女史

女史は高知縣の士族にして本名は君壽。倉知如蘭先生に師事して池坊華道を研修し各階級を經て總華督の最高職役にあり、盛花投入は一派を創始して松月庵流を稱ふ。花號は松月庵可專である。その他茶道は宗偏流にして羽白庵宗英、香道は志野流にして松月庵默壽の號あり共に編著を披瀝して教授せられ門葉頗る多く盛大である。

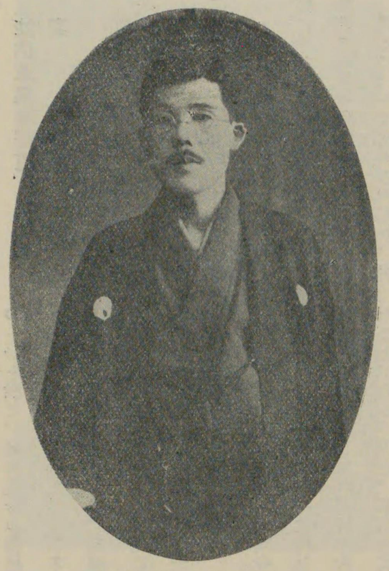
（東京市外西巢鴨町向原三四三九番地）

松岡秀芳女史作

松岡秀芳女史

◎

女夫して住持醉はしぬ花に鐘　几董
花笠をきせて似合む人は誰　其角
山門に花物々し木のふとり　一桐
二の膳やさくら吹込む鯛の鼻　子珊
酒部屋に琴の音せよ窓の花　惟然
彙好も薙織けり花さかり　嵐雪



宮本弘氏

正風遠山流瓶花盛花家元
里櫻　宮本弘氏

氏は明治十九年八月五日、大阪市高麗橋三丁目に生る。正風遠山流先代十一世家元里櫻宮本忠鄕氏の男であり、關西華道界の逸材である。

氏は大阪府立第五中學校の出身今より二十年前、父翁が隱士となつて隱退するや、氏はその跡を繼ぎ、十二世家元として、現在に至つた。父君は隱士なると共に、吳堂と號し、風流三昧の餘生を樂しんでゐたが、大正六年大阪において易簀した。

氏は、夙に父君について、雅道の蘊奧を極はめ、當流の普及振興に力をいたしたのは勿論、かつて神戸家政女學校に教鞭を執り、大に斯道の普及を圖り、後辭して現在は、蘆屋の昭和婦人會に、教授として、その深き造詣を傾けてゐるのである。

氏は、毎月一回家元自宅を研究所として盛花瓶花研究會を催し、主として奥傳者および師範者を集めて、只管門下の技術練磨に盡しつゝある。

宮本弘氏作

又、夙に大阪諸流團體、花友會の幹事として、斯界全般のために盡す處尠からず、特にその生新な意氣と、堅實なる思想人格とは、一般の敬仰する處となり、斯界に隆々たる威望を有してゐる。

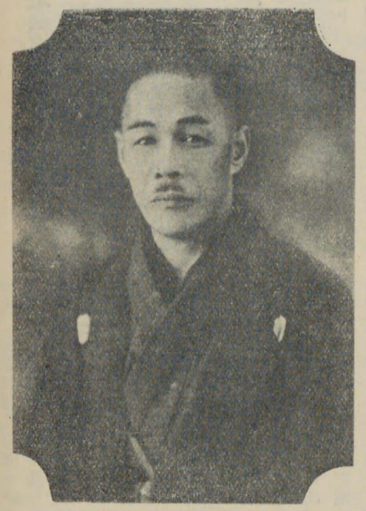
茶道は表千家を極はめ、餘技としては常盤津、歌澤、謠曲、日本舞等を好くするといふ。以つて氏の多才の程を窺ふに足るものがあらう。

夫人は本名をすえ子といひ、號して里晴齋といふ。斯流の名手として知られ、夫君を援けると共に、餘技として三絃、常盤津、清元等に堪能である。

巨萬の資を擁し、夫妻相携へて雅道に精進す、また健羨すべき境地である。（大阪市西成區南神合町五八番地、電話茨一一〇七番）

池坊玉集派華道家元

玉集庵 渡邊華舟氏



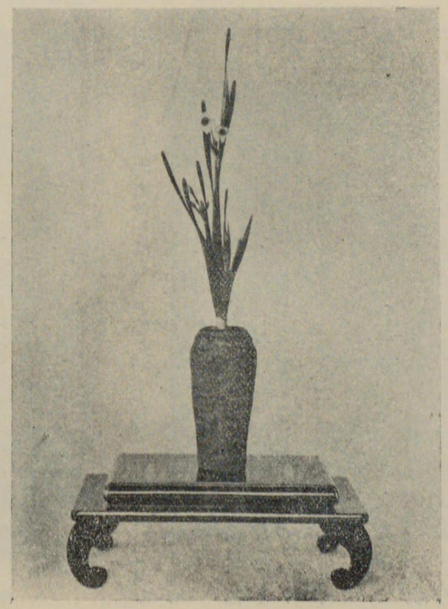
渡邊華舟氏

氏は明治十年十二月十一日東京京橋區南鞘町に生まる。本名を義八といふ。華道は初め池坊を柴田師につきて修め、後池坊龍生派星野氏に學び。教授職となる。

然るに、氏は感ずる所あり、明治四十四年九月、別に玉集派池坊の一派を樹て、爾來流派の發展に努力し、今日に至つたのである。

玉集派の特色とする所は、前副をなすことであつて、この前副は池坊の傍流中にあつても、氏の先鞭をつけたものであると云ふ。

氏は曾て、奠都五十年祝賀會に際し、式場便殿御座所に生花を奉献し、斯道家としての面目を施したことがある。現在、華道清賞會同人として、大小花會には進んで出瓶し、斯界に重きをなしてゐる。



渡邊華舟氏作

四四二

氏が今日まで養成し來つた子弟數百人に達し、現在社中百名に垂んとしてゐる。現に埼玉縣岩槻町の自宅において教授する外東京京橋松屋町に出張所を有し、熱心に子弟の養成に努力してゐる。

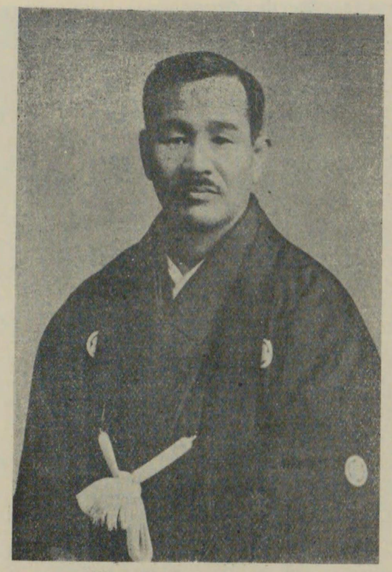
氏は又生花の外、表千家茶道を極め現に華道と共に教授してゐる。

家庭はテル子夫人との間に一男一女あり、極めて平和である。

（埼玉縣南埼玉郡岩槻町字太田二〇九）

明松遠州流華道家元
明正古流華道家元
表千家茶道教授

翁松齋 麻野一叟氏



麻野一叟氏

一叟氏本名は市助、西南の戰雲暗き明治十年足利市通四丁目に生る、幼より生花を好み、年十五にして早くも華道に志し、當時に名聲を馳せた松登遠州流家元四世松輝齋一登師に師事して研讃を積み、明治二十九年雅號を得て教授職となる、一面また二十八年より、表千家茶道三代目一指亭川上仙渓宗壽の直傳、二尊庵將聖師に師事して茶道を修め、四十五年二松庵朝聖の號と共に教授の免許を受けた大正元年華道に於て一派を樹て、明正古流と呼び、現在では自宅教授の外、足利市實踐女學校、足利郡御尉裁縫女學校に教鞭をとつてゐる。

得意とする處は萬年青。

（足利市通四丁目）

古流實派生花教授
花燿會委員

松耀齋 高橋理清氏

高橋理清氏作

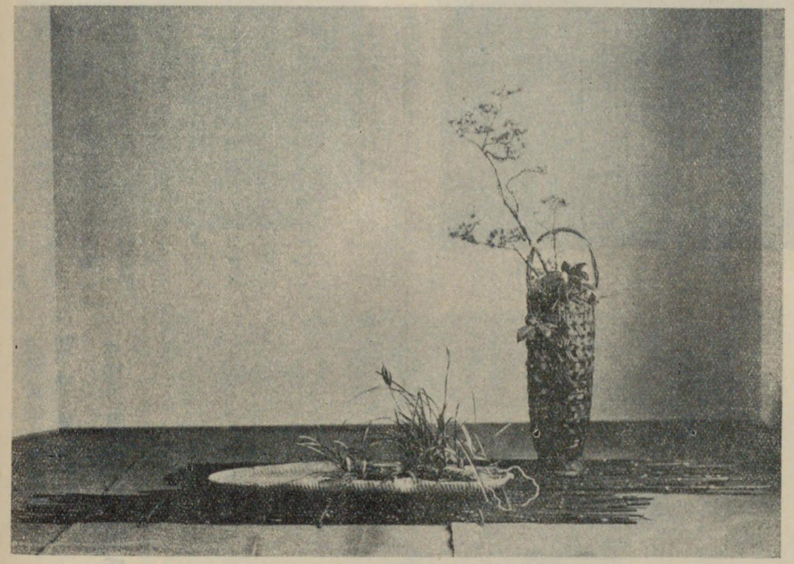
氏は本名清次、明治四十一年十二月十五日東京市外三河島町に生る、大正十年三河島峽田小學校を、同十三年東京陶工學校電氣部を卒

弘洲風盛瓶花教授
交友會幹事
石原肱洲氏

氏は明治二十七年十一月十一日愛媛縣喜多郡大洲町に生る。大洲中學を卒へ、大阪齒科醫學校を卒業、現に三善尋常高等小學校に教鞭を執る。

氏は大正八年、辻井弘洲先生の門に入つて、弘洲風盛瓶花を學び、翌九年秋師範を許さる。氏は幼時から、花卉に對して趣味あり、その遊學當時においては、植物研究をなし、自然花道に對しても、趣味を抱くに至つたのである。

かくて、氏は當時大阪未生流の大家にして、且つ弘洲風盛瓶花家元たる辻井先生と相知るの機會を得、更らにその技風人格を慕ひ、その門に學んだものである。爾來鄉里大洲町に辻井先生を聘して、當流の普及に努力し、今や當流の重鎭として、多大の輿望を得てゐるのである。



石原肱洲氏作

かつては、大洲町婦人會の教師となつて、斯道を普及し、現に女子青年會に於て講師の任にある。渡邊長洲氏と相並んで、大洲町花道開拓の功勞者であり、特に當流の普及に盡瘁する頗る大である。

この外、交友會幹事として、當流家元を補佐してゐる。

別に趣味として、有樂流茶道を修め、その奥堂に達すといふ。この外植物學の造詣最も深し。(愛媛縣喜多郡大洲町中町一丁目)

坂田秋朋氏

東山新流花道師範
石州流茶道教授
細川流盆石師範
觀世流謠曲師範
鶴清齋 坂田秋朋氏

氏は、明治十三年二月二十四日大阪市東區南久寶寺町五丁目、坂田九兵衞氏の長男として生る。本名を清次郎と云ひ、代々家系連綿として續く舊家である。氏は別に風流の外に、裁縫の名手、その教授をしてゐる。

氏は少年の頃からよく風流の道を解し、殊に花道に至つては、非凡の才を持つてゐた。卽ち明治二十八年から、初代東山新流家元菅生鶴照齋宗匠の門に入り、年僅かに十九歲にして旣に齋號を許されるに至る。以來、氏の精進と共に技又日を追ふて進み、明治三十四年四月には、准會司、續いて翌年會司としての要位に進んだ。

斯くの如く、全くその蘊奥を究めて、後は、廣く諸地方に遊び、又遠く滿鮮地方にも及んで一面當流の發展に盡瘁し、明治四十二年四月には家元より、特に朝鮮總師範代としての、重要位に推擧された。その後、大正二年十二月には總師範に昇り、同十四年七月には遂に副總理となつて、家元門葉中の最高幹部となつた。

氏は又茶道も早くから學び、明治三十年より遠州公小堀宗舟先生に就き、遠州流茶道修めること數年、更に引續いて現東山新流花道家元菅生鶴照齋宗匠に就き、石州流の蘊奥をも究めた。

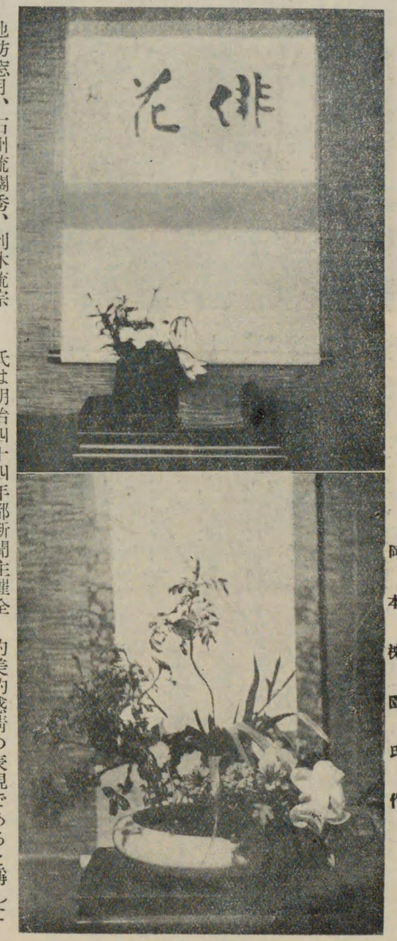
又、細川流盆石をも修めて、現に師範であり、同時に觀世流謠曲の指南をもしてゐる。その他盆栽、繪畫等の方面にも傑出し、頗る多能である。

尙、夫人里子との間に、二男あり、夫人亦よく氏を援けて、家門日に榮へてゐる。(大阪市東區南久寶寺町五丁目十五番地)

千家三齋流家元隱師
岡本槐園氏

岡本槐園氏

氏は千葉縣里見家の出にして東京四谷仲町に生まる、本名を忠といふ。普通學を卒へたる後は小林正道先生重野安繹先生に就きて專ら漢國學を習修した。華道は千家三齋派の中興である。同流は千利休の子少庵の相弟子たる細川三齋より出でたる古い歷史を持つて居るが慶應年間に歿した宗以と共に其後を絕つたのである。孫の氏は其傳書を探究し傍ら石州流關里、池坊窓月、石州流關秀、利休流宗月、遠州流一芝、古流理君、眞道流松向齋の諸氏に師事して所謂八宗を研學し時勢に適應したる花型を偏出して當流を興し柳含堂宗笑の花號にて多年斯道の隆興と向上に盡瘁したるは人の知る所である。當時小笠原伯爵家をはじめ幾多の權門に招聘せられたるを以ても其人格の高潔其花技の卓越したるか窺知されるのである。



岡本槐園氏作

氏は明治四十四年都新聞主催全國華道十傑投票に當り褒狀を、大正三年大正博覽會に出陳して東京府知事久保田政周氏より感謝狀を受けた。

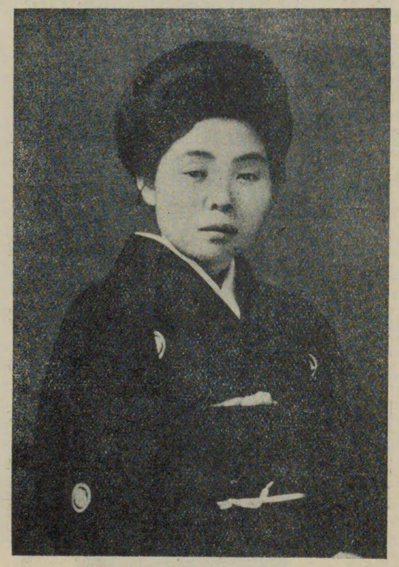
氏はまた漢詩俳句に造詣あり、華道に於ても『俳花』と稱する一種の手法を案出した、卽ち俳句の簡にして餘情の溢るゝものあるが如く、一花一葉にても其花枝の美を美的良心の命ずる所によりて挿し自他共に其妙締を味ふものにて、器の如きビール壜可なり白粉壜古土瓶等何でも用に足るので、平民的美的感情の表現であると稱して居る。

氏は大正十五年二月病氣の爲家元として其任務を遂行するに支障を生じたるを以て門下と協議し、高弟柳汲庵宗瀧田大氏に家元を讓り、同年二月十一日隱退の披露生花會を盛大に開催した、爾來隱師として靜養の傍悠々自適華道盆景を唯一の友として餘生を送つて居る。

盆景は清原御流である。

一子光雄氏あり孝養の譽が高い（東京市外荏原町上蛇窪九十四）

柴山古流生花教授
緣山流投入盛花教授
松芳庵
町永宗淑女史



町永宗淑女史

女史名は駒子、明治十九年二月十五日、大阪市に生る。大阪市寺尾女學校の出身である。

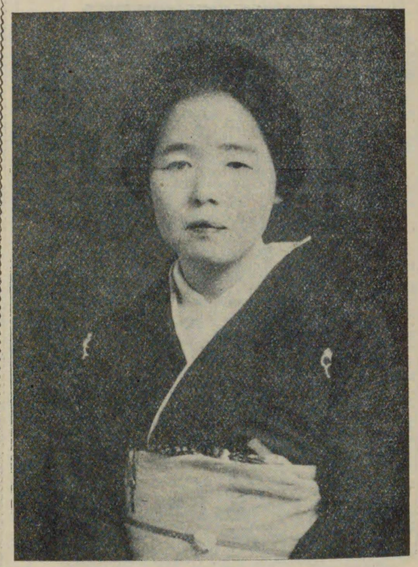
學校卒業後、直ちに花道の研究に從事したが、その嫁してよりは、家事に追はれて一時中絕した。が、三男をもうけてより、再び斯道に專念し、更らに長女出生してより、一層努力を拂ふに至つた。

不幸震災直前主人を失つたが、女史の斯道に熱心なる柴山古流家元根津先生の信認加はり、間もなく師範に推擧され、花道教授となつた。現在では同流副總會頭の要職にあり、專ら斯道の普及と研究に、沒頭してゐる。

女史が最も好む處の花は、葉らんと水仙である。

家庭では三男一女の慈母としてその教養に專念してゐる。（東京市外澁谷町向山一〇二番地）

柴山古流生花教授
緣山流投入盛花教授
松泉庵
畠山宗吟女史



畠山宗吟女史

女史は千葉縣東葛飾郡舟橋町の人、明治二十二年三月七日を以つて生る。名はてい子。女學校を卒へ、後、日本女子大學に學び、これを卒業す。

女史は學業を終り、家政補助時代に、古流の花術を究め、後家庭に入つて地方に住ふや、寸暇を利用して、未生流を學ぶ。その後再び止京するに及び、佳月古流を修業し、師範の免許を受く。後、柴山古流の流風を慕ふて入門、技術群を抽んで、總會頭職に就任、別に緣山流投入盛花をも研究し、現に孜々として、研鑽の一路を邁進しつゝある。特に投入盛花については、趣味と自信を持つてゐる。

餘技としては手藝、家庭は主人との二人、伉儷相和す。（東京府荏原郡玉川村奧澤六三二番地）

柴山古流 生花教授
綠山流投入盛花教授
松操庵　**渡　宗陽女史**

女史は本名あさの、鳥取縣東伯郡赤崎町の人。明治二十四年十二月二十日生れである。

明治三十九年郷里の小學校を卒業、直ちに神戸市に出で、市立湊東女學校に入學、同四十三年三月卒業す。以後、郷里に歸つて、家庭教育の傍ら未生流生花を學ぶ。

渡　宗陽女史

上京後は、柴山古流家元根津宗悦先生について研究、女史の天稟と師の熱心なる教導と相俟つて、幾許ならず師範免許となり、更らに家元副總華務職に擧げられ、以つて今日に至る。又、柴山古流樂友會幹事として、同流開拓に盡す。

『花は美しいこと、清らかなもの〳〵代表として、物の譬にも第一に擧げられ、人間讃美の的になつてゐます。誰れしもこの美しい花を見て、腹を立てたり、怒つたりする人はありますまい。實際、どんな氣の鬱いでゐる時でも、花に向ひますと、心身共に清々しくなります』とは女史が花道禮讃の言葉である

（東京市外杉並町高圓寺三三七）

柴山古流 生花教授
綠山流投入盛花教授
松蔦庵　**杉山宗榮女史**

女史は本名たけ子。

その花道に入つたのは柴山古流家元根津氏に入門したのが初めで比較的新らしいのであるが、生來の才氣と異常なる熱心とは、兩三年にして、衆を抜き、早くも一家の風格を具ふるに至つた。今や多士濟々たる同流派内の技術家を以つて目せられ、最も尊重されてゐる。

杉山宗榮女史

しかも、日夜倦まず撓まず研究精進し、飽く處を知らず、日尚ほ淺しと雖も、同流派の聲價を揚ぐるに寄與する處、頗る大なるものがある。現在同流花目付職。

女史の得意とする處は、水盤ものであつて、就中、小品よりも大物を好しとする。その作品は何れも、一種の氣慨を表現して、雄大であり、同流内における最も異色ある作者の一人である。（東京市芝公園二十號地）

柴山古流 生花教授
綠山流投入盛花教授
松鶴庵　**菊池宗清女史**

女史は明治二十五年六月二日、靜岡縣駿東郡須山村に生る。本名を清子といふ。

郷里にあつて、女學校を卒業するや、直ちに上京し、裁縫その他一般の手藝を研修する處あり、何れもその道に通ずるに至る。

又、一方において、上京と共に宏道流生花を學び、更らに佳月古流を研究す。後柴山古流家元根津宗悦氏が、一派を樹立するや、これに參して、家元の知遇深く、間もなく同流家元總華務職に推され、今日に及ぶ。別に柴山古流樂友會幹事の職にある。目下自宅および千住に出張所を設け、專ら趣味として、教導に研究に勵精す。

菊池宗清女史

又、茶道は表千家の造詣深し。主人との間に一男二女あり、極めて圓滿な家庭である。（東京市外下大崎三二二番地）

柴山古流 生花教授
綠山流投入盛花教授
松榮庵　**内田宗惠女史**

女史は明治三十六年八月二十八日生れ、本名嶋枝子。

初め關西において未生流を學び後上京して、柴山古流の門に入り、生花並に盛花の技を學ぶ。天賦の才能と熱心なる研究とは、技日に進み、月に昇り、研學三星霜にして、家元華務職の要位を與へられ、現在に至つてゐる。しかも、研究心の旺盛なる、例月の研究會には、缺くる處なく出席して、新工夫を凝らすに孜々たるものがある。前途の洋々たる近藤宗翠女史と俱に同門中最も將來を嘱望されてゐる一人である。

内田宗惠女史

現代華道家列傳

現在家元華務職の外、柴山古流樂友會幹事の職にあり、當流の發展に寄與する處、頗る大なるものがあり。（東京市外澁谷町一〇二番地）

柴山古流生花教授
緣山流投入盛花教授
松勢庵　高松宗樂女史

女史は本名せき子、柴山古流の重鎭である。

女史は、現柴山古流家元根津宗悅氏が、まだ一派を創成せざる以前、卽ち佳月古流にあつて、研鑽に浚頭してゐる頃よりの、社中であつて、その當時既に奥傳の技倆を有してゐた。

高松宗樂女史

その後、宗悅氏が懷抱する既成花道に對する不滿の念が、漸く結成して、柴山古流創成となるや、直ちに同派の花目付職となり、よく家元を補佐して、創草の際における多難な時期に善處せしむるを得せしめた。現在は、同流副會頭職の要職にある。

得意は生花であつて、常に模範を以つて目せられる。作品何れも枯淡の趣があり、この點家元と最もよく似てゐる。(東京市本鄕區根津八重垣町)

柴山古流花道教授
緣山流投入盛花教授
松嶺庵　近藤宗翠女史

女史は明治四十二年七月十九日東京に生れ、本名を恒子といふ。

實踐女學校の出身、同流派内師範における最年少者である。しかも、流内において、最も優秀なる技術の持主として、推賞されてゐる。

女史は幼少より花道の事に志し實踐女學校在學時代より、柴山古流家元より師範の職を許されてゐたといふのであるから、年少にして流内に重きをなす偶然ならず。

加之、熱心なるその研究は、その技術日に進み、生花において、最も顯著なるものがあるとは、流内における定評である。

行く處として可ならざるなき女史が、最も好める花は、寂びのある花である。又、葉組ものにおいては特に光つてゐるといふ。

餘技として琴曲を好み、技入神。(東京市外澁谷町鉢山一番地)

近藤宗翠女史

柴山古流生花教授
緣山流投入盛花教授
松峰庵　赤津宗俊女史

女史は明治四十一年二月を以つて、茨城縣多賀郡平潟町に生れ現にその地にある。本名千代子。

水戸大成女學を卒業、學校時代より斯道を愛し、古流を研修する頗る熱心、技倆大に進む。

學校卒業後、直ちに東上し、令兄の宅に寄寓し、柴山古流師範町永宗淑先生の門に入り、大に研究を進めてゐたが、圖らずも令兄の物故に會し、後町永師の居に寄寓して、直接家元根津氏に就き、一層精進する處あつた。この功空しからず、幾何もなく師範を免許され、現在家元華務職に推され、併せて柴山古流樂友會の幹事に就任、日夜、斯道の研究を怠らない。

尙、女史は花道の外、裁縫の技に長じてゐると共に、手藝一般にも熟練してゐる。(茨城縣多賀郡平潟町三一七番地)

赤津宗俊女史

東山新流花道師範
石州流茶道教授
鶴嶋齋　菅生春子女史

女史は明治二十六年二月二十四日、大阪南區西清水町に生る。

女史は幼少の頃より、華道茶道に趣味を有し、夙に東山新流家元菅生鶴照齋宗匠の門に入り、專心研修する處あり、大正五年四月師範を免許された。が、なほその蘊奥を極むべく、孜々として研究を怠らず、毎月開催の研究會には、一回も缺かすことなく出席して、只管、技術の琢磨修練に潜心してゐる。

趣味としては、長唄、歌澤、謠曲等々。

夫君は菅生耕村氏といひ、竹内栖鳳門下の少壯畫家である。一男あり、大阪商業學校に在學す。(大阪市此花區上福島南二丁目二三三番地)

本派美笑流師範
美高軒 **高木一華女史**

女史は本名を君代といひ、東京府下北多摩郡狛江村豪農高木一平氏の二女として生る。

女史才學衆を抽んで、同村高等小學を優等にて卒業、更らに調布町實科女學校を卒へ、東京大妻女學校に入り、大正十三年優秀の成績にて同校を卒業す。

女史は十歳の頃より、華道の研究に志し、隣村の美梅軒先生の門に入りて、美笑流華道を研修、技大に進み、美梅軒師奥傳の巻を家元に傳達するに至つた。

爾來家庭の人として、一家の經營に專心するの傍ら、斯道にも精勵、昭和二年家元より師範免狀を贈られた。

その後、女史は花道普及の肝要なるを感じ、調布町學校補習科に、花道の教授を開始し、幾多の門下を養成したのであるが、後、現住所に轉じて、斯道のために精進しつゝある。

女史は單に技術の練磨のみならず、斯道の故事口傳を渉獵して、これに通ずること深く、しかも春秋に富み、最も未來ある人として、その大成を嘱望されてゐる。(靜岡縣田方郡小室村川奈川奈ゴルフリンクス内)

櫻遠州古流花道教授
自然瓶華家元師範
麗水庵 **民部和風女史**

民部和風女史

女史は本名をたけ子といふ。大正十三年三月以來、櫻遠州古流家元蘆水庵阪下空晴宗匠の直門として、斯道の研究に入る。

爾來、孜々として勉勵、昭和三年師範を許され、現に家元補佐職として、子弟の養成と當流の發展のため、夙夜努力してゐる。

なほ、當流の家元三世蘆水庵阪下空晴先生は、技術超凡、人格高潔、現に大日本花道國生會副幹事長の要職にあるが、女史もその感化を受けて、人格技術共に、人の推服する處となつてゐる。蓋し、當流の一柱石として重きを成す。

女史は別に、茶道に通じ、更らに謡曲、長唄、常盤津、三絃等何れも堪能であるといふ。(東京市外小松川町下平井一二九番地)

日本古流華道教授
松允齋 **松井一益女史**

女史は明治二十五年一月四日、東京市外武藏野村吉祥寺に生る。本名テツ子、庵號を光盛庵といふ。松井正次郎氏の二女である。

父君は吉祥寺の素封家であり、一面醬油釀造業を營み、資力德望の具備せる人である。且つ風流の趣味にも淺からざる理解ありといふ。現在では女史の長兄大吉氏に家業を讓り、大吉氏は村の名譽職等に推され、自治公共のために、盡瘁しつゝある。

女史は大正十五年より、日本古流宗家松梅齋角田一忠先生の直門となつて斯道に入り、爾來、研究熱心に努め、技術大に進み、累進して昭和三年十一月、皆傳となり師範を許されるに至つたのである。

現に同門中堅の一人として、當流のために力を致してゐる。

松井一益女史

松井一益女史

女史は茶道にも通じ、別に長唄、常盤津、端唄等の諸藝に堪能である。(東京市四谷區鹽町三丁目四四番地)

◎

山深み春ともしらぬ松の戸にたえだえかゝる雪の玉水　(式子内親王)

春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ　(大伴黒主)

日本古流華道教授
有樂流茶道教授
松樂齋 小林一鶴女史

女史は、明治三十四年三月十七日、山梨縣甲府市穴切町に生る。本名をつるゑ、茶號を曙光庵泉林といふ。

女史は高等小學を卒業、後、家庭にあつて、家事に從ふの傍ら、甲府市百石町松栗齋石原一遜先生の門に入り、日本古流華道を學び、

小林一鶴女史

累進して昭和二年七月皆傳を許され、師範職となつた。

又、茶道は有樂流を同じく石原先生について修業し、眞の臺子許しを受け、目下、一層修道に精勵してゐる。

得意の花は三才活けおよび投入花である。又裁縫に長ず。

蓋し、女史は當地における閨秀斯道家として、最も嘱望される一人である。(山梨縣甲府市穴切町二四五番地)

日本古流華道教授
松怵齋 渡邊一洗女史

女史は明治三十一年五月二十九日、北海道大黒町に生る。本名をきん子、庵號を心正庵といふ。故渡邊卯氏の長女である。

女史は京華高等女學校の出身、大正十二年四月日本古流家元角田一忠先生の門に入り、孜々研修の功を積んで、昭和二年三月皆傳となり、教授を許されるに至つた。

渡邊一洗女史作

次いで、昭和二年六月、家元補佐職となり、更らに同三年六月、累進して家元幹事の要職に推され今日に及んだ。

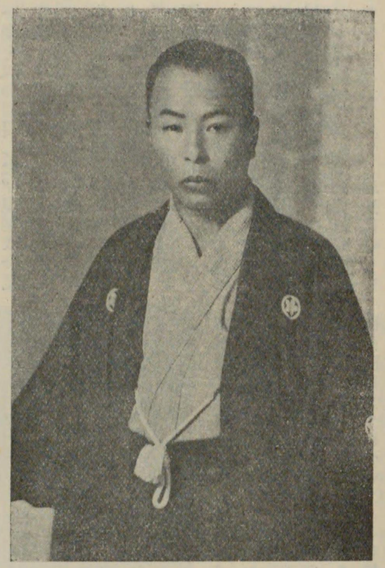
趣味としては三絃、山田流の琴を學び、頗る技に秀でゝゐる。

家庭は母堂春子刀自並に令妹との三人、平和なる團欒の裡に、雅道に精進してゐる。(東京市牛込區白銀町三三番地)

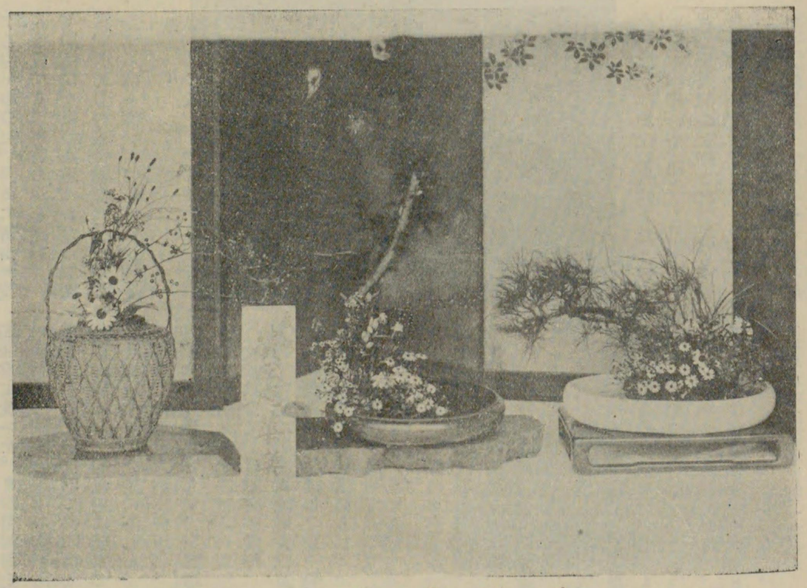
桂古流華道教授
桂流投入盛花教授
寶松庵 吉川華樂氏

氏は明治十二年三月の出生にして本名を市五郎と稱す、長じて風流に志あり家業は花卉園藝を營み現に生花資料の問屋業として吉川一樂園と稱し、埼玉縣蕨町に本舖を有し、同縣川口町榮町に支舖を置き主として栽培の花卉を供給し遠近斯界に其名が高い。

華道は桂古流漠鼓庵池華叟先生に師事して研修すること多年其奥儀を究め教授を許された。資性恬淡風流肌の人で先師も大に嘱目された、營業の傍ら子弟の教養に從事し門生多く專ら先師の意志を祖述し熟識流儀の進展に努力精進しつゝある。(埼玉縣北足立郡蕨町三七一一番地)



吉川華樂氏



吉川華樂氏作

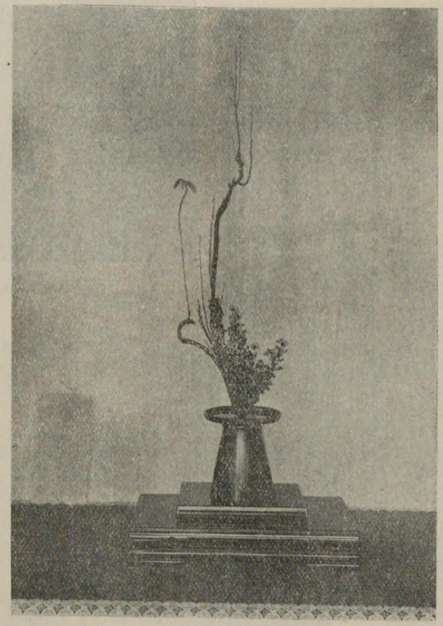
家元池坊花道教授
廣山流投入盛花教授
生華園　大黒秀月女史

女史は、本名秀子、明治十四年十月三日、東京下谷仲徒町に生る。父は會津藩士中村良益、母をとく女といひ、家祖は代々醫を業とし父良益氏は、帝國大學第一回の醫學士で、前侍醫頭岡玄卿氏等と同窓であつた。青森、秋田、弘前等の縣立病院長を歴任し、後下谷に病院を經營、今より二十年前六十一歳を以つて歿した。現在は令兄醫學士中村謙吾氏が遺業を繼承してゐる。又、令弟中村豊氏、同納谷省吾氏は、何れも醫學博士であり、豊氏は札幌醫科大學教授、省吾氏は細菌學の權威であつて、目下獨佛に留學中である。

斯く女史の一門は、何れも杏林の名手を輩出してゐるが、女史も東京府立第一高等女學校卒業、後補習科一年の科程を終へて、明治三十四年一月、九州佐賀縣立病院長醫學博士大黒安三郎氏に嫁したのである。しかし惜しむべし、大黒博士は在任十有餘年、今より十四年前に、任地で病歿した。

女史が花道に志したは、十七歳の時であつた。當時は遠州流を學ぶ處があつた。同時に廣山流投入盛花にも、研究の歩を進む。

斯様に女史の斯道における經歴は、長く且つ古く、從つて、その造詣する處も深い。されば明治四十二年既に池坊生花皆傳となり、大正七年準總幹事、同年十月床構、紫幕、華盤、薄盤を許され、大日本總目付職、立華皆傳となつた。同十年一月華督、十一年十二月準總華督、翌十二年五月、大日本總華督の最高職役に就いた。この間岡田先生に隨行し、閑院宮殿下の御座所に獻花し、又、鍋島侯邸に英國皇太子行啓の際にも、同先生に隨ふて數瓶を獻花するの光榮に浴した。



大黒秀月女史作

現在、池坊東京紫雲會理事、池坊昭和會評議員として、東都坊門に重きをなしてゐる。

女史は曾て、日露戰爭當時、日本赤十字社の特志看護婦會佐賀支部評議員として活躍し、又、愛國婦人會佐賀支部評議員として、盡瘁する處多く、後功によつて二等有功章を授與された。

又、女史は、頗る多藝多才、遠州流茶道、山田流箏曲、三絃、胡弓等何れもその蘊奥を極はめ、その外、餘技として、長唄、常盤津等にも達してゐる。

なほ、女史は故博士との間に、長男三郎氏があり、上智大學卒業後、東京電燈會社に勤めたが、間もなく病を得て、昭和三年に歿した。女史の悲愁察するに餘りがある。爾來、女史は花道を唯一の慰藥として、一層斯道に潜心してゐる。

（東京市本郷區森川町一番地）

谷　一嶺氏

正風遠州流華道教授
京都嵯峨御所花道
總司所花務職
盛花投入小笠原流禮式
熨斗折方水引教授
宗偏流茶道
瑞寶庵　谷　一嶺氏

氏は新潟縣中蒲原郡村松町の産本名藤松、明治十五年一月十二日誕生す、早くより風流の道に親しみ、亡姉タニと共に舊村松藩時代よりの正風遠州流指南役たりし、小田榮八氏に師事し、家元秘書目錄、初傳前免上の切紙より十二階級の秘藏書を所有するに至つた。

大正十一年九月十五日より京都舊嵯峨御所花道總司所に屬し、正風遠州流諸國總會司及び教授を許され、傳書七卷及び翡翠章佩用を許容された。爾來流派のために一意獻身努力し、後宇多天皇六百年御遠忌、後龜山天皇五百年御遠忌紀念勅封心經殿建築、花道會館創設等に盡瘁し、功績に依り種々の紀念品等を授けられたこと、一再に止まらない。

谷　一嶺氏作

大正十五年十一月准目代を許され目錄を受けた。

氏は曰く。

華道は國民教養の基本となるべきものであり、一般家庭に於ても充分尊重されべきであるにも拘はらず、微々として更らに振はないのは、諸流の和合を缺くからである。華道をして眞の國教の根元たらしめんがためには、諸流歩を一つにして大いて斯道の開發を企てねばならないと。

最も得意とするところは、柳及び杜若。

社中に於て師範代岡元一默、巖一榮、佐藤一豊、藤井マツ、山田津榮子以下數十の子弟を教え、一面家庭にあつては五人の子女の慈父として一家の柱石である。（新潟縣中蒲原郡小須戸町三六七〇）

東光古流華道家元
東光庵 **福田松齡氏**

氏は明治十二年六月八日、栃木縣鹽谷郡藤原村に生る。

氏の生家は、代々商業を營んでゐたが、祖父なる人が風流に心あり、特に華道の名手であつた。從つて、父君もこれを傳へて斯道に精進したので、氏は幼少の頃からその指導を受け、年少にして斯道の上手となつた。

その後、——明治三十年氏は上京し、商業に從ふの傍ら好愛する斯道の研究と知人に對してのみ敎へてゐたが、三十三年獨自の立場より、東光古流の一派を創始し、これが家元となり、爾來、斯道に專心するに至つた。

『そもそも、生花は、日本古有の藝術であり、その高尙優美なること他に比を見ない。故にこれを敎ふる人も、學ぶ人も日本固有の精神を尊重し、師弟の間は圓滿に情義正しく、苟くもその師に反する如き行爲は、斷じて愼しまなければならない。若し、この美德なき人は、花道家として先 第一の資格なきものと思ふ』

といふ信念の下に、斯道に精勵してゐる。

養成する處の社中は全國に亙つて多く、隱然たる勢力を有してゐる。卽ち社中の重なる人々は副家元淸月庵宇野松溪、同代理古月庵長船晴湖、會長松籟庵杉村仲和、副會長片岡、副幹事淸光庵小泉松韻、秋田支部長松濤庵杉村月郊、滿州支部長巖松庵高橋翠雨、家元顧問松雪庵高部月郊、同東照庵福島光齡、島根縣支部長松雪齋吉田一香、大分縣支部長古瓢亭安部香月、同副支部長古月亭渡邊松雪、大分縣幹事長古松亭後藤光月、神戶支部長天生庵水沼松聲等諸氏の外全國の敎授者一百四十六人に達するといふ。(東京市本鄕區根津須賀町二三番地)

福田松齡氏作

福田松齡氏

千流派古流生花家元
自然派投入盛花家元
松華齋 **仁戶田一應女史**

女史は明治二十二年十一月十一日、長野縣南佐久郡臼東町に生まる。本名を富士代といふ。生家は代々蜂須賀侯に仕へ、安政の頃藩主の分家に際し、その祖父爲右は抜擢され新藩主稻田公に從つて、任地阿波美馬郡に赴き、その地に永住の居を定む。父君丸茂宜舜氏は舊阿波稻田公の藩士にして東町公共の爲めに盡すこと多年、大正八年五月歿した。

女史は明治三十九年鄕里の高等小學校を卒業後、上京して獨學すること數年、戶板女學校に入學し、大正元年同校を卒業す。華道は前千流派古流家元探花齋松岡一卜師に師事し、敎授として立つこと數年、家元補佐となり、師を援くること七年、昭和二年家元引退するに及び、後事を託せられ、家元を繼承して今日に至つた。

女史は現時の花道が未だ研究の餘地あるをさとり、特に投入盛花に改善を加へて、遂に自ら自然派の一派を立て、形式打破の第一步を進めた。今後も名の如く。自然主義を唯一最大の目的たらしめん

現代華道家列傳

仁戶田一應女史

古流圓相派華道教授
松廼齋　松崎理秋氏

氏は安政四年十月六日、長野縣松本市北深志に生まる。本名を向忠と云ふ。松崎家は舊松本藩主戸田丹波守の重臣にして、藩中に軍學、巽方の師範をなし、代々物頭役を勤めた家柄である。

氏は明治四年、松本藩の漢學校に入り、明治八年松本醫校兼病院の貸費生となりて卒業、明治十一年十一月、內務省制規の試驗を受けて醫籍に登錄せられ、同十四年北海道空知集治監病院の副院長に補せられ、在勤五年にして明治十九年職を辭して上京、神田區五軒町に醫を開業し、業務の傍ら、夜雪庵金羅宗匠について俳諧を學ぶ。二十年三月初めて松月堂古流を學び、後ち古流圓相派を研究して家元總務に推された。

明治三十二年鄉里松本に歸り、醫業を開業の傍ら、子弟に生花並に作法の教授を始め多くの社中を養成したが、大正四年五月松本高等女學校華道教授を囑託せられ、勤續十三年におよび、又大正六年より松本女子師範學校華道教授をも囑託せられ、今尚ほ勤續してゐる。大正十三年十一月氏の門下生一同發起となりて、松本中學校運動場即ち松本天主閣の傍らに生花頌德碑を建設して、氏の德を永久に頌することとなつた。氏が今日までに養成したる社中はすでに數千名に達してをり、師範として立てるものも少なくないのである。

松崎理秋氏とその作

氏は現代の生花が、何流たるとを問はず改良すべき點多々あるを認め、殊に生花に對する精神の涵養不十分なるは慨すべき傾向なりとし、社中を教導するに際しては、常にこれをやかましく唱へてゐる。得意の花は草木共に骨體生である。

氏は今日まで、各方面から、その功績を表彰されてゐるが、その主なるものを擧ぐれば、北海道廳より木盃一個、長野縣より木盃前後五個、同じく長野縣より勤勉賞前後八回を受けてゐる。

華道の外、俳號柿本、虛實庵秋稿と號して俳諧に巧みであつて、花本家首席宗匠である。又、茶事においても精通してゐることは云ふまでもない。生花に對する教句に曰く。『生けて見よ花は心の影法師』と。

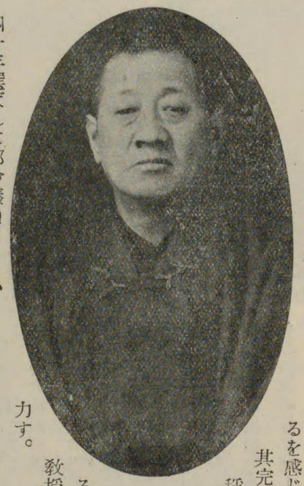
氏は現に生地において醫を業とし、傍ら松本女子師範學校教授囑託たるの外並に松本市會副議長として公共方面に盡瘁しつゝある。（松本市大字北深志百廿二番地）

古流圓相派華道教授
石州流茶道教授
松古齋　中村理尙氏

氏は明治元年八月二十日、舊信州高遠藩に生まる。本名を萬治と云ふ。生家は宇多源氏に屬し農を本業とし、世々里正を勤めた家柄である。父は北原八十八、母は藤田氏、氏は幼にして中村家の養嗣子となつたのである。氏の祖父北原所は坂本天山の直門にして、砲術の指南役たり、又家塾を開き寺子屋師匠をして居た。現に邸地に筆塚（頌德碑）ありといふ。

氏は鄉里の小學校を卒へて、外祖父藤田信醫の塾に入り漢書を學び、祖父の一齋塾において國學を修めた。華道は初め、松住齋荒川一甕師の門に入り、遠州流挿花を學び、幾何もなくして師の訃に會ひ、爾後地方にありて公共の事に身を委ぬること二十有餘年、明治四十年選ばれて郡會議員となり、前途を衆望に待たれたのであつたが、一日議場において正義の行はれざるを慨し、奮然公職を去り、家事を嗣子にゆづり、身を閑所に置き、自ら好める風流の道に身を委ね、華道を松崎玉枝師に、煎茶式法を清風庵仙樵師に學び、各その蘊奥を極め、遂に師範に列す。後諸流の研究に沒頭し、長を採り短を捨て自ら一家をなすに至つた。

現代華道家列傳　中村理尙氏作



中村理尙氏

氏は從來の花體が只前面より見るのみの樣式なるも、家屋の構造等住居の變遷に伴ひ、前後左右より見る事を得る樣式の必要なるを感じ、工夫の結果其完成を遂げ、自ら稱して四方面式と稱してゐる又從來の教授法の迂遠にして的確ならざるを憂ひ、速成教授法の研究に努力す。

氏は竹、萬年青、古木應用の骨體花を得意とし、華道の外、石州流茶道、水引折形、清風流煎茶式法を教授し、社中八百餘名に達す。大日本華道會名譽會員にして長野縣深志支部長である。

明治三十七八年戰役の功により勳八等白色桐葉章を授けられ、其他公共慈善の事に力を致し、木盃其他の賞を受けたること前後九回に及んでゐる。

氏は現に松本の宮に閑居し、實家には令息夫妻及び愛孫六人が住んでゐる。（松本市大名町七二）

池坊龍生派華道教授
芳昌齋 石黒素香氏

氏は明治三十二年二月千葉縣野田町に生る。伊東長藏氏の男で石黒康之亮と稱す。家は酒醬油商として聞えたる老舗である。

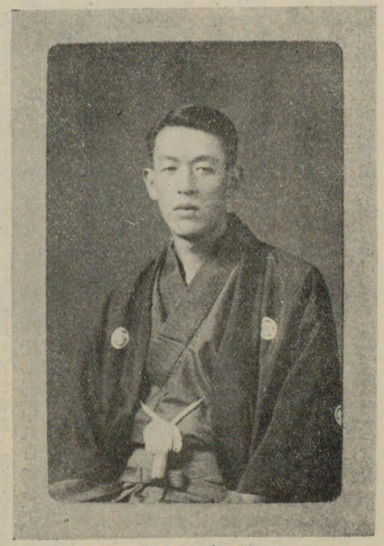
氏弱冠にして風流に志あり大正六年三月池坊龍生派華道教授椎野素瑛先生の門に入り華道を修業した、氏は熱心なる研鑽者で非凡なる技能を有し累進して大正九年七月には已に教授職を許された程である。翌十年には野田町に教塲を開き子弟の教養に從ふた、次で同十二年には家元華鑑の要位に昇級した。同派の例月研究會には欠席した事のない熱心振で、同十四年十二月、遂に選外格に當選し、家元より表彰を受けた。

石黒素香氏作

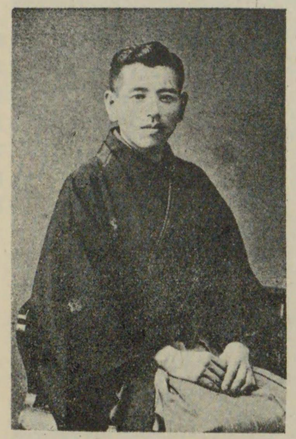
表彰

夙ニ華道ニ志シ熱心ニシテ克ク他ノ模範トナリ殊ニ當派研究會ニ於テ技術優秀ノ成績ヲ得依テ本會々則ニヨリ賞品ヲ賜與スと、温厚篤實、稀に見る眞率の風流子である。盛花投入は松東流を學び拔群の技能ありと、氏得意の花は、柳、金雀花等の所謂筋通しもの、及び梅松の如き拮屈捿拐たるものが其嗜好に適して居ると。

（東京市本所區表町三十二番地）



石黒素香氏



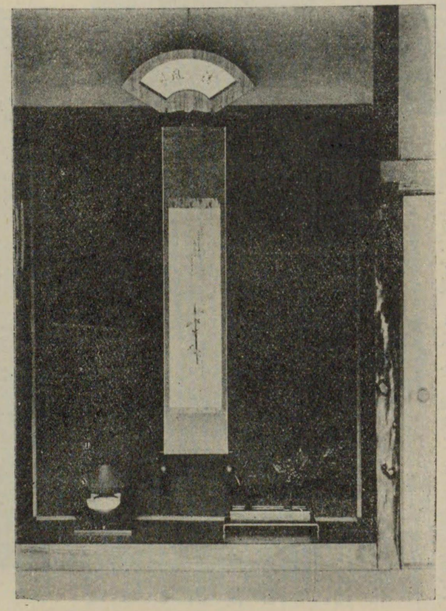
塚本理雅氏

佛心古流華道
第六世家元
松華齋 塚本理雅氏

氏は明治二十三年十月、東京京橋區木挽町において塚本豊次郎氏の長男として生まる。本名雅俊と稱す。

氏は幼少の頃より、技術的なることを好み、各種の教育模型などをつくつて、大人をしてその才能を歎賞せしめたことがあるといふ。長ずるに及んで最も華道を好み、明治四十一年五月、古流家元師範松露齋理師の門に入り、華道を學び、四年にして師範となつた。

かくて師範となつてから後も、數年間更に斯道について研究を積み、東都において華道教授に從事し、大にその才幹を認められるゝに至つたが、不幸にして彼の大震災に遭遇して、全財産を烏有に歸したので、埼玉縣大宮町に移つて華道教授をなし、又茶道華道の研究會を起して大宮華道會と稱し、その會長として同地の華道界に重きをなすに至つた。



塚本理雅氏作

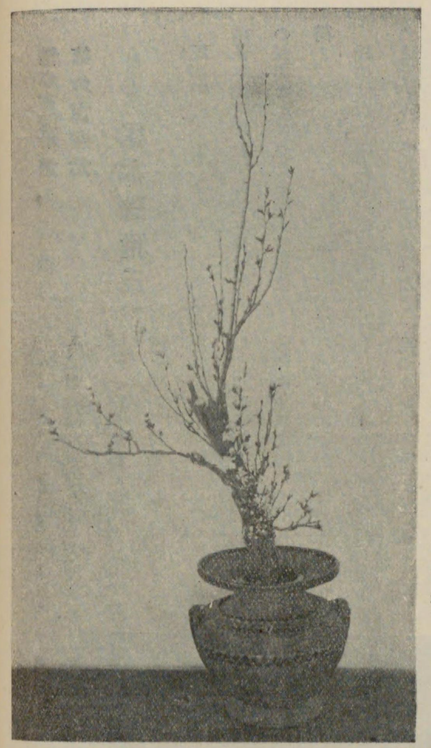
昭和二年都新聞社が華道十傑投票を催すや、氏は東京在住の門下に擁立されて、第一日より數回最高點に當選し、大に人氣を博した。

昭和三年五月、佛心古流第六世家元を繼ぎ、熱心子弟の教養に當つてゐる。

茶道は表千家流不知庵玉翠師の門下にて竹堂と號し造詣が深い。

家庭は夫人との間に二男一女あり、極めて平和圓滿である。（埼玉縣大宮町大門町三七七五）

生花雙月流家元
小原流盛花瓶華教授
雙月庵 阿部一鵠女史



阿部一鵠女史作（吉野櫻）

女史は明治十三年一月十日、越後に生まれ、北海道函館市において成長す。函館女學校卒業後、明治三十五年、古遠州流樹月庵門人函館市住上見美見師の門に入り、古遠州流華道を學び、明治三十八年上京して樹月庵一全師の内弟子となり、更に修業をつゞけ、皆傳を得て同四十年函館にかへり、直に廳立高等女學校囑託となつた。

斯くて女史は多年女學校において華道教授を經驗する間に、技巧を主とする生花の團體教授に不適當なるを感ずるに至つた。即ち自己の修めたる古遠州流は技巧を主とするにより、學校の如く一定の時間の處で教へるのには非常に困難で、其爲め初心者の興味をそぐ恐れがあるといふことを感じ、當時家元樹月庵師に相談の上、短時間に多人數を一齊に教授出來る樣に工夫し、以來少しづゝ改め來つて廿餘年に及び、現今に至つて顧みる時は家元の花型とかなり相違せるを認め、恩師の流より離るゝことは自己の心にそはざりしも意を決して昭和三年春上京現在の家元に細々と事情を述べて許しを受け、故師より受けた庵號をそのまゝ流名として玆に雙月流なる一派を立てることになつたのである。現在同女學校にて自流の外、小原流盛花瓶華を教授してゐる。別號清風軒といふ。餘技として千家表茶道に堪能である。（函館市元町三十一）

阿部一鵠女史

片峰雅雲女史

池坊龍生派華道教授
峰光園 片峰雅雲女史

女史は明治二十七年八月三十一日大分縣宇佐郡長峯村に生まる。父を後藤範六氏といひ女史はその長女にして本名三津子といふ。明治四十三年福岡縣立小倉高等女學校を卒業し、後片峰氏に嫁す。

大正十五年より池坊龍生派教授千葉雅山師に入門して生花および小原流盛花を學び、專心研鑽をつゞけて昭和二年皆傳を受け、翌三年十一月教授職を授與せられ、家元執事の職に推擧せらる。女史の技師の職を奉じ、長男吉一君は中最得意とする花は、立生けである。學に長女三代子孃は小學校に通學家庭は夫君秀雄氏との間に二男中である。（東京市外中野上町二八一女あり、夫君は青森縣地方農林五六）

片峰雅雲女史作

池坊龍生派花道教授
栃木縣鹿沼高女校友會囑託
一心軒 今村愛花女史

今村愛花女史

女史は農學士大町信氏の女、父君の任地大阪市に於て生まる。大町家は舊仙臺藩士にして伊達家の族たり、今村家もまた同藩の名家であつた。父信氏は農商務省及大分、岩手、大阪、廣島等に職を奉じ、現在東京小石川にある。

女史は大阪に於て小學校卒業後父君と共に大分に赴き、次で盛岡に再轉、同地高等女學校に入學、父君の廣島縣に轉ずると同時に、母君と共に上京して神田の佛英和高女に學んだ。生來健康勝れず、中途にて學業を斷念し、家にありて茶道、華道、箏曲等に專念した。

婚嫁後、大正四年より高知市に於て、池坊花道教授田村氏に就き同流を研究し、京都家元より美卷傳を授けられ、後同十二年より栃木縣鹿沼町發田氏に就きて、龍生派の堂奥を究はめ、家元吉村華芸氏より教授免狀を授與され、現に家元目代筆蘊奥相傳となつてゐる。

今村愛花女史作

容性溫良、家にありては鹿沼農商學校長たる夫君に仕えて琴瑟よく和し、二男二女あり、長男東京外國語學校に、次男東京高師附屬中學に、長女栃木縣立鹿沼高女に、次女同町小學校に何れも在學せしめ、良く家を治めて常に洋々の和氣を漂はしてゐる。

女史はまた花道の外、箏、手藝にも通達してゐる。（栃木縣鹿沼町今宮）

關藤千明女史作

池坊龍生派華道教授
白藤園 關藤千明女史

女史は明治十八年五月二十四日廣島市において生まる。故檢事三俣秀彦氏の女にして本名を千代子といふ。

幼少の頃より華道に入り、秀才として知らる、大正十五年より池坊龍生派教授千葉雅山師の門に入り、熱心研究を續け、昭和三年春皆傳披露を擧げ教授職を授けらる

關藤千明女史

現に家元華鑑の職にある。

女史は生花の外、又茶道においてもすでに造詣深く、餘技として長唄、琴をよくし、琴は奥傳を有す。

家庭は夫君關藤國助氏との間に令息禮彦君あり、夫君は東大工科出身の技術家として令名ある人、今日まで既に幾多の業績を擧げてゐる。現在は東京丸ビル内に關藤煖房事務所を經營して煖房の設計供給その他の業務を營んでゐる。

（東京市外中野町中野三三〇〇）

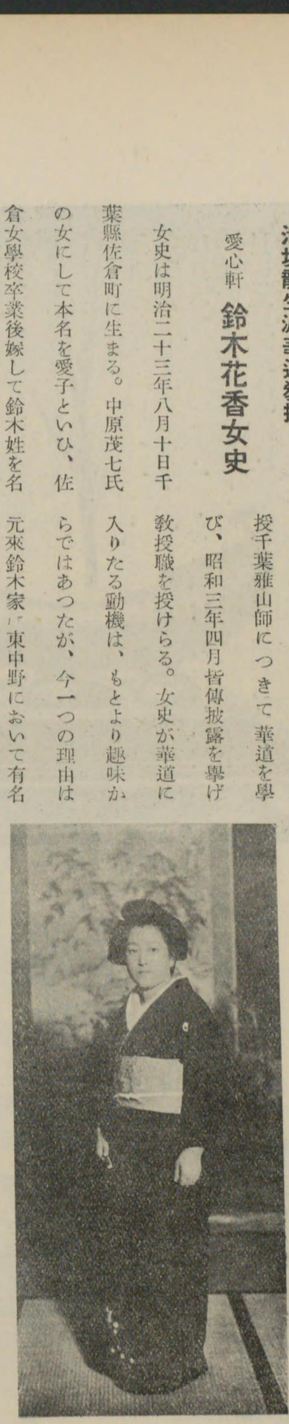
◎

白露に夜は染たる黄菊哉　沽峨

坂こすや黄菊に蝶の羽やすめ　吟江

咲滿て黄菊靜にてる日哉　保吉

池坊龍生派華道教授
愛心軒 鈴木花香女史


鈴木花香女史

女史は明治二十三年八月十日千葉縣佐倉町に生まる。中原茂七氏の女にして本名を愛子といひ、佐倉女學校卒業後嫁して鈴木姓を名乘る。

大正十四年以來、池坊龍生派教授千葉雅山師につきて華道を學び、昭和三年四月皆傳披露を擧げ教授職を授けらる。女史が華道に入りたる動機は、もとより趣味からではあつたが、今一つの理由は元來鈴木家「東中野において有名なる料亭『壽ゞき家』を經營し、女中の如き數十人も使用してゐるので、これら女中の品性陶冶上華道は最も有効有意義なりと認め、これを修得せしむるため自宅を稽古場と定め、千葉師を聘して、女史先づ自ら教へを受けると共に、女中に華道教育を施すに至つたのである。されば同家の女中にして華道教授職を授けられたもの既に四名を出し、現在の女中の內半數以上は女史を師として華道を修得しつゝありと云ふ。現在家元華鑒の職にある。

家庭は夫君磯五郎氏との間に長男松久(二十二)次男久雄(一九)長女春子(七)の二男一女ありて至極圓滿である。(東京市外東中野一三四〇電話四谷五四番同九八番中野一三三番)

荻原秋風女史

池坊龍生派華道教授
荻野庵 荻原秋風女史

女史は明治三十五年十月十一日茨城縣相馬郡取手町に生まる。本名たけ子といふ。茨城縣潮來技藝女學校を出でて、上京後大正十三年より池坊龍生派教授千葉雅山師の門に入り華道を研究し、昭和三年春皆傳免許を得て披露を擧げ、教授となる、現に家元又千葉師につきて、小原流盛花及び、表千家流茶道を學び、いづれも其の功を積んで、斯道の奥儀に達す。得意は生花にして、又餘技として生田流琴曲に堪能なりと云ふ。

女史の兄弟六人中令弟清司氏は郁文館中學教諭の職を奉じ、少壯教育家として令名あり、他は鄉里の父君清次郎氏の許にありて、家業を勵み、幸福に惠まれたる家庭である。(原籍茨城縣相馬郡取手町現住東京市外真中野一三四〇すゞき家方)

荻原秋風女史作

池坊龍生派華道教授
白雲齋 倉本千龍女史

倉本千龍女史作

女史は明治二十五年二月十日、神奈川縣下に生る。本名千江子、長山角次郎氏の四女である。

明治四十四年十二月、倉本家に嫁し、その姓を名乗る。

華道には十二三歳にして、早くもその研究に入つたが、その當時は古流であつた。

後、上京して池坊龍生派師範細井氏について研究し、大正十四年十二月皆傳となり、師範職となる。洋樂、琴、三味線、その他文藝にも趣味を有し、教養深き閨秀である。

かくて、昭和元年十一月、その披露を行ふ。現在準目代職である。夫君との間に二男三女あり、一家相和してゐる。

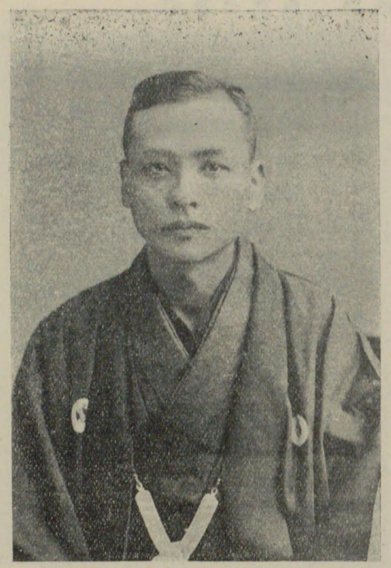
女史が最も得意のものは、水盤物であると。

社中は小岩小學校母の會員を主とし、その數頗る多い。(東京府下小岩村字伊豫田二三二番地)

なほ、茶道裏千家に精通せる外、

倉本千龍女史

未生流花道教授
養親齋 青木岡甫氏



青木岡甫氏

氏は明治三十七年一月七日、富山縣上新川郡福澤村東黒牧に生る本名を有岡といふ。

氏の生家は代々桑門として立ち現に氏の父君は鄉里において、一寺の住職として、信望篤厚の人である。

氏は累代の遺鉢を繼いで、僧侶たるべく、中學校を卒業するや、上阪して現住圓滿寺内に在り、修道に向つて、專心努めつゝあるのである。

氏は生來、風流の道に志あり、二十一歳の頃より未生流花道師範吹野養心齋氏の門下となり、修道の餘閑を以つて、熱心に研究するに至つた。蓋し氏が如何に熱心にこれを研修したるかは、入門後僅かに一年有半の歳月を以つてし、同門の士を凌ぎ、早くも師範代の地位を贏ち得たことによつて、これを窺ふことが出來るであらう。もとより天與の才能と非凡なる花才とに惠まれてをり、入門の當初より師の眼底には、その凡庸ならざるを、認められてゐたのであるが、その入門後における進歩は、全く目覺しいものがあつたのである。

青木岡甫氏作

かくて、若冠にして、早くも諸國總會頭の高職につくに至つた。蓋し、異數の榮進でなければならない。

氏は性溫厚にして篤實、特に同情心に深くして、その日常の性行についても、萬人をして推服せしむるものがある。從つて、後進社中を導くや懇切を極はめ、相共に研究するの態度を以つてし、些かも衒ふ處のないのは、天性とはいひながら、修養の淺からざるものあるを思はせるに足る。

得意の花としては、頗る多きも、就中、葉蘭、柳、えにしだ等々であると。

又、音樂を好み、特に琴曲は師範の資格を有してゐるといふことである。

兎に角、氏は當流内における逸足として、その前途に最も多くの期待をかけられてゐる。切に自重を祈る。(大阪市北區此花區玉川町一丁目六八番地圓滿寺)

池坊龍生派華道教授
龍豊園 高石明雲女史

高石明雲女史

女史は明治十八年三月、愛媛縣宇摩郡小富士村小林に生る。高橋政太郎氏の二女である。本名をたつといひ、二十歳の時、海軍々屬高石武平氏に嫁した。東京裁縫女學校及大妻技藝部の出身である。

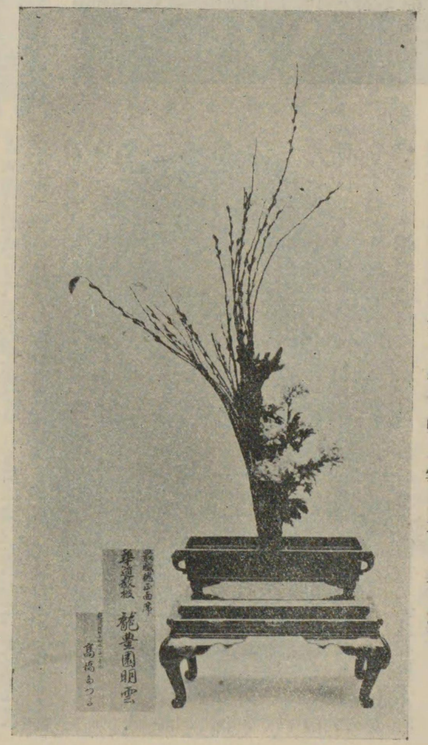
女史は最初京都において、池坊華道を學び、一時、中止して專ら裁縫並に手藝の教授をしてゐたが、人にすゝめられて再び花道を研究するに至つた。即ち池坊龍生派師範戸田内先生につき研究、技術抜群で、間もなく戸田内先生の代稽古を勤めることになつた。又、投入盛花を日本生花學會に入つて學び師範の免許を受く。

しかし、女史の半生は、頗る波瀾に富み、一篇の哀史を綴くの感がある。即ち二十二歳の時一女は つ子嬢を擧げ、別に、嗣子春雄氏を養子したが、十數年前二人の子女教育を目的に一家をあげて上京、愛嬢を京華高等女學校に、養子春雄氏を早稲田大學政經科に入學せしめ、頗る平和な家庭であつた。が、好事魔多しの例に洩れず、愛嬢は女學校四年生の時、急病で夭折し、同じ年の末には主人武平氏が、丹毒を患ふて急死したのである。しかも、不幸はこれにとゞまらず、唯一の力と頼んでゐた養子春雄氏は、早大を無事卒業して、津村順天堂に奉職したが、また病を得てあらゆる手當の効もなく、卒業後僅かに一年で長逝したのである。

この打ち續く不幸に、物質的にも精神的にも、大なる打撃を受けたのは當然であつた。就中精神的打撃は、甚しいものがかつたことは、察するに難くない。しかも、女史は健氣にも、これに打ち克つて、雄々しくも振ひ起つた。そして、造詣する處の裁縫手藝琴曲等の教授をなし今日に至る。

女史は箏曲は生田流の名手、特に裁縫手藝は他の及び難き天稟を有してゐる。特に物に熱心で一度やりかけたことは、何事でも徹底的に仕遂げなければ止まぬ氣魄を持つてゐる。從つて花道においてもその進境は著しいものがある。

現在女史の門に集る箏曲、裁縫、手藝、花道の子弟頗る多く、指導懇切その敬愛を一身に集む。(東京市外巣鴨町上駒込一二一番地)



高石明雲女史作

香川靜香女史

無双眞古流生花教授
同萬閥師範總色位
東山流盛花瓶花教授
同家元幹事
玉有堂 **香川靜香女史**

女史は明治四十三年十月二十五日、大阪市西區本田通り二丁目に生る。本名を靜子、父は香川玉祐氏、母はすえ子、その二女である。生家は、代々讃岐の藩士であつて、父君玉祐氏は、明治二十八年五月大阪に出で、現在は大阪朝日新聞の販賣所主任を勤め、餘暇を以つて專ら茶華道の風流に親しんでゐる。

女史は大阪府立實科高等女學校の出身、大正十四年五月より、無双眞古流、東山流盛花瓶華家元蓮月堂蓮池夢水宗匠の門に入り、同十五年初傳となり、爾來、累進して昭和三年六月奥十段萬國總色位の重位に昇つた。盛花瓶花も師範となり、現に家元幹事として盡瘁してゐる。

又、茶道千家裏流に達す。

女史は年齒頗る若く、前途洋々として、その大成を囑目されてゐる。昭和三年十一月、今上天皇陛下即位式の御大典に際し、蓮池宗匠に挿花奉仕の命下るや、女史は選ばれて宗匠に隨從して、賢所御座所に、生花を謹挿し奉るの光榮に浴し、その大任を無事果したのである。

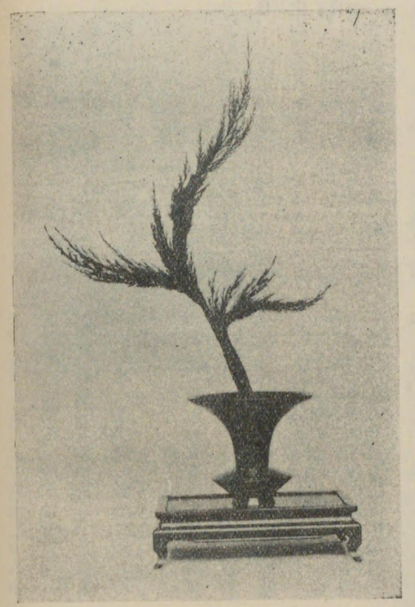
餘技として山村氏に三絃を學び頗る堪能である。

家庭は父母の外、令弟雅洋君(大正七年生)あり、擧家平和を樂しむ。(大阪市南區上本町二丁目十三番地)

香川靜香女史作

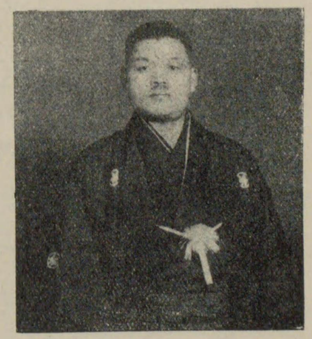
櫻古流花道家元
文人流盛花投入教授
翠保軒 清水華文氏

氏は明治二十二年東京下谷に生る。本名は文次郎と稱す、幼にして花道を嗜み遠州流を研修し十六七歳にして已に一家をなすの技に熟達し俊秀の花才を認られた、憲照皇太后御在世中宮內省に於て生花を奉献し台覽に供するの光榮に浴した、明治四十二年櫻古流を創始し次で諸流花道聯合會を創立し幹部の一員たり次に諸流の花團たる大日本華道共愛會を起し同人として斯道の普及發展に盡瘁を續けて居る。



清水華文氏作

氏は櫻古流の名に就いて曰ふ『日本國花たる櫻を生花流儀の象徴として冠用したるは我流の理想で櫻花の如く絢爛にして萬人に愛され而も高潔ならんとするにある』と、又一流を創始したる意義は『技巧に偏する缺點を補ひ自然の妙味を取入れ四季の生方を本位とす、例へば磯馴を生くるに於ても春夏秋冬の異なつた情趣を表現するが如きである』と、其他投入花は南畫の如く瀟洒風韻を花術に表し盛花は花卉の自然を主體とし技巧を施すものである』と。



清水華文氏

氏はまた頗る多技の人で千家茶道をも教授し、其他長唄、清元、圍碁、將棋、川柳等共に造詣ありと。夫人名はふみ子女史。(東京府荏原郡馬込町一〇二一番地、自宅稽古日毎月曜日)

正生古流花道家元
櫻樹庵 增山翠芳氏

氏は茨城縣北相馬郡川原代村の人、明治七年二月十三日、父增山孝次氏の三男として生れ、名を芳松と呼ばれた。生家は代々農を以つて生業としたので、氏もまた父祖の業を繼いで鋤鍬を採るべき筈であつたが氏は資性風流を好み、常に草木花卉に親しんでゐたといふ

氏は普通學を卒へ、更に菅谷氏の漢學塾に入つた、在學三年、氏の藝術的素質は益々助成され、机上常に花卉を絶たず、また詩作に耽ることを唯一の樂みとしてゐたが、遂に將來花道及び茶道を修め、風流の道に終始せんとの希望を抱くに至つた。

增山翠芳氏

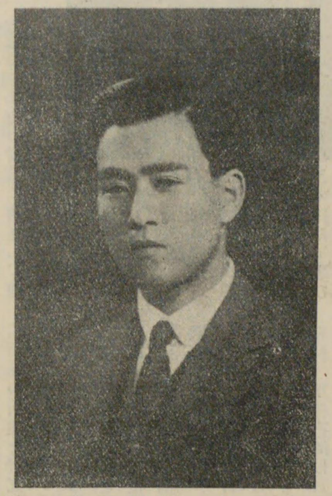
二十三歳の秋、氏は遂に意を決し、青雲の志を抱いて上京し、成るべく父君の粒々辛苦に負ふところを少くせん心盡しより、傳手を求めて某官廳に雇はれ、それに依つて自活の道を講じながら、當時東都に令名のあつた古流の老師隆興齋氏に就いて花道の教へを受け一意たゞ藝術の殿堂に精進して他に何ものをも省みざること數年遂に斯流の奥堂を究はめ盡したが、當時甚たしく時世の進運に伴はざる感のあつた花道教授法の改革を願つてゐた氏は、再び笈を負ふて關西地方に赴き、具に斯界の情態を研究し、幾多の流派に就きて學びつゝ、遂に斯道の蘊奥を極はめ、傍ら植物の培養法に就き巨細に研究を積むこと數年にして、花譜及び花道速習法を考案し、歸來一派を創始して正生古流と名付けた。

增山翠芳氏作(松・菊)

明治三十六年六月、居を横濱市大和町に構へ、專ら花道の教授に從事したが、幾何もなく世人に知られ、正生古流は日を追ふて隆盛に趣き、社中の數に於ては同市にて一二を爭ひ、同門より輩出した幾多の優秀なる師範家は、同市はもとより、遠く歐米にまで至つて教授に從事してゐるとか。氏は常に花道は心の業にして手先きの技に止まるものにあらず、との信念を抱き、常に禮節を守り、一枝の花を挿してよく人の品性をまで薫陶する人格の所持者である。

夫人との間に一女あり、横濱山手共立女學校首席卒業後、家政の傍ら花道を父君に、茶道を表千家奥村一洲氏に學び將來父君の家を繼ぐべく精勵してをる。猶氏は大震災後居を東京に移し現在に及んでゐる。(東京市外上目黑一九六八番地)

桂古流華道教授
桂流投入盛花教授
松峰庵 **田邊旗風氏**



田邊旗風氏

氏は明治三十二年十二月二十八日新潟縣南浦原郡井栗村に生まる本名を旗司といふ。

氏の祖父は俳人にして遠州流、父君は池坊、共に生花に趣味を有してゐたので、氏も幼少より自然花道を好み、十六才の春、横濱に出で、初め美笑流を研究したるも思ふ所ありて、大正七年七月桂古流松濤庵在間華舟師の門に入りて研究を續け、二ケ年にして代師範を許さる。大正十二年二月松濤庵師逝去のため前家元溟波庵池華叟師の門を叩きて教へを受け、大正十四年家元の勸めによりて桂古流横濱支部を設置し、爾來、專ら門下の養成に努め、既に松旭庵雪蘭、峰月庵華水、淡月庵薫松外數名の師範を出してゐる。

因に横濱支部事務所は同市中區南吉田町一六五（電話長者町三六四六）にして、同區高砂町一ノ四（電話長者町二一一六）に出張所を有してゐる。

家庭は夫人園子との間に、長男哲司、長女桂子、二男章の二男一女あり、極めて圓滿である（東京市外入新井町不入斗一四六九）

尚眞流生花教授
松月庵盛花投入教授
一芳齋 **鈴木喜仙女史**

鈴木喜仙女史

女史は明治三十年十一月、東京西巣鴨町に生る。西浦長太郎氏の女、本名を岸といふ。

父君は愛知縣の人、十九歳にして上京、土木建築請負業として成功、現に古稀を過ぎて頑健、長子周三郎氏業を繼いで、ます〳〵盛大である。

女史は淑德高等女學校の出身、在學當時古流を學び、大正八年より山岸福仙先生について、尚眞流を學ぶ。努力五星霜、同十二年皆傳教授職となり、現在に及ぶ。

又、宗偏流茶道を山岸福仙先生に學び、目下修業中である。

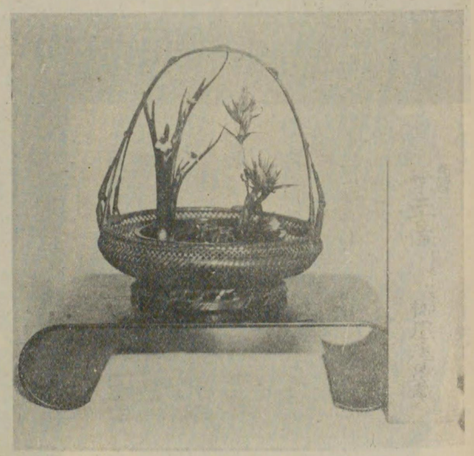
夫君鈴木圭次郎氏との間に、長男圭弐君（大正八年生）および長女磯子嬢（大正十五年生）の一男一女がある。（東京市外西巣鴨町七五番地）

不二古流華道家元
表千家茶道教授
群鳳庵 **柳　柳翁氏**

柳　柳翁氏

氏は文久元年九月七日、新潟縣東頸城郡松代村に生まる。本名を留吉と云ふ。生家は代々農業を營み、氏も家業に從事する所あつたが、中途華道に志し、明治二十二年八月、前橋市の知人を迎りて同地に就職し、傍ら當時名有りし松風遠州流柳貫齋一花師の門に入り、華道を研修し、一貫齋閑柳の雅號を受け、更に明治廿八年熊谷町に移り、寶松庵榮海師につき古流を學び、後又佐渡の人群玉庵花叟と相識り、居を共にして、共に斯道の研究をつゞけた。

明治卅八年、氏は扶桑古流の一派を開き、雅號を群寶庵柳叟と改め、橫濱に移り、華道教授を始め、傍ら各流の花型を研究したが、感ずる所あり、大正元年流名を不二古流と改稱し、同時に號を群鳳庵柳翁と改め、同市の蓮門教會所において家元及び改名の披露をなし爾來、橫濱市はもとより、東京、湘南地方にも門下を有し、熱心自流の普及に努め來つた。氏は大正元年以來今日まで千餘人の社中を出し、現今扶桑會々長として斯道に精進しつゝある。



柳　柳翁氏作

氏は華道の外、表千家茶道を教授し、趣味として書畵骨董を好み藏するもの多しといふ。（橫濱市中區高根町四ノ二二）

絳雲未生流家元師範
絳雲會幹事
絳傚齋 **村田綾甫女史**

女史は明治二十八年四月三日を以つて、大阪市西區幸町に生る。本名を綾子といひ、村田義徹氏の息女である。

女史は大阪ウキルミナ高等女學校出身の才媛である。

大正十四年十月より、絳雲未生流家元横田茂甫先生について、當流華道の研究に入り、昭和三年一月、第一級皆傳を許され、同時に家元師範となつた。

茶道も同時に横田先生に師事し、資性温良、好箇の閨秀斯道家である。(大阪市東成區猪飼野町四八五番地)

現在は家元の研究機關絳雲會の幹事として、當流のために、大に貢獻をなしつゝある。

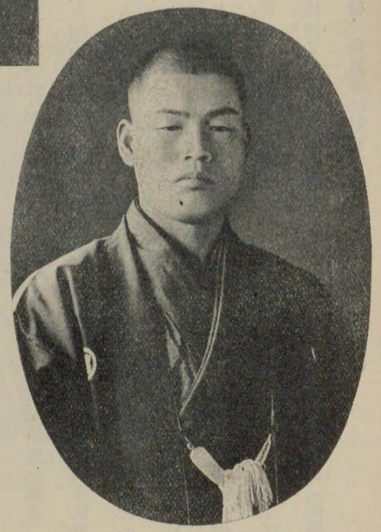
村田綾甫女史

未生流花道教授
裏千家流茶道教授
景遊齋 **大森譽甫氏**

氏は明治三十年七月九日、大阪東區野江町の現住地に生る。本名を與吉と云ひ、大森市太郎氏の二男、後分家す。

生家は約三百年連綿たる舊家であり富豪であつて、知名の有力家である。氏の父君は、種々なる公職に携はり、日露戰役に際しては、その功によつて、特に勳八等に叙せられた。

氏は大正四年未生流大家、故團野師の門に入り、斯道を學ぶに至つた。研鑽よく努め、昇進して郡會頭となつた當時、恩師の物故に遭遇したので、同門の先輩宇野氏について、その研修を續けた。が、後宇野氏等が、一派を樹立するやその許を辭して、依然當流の研究に沒頭し、技風いよいよ練磨さる。



大森譽甫氏

かくて、昭和三年十月には、諸國總會頭の地位に進み、流内の一勢力となると共に、專ら社中の指導と流の發展とに努力しつゝある。

なほ氏は、青年訓練所講習委員の職に居り、盡瘁する處多く、又、誠和會講師として、多年無料を以つて奉仕し、會長伊豆凡夫少將より、賞與を受けたことがある。

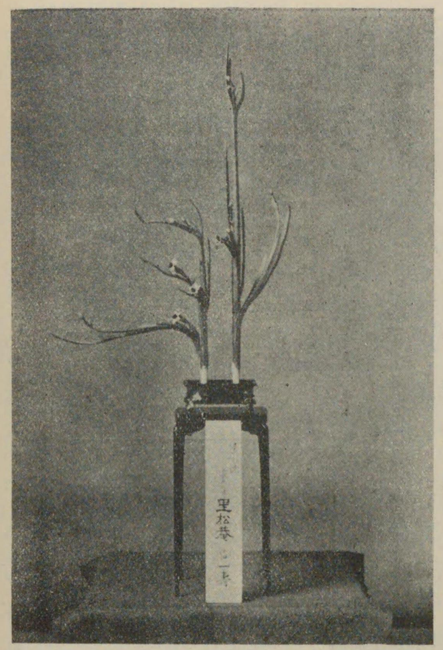
又、大正十五年、先帝陛下御惱平癒祈願のため、阿部野神社に献茶の役を勤仕した。

資性頗る溫厚にして親切、特に社中の教導に細心懇切である。

餘技として謠を學び、至藝の域に入る。家庭は夫人敏子(明治三十八年生)との間に、一男がある。

(大阪市東區野江町二丁目六五三)

庵號遠州流華道七世家元
表千家茶道教授
里松庵 小田一壽氏



小田一壽氏作

氏は明治十年一月十日、高崎市柳川町に生まる。本名福太郎と稱す。父を小田重平と云ひ、氏はその長男である。天性英敏にして、學童たりし頃衆に優れ、夙に華道に志し、十八歳にして二世鶴松庵一晴師の門に入り、教へを受けた。鶴松庵は原山氏にして、初世里松庵一壽師の直門森松庵一郷氏居を高崎にトし、華道を教へて居た。其門人永松庵一樂氏は即ち鶴松庵原山一晴の師匠である。一晴氏は地方華道中興の祖にして、斯道の蘊奥を極めた人であつた。氏はこの人の高弟にして、華道に遊ぶこと三十餘年、多年の功績報いられて、先に七世家元を襲ぎ、里松庵二壽を稱するに至つた。

小田一壽氏

氏は又、國學を研究し、狂歌、俳句、和歌等に堪能である。先きに縣立高等女學校華道教授たりしが、辭して後進の路を開き、今や佐藤裁縫女學校、高崎電話交換局の華道教授を囑託され、熱心に斯道の普及に努力してゐる。社中三百餘人あり。華道の外茶道表千家、小笠原流禮法をも教授してゐる。最も得意の花は水仙。(高崎市柳川町二二)

庵號遠州流華道家元目代
春草庵 速水一枝氏

翁は安政二年六月を以て、群馬縣六郷村に生まる。本名を重太郎と云ふ。家系を按ずるに、本姓は藤原氏、初め小名坂と稱し、其祖傳左衞門安棟、烏河において治水の功により、高崎の城主松平貞輝より、速水の姓を賜うた、時に享保四年八月、仍て改姓す。代々名主であつた。

翁は速水安明と稱し、花技を老松庵一久師に學び、後五世里松庵襲名し、六世家元の後見となる。建て、翁の功績を永久に傳ふ。亦一壽の直門となり、明治四十一年翁の高弟丘松庵長井一芙氏、翁宜なりといふべし(高崎市堰代町)家元師範代となり、更に大正七年を援けて社中を指揮し、よく華道

六月家元目代となり、大正十二年七月、庵號派の宗家春草庵一枝を薫陶の任を完うせしめてゐる。今や翁の門人知己相圖りて頌德碑を

速水一枝翁と社中及頌德碑

庵號遠州流華道教授
表千家茶道教授
丘松庵 長井一芙氏

氏は明治三年九月二日群馬縣群馬郡大類村に生まる。本名を丑五郎といふ。家系を按ずるに、本姓は藤原氏、遠祖長井參河武田氏に仕へ、川中島の役に戰死す、其子織部大類村に住し、農を以て業とすとある。氏は幼少の頃、當時教育機關未だ不備なりし時代漢籍を學び、經史の類殆んど盡し、又國學の研究をなし、大白堂孤月の門人、太永堂麥雪につきて、和歌俳句を學んだ。

華道は初め、春松庵一榮師（現三世春草庵一枝）に學び、後五世里松庵一壽師の直門となり、又池坊、古流、未生流等を研究し、遠州流の傳書等にも註釋を加へ、草木の出生を明記し、或は花の栞を編輯し、大に自流後進のために蒙を啓く、又表千家茶道に達し、細川流の盆景をよくす。

氏は製糸の發展に力を致すこと數年、かつて村會議員、水利組合議員、消防組頭等の公職を奉じたることあり、現今は商業の傍ら、高崎長子は海軍大尉、以下は高等工業學校及び商業學校にいづれも在學中である。（高崎市田町）と稱する者續出し我國固有の花道を棄るの傾向あるは慨すべきである。我國の花道には各流共それぞれ侵すべからざる權威と獨特の妙味とを持つてゐる。然るに些細の感情のために師家家元と離反してみだりに新流を樹つるものあるは之を戒め、これを排斥して可なり、と傾聽に値すべきであらう。

氏の得意は梅、葉蘭、柏、杉にして、又謠曲、盆栽などに深き趣味を有してゐる。

家庭は夫人との間に三子あり、

東山新流花道師範
石州流 茶道教授
鶴忠齋 小林松乃女史

女史は、明治十三年四月十四日、廣島縣御調郡喰村、西丸常七氏の長女として生る。代々の廣島藩士にして、素封家とし知られてゐる。女史の實兄西丸正市氏は、父君の後を繼承し、現に議員その他の名譽職に推され名望高し。

女史は長じて、小林家に嫁し、

小林松乃女史

二十年前大阪に移る。

資性溫雅にして高尚、特に茶花道は、その最も好める處であつた。大正七年二月斯道の達人東山新流家元宗家菅生鶴照齋宗匠の直門となり、大正十五年九月一日、齋號を許され、同時に准會司の要位に居る。

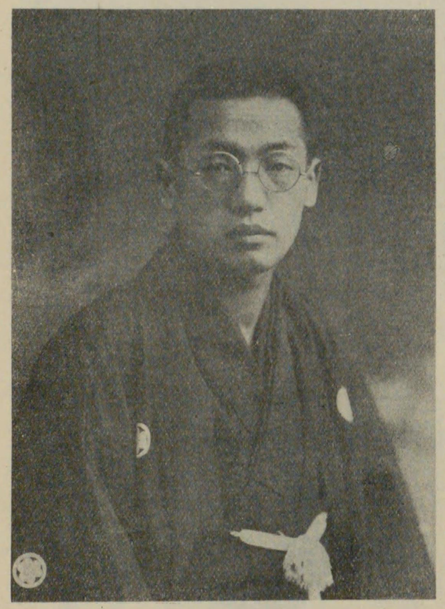
女史は別に、觀世流謠曲の趣味あり、又夫君小林金太郎氏は、箏曲に深き造詣を有し、相共に風流の道にいそしんでゐる。（大阪市西區立賣堀七丁目三五番地）

東山新流花道師範
石州流 茶道教授
鶴東齋 辻井久朋氏

氏は明治三十六年一月二十三日大阪西區阿波座二番町に生る。本名を久次郎といひ、久吉氏の長男である。

生家は代々米穀の卸小賣商を營み、現在は氏が家業を繼いで、いよいよ盛大である。

氏は、早くより雅道に志し、東



山新流家元菅生鶴松齋宗匠の門に學び、大正十二年二月齋號免許、同年四月準師範代、昭和二年十月師範となつた。前途春秋に富み、嘱目されるの人である。

又、氏は別に舞踊をよくし、柔道二段の達人である。徵兵に應じ陸軍輜重兵伍長勤務となり、現に大阪市西第八青年訓練所教官として大正十五年七月以來任に在る。

資性活達、欽すべき風格の士である。（大阪市西區南堀江上通四丁目十四番地、電話櫻川四三二五番）

日本生花司
松月堂古流教授
花岡軒 田澤うめ子女史

田澤うめ子女史

女史は、明治三十四年五月二十六日、北海道北見國稚内町字聲問に生る。

田澤家は、加州前田利家公の實兒利久公の嫡男、前田敬次郎の末裔であつて、敬次郎は上杉景勝に仕へ、祿三萬石を食みたる人、上杉家米澤轉封と同時に、その子孫甚左衞門山形縣庄内田澤の里に住して姓を田澤と稱し、後更らに藤島の里楮といふに移住す。かくて、藤島組の大庄屋となり、子孫連綿大に榮えた。その後十一代を經て、田澤久藏の代となり、その四男末吉氏、北海道北見國稚内村に移住し、更らに當主福造氏の代となつて、大正十三年十一月東京に移り、以つて今日に至る。即ち女史は福造氏の夫人である。

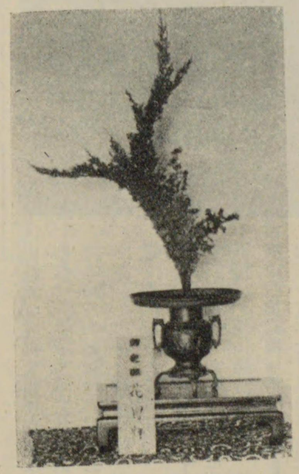
女史は、札幌北三條松子裁縫女學校並に稚内女學校の出身。初め池坊の斯術を學んだが、後東上すると共に、松月堂古流大日本總會頭顧問高野不及庵先生について、その蘊奥を極むるに至つた。その間、女史が如何に、斯道のために精進したかは、轉た嘆稱に堪へないものがある。即ち大正十四年春以來、住宅戸越より、上野なる不及庵先生の教へを乞ふため、朝四時に出で七時に歸宅、それより家事を處理し、直ちに自宅に教へを乞ふ裁縫の子弟の教導に從ふたのである。この間實に二年餘、その撓まざる努力に對しては、何人の頭をも垂れしむるものがあつたのである。

されば、その技術の進歩も、人に越えて著しく、今や多士濟々の不及庵門下中にあつても、特に異彩を放つてゐるのである。現に、書間は裁縫の教授者として、多くの子弟を取り、夜間は生花教授として、その職を果たしてゐる。しかも、その間三日毎に、師の許へ通ひ、專念斯道の研究を怠らないのである。

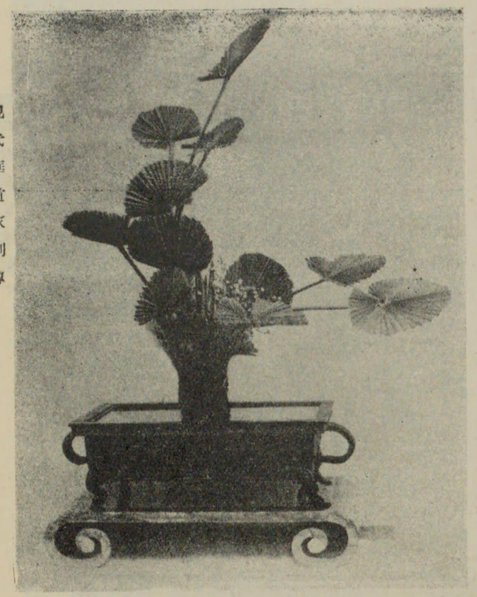
しかも、花道教授をなすものは、これによつて、生活することなく、餘技として將又趣味として教授するのがよいといふ意見を懐いてゐる。そして、その主義のもとに花技を教へ且つ樂しんでゐるのである。現在社中數十名。

得意の花は、イブキと菊であるといふ。

又、女史は別に作法一般を好くすると。(東京市外荏原町戸越九二〇番地)



田澤うめ子女史作

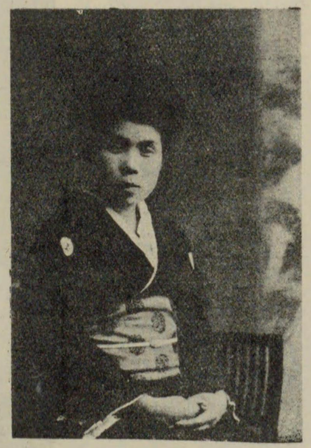


現代華道家列傳

古流華道教授
家元會頭幹事
松栄齋 廣瀬理種女史

女史は明治十六年九月十三日、香川縣香川郡一宮村一宮に生まる。本名を種子と云ふ。華道を古流山本派家元について學び、教授となる。

大正十二年の關東大震火災以前は、東京市本所區龜澤町一丁目において教授に從事し、多數の門人を養成し。震災後は現在の所に居を定め、埼玉縣立浦和高等女學校し、何れも堪能なりといふ。(埼玉縣浦和町岸區岸町二六〇五)



廣瀬理種女史作

華道教授を囑託せられ、學校並に自宅において、專ら華道の隆盛のため、利慾を離れて門下の養成に努め、信望を博してゐる。現に家元會頭幹事の重職に在り。

女史は華道の外、餘技として琴、謡曲、和洋裁縫及び料理等に精通

◎

おのづから寒靜なり雨の菊　蓼太
十六夜の月と見はやせ殘る菊　芭蕉
白菊に黄菊の中を凪かな　雪瓜
手燭して色失へる黄菊哉　蕪村
旅人の飯はつめたし紫苑さく　乙二

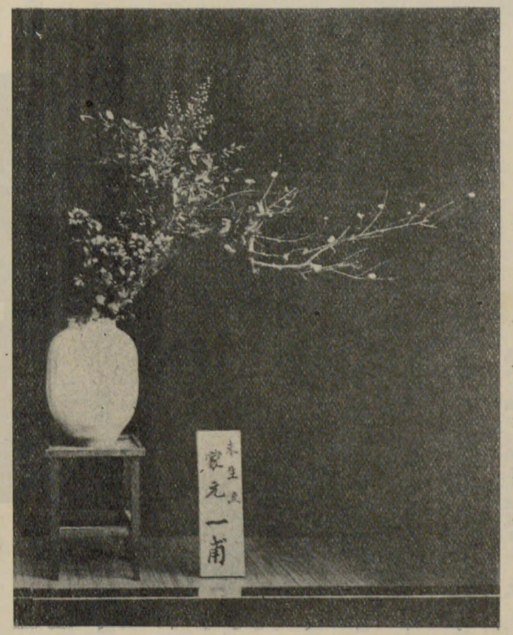
未生流家元
未生齋 佐藤一甫女史

佐藤一甫女史

未生流は其淵源を遠く室町朝に京都に發し後江戸に移る、文化年中未生齋田沼廣甫斯道に妙を得聲譽を姿ままにした、時に但州の人不濁齋上田一甫は廣甫を鄉國に請じて其秘奥を學び、斯道を大に天下に傳へんと、師資相ひきいて浪華に出た、桃李の下蹊自ら成り、教へを請ふもの多く、花聖と稱せられた、其妙技天聽に達し、周防法眼正行の號を賜ひ、嵯峨御所花務職を命ぜられた、是れ即ち本流を以て嵯峨御流と稱するの濫觴である。而して廣甫が歿するに臨みて未生齋の號を一甫に授けて、其統を嗣がせた、爾來傳統の者必ず未生齋を號し、廣甫と一甫とを遞代交稱するの例を開いた。明治十年上田一甫死して嗣なく、一甫の姉松田豊子廣豊齋愛甫が衆に推されて將に絕えんとする統をつぐことゝなつたのであるが、愛甫にも亦子がなかつたので家元役頭香子齋原甫事佐藤新兵衞がその後嗣となり未生齋廣甫の號を授けられた、時に明治卅七年七月であつた、翁は愛知縣海部郡佐屋村日置の産で、幼少より花技を好み、初め千秋流を學び、後未生流に入り、遂に其蘊奥を極めたのである、翁大正九年八月壽七十才にして歿するに及び、翁の未亡人たる女史が其統をつぎて今日に至つたのである。同流の門葉今や全國を通じて八萬人に達すといふ。

女史は昭和三年十一月今上陛下御大典の際、名古屋離宮に挿花を謹挿するの光榮に浴したのである

（愛知縣海部郡津島相生町）



佐藤一甫女史作

狩野華城氏作

華心流花道及投入盛花家元
旭松軒 狩野華城氏

氏は明治元年一月十七日群馬縣勢多郡駒形町に生まる。本名を浩基と稱す。祖先は大織冠藤原鎌足の後裔二階堂主計允行政八世の孫狩野次郎景信より出づるといふ。

氏は小學校を卒へ、漢書を阿部耕太郎、石山確乎兩師に學び、一時小學校に教鞭を取り、曾て醫學に志したるも之を抛ち日本法律學校に學ふこと二年にして病氣のため退學す。

華道は明治二十三年秋、軒號遠州流十一世家元春秋軒武田一葉の當時上毛世良田村長樂寺住職僧正塚田亮詮事家元四世幹事深松軒一雫師の門に入りて、學ぶこと二年を越えざるに、師の代稽古をなすの域に達し、花號を旭松軒一天と稱し、師の秘藏弟子として鍾愛を受くるに至つた。

斯くて同流の教授として子弟の教養に努力する傍ら、深く考ふる所あり、華道は流派として學ぶべきものなりやとの疑心を抱き、華道に關する古書を蒐集し、科學的に研究を遂げ、つひに華道に流派の必要なきを確信し、流派を超越して植物の自然風情を本位とし形式に偏せず、つとめて簡易の挿方によつて試むべきであることを悟り、此處に流派の拘束より脫れて自由の境地に進むべく決心し、社中の教導其他一切を高弟松蔭軒岡崎一愚に託し、明治四十一年初冬橫濱市西戸部町に居を移し、引續き斯道に關する古書を調査する傍ら、代表的流派の花型を見學し、又特に池坊總華督小島晩翠師につき實地研究し、漸く多年の理想を實現するの彼岸に達し、流派の觀念を離れ廣義の華道として、自由の手法を考案し、門戸を開きて多

狩野華城氏

數の門弟を養成し來つたのであるが偶々大正十二年の大震災に遭ひ爾來前橋市を根據に伊勢崎町其他へ出張教授をなし、斯道普及のため寧日なき有樣であるといふ。

因に氏は華道に流名を付することは自らの主張と相容れざるため流名を付せざる積りであつたが、一般華道家の誤解を受くるを慮り方便上華心流と命名したものであると云つてゐる。

氏が現在の華道に對する意見は豊富にあるが、特に參考たるべきはお許とか秘傳口傳と稱するものは平素の教授において口授すべき筈のもので、お許を得て初めて知るべき道理のものにあらず、免許其他の名譽を授與する內規を根本から改革し、實費手數料程度のものとして、技倆あらば何人にも授くべく之等の事は各家元において改正すべきであると云つてゐる。

氏は今日まで皇太子殿下各宮殿下に挿花台覽の光榮を荷つたこと屢々に及んでゐる。社中は無慮一千五百名に上るといふ。(前橋市本町二十九)

柴山古流生花教授
綠山流投入盛花教授
松麗庵 稻葉宗禎女史

稻葉宗禎女史

女史は本名和子。茨城縣筑波郡北條町の人、明治五年四月二十日を以つて生る。先祖は平將門より出で、維新前まで代々土屋侯の御用掛りを勤め、名字帶刀御免の家柄であつた。

女史の父君は、彭濤軒と號し、池坊花道に通じ、又、茶道にも達して何れもこれが教授であつた。母堂は有馬侯の御祐筆役にして、漢學教授たりし塚本三千代の女。長ずるに及び笠間の牧野侯に仕へ、閨秀の譽れがあつた。

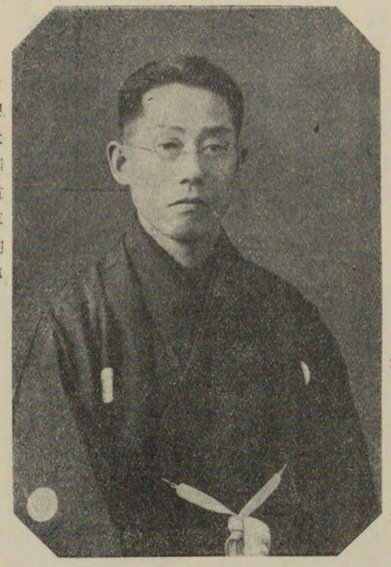
女史はその長女である。女學校を卒業後、祖母に就いて、漢學を學び、後東上し、本鄕千駄ヶ谷山本美充氏の門に入つて、花道を研究、更らに古流師範淺野松雪軒について學ぶ。後更らに柴山古流家元根津氏の教導を得て、技大に進み、現在同流諸國會頭職に推され、又、柴山古流樂友會幹事として內外に重きをなす。今後一層の勵精を以つて、大に斯道のため盡すべく、所期してゐる。社中頼る多し。

女史の花道に對する意見は左の如くである。

『花道は一つの藝術であると共に家庭になくてはならない儀禮の一つである。草木の清らかな姿や、美しい色とりどりの花は、何物にも優つて美しい。この花を挿すには、やはり美しい柔しい心をもつてせねばなりません。實に花道は精神修養の要道であります。』云々。

女史は別に裁縫に熟達し、多くの子女に教授してゐる。(茨城縣筑波郡北條町二一〇番地)

古流秀陽派華道家元
大日本諸流花道
大家研究所主任
松秀齋 橋向理丹氏



現代華道家列傳

橋向理丹氏

氏は明治二十年八月十三日、石川縣下に生る。本名を丹次といひ、橋向吉次氏の六男である。

氏は金澤中學を卒業、爾後、加賀、奈良、京都、東京等の各地において、池坊、遠州流、古流等を研究すること多年、各流の奥儀を極めるに至つた。東上したのは明治四十四年で、子弟の養成に專心するの傍ら苦心研究、各派の長を採り短を補ひ、以つて獨自の境地を打開し、更らに教授法に一新機軸を出して、つひに大正五年九月故宮根理信先生の推賞名命により古流秀陽派なる一派樹立し、その宗家となつた。

現に社中によつて組織する花明會々長、邦藝協會講師として、當流の普及、華道の振興に努力を傾注しつゝある。

氏の花道に對する理想は、左の如し。

『現代の生花は、時勢の變遷に伴ひ、漸くその精神を沒却して、虛威虛飾の末技に走るの傾向にあり。予、中學時代より二十餘年茶華道に精進し、普く各流を渉獵して、その眞髓を極め大悟する處あり、つひに一派を創成するに至れり。元來生花の道は、植物學、科學、經濟、美術、體育、風流、宗教等に亘り、精神の修養、宇宙大自然の攝理等の渾然とせる綜合的大道なり。故に教育の淵源は斯道にありといふべく、從つて花道學を修め、その技術を磨き、以つて智能を誘導し、美德を發揚して、世の進運による國民精神に及ぼす俗習を除去し、修業によつて得たる趣味修養ある精神的藝術の表現を以つてその理想とす。一面現代の趨勢に鑑み、速成的教授法と心身の改造の必要を感じ、こゝに學理實地照合速進主義、秘傳開放主義、相互研究主義、貧富無別公平主義、心身矯正主義、言行一致主義、和敬清寂主

橋向理丹氏作

義、健康增進主義、一律實情主義等に順道して、その改善を圖り、系統的組織的に、清純な感受性と、敏感な神經と、正確なる認識力を得せしむるにあり。これ予の永年苦辛の賜に外ならず、實に斯の道は、國民精神の精華にして人生欠くべからざる尊き藝術なり。これを誤ることなく普及し、その德を周く享受せしめことを切に希ふものなり。」云々。

氏は大正七年研磨の法、所望付廻り花、瓶點式抹茶の各式を案出したが、これ氏の理想する茶花道速成の祕法であるといふ。なほ茶道は裏千家を學びて、これが教授である外、書道、盆石、圍碁、謠曲、擊劍(四級)俳句等に達し、頗る多才多能の士である。

花活ける手許のそへや蝶一つ
雪の日にひとり顏なる寒椿
掛筒のくちより香る梅の花
初生や菊に千兩に松一樹

以上は氏の近業である。(東京市外巢鴨町字平松一二五〇番地)

東山新流花道教授
石州流茶道師範
鶴松齋 谷口慶子女史

谷口慶子女史

女史は明治二十年三月、岡山縣上道郡西大寺町、舊池田藩士伊原亭二氏の二女として生る。

女史は明治四十二年四月初めて華道東山新流總師範代高田清朋氏の門に入り、大正二年十一月初傳生華譜要訣を受け、同七年十月家元菅生松朋氏より齋號を免許、三光之卷を授與され、同時に家元直弟子として入門した。同八年五月奥傳童陽之卷を受け、準師範代に任ぜられ、翌九年五月師範代となつた。

同十一年五月、大阪市大阪市立西條裁縫女學校教員囑託華道教授擔任、同十二年三月同校が家政女學校に變更されるや、引續き教授を擔任して、十三年三月まで在任してゐた。

昭和二年十月副總師範代に任ぜられ、昭和三年十二月大禮奉祝交通電氣博覽會に生花を出瓶、大阪市長より感謝狀を授與された。

夫君谷口盤若麿氏は、鹿兒島島津藩士、元大阪消防署長を勤め、現在大阪朝日新聞社庶務課長の要地にある人、仲に長女照子(明治三十九年生)二女澄子の二嬢がある。照子嬢は親愛女學校出身の才媛である。(大阪市北區玉江町二丁目七番地)

松月派古流華道教授
松容庵 鶴間靜子女史

女史は、東京小石川初音町の生れである。鶴間藤太郎氏の女であり、母堂を民子といふ。

小石川柳町小學校を卒へ、次いで京華高等女學校を卒業す。

大正十四年より松月派古流家元磯前一枝先生の門に入りて、斯道の研究に入り、頭來孜々として研修の功を積み、昭和三年十一月師範を免許されるに至つた。

性質溫厚にして容姿端麗、加ふるに技術優秀、稀に見る才媛である。

女史は何れの花にも優秀であるが、就中、優美なる花を得意とす。

家は洋品店を經營して資豊かに兩親および姉妹二人あり、清福に滿てる家庭である。(東京市小石川區初音町九番地)

松月派古流華道教授
松晴庵 石田貞子女史

石田貞子女史

女史は明治四十年十二月二十七日、東京小石川初音町に生る。

父君は早く歿し、母堂の手にて愛育され、叔德高女を卒業した。

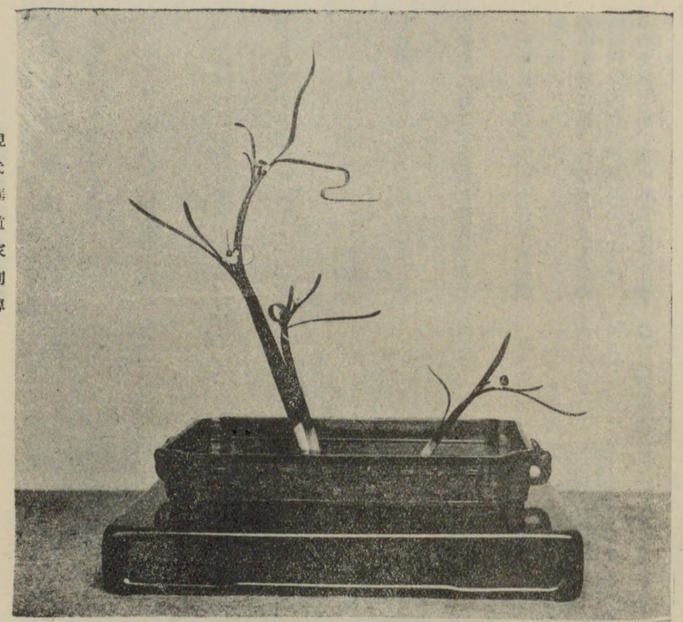
大正十二年より松月派古流家元磯前一枝先生の門に入り、初めて華道に志す。

明敏の頭腦、聰明の質、從つて技倆の進歩も著しきものあり、家元においても特に嘱目して教導し、累進して現に師範の職にある。

女史は何れの花にても、可ならざるはなき多才での閨秀であるといふ。

餘技として琴曲を山田流安原歌津和先生に學び、名を伊津和と稱して、現に教授をなしつゝある。

前途に富める閨秀斯道家として同門において嘱望されてゐる。(東京市小石川區初音町八番地)



山本鶴甫女史作

縫雲未生流華道師範
表千家流茶道教授
絲雅齋 山本鶴甫女史

女史は明治四十三年一月三十日廣島縣比波郡庄原町に生る。山本代次郎氏の長女であつて、本名を鶴代といふ。

女史は鄉里の小學校を卒へて後大阪市立都嶋補習學校に入りて卒業す。

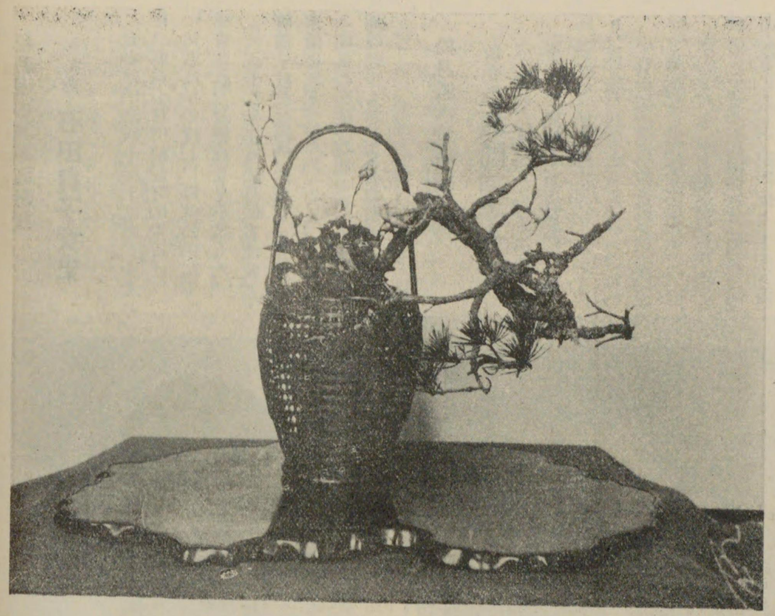
華道に入つたのは、大正十四年からで、師は、絲雲未生流家元横田茂甫先生であつた。爾來、熱心に研究を積み、累進してその奥儀を極はめ、現に家元師範の地位に在る。

山本鶴甫女史

茶道は表千家を同じく横田先生について學び、師範となつた。

餘技としては、專ら長唄に傾倒し、頗る堪能であるといふ。

女史は同門師範中にあつても、最も春秋に富む人である。加ふるに、天賦の花才と相俟つて、研究に熱心なる、その將來の大成を嘱目されてゐる。(大阪市北區澤上江町四丁目九十六番地)



井筒稔甫女史作

縫雲未生流華道教授
絲曉齋 井筒稔甫女史

女史は明治三十五年一月十四日德島縣勝浦郡小松島に生る。本名稔子、井筒勇藏氏の女である。生家は鄉里德島における材木商として知らる。

女史は、幼少より華道に志しがあり、しかもその師を得るの機會なくして過ぎたが、たまたま縫雲未生流家元横田茂甫先生の技風を知るに及び、深くこれに傾倒して、その門に入つた。その優れたる花才と修道の熱烈なる幾何ならずして技術大に進み、累進して家元師範となり、以つて今日に至つた。前途に富む一人である。

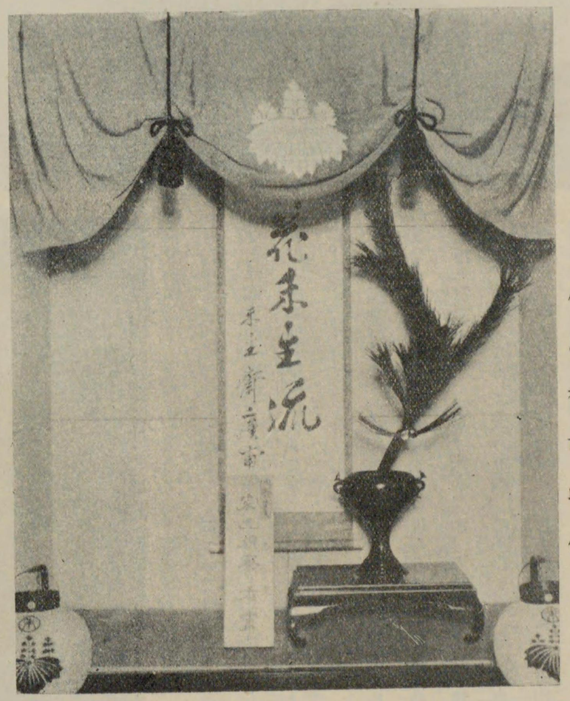
別に、長唄を杵屋正隆氏につき、舞踊を極光氏について修業し、何れも至藝の域に入つてゐる。

同門中の光彩ある閨秀である。(奈良縣生駒込郡生駒町大字谷田)

井筒稔甫女史

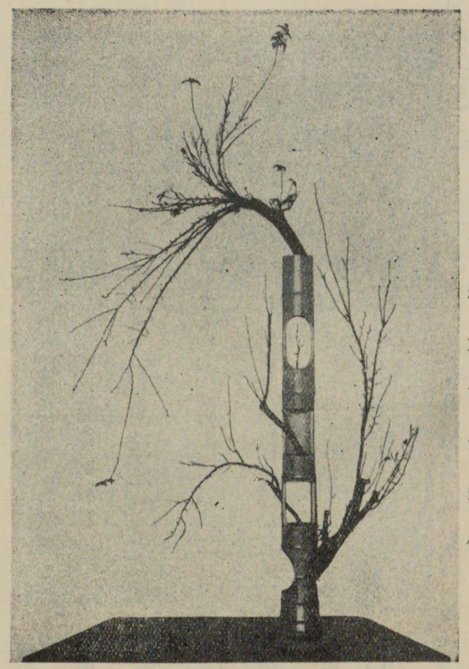
未生流華道
名古屋未生會々長
未原齋 小島有甫氏

氏は明治六年岐阜市に生まる。幼少の頃より花技に親しみ、青年にして既に一家をなした。明治四十年頃、家元より命ぜられて五畿内視察に赴き、京都に滯在すること七年に及び、大正十二年家元視察の要職に推され現在に及んでゐるのであるが、現に名古屋未生會會長として、同市における流派の普及のため多大の努力をなしつゝある、卽ち同市未生流の隆盛なるは、氏が熱心なる努力によるのである。今日まで養成した門弟は數百人に及んでゐるといふ。(名古屋市東區石神堂町四七)



小島有甫氏作

白菊にまかせて夜の黃菊かな　窓雪
曉はおのれに戻る黃菊かな　不角
靑々と黃菊めでたき莖葉かな　去何
人からも古風になりて黃菊かな　史郎
小家つゞき垣根々々の黃菊かな　牧童



未生流華道教授
同家元准目代
表千家流茶道師範
廣松齋 西村東甫女史

女史は明治十年一月十五日、岡山縣御津郡芳田村に生る。本名を多喜子、茶名を敬月と號す。西村勘十郎氏の女である。

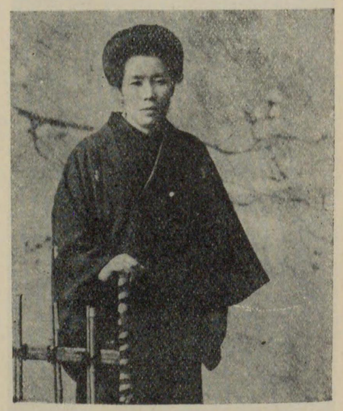
女史は十六七の頃、祖父の家に在つて、花道の門に入つた。その後次第に趣味を加へ來り、研究を續けてゐたが、二十七歳の時より、未生流師範栃谷廣玄齋先生の門に入つて、いよいよ專心研究に從ふことになつたのである。當時栃谷氏は、當流の名手として嘖々の名があつたばかりでなく、稀に見る人格者として、一世の敬慕を受けてゐた人であつた。

かくて、研修努めて倦まず、七年の後許されて師範代となつた。入門以來二十六七年の間、不斷の精進と門下の養成に努力し、その間職役も那會頭、准國會頭、國會頭、准總國會頭等を經て、昭和三年四月、家元准目代職の高位に就くこととなり、門下の數も千餘名を算するに至つたのである。

女史は社中および廣く流内の婦人を糾合して、未生婦人會なる團體を組織し、自らその統帥者となつて、品性の向上、修養等に資すると共に、毎月集る會費の内、三分の一を積み立て、以つて、社會事業に寄附してゐる。又女史個人として、一週二回金光教大阪難波婦人會々員千二百餘名に對し、無料教授を行ふ等、頗る篤行が多いので、その名聲はいよ〳〵よ揚るに至つた。

又、社中の團體としては敬松會を設け、春秋二回大會を催し、專ら花道茶道の研究向上を期してゐるのである。

『婦人德性の涵養と向上とには、華道および茶道の修業が、最も適當なものであると思ひます。特に



西村東甫女史

わが國民性の長所を發揮するためには、華道茶道の教へを遵奉することが、その目的を達成し完成せしむる所以であると信じます。それで、私は常に斯道によつて子弟を教導するのには、先づ自己の身を修め、而して誠心誠意を以つて、お互に相携へて自己の品性と德性の向上に努めなければならぬと思つてゐます。これが斯道の眞髓であると信じ、これに悖らぬやうにやつて行くことを常に心がけてゐる次第です』

これが、女史の斯道に對して抱く、信念である。

なほ女史は兵庫縣有馬郡三輪町女子補習學校に、每週斯道の教授に出張してゐる。

蓋し、女史は當流の權威であるばかりでなく、大阪斯界の女流として最も傑出せる一人である。(大阪市東區釣鐘町一丁目十七番地)

昭和古流華道教授
昭和花道會幹事
松風齋 淺沼理歲女史

淺沼理歲女史

女史は明治三十年七月一日、靜岡縣加茂郡白濱村原田藤井助三郎氏の二女として生まる。生家は代々の豪家、嚴父は數年前まで、小學校々長の職にあり、育英のために盡す處多かつた人である。

女史は高等小學を卒業後、家庭にあつて家事に從ひ、傍ら華道および文學の研究に專心した。華道の師は昭和古流家元松富齋上野理清先生で、精勵幾何ならずして拔術の進歩齊輩を拔き、師の囑目する處となつた。

後、神田錦町淺沼實氏に嫁し、よく良妻賢母としての責を果すと共に、一層華道の修業に精進し、上野先生が昭和古流家元開基の際、先年中央新聞社が全國挿花十傑投票募集の際等、同派幹事として大に活動し、師をして十傑の首位を獲得せしむるに至つた。現に家元を補佐し、昭和花道會の牛耳を執り、當流のため將又斯界のため、盡す處が多いのである。(東京市神田區錦町二丁目十二番地)

利休古流華道教授
泉心庵 吉澤照月女史

吉澤照月女史作

現代華道家列傳

女史は明治二十七年七月十四日東京龜井戸に生る。本名はま子、風間谷吉氏の四女である。

後、吉澤秋之介氏に嫁す。

吉澤照月女史

女史は龜井戸高等小學を卒業し後專ら家事に從ふ。

華道は大正元年より、利休古流家元榮心庵新谷傾月先生に師事し、日夜勉勵して、同五年皆傳となつた。それ以來、門弟の養成に力を致し、自宅の外出張所を設け、且つ出稽古にも精勵して、斯道の普及振興に席暖るの暇がない。又、家元の研究會洗心會々頭として、多くの門葉を指導し、且つ自らその技を磨くに專心してゐる。

別に茶道、三味線等を修め、何れも堪能である。

家庭には夫君秋之介氏並に長子義一君が居り、秋之介氏は會社員として信用厚し。(東京市本所區北新町)

思ふどち其處とも知らず行き暮れぬ花の宿かせ野邊の鶯　(藤原家隆)

◎

雨重し地に這ふ菊を先折らん　其角

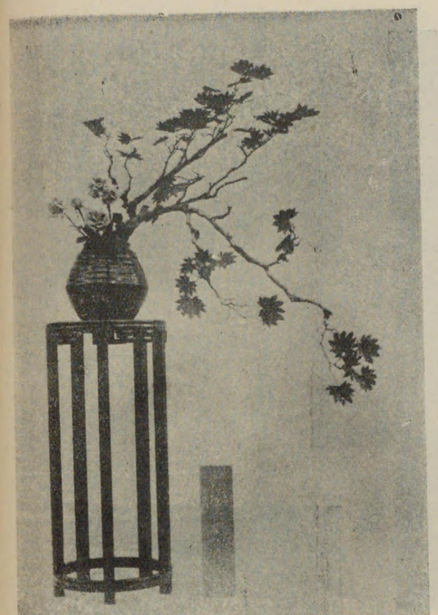
◎

うす色や花にしぐれし秋の菊　宵柏

◎

樂しさや二夜の月に菊そへて　素堂

利休古流華道教授
泉松庵 **深澤蝶月女史**



深澤蝶月女史作

女史は明治三十四年九月二十三日、東京府下大島町に生る。本名を喜代、深澤力藏氏の長女である。母をぎん子といひ代々農を業とし大島の舊家として知らる。

女史は大島高等小學校を卒業して、大正七年泉心庵吉澤照月女史について、利休古流華道の研究に從ふたのである。

爾來、研修孜々として怠らず、大正十二年十一月皆傳を許され、現に家元目代職として當流のために盡す處多し。

深澤蝶月女史

夫君勝男氏、母堂三人の平和なる家庭である。（東京府下大島町七ノ四五八番地）

女史得意の技は投入れ、家元研究機關洗心會においては數回に亘り入賞したことがある。

趣味としては三味線、オルガン一等音樂に長じてゐる。

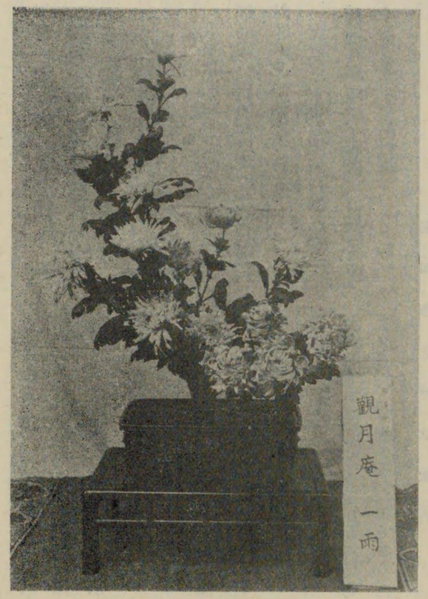
又、茶道にも精進して夙に一家を成す。

◎

やま人の折る柚匂ふ菊のつゆうち拂ふにも千代は經ぬべし　（藤原俊成）

花誘ふ比良の山風吹きにけり漕ぎ行く舟のあと見ゆるまで　（宮内卿）

古遠州流華道教授
小原流國風會々員
觀月庵 **山口一雨女史**



山口一雨女史作

女史は文久三年、新潟縣下に生る。本名を袖子といふ。

女史は幼にして華道に趣味を持ち、これが修業に志したが、その最初は池坊であつた。

それから、明治二十五年頃より、古遠州流の門に入り、爾來、その蘊奥を極はめ、今日に至つた。現に同流家元補佐の要職に在る。

その間、時勢の趨く處に從ひ、小原流盛花の研究をも志し、その奥儀を得て、現に小原流國風會々員である。

茶道は古遠州流華道と同時に、その修業に從つた。流派は表千家流で夙に教授となり、號を孤山庵美袖といふ。

山口一雨女史作

女史は現に、米穀業を盛大に營み、財豊かにして爲人溫雅、華道は專ら趣味を本意として、後進を導き且つ自ら樂しんでゐるのである。

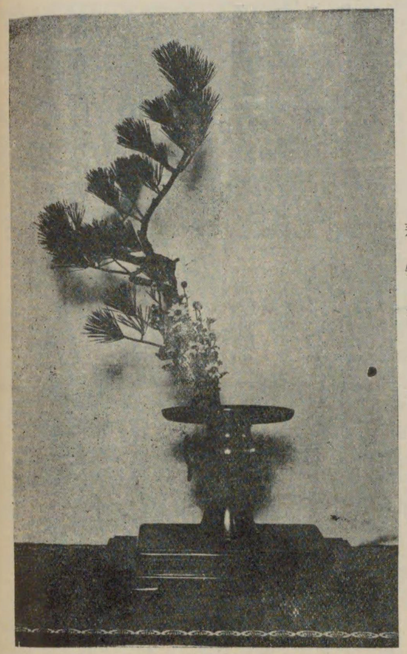
女史の夫君故山口留吉氏は、公共自治のために盡す處頗る多く、かつて、市會議員、區會議員等その他の要職に推されてゐた。が、先年故人となつしたのは惜しむべき限りである。

（東京市芝區神谷町六番地、電話芝一四四一番）

日本生花司
松月堂古流華道教授
日本准總會頭
竹成庵 **飛知和とみ女史**

女史は明治十七年二月十二日、福島縣西白河郡白河町に生る。小針又八氏の三女である。

女史は小學を鄉里に學んだが、成績常に拔群、縣廳より賞狀を受くる一再でなかつた。



飛知和とみ女史作

花は上京後の明治四十三年五月より松月堂古流を窪西露香庵先生に學び、同氏の死後前田竹精軒宗匠について、研修大に努めたが、前田氏名古屋に歸ることになるや、女史の後事を宮田宗興氏に依囑したので、同先生について、更らに研修を積んだのである。

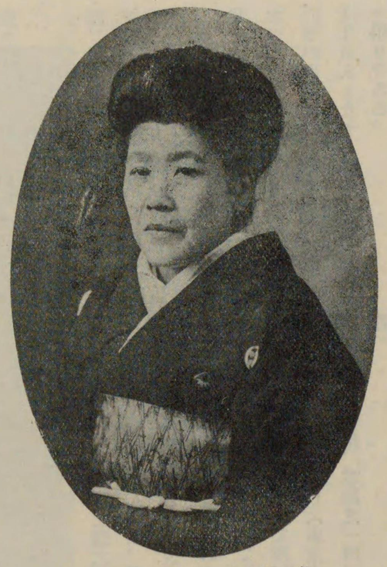
尤も、女史が花道に志したのは、上京前即ち故鄉にある頃からであつた。が、片田舍のことであるため、ただ母堂のみの許しを受け人目を避けて師につき、夜を徹して修業したといふ。以つて女史が如何に華道に對して、天性的であるかを知ることが出來る。その當時學んだ流派は遠州流であつた。

茶道は吉田古樂軒につき、松尾流茶道を修め、それ以前においても、表千家を人知れず修業する處があつた。

女史はすべての花を特意とするが、別して蘭に巧みである。

尙、女史は昭和三年十一月、御大典に際し、家元に隨從京都御所に獻花の光榮に浴す。

家庭には令息正男君（大正三年生）長女千代子嬢（同九年生）の一男一女あり、正男君は關東中學に在學中である。（橫濱市中區本牧町宮原八一三番地）



飛知和とみ女史

古流御家派生花教授
御家派盛花投入師範
松蔭齋 **高橋理照女史**

女史本名照子、明治二十七年五月十日岩手縣稗貫郡新堀村に生る。父君は高橋誠一郎氏、かつて埼玉縣官房主事を歷任し、現に愛國婦人會部長の職にある。

女史は一の關小學を經て、埼玉縣立高等女學校を卒業し、更らに鹿兒島縣鶴峰高等女學校補習科を卒へた。

女史の母堂元子刀自は、既に故人となつたが、古流の皆傳者として、幼少より女史を指導したので、夙に技倆の見るべきものがあつた。かくて大正十一年古流御家派の門に入つたのであるが、その淺からざる素養と優秀の技倆は、直ちに師の認むる處となり、同十五年四月皆傳教授免許となつた。

爾來花道松の會に出席、技いよいよ圓熟、現に同會の幹事長、家元總司の要位に居る。茶道は大正十四年以來裏千家を學び、現に助教授である。

女史は花道に對する抱負について次の如く述べる。

『家元の教授を受け、大正十五年以來教授職として末席を汚し、傍ら恩師につき化學的に水揚法を研究、斯道のため聊か微力を致してをります。がその種類多岐多樣に涉り、前途却々容易のことではありません。思ふに先輩諸先生の斯道に盡されしもの多々ありませうが、元來が個人教授の關係上一般に知悉せしむるまでには、幾多の障碍があり、修得するに容易でないのは、つまり教授上の欠缺と思はれます。願くばこの弊習を根本より改革し、理論と技術と並進の方法を講じ、又一面には各流派より優秀なる先生方を選拔して、審査員を設け、畫壇における帝展或は院展の如き制度に倣ひ、人格の向上と技術の進步を圖り教授方は一定の資格者より、選任せしむること、恰も檢定の如くせば、斯道の發展上最も意義あることと存じます』

眞に堂々の識見といふべきだ。

女史は生田流琴曲を高野檢校について研修、大正十四年奧傳を許され、又文藝の嗜み深く、就中短歌の才に長けてゐる。

高橋理照女史

子　犬

脅してもおこりてもなほ逃げやらぬ子犬の額をつくづくと見つもろこし

かりそめに種おろしたるもろこしの廣葉しげりて風に騷げる

櫻　苗

去年の春背戶にうゑたる櫻苗けふ子雀の宿りてゆきし

その格調の自然にして巧妙、餘韻の嫋々として偶意の深き、女史が凡々たる月並歌人にあらざるを知るに足るではないか。

夫君武秀氏は、國際汽船株式會社エトナ丸機關長である。（東京市外澁谷町代官山二五番地）

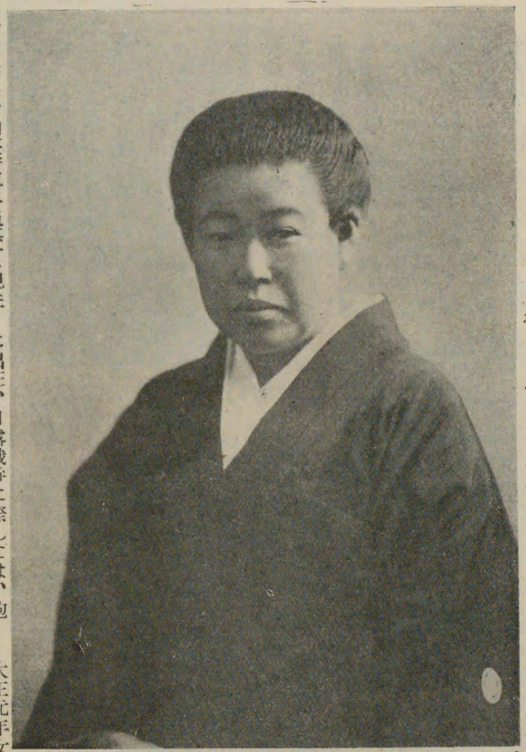
小原流盛花瓶華教授
同　一葉會々長
同國風會理事
平　一鶯女史

女史は山形縣東置賜郡和田村の人、明治六年六月十七日を以つて生る。本名駒子、平榊五郎氏の長女である。東都斯界の一權威として、その名最も顯はる。

女史の生地は、三方山に圍繞された全くの僻村であつて、往昔平家の一族が逃れて、住んだものである。而して、同地の平數衛家は、その首長にして豪家、連綿今日に及んでゐるが、女史の家は同家より祖父の代において、分家したものである。

嚴父榊五郎氏は、農を主としながら、一面村の村吏として自治共公の爲めに盡すと共に、風流の道を解して、遠州流の生花、茶の湯等に達し、閑月日を樂しむの士であつた。

されば、女史は九歲の頃から、父によつて遠州流生花並に數の內流茶道を修め、十三歲にして勉學のため仙臺に出で、織田家の家臣高橋元次氏の許にあつて、小學補習科を卒へ、更らに松操學校に學び、次いで仙臺實科女學校（現在の高等女學校の前身）を卒業した。後家庭の人となつたが、この間同地の本名一洗氏について、古遠州流華道を修得すると共に、同師の母堂一茶先生について、裏千家茶道を究むる處があつた。



平　一鶯女史

なほ、女史の夫君平繁治氏は、軍人であつて、日清、日露の戰役に出征、日露戰爭に際しては、砲彈によつて名譽の負傷をなし、これが原因して明治四十年二月、年四十にして仙臺に歿した。當時陸軍大尉の職にあつた。

かくて、未亡人となつた女史は、當時七人の子女を抱へてゐたので直ちに華道教授を始め、以つて自活の道を樹てたのであるが、女史の纖手によつて、七人の子女を養育することは、容易なことではなかつた。しかも、女史はあらゆる困難に直面しつゝも不撓の覺悟を以つてこれに打ち克たんと努力し、女史の健氣なる奮鬪は、漸く世の同情を集め、その門に入るもの陸續として相次ぐに至り、更らに女學校、婦人團體等の教授をも委託され、遂次隆盛的の人氣を得ることが出來た。

大正元年女史は、茶華道の修業を志し、先づ京阪地方に赴き、茶道を裏千家京都家元千宗室宗匠に學び、同時に小原流初代家元六合軒雲心宗匠に師事して、具さに修道の功を積んだ。かくして大正二年同流の教授となり、仙臺に歸つて、大に斯流の發展開發に資する處があつた。

後、——大正六年春、一家を擧げて東京に移住し、四谷に居を卜して、斯道の普及に盡す處あり、更らに震災の年、現住所に移り、門下を養ふこと多數、今日の盛名を謳はれるに至つた。女史の社中は名門貴族の子女頗る多く、現に德川喜久子姬の如きも、女史の社中であるといふ。

女史は昭和四年三月寫眞帖『一鶯集』を發刊したが、その序文を左に引用する。蓋し、女史の謙虛な人と爲りを窺ふことが出來るからである。

『顧みますれば、私が華道の教授に携はるやうになりましてから早くも二十四年の歲月がたちました。幸にもよき時勢の機運に投じ、小原流の日進月歩の發展の流れに沿ふて、走り來ることの出來ましたのは、たゞ〳〵感謝の外はないのでございます。昨秋御大典のみぎり、先代雲心宗匠追憶のため盛花塔建碑式を營み、つゞいて奉祝挿花全國大會の開かれました席上におきまして、家元光雲宗匠より數ならぬものへ表彰を給はりましたことは、まことに身に餘る光榮でございました。かやうな次第にて、此度びいさゝかの紀念にもと折にふれて取り集め置きました、寫眞をまとめました。』云々。

小原流盛花瓶華教授
平　光波女史

女史は明治三十年四月十五日、仙臺に生る。平一鶯先生の女であり、本名を千代惠といふ。宮城縣立女學校の出身である。

女史は八歲の頃より、母堂一鶯女史について、茶華道を學び、女學校を卒へて後、茶道修業のため京都に赴き、裏千家家元千宗室宗匠について研修、その蘊奧を極めた。

又、華道は大正四年春、大阪において小原流家元小原光雲宗匠に師事して、その奧儀を極め、爾來、母堂と共に專ら當流のために精進の一路を辿つて來た。

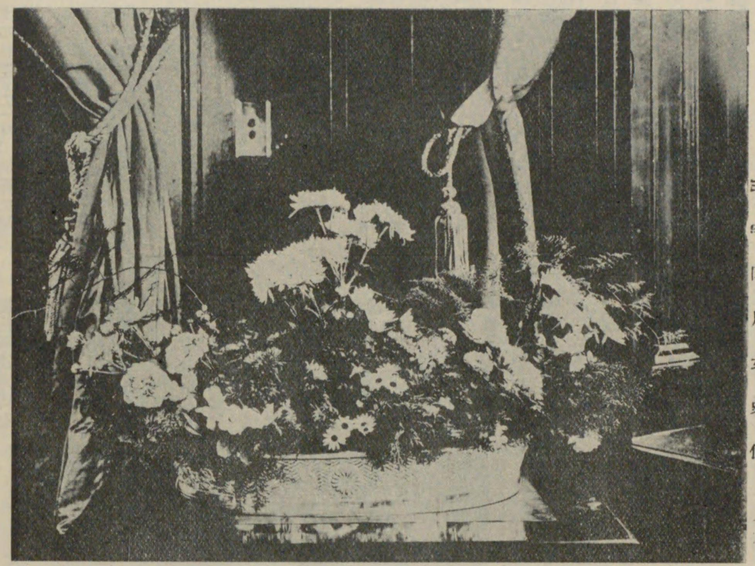
母堂の好後繼者として嘱望さる

平　光波女史

設け、その會長である外、別に翠會を設けて主宰してゐる。

七人の子女は一人夭折したのみで、何れも一家をなし、家には一女光波女史あり、女史を援けて、斯道のために精勵しつゝある。

（東京市外西巢鴨町宮仲二〇五〇）



島津公爵家入門後女史の作品

池坊華道教授
同大日本總華督
萬華園　三宅閑月女史

女史は明治八年七月廿八日、廣島縣福山市古吉津、山村房舍氏二女として生まれ、本名八重といふ。後ち三宅家の養女となりて分家す明治二十二年三月、岡山縣笠岡高等小學校を卒業し、同四月、同校裁縫補習科に入り、同二十四年三月同校を卒業す。

華道は初め、明治十九年七月、岡山縣小田郡笠岡町津田光純師に入門し、後ち明治廿七年三月、福山市において池坊華道教授清水坊相準師の門に入り、斯道を研究し、明治三十五年六月渡臺し、臺北において華道の教授を始め、今日に及んでゐるのであるが、この間職役は、明治卅七年十月准會頭職に、大正八年十一月大日本華督（女史として華督を受くるの初め）に、大正九年五月大日本准總華督に、同年十月大日本總華督に進み、大正十年七月繼輿相傳を受くるに至つた。

女史が今日までの學校方面における華道教授の閲歴を見るに、明治四十年九月、臺灣總督府中學校附設高等女學校教務囑託を命ぜられたるを初めとし、同四十二年臺灣總督府高等女學校教務囑託、ついで大正十一年四月、臺北州立第二高等女學校教務囑託を命ぜられ引續き今日に及んでゐるのである。

三宅閑月女史

又、女史が華道家として畏きあたりの御台覽の光榮に浴したる數々を記せば、明治四十一年十月廿二日臺灣縱貫鐵道開通式に閑院宮殿下御台臨、臺灣總督府中學校に御成、御休憩所に生花二瓶、大正五年四月十六日臺灣總督府主催共進會に際し、閑院宮同妃兩殿下御台臨の節御泊所總督官邸に投入盛花數瓶、同時愛國婦人會臺灣支部御成の節御休憩所に盛花投入五瓶同貴賓館御休憩所に投入一瓶、大正六年十月廿二日、北白川宮同妃兩殿下御台臨の際御泊所總督官邸に裝飾用生花投入盛花卓花數瓶、同時博物館に御成の際玄關に大投入二瓶、大正九年十月廿日、久邇宮同妃兩殿下御台臨の際、御泊所總督官邸に裝飾用生花投入盛花卓花數瓶を謹挿し、其他十二年皇太子殿下御台臨、大正十四年秩父宮殿下大正十五年高松宮殿下、同十五年北白川宮大妃殿下、昭和二年朝香宮殿下、昭和三年久邇宮殿下御台臨に際しては常に御泊所に挿花を謹挿して、台覽の光榮に浴してゐる。

得意の花は萬年青及び卓上盛花にして、社中は千五百名に達し、内教授職二十七名を出してゐる、華道の外茶の湯並に謠曲に堪能である。大正三年十一月諸流聯合臺灣華道會の設立を發起盡力し現に其幹部である。また昭和三年七月池坊臺北親睦聯合會を發起組織して益々流派の發展に努めてゐる。家庭は愛孫及び令妹親子の四人にして至つて平和である。（臺北市北門町十番地）

家元池坊花道　教授
廣山流投入盛花教授
玉舟軒　**榎本碧汀女史**

女史は、明治十二年十二月十六日横濱市に生る。山山留吉氏の女であつて、母はりせ子、女史は本名せき子である。後榎本家へ嫁す。

榎本碧汀女史

明治三十五年、横濱市において、池坊花道師範玉榮軒態齋氏の門に入り、斯道を學び皆傳を得、同四十三年より教授となつて、子弟を教養す。その後、大正二年十月、現池坊東京紫雲會長岡田廣山先生に就き、大正三年脇教授、同五年正教授、同七年簱を得、同十年大日本總執事となり、更らに大日本生花總會頭となる。別に裏千家茶道の教授である。

女史は、十數年前、斯流開發のため、初めて催された横濱池坊大會以來、春秋二季の花會に際し、盡力する所多く、同流派横濱發展の上に、頗る功勞があつたので、職役の多くは、何れもその功により、廣山先生の推擧によつて、賜られたものであつた。大正元年横濱池坊清正會の創立されるや、爾來理事として現在に至る外、池坊東京紫雲會碧汀社々長として、多くの門弟を養ひ、その内數十人の外人社中がある。

母堂しん子刀自（八十二才）の外長男壽美雄氏（三〇才）長女靜子嬢（二二才）次男八郎氏（二〇才）の二男一女あり、長女靜子嬢は、神奈川縣立高等女學校の出身、靜窓園と號し、池坊花道に通じ、大阪西區梅本町大村家に嫁す。（横濱市中區西戸部七七八番地）

正風遠州流華道教授
貞安齋 小倉小一啓氏

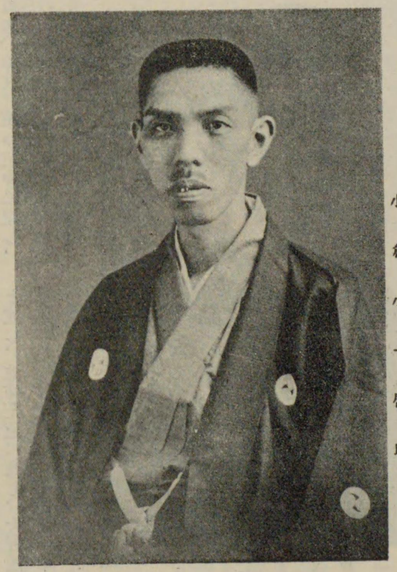
小倉小一啓氏作

氏は明治二十二年、東京市芝區南佐久間町二丁目に生まる。本名を啓之助と稱す。普通學を卒へて後、明治三十八年五月、十六歳にして正風遠州流宗家五世貞松齋米一馬師の門に入り華道を學ぶ。大正五年十一月齋號免許、大正九年十一月準師範、大正十五年四月六世貞松齋米一馬師より師範を免許され、華道教授として今日に至つた。

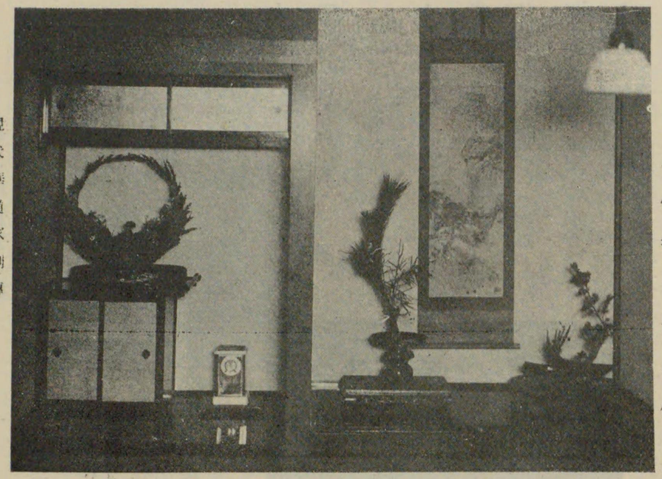
氏が華道に對する意見としては『現今しきりに、新しいといふ事にのみ流れ、古きを忘れ勝ちにならんとしつゝあることは憂ふべきであると思ひます。わが華道は何流何派たるを問はず、その固有の精神に從つて正しくこれを民衆に傳へてゆきたいと思ひます』と云つてゐる。蓋し輕浮なる一派の華道家が邪道に陷れるを慨して言へるものであらう。

氏は家業として賣藥商をいとなみ、業務の餘暇を以て、子弟の教導に從事してゐるが、既に優秀なる門下多數を出してゐるといふ。

家庭は實母、夫人との間に子女數名あり、至極平和である。(東京府下荏原町中延四七八)



小倉小一啓氏



上條香月女史作

眞派青山流
第十二世總務
雲林齋 上條香月女史

女史は明治十八年二月十日長野縣松本市に生まる。松本高等女學校を卒業後、東都の學舍に學び、中等教員の免許狀を得て東京、岐阜等の高等女學校に奉職し、後退いて專ら華道に入り、こゝに多年の宿望を遂ぐることとなつた。

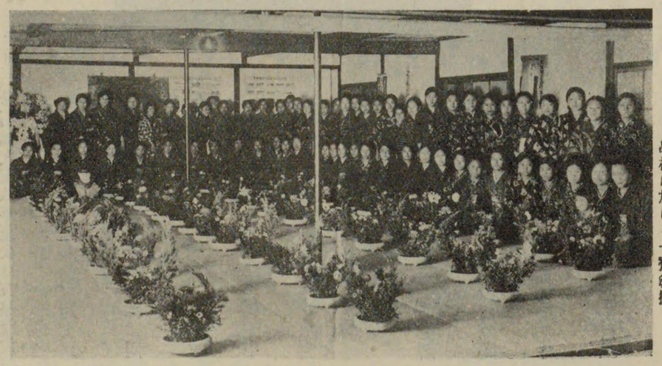
女史が華道家として立つようになつてからは、熱心に斯道を修練し、その獨得の新らしき花型は、廣く世間に迎へられ松本地方だけにても現に八百餘名の門下を有し、野尻、福島、大町、一日市場、淺間、倭、波多、村井、岡谷外六ケ所を根據として專ら嫩人會、學校等に出張教授をなし、其他全國に二十七ケ所の支部を設け大に活躍を續けて居る。

女史は華道の外、小笠原流禮式の元祖たる小笠原清務氏の家塾において禮法の蘊奥をきはめ、茶の湯を清風庵に學び、盆景をよくす。

曾て同地方における特別大演習の際、竹田宮、北白川宮に御給仕をつとめ、又閑院宮殿下が御成りの節拜謁を賜はりたることあり、其外久邇宮殿下が宮城縣地方へ御成りの節松島瑞巖寺白書院の御座所を飾りてお待申上げたるなど幾多の光榮に浴したことがある。

女史は又、生花水揚法及び花配りにつきて多年研究をつゞけ、その結果、大正十二年六月八日特許局長より第七〇七三二號を以て花配の特許を受け今日斯道家の便益となつてゐる。

夫君藤幸氏は公立實業學校長として、多年教育に盡瘁し、一子昌幸君は昭和四年皇學館を卒業、頗る文才ありといふ。(長野縣松本市北深志旭町)



學校に於ける一齋教授

東山新流華道教授
石州流茶道教授
玉泉流盆石師範
靜瑞齋 小澤圓子女史

女史は明治二十一年九月三十日大阪市北區立田町に生る。小澤松三郎氏の長女である。

明治二十八年京都府高等女學校を卒業、同二十九年大阪の國學者敷田年治先生の門に學び、師翁後は藤村叡運老師について修學、同三十四年十一月東京大日本女學會を卒業した。

花道には同四十三年より志し、東山新流家元菅生鶴照齋先生の門に入り、同四十四年十月當流憲章により、生華識要訣を授與され、同四十四年十月生華三光之巻を授與され、同時に齋號を許された。同四十五年二月準師範代に任ぜられ、大正二年九月師範代に進み、同年十一月に至つた。

小澤圓子女史

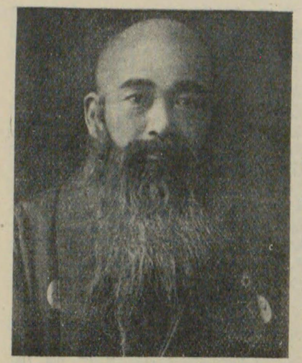
又、茶道は明治四十三年より石州流を學び、大正五年四月小習相傳證を受け、同六年五月、副總師範代に累進、同九年九月總師範代となつた。

この間明治四十四年九月より、月奥傳生華薫陽之巻を授與され、師の助手として西區女子手藝學校に生花を教授し、後市立西華高等女學校の教授を擔當し、以つて今日に至つた。

盆石は大正八年夏より玉泉流家元安井玉泉氏の門に入り、同十三年春教導雅稱號玉圓を許され、同時に家元より持授の巻兩巻深奥之巻一巻を授與され、引續き研究中である。又、煎茶は花月庵流を講究して、一家を成す。

除技としては長唄、歌澤、日本畫等を好くし、夫君仙太郎氏との間に二人の子女があり、伉儷睦じ。

（大阪市天王寺區上本町七丁目二十七番地）



加藤一照氏

孤蓬遠州流五世旭松齋目代
大和直心流二世家元
旭靜齋 加藤一照氏

氏は本名を加藤唯次と稱し、栃木縣安蘇郡堀米町に生まる。氏の高祖は元、武を以て立つたのであつたが、享保二年現在の地に居を構へ、代々神道の職にあり、弓劍道と共に華道は遠州流が傳はつてゐた。

氏の父隨晃軒誠中本名加藤源次氏は大和流弓道、無眼流劍道、遠州流華道の各免許を得て、子弟の訓育に努めてゐたので、氏も幼少より劍を學ぶの傍ら、父隨晃軒伯父靜月齋一棄師について華道を學び、明治三十三年一月當流免許を授けられた。氏が之を受くるに當り、先師は教ふるに先哲の遺訓を以てし、諸道歸一、宜しく大和民族固有の大和魂を練磨修養に努め、圓滿豁達なる氣品を養ひ、君國の恩德に報謝獻身の實を擧げよと、大和心の直なるを以て流名に冠し、之を氏に傳へた、之れ當流の起源であるといふ。

既に一流を得たる氏は、更に足利において孤蓬遠州流五世家元旭松齋一蓮師の門に遊び、そ の短を補ひ、明治三十五年、同流の皆傳を得て師範となり、次いで家元目代に補せらるるに至つたのである。

氏が最初華道に志したのは自己修養の目的であつて他を導くの意などは全然なかつたが、同好の士氏を迎ふるの切なるものがあつたので、氏もついに辭し難く、明治三十三年四月、佐野花友會なる華道修養の道場が同志の盡力によつて成るに及び、氏は教授の勞を取ることとなり、現今に繼續してゐる。又氏は明治四十二年四月、佐野高等女學校華道教授を囑託せられ、爾來今日に及び、何れも熱心に子弟の教養に任じてゐる。而して門弟今や七百名に達すといふ。昭和三年五月栃木縣立佐野高等女學校八千代會は創立二十週年記念として氏に感謝狀に添えて銀盃を贈つた。

加藤一照氏作

氏が花道に對して常に戒めて云へるは『心常に直かれ、心直ければ影また正し、影のまがれるを恥ぢて、心を正しうすべし、まこと華道に遊ぶもの、宜しく直を養うて害ふ事なく、神人合一の境に達せん哉。』至言といふ可であらう。

家庭は夫人菊子との間に一男二女あり、長女滿知子二女壽美子いづれも佐野高女を卒へ、他家へ嫁し、長男正義君は佐中を卒へて、上京劍道を修業中である。（栃木縣安蘇郡堀米町大字堀米一三八一）

松月堂古流隆養派家元
松月流煎茶家元
松壽庵 山口隆養氏

氏は明治二十六年十月六日、滋賀縣伊香郡高時村河合に生る。本名を章光といひ、山口與惣治氏の長男である。

生家は佐藤太秀郷の末裔であつて、初め脇阪姓を名乘り、伊井家に仕へ、山廻奉行を勤めてゐた。後、祖父の時代となり、分家して山ノ口郷に住み、山口姓を名乘るに至る。祖父は半兵衛と稱し、御家流の書道に達してをり、別に染色その他の圖案に巧みであつた。父君與惣治氏は、材木業を營むの外、料理、造花等の技術に秀で、また池坊華道に達してゐた。

氏は滋賀縣立中學校に學び、後、國、漢文を修業す。

華道は鄉里において、十五歳の頃より橋本窓月氏について、池坊を學んで奥傳を得、次に細谷氏について松月堂古流を研究して會頭に進み、更らに力石氏に遠州流を、又、小板橋氏に月泉流を學んで會頭准師範代となつた。これが二十二歳に至るまで約七ケ年の修業である。

二十二歳の時志を立てゝ大阪に出で、商業界に身を投ずると共に、依然餘暇を以つて花道に親しみ、先つ個昇玉氏について表池坊を學び正教授三段となり、次いで華務長、總務となつた。次いで松月堂古流家元伯爵鷲尾家總務兼家元代教授となり、花型の改善、家元規定、免許樣式等を改廢して煮す處多く後、退いて自ら獨立して松月堂古流隆養派なる一派を樹立した。

山口隆養氏

その間氏は夫人を迎へ、又、關西相互實修學院を創立し、裁縫諸禮茶華道を主とする純倭式教育を企圖し、第二回卒業生を出したが、都合によつて休校し、更らに大阪華道學校總務となつて劃策する處があつた。

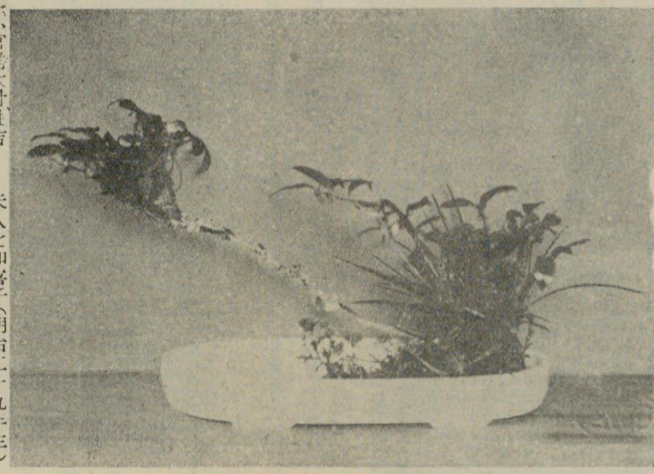
氏は如上の如く諸流の間を周く見學したのであるが、これについて氏は次の如くいふ。

『余の常に師および流派を轉々するのは何故であるか。それは偏に研究心より來るに外ならない。他のことは知らないが、予の從來轉々した流派にあつては、悉く長短がある。これは畢竟その流祖の定めたものを各流共に墨守しやうといふ處から來てゐるのである。余の平生遺憾に思うたのはこの點である。何故なれば往昔より花は觀賞するを以つて第一の目的とし、第二に室内の調和裝飾のそれである。然るに定規のみに囚はれることは、文物日に進みつゝある世において、ひとり花道のみが時勢に遲れることになる。これはまことに心外のことであると共に、斯道の由々しき大事であると信ずる。依つて余は上阪以來、良師を求めてゐたが、たまたま個昇玉先生に接するにおよび、斯道上における理想が合致したので、居ること六七年專心研究を重ねるに至つた。當時、盛花は實に幼稚の時代にをり、僅かに小原流たゞ一流あるのみで、他流では全く顧みるものがなかつた。そこで余は洋風盛花の日本化並に出生を確守して如何なる材料でも使用出來る花、大自然を自由に寫し得る花等の研究に潜心し、個師の指導と相俟つて、大正十二年以來、角花、形變り、五十形盛花色株物五十型、景花五十型、意匠花五十型、投入花大中小、自由傳、師範必携別傳等に心血を注いで完成するに至つた』と

なほ氏は茶道にも造詣深く、松月流煎茶を創始して家元となつてゐる。氏は華道と茶道の關係に就て曰く、

『花道と茶道とは、車の兩輪であつて、花道家にして茶道を解せざるものは、花道家にあらずして挿花業者であり、又、茶道家にして華道に通ぜざるものは、茶道家に非ずしてお座敷まかないの僕婢と選ぶ處がない』云々。

氏は大正十一年、現皇太后陛下が、官幣大社住吉神社御參拜の砌、玉座次の間に生花を奉り、感謝狀を賜はつた。現に、大和舊斑鳩御所華務職。三つ割菊紋免許、大法眼である。



山口隆養氏作

夫人を和喜子（明治二十九年生）といひ、溫良貞淑の譽がある。（大阪市東區小橋元町一〇七番地）

五明流華道教授
遠州流華道教授
五成齋 森越壽靜女史

森越壽靜女史

女史は明治二十九年十二月二十八日、奈良縣下龍田に生る。本名を靜子といひ、遠州流號を成園といふ。

生家は代々奈良縣下の酒造家であつて女史はその長女、大正八年二月會社員森越基一氏に嫁した。大阪女子師範附屬女學校の出身である。

女史は十八歳にして、遠州流師範一釜庵宗味師に師事し、研究孜々として其奥傳を許され、後、上京して五明流家元山根先生につき專ら盛花の研究に從ひ、その皆傳を許され、目下引續き研究中である。

得意の花は枝物。

別に、京守流の茶道にも達す。號を官休庵といふ。（東京市外澁谷町常盤松五二番地）

池坊龍生派華道教授
金鈴庵 鈴木かね子女史

鈴木かね子女史作

女史は東京市外金町の人、長谷權次郎氏の女である。後、鈴木眞氏へ嫁す。

鈴木氏は理髪業を營み、盛大を極めてゐるが、氏の父君鈴木榮太郎氏は、理髪組合長として、十有七年間在任し、斯界の功勞者であ

鈴木かね子女史

る。曩に組合よりその功勞を表彰されたのは勿論、公共のために盡すことをその唯一の慰藥として、日露戰爭、世界大戰等に際しては、何れも多額の寄附をなし、その功勞を表彰された篤志家であつた。

夫君眞氏も、嚴父の遺鉢を承けて、公共のことに志あり、又、同業組合の會計として多年盡瘁して、組合より銀杯および感謝狀を贈られ、同時に龜有警察署長より褒狀を授けられた。

女史は、夙に花道を好み、これが研究に志したが、大正十五年一月、池坊龍生派師範豐秋軒戸田内先生の門に入り初めて正式に教へを乞ふことになつた。が、その熱心なる研修と非凡の才腕とは、その進境著しく、最近皆傳を許されて、師範職となつた。が、引續いてその研究に沒頭してゐる。

得意の花は菊花で、この方面では特に光つた技術を有してゐる。

その他の趣味は三味線。

家庭は、主人眞氏との二人、頗る圓滿である。(東京府下金町大字金町二〇〇七番地)

廣田梅叟氏作

家元池坊華道教授
一窓庵 廣田梅叟氏

氏は慶應二年九月二十七日、東京府下千住町千住中組に生る。名を廣太郎といひ、故房次郎氏の長男である。家は代々商を以つて業として來た。

氏は漢學塾において、高等程度の修業を積み、明治二十年の夏より、華道に志すに至つた。最初は千住中組土屋清房氏について學び、後、淺草花川戸杉本梅香氏に師事、更らに杉本氏の斡旋によつて、小網町の村野常次郎氏について學んだ。蓋し、杉本氏が氏を村野氏に紹介した所以は、杉本氏の手では教ふべき何物をも有せざるに至つたがためであるといふ。現に松藥社副社長、功績により五色綬を許されてをり、やがて總華督に昇進を見るであらう。

氏は如何なる花でも好み、且つ行く處として可ならざるはない名手である。從來しばしば受賞し、近くは上野博覽會において、市廳より授賞された。

廣田梅叟氏

茶道は宗偏流の免許、その他謠曲、盆栽、小鳥飼養等、趣味頗る饒にして、爲人眞摯溫厚、君子の風がある。

氏は、父君に早く死別したので、少にして家業を繼ぎ、その傍ら趣味の道に親しんだので、時には汚れた仕事着のまゝ、師の家を訪れ、或は深夜三更獨り稽古に沒頭したことも屢々であつた。その努力は眞に畏敬するに足るものがあつたのである。

家にはさだ代夫人その外數人、頗る惠まれたる家庭である。(東京市外千住町千住中組五六番地)

粹池坊花道
飾花法投入盛花
小原流投入盛花 教授
正風流投入盛花
細川流盆石盆畵

淙聲庵 古田翠溪氏

氏は明治三十年二月十三日岡山縣勝田郡豊國村大字明見に生る。本名を多賀義と稱す。小學卒業後、東京遊學中病氣のため、學問を斷念し、こゝに華道を志すに至つたのである。

氏は初め、池坊を學び、後感ずる所ありて、別に粹池之坊といふを創始すると共に、投入盛花の流行に鑑み、飾花法、小原流、正風の三流を極め、又趣味よりして、茶席花の專門研究に努力しつゝあるといふ。

氏が華道に對する感想の一端に曰く『近頃花術の本義を忘れて徒らに花卉、花器の選擇に腐心するもの多きは笑ふべく、殊に花に調和なき品物其他の色彩を以て無智なる者を惑はさんとするは慨すべきである。花は一木一草時に從ひ、所に應じて、手にするものを愛挿するのが華道家たるの道である』と云つてゐる。

古田翠溪氏作（菊）

氏は大正十一年十一月、高松市に於て、折柄行啓遊ばされし攝政宮殿下御座所に瓶花を謹挿して、台覽の光榮に浴し同縣立工藝學校長より感謝狀を受けた。其時の歌に『朝日子の光をうけてもえ出づる、めさへ花さく心地するなり』和歌を良くし號を葛廼門景賀と稱す。

氏は華道の外、細川流盆石盆畵に長じ、號を梅岳と稱し、又婥水と號して錦心流琵琶をも教授してゐる。

家庭は夫人美知古との間に二子あり、多佑、統彌といふ。（岡山縣御津郡大野村東正野田二四一、中國鐵道三門驛西）

大和斑鳩御流華道教授
表千家茶道教授

雅靜園 下田淳甫女史

女史は明治十九年十一月十三日大分縣速見郡朝日村に生まる。本名は靜子といふ。父君は漢方醫にして鍼の名家として知られた人であつた。女史は高等小學校卒業後裁縫技藝學校に學び、後華道に志すに至つた。

初め肥前國平戸舊藩主抱へたりし華道家につき茶花道を學び、後大和斑鳩御流の由緒正しく、花形の優雅なるに感じ、研究すること數年、同流の奥儀を極めて教授となり、多年同流のために盡すところ大なりとして現に中法眼家元執事の重職を授けられ、孜々として斯道に勵んでゐる。

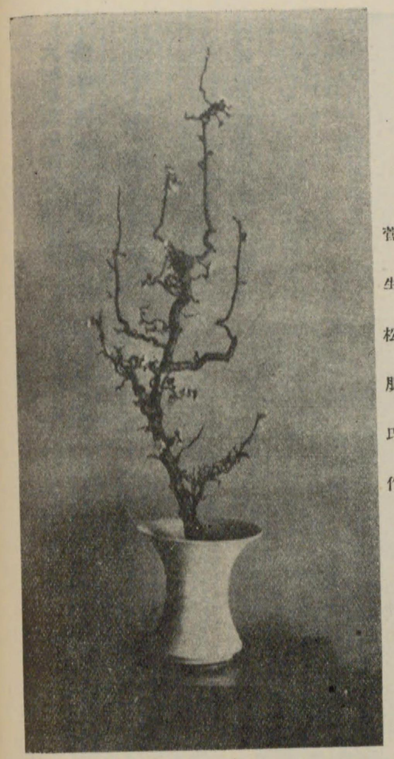
下田淳甫女史作

下田淳甫女史

女史が華道に對する意見に云ふ『華道が高尚な家庭娯樂であるといふ舊來の觀念より脱却し、我國固有の藝術である此の道を精神生活上必須の科目であるといふ理解に達せしめ、この觀念の下に修業せしめ、如何なる家にも一瓶の花が生けられ、常に精神の淨化に努めるといふことに華道家としての責務がある』と感じてゐる云々。

華道の外餘技として小笠原流禮法の奥儀を究め、茶道表千家流と共に教授してゐる。社中は門司市、若松市等に多數あり、頗る多忙を極めてゐるといふ。（門司市大里町中通り八丁目）

花道東山新流家元
茶道石洲流教授
大日本花友會幹事
鶴照齋 菅生松朋氏



菅生松朋氏作

氏は東山新流現在の家元、關西花道界の重鎭である。慶應三年三月、初代菅生與兵衞氏の長子として生れたる生粹の大阪人で、最初鶴翠齋華朋と稱してゐたが、二世家元を繼ぐに及び、先代の鶴照齋松朋及び與兵衞の名籍をも襲名するに至つたものである。父は別に無我庵と號したが二世は稚松庵の別號を有し、主として茶の方に用ゐられてゐる。

東山新流は、其祖を遠く足利八代將軍義政公に發し公が東山殿に住ゐたる因由により、此名を冠したる所以であらう。一世は初め只數奇より花を愛翫したる人であつたが、好んで人を導き、遂に衆より家元に推立されたる器量人であつた。新に一流を起して、家元を名乘るに至つたのは『慶應の初め頃より、深く生花の趣味を解して、其祖を敬慕するの念を生じ、爾來先覺の門に入りて、日夜斯道の練磨研鑽に努め、傍ら斯道の書を閱し東山流蘊奥の秘書を得て、思を凝し技を研き、從來學びたりし其粋をも加へて、遂に一流を樹つるに及んだもので、當時志を俱にしたる杉野鶴壽齋氏を、特に流肆として一代の名譽號を附す』——と自ら記してあることによつて明らかにされる。

菅生松朋氏

初代既に前述の如くで、二世(現在家元)また初代に讓らぬ風格を具へ、洒脫なる花技は勿論、深く茶に通じて、其の形式よりも三昧境を樂しむの數奇者であつて、毫も衒ふ所なく、實名を好まず、從つて茶、花ともに交友頗る多く、溫雅、篤厚の人格と相まつて、大阪花道界に重きをなしてゐる。ま

た風に士女の教養には特に意を用ゐ、現に大阪府立市岡高等女學校、大阪市立高等西華女學校等に花道茶道の囑託教授である。流内に於ては師範者を網羅せる鶴朋會を初め、研究機關として師範會があり、また別に家元社中の集ひには、東山會なるものがあつて、何れも年數次に渉つて挿花會、茶會、研究會、野外研究會等を催し、實技と精神の錬磨修養に努め、流勢爲めに日を追ふて、盛んとなる現狀にある。師範及び門弟は數千に達し、中でも坂田、小澤、泉、松井、小林氏等の師範は、現在大阪斯道界に名ある人達である。

又、我が華道界の爲めに盡瘁するところ少なからず、現に諸流同盟團體たる大日本花友會には、多年幹事として選任され、斯界の權威たる柏葉會の會員として、確乎たる地位を有してゐるのも宜なるかなである。

家には、一女鶴松齋壽美子女史あり、近時家業の銅鐵商は、その女婿鶴宙齋辨朋氏に托して、自分は專ら閑日を作りて、趣味と教養方面に意を注いでゐる。愛孫は目下高等西華女學校二年に在學中で一家を擧げて茶花道の趣味に生きる家庭は常に春風怡蕩の氣に滿たされてゐる。昭和四年一月より、西區阿波座の邸より、現地に隱棲、いよいよ趣味三昧の生活を樂しむことになつた。(大阪市西區新町四丁目廿五ノ二番地、電話新町二八番)

◎

夏咲くは仙人もいさ菊の花　宗養
夏菊に水をうつたる家居哉　鬼貫
淋しさや牡丹のそばの菊の花　嵐哉
夏の菊紫蘇も手傳ふ匂ひ哉　嵐外
夏菊や小雨の匂ふ新すだれ　策邦
夏菊やこちから露を置て見る　太無
夏風や市の中なる菊の花　北章
獨り住む法師の爲か夏の菊　女菊
夏菊や暫し隱者の氣だすかり　梅軒
夏菊の山路忘るゝ住居かな　蓼太
夏菊はしもにおかれぬ色香哉　野網
夏菊や又これからは千々の秋　吟江
花咲や皐月の菊の只あまり　尙白
夏菊の白きを賞し醫者やある　支考
夏菊や溫泉の香の通ふ盡疑哉　介美
夏菊やけふと言日は無けれ共　異雨笑

池坊龍生派華道教授
小原流盛花瓶華教授
雪舟園 高島光照女史

高島光照女史

女史は明治廿六年二月八日、岡山縣阿哲郡野施村大野部、高島德太郎氏の二女として生まる。本名を雪子といふ。

幼少の時より風流に志し、初め、池坊龍生派家元の直弟子、諏訪善南子の愛弟子小林サク子氏について華道を學び、大正九年華道教授となり、大正十年臺灣華道會幹事となつたが、女史は自己の藝道を以て尙ほ十分なりとせず、更に大正十四年春上京し、家元龍松齋師の門を叩き、その不審の點を明かにし、其の後技術進歩著るしく、家元の認むる所となつて、臺北市總會頭職に任ぜられた。

女史は獨身華道を以て身を立て現在百二十四名の社中を有し、內三名は既に教授をしてゐる。女史の得意の花は、二重又は曲生けにありといふ。

華道の外、小原流盛花瓶花(盛花の號光雪)、久田流茶道、小笠原流折物、水引、山田流箏曲等何れも堪能である(臺北市兒玉町二ノ一三)